

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】

伝説の転生者の物語

【作者名】

ゆっぴー

【あらすじ】

テンプレ転生を果たした主人公が刀と体術とついでに能力で伝説を打ち立ててゆく物語…のはず。

二次ファンからの避難です。諸事情により更新はアットノベルス様の所で行ないます。……とか思ってたのですが案外諸事情が解決。やはりここにお世話になります。

こんな適当な作者故に更新は不定期ですぜ。

第一、二話は自分で読んでてもちよっと酷いなー、と思ってるので要約を紹介。

テンプレ的に神様転生を果たした御剣 帝改め、スコウエルド・イーブは悪魔の実自然系ドロドロの実と神達の中でも最高の妖刀"帝"を貰い受け、さらに神直々に鍛えてもらって四歳の時に海軍に入るお話。

第一話 無人島で創造主は悪意の悪戯を

ここはとある島のとある家のとある一室。そこにいるのは一人の女性でそこにあるのは十体の死体と三振りの彼女の得物の刃物と禍々しい色彩の木の実。

「やっと―自然系(ロギア)の実を見つけた…これでアイツに復讐出来るかもしれないな。これもあることだし今回のヤツは上手くいけばいいんだがな……」

「やっぱり呼ぶなら欲にまみれた飢えた奴に限るな…でも動物みたいな食欲と色欲と睡眠ばっかじゃなくても金とか権力じゃなくて…友愛？家族愛？だから先進国の奴がいいな…性別は…どっちでもいいや。年は…若いやつの方が染めやすいな。英雄の素質持ちなんてさらに居るしこんなことで一々人を殺す必要もねーな」

光輝く女性は悪魔の実をポンポンと投げながら言った。

日常というのは当然日常的に続いていくものである。しかし非日常というものは続いてきた日常が終わることで始まる。

今とある交差点にあるのは非常に日常的な光景である。

仲が悪い、なんてことのないとある高校生二人が並んで帰宅している光景である。

その二人の少年が数少ないといえる繋がりである好きな漫画“ワンピース”について話しているという日 常的な光景。会話の内容は今日発売のワンピース第 六十六巻の予測などである。

そんな中日常は突然終わり非日常が始まる。

「あれ、やばくね？」

と少し前を指差す一人の男子高校生。

その指の先にはには車道に飛び出した五才ほどの子供が、トラックに引かれそうになっている光景が広がっていた。

「はあ!?あの子何四天王!？」

「そこはボケる所じゃない!」

叫びながら走るこの物語の主人公、御剣帝（ミツルギ ミカド）に突っ込む友達。少なくとも彼の突っ込みは間違っていないだろう。

彼はその引かれかけている少女の元にたどり着くと、その子の襟を引っ張って歩道に引き戻す。彼の隣で何やら「グエツ、ゲボオツ」なんて聞こえたがそれは幻聴であるのだろう。特に後半。

それに加えてズボンが何やら温かい気がするがそれは気のせいだ、と彼は自分に言い聞かせて目の前の問題に集中することになる。彼の目前に迫るトラック。しかしそこで彼は真横に飛び、跳ねられたときのダメージを軽減する作戦に出る。

しかし反対からも迫る逆走トラック。

(マ・ジ・で?)

人は予想外の出来事に直面すると何も出来ない、声すらもあげられないものである。

その一秒後、御劔帝は人前で自身の内面を全てさらけ出した。(比喩的表現無しで)

最期の言葉が『何四天王!?』というのは彼がそれを 聞いたとき二度と思い出したくない黒歴史となる事は確定であろう。

「……………つちと起きろー!」

と腹にくる激痛とついでに叫び声で彼は目を覚ました。ふと一瞬さっきのは夢オチであることを期待していたがその幻想はぶっ殺された。 何故なら最初に入ったのが、

「見たことの無い天井だ」

嘘である。本当は目の前に明らかに見覚えのない森と青空が広がっていたからである。そして横を見ると何かをふんずけている三十代と思われて年相応の美しさの美女。しかも何やら輝いている。つまり比喩表現なしに発光しているということだ。 ついでにこれが夢オチでない事を確信した原因は腹の激痛である。

(彼女は神様かなんかだろうか…?)

と柄にもなく頭の中に愉快なファンタジー満点の考えが思い浮かぶ。もし彼の考えが合っていてなおかつこれがテンプレ的狀況だとするとこの女性が「実は私は神様で間違って貴方をペースト状にしちゃいました、テへ(笑)」と か言っつて来る筈だ。

「もしかして、あなたのミスで俺が死んだとかですか……………?」

とおそろるおそろる聞くと、

「んな訳ねーだろうが、バカか teme は？ バカなのか？」

と何やら機嫌を損ねてしまった。

非常に気まずいがそれでは永久に話が進まない。小説的にもそれは困るから御剣から話しかける。

「このままじゃ話が進まないから聞くぞ？ ここは何処？ あなたは誰？ 何故俺がここに居るのか？ 位だな」

「んじゃ一応答えていやる。ここは『ONE PIECE』の世界にある無人島だ。アタシはまあオマエらのいうところの神？ いやちょっとそれは違うな…。まあ、創造主的なもんだな。んでなんでオマエがここに居るのかっつーと、面白いモンが見れそうだったから、だな」

「……は？」

とあまりにも突拍子の無いことを言われてフリーズしてしまつた御剣。しかし彼が固まってしまつのも無理ないだろう。何せ突然自称創造主から『貴方の好きな世界に転生させました』と言われたのだから。普通の人間は夢だと思つ、いや確信するだろう。しかし自称創造主か踏んでいる腹の痛みがこれが現実であることを証明している。

等と思考が丁度五順目を回り終わった時にやっと自分の置かれた立場をおもむろに理解し始める。

「えーっと、状況を確認するぞ？ 創造主であるお前が面白半分には俺を『ONE PIECE』の世界に転生させたっていつことだな？」

「おー、完璧だ。オツケー完璧だ。飲み込みはえーな、お前」

と今にもケタケタと笑い出しそうな雰囲気肯定する女性。その姿は創造主からはほど遠い。

「いや、全く完璧じゃねーよ、どう考えても。まず創造主ってなんだよ!?次にどうして平々凡々で一般ピーポーな所謂モブAである俺を転生させたんだ!?最後になんであえて俺の転生先が"ONE PIECE"世界なんだよ!？」

「どーどー落ち着け。先ず創造主っつーのは人じゃないなにか、っていつか人の上位個体?んでお前らの世界を作って観察する者そんな感じた。何でお前なのかつーのは知能のある生き物なら目の前に死にかけて使えそうな玩具が落ちてたら使わずにはいらねーだろ?んで、何でこの世界かつーとこの世界を観察?うーん、まあ見守ってる奴を困らせる為だな」

神に対しての御剣の信仰心が0からマツハの勢いでマイナスに突入しているこの頃だが、状況は理解し始めてきたようだ。この世界を観察しているらしい人を何故嫌っているかは大して問題ではないだろう。

「おー、大体分かってきた。つまり俺にこの世界を改変しろっつーことか?」

「オールライト!いやー良い玩具を拾ったもんだわ!前回とは大違いだ。あの貴族かぶれの箱入りピツ 手は全然面白くなかったからな。でもそんなに気張らなくても良いぞ?オマエが生きてるだけで世界はかなり変わるだろうっからな」

然り気無く問題発言である。少なくともこの雰囲気からしてテンプレ的にはこれから御剣 帝は所謂“転生者チート特典”というものが貰えるはずなのである。こういった転生者最強ものでは唯一敵となりうるのは同じ“転生者チート特典”を持っている人間だけであるから。

「他にも居んのかよ…」

「あー全然心配しなくていいぞ。あの糞ビッチはもう半分永眠してっから」

ひどく気になる言い方だがこの言葉で御剣はひとまず敵は居ないと安心する。

「世界を変えるっていつからには俺にはなんかチートがあるんだよな？」

確定した事柄を確認するかのような口調で御剣が尋ねる。しかし不機嫌そうな女性から返ってきたのは 確信とは全く逆の言葉だった。

「はあ!?チートだあ!?テメエぶざけんよ!?何でア タシがテメエの為にそんなつまらねえ苦勞をしなきゃいけねえんだよ!」

その言葉に御剣は絶望する。確かに殺生過ぎる話である。例えるなら全裸で未開の夜のジャングルに放り出されるようなものだろうか。しかし神は居なか ったが悪魔も居なかったようだ。

「だけど六式と覇気は使えるように訓練をつけてやる。中々良い体だし直ぐに上達するさ、生きてれば。ああ、でもさっきペチャンコだったお前の身体の再生ミスったんだったな。所々記憶障害があるはず

だ。オマエ自分の名前わかんねーだろ？考えとけよ？ついでに言う
と、今のオマエの体は一才児のそれとあんま変わんねーから。身体
にも不備があったら言うように。内臓が働いてないなんてヤだろ？
あとこれはお前の得物の異世界の名刀“帝”だ。技術さえあれば
斬れねえモンはねえしどんだけ 打ち合っても刃こぼれ一つしねー。
さらには手入れも要らねーし、絶対に壊れることはない。まあ、ただ
し技術が無けりゃあバターも切れないがな。あと、おまけに刀身も持
ち主の体格に合わせて変化するっつー優れモンだ。あともう一つは
これだ」

物凄い問題大有り発言があったが今はそれどころではない。勿論
名前の件は後でちゃんと思えるが。何故ならば女性が差し出したの
は、御劔の現在50cmの身長の上三倍以上ある刀と、明らかに「ウチ、
猛毒ですよ」と激しく自己主張している多分木の実を御劔の目の前に
かざしたからである。木の実的なナニカである。しかしこの世界で
言う木の実的なナニカと言えば、

「悪魔…の実…か……？」

これしかない。

「ああ、これは悪魔の実自然系“ドロドロの実”。これを食べばオマ
エは晴れて泥人間だ。モチロン拒否権はないからな？」

と何人も威圧するような満面の笑みを浮かべて女性が通達するも、

「お前、実は良いやつ？」

むしろ御劔はこれを好意と受け入れた。確かに面白半分に分身を
殺したわけではないし、寧ろ死にかけていた自分を生き返らせて第二
の人生を 約束してくれた目の前の女性は幾分か人格が破綻してい

る節がかいまみえたとしても天使に見えただろう。

「全然気にしなくて良いぞ？こっちとしては“帝”の持ち主とか“ドロドロの実”の能力者を殺しまくって楽しかったから寧ろお礼が言いてーくらいだな」

しかしちゃんと悪魔はいたらしい。悪魔の実に関してはその能力者を殺した所で実を手に入れる訳ではないから文字通りドロドロの実の能力者を殺し“まくった”ようだが、具体的な人数は怖くて聞けない御剣。しかし彼を臆病者呼びわりできるやつはそういないだろう。世の中には知っても良いことと知らなくても良いことと知ろうとしてはいけないことがある。

すると突然女性が指を二本立てて言った。

「三年だ」

「……は？」

「三年でオマエを世界最強にしてやるからオマエは 口調を子供らしくしな」

何故稽古をつけることと口調を変えることが関係あるのか全く理解出来てない御剣。しかし共通項の無いこの二つの関係性は何人たりとも理解できないだろう。その例に洩れない御剣。やはり気になったので聞く、

「何故に子供口調？」

そこでここぞとばかりに女性が口を開く。

「だって見た目一才の子供をポコポコに出来るなんて凄く楽しいだろ？」

「ここには神も悪魔も居ない。居るのは魔王だけである。右手に大剣、左手にサバイバルナイフを構える女性を見て御剣はそう確信した。

第二話無人島で少年は地獄の虐待を

ラヴィサメに稽古をつけてもらった三年間は御剣にとっては地獄と形容できる、いやそれ以上だったと言えるだろう。

斬殺、刺殺、撲殺、銃殺、絞殺、毒殺、爆殺、圧殺、感電死、溺殺、凍殺、焼殺……

ありとあらゆる方法で、そのなかでも百を超えるバリエーションで、例えば毒殺ならば毒の種類を変えるなど、で殺され続けた。

いや厳密には殺される寸前で回復させられ続けた。故に御剣にはこの三年間は地獄以上であったと言えるだろう。

勿論女性も唯殺し続けるだけではない。ちゃんと六式や覇気のコツなどを伝授している。もっともそれらを考慮したとしても明らかにこれは一般的にはやり過ぎと言えるだろう。そう、ただしそれはあくまで一般的には、である。女性にとってはこれはかなり甘い方である。

しかし女性は全くドロドロの実の能力の制御については教えなかった。そもそも女性は御剣が能力を持たせるべきかどうかですら悩んでいたのだ。つまり泳げなくなる、という大きなデメリットを抱えてまで手に入れるべきかと思っていたのだ。しかし女性が御剣に結局「ドロドロの実」を渡したのは事故死を避け、この三年間を生き残らせる為である。いくら最強の戦士と言えど一瞬の油断と一発の弾丸で容易に絶命することがあるし、今まで数百越える人間がこの三年間を耐えられずに絶命してきた。だが「悪魔の実」シリーズ最強と謳われる一自然系（ロギア）の能力者であれば相手が格下である限り百パーセント敗北は有り得なくなるしこの三年間の生存率が多

少し上昇するだろう。だから御劔に“ドロドロの実”を渡すことにしたのだ。つまり別に御劔 帝が能力で敵を葬り尽くす事には全く興味が無いのである。

つまり剣技と六式に関して御劔は女性のパクリ、または多少のアレンジを加えた程度のものであるが、能力に関しては全く別次元、女性の未知の領域なのである。故に能力を使えば女性と互角、いや互角以上に戦えるようになった。ただし能力を使わなかったらまだまだ女性に勝つことは出来ないが。

「面白れーな。アタシも本気でいってやるよ、化け物。『神通力』」

と能力を全開にしている御劔に対して、女性は管轄外の世界であるが故に全力の百分の一パーセントも出せない。とはいえこの世界で間違いなく指折りの実を持っていることは間違いのない“創造主”が本気をだす。

ボコッ、ボコッ、ボコッ…

とその島の周りにある島々が不可視理解不能な力によって持ち上げられる。その数は十五。

「本気で行くから死んだら一応ゴメンな？」

こうして“創造主”と創造主に育てられた“化け物”の戦いが始まった。

「…………やるじゃ…ねえか…………化け物が…………」

「全く…師匠の戦い方も異常だね。…………五分間脳みそと心臓止めて隙を待っただなんて出来ないよ。」

「バーカ。言っ……たる？原型が……あるかぎ……り気……抜くなっ……て」

「って言うかあのときは右手首以外ミンチだったよね」

その戦いが始まってから直ぐに二週間が経った。双方時間を忘れてただ殺し合った。互いにその時間を楽しんだ。御剣は前世では蟻一匹殺せない、とは言わないが、ここまで好戦的性格ではなかった。これも女性による性格の改変だろうか、それともその三年間で性格が歪んだのだろうか。

とにかくこの二人の戦鬪狂のせいで周りの島々は碎け、偶然近くの海域にいた不運な魚は当然被害を受け自らの血で海を彩った。そして半分が海に沈んだ無人島で何とかで立っている化け物と最早顔の下半分しか残っておらず奇跡的に残った口でなんとか会話をする創造主。普通に戦えば絶対に勝てなかった世界でトップクラスの創造主を相手取って勝つことの出来る能力が手に入る“ドロドロの実”。当然デメリットもあるし使いこなせてないがゆえに出来る事も少ないがそれでも使えれば世界最強にだってなれるだろう。

「そうだね…イーブ。スコウェルト・イーブ。それが名前を忘れた化け物の名前にしよう」

「アタシの名前はラヴィサメだ。一応覚えときな。アンタの旅路が血で塗り固められてアタシを楽しませられるものになることを祈ってる」

「あとこれからは宜しくね、”僕の帝”」

イーブは元の主を殺したことで自分のものとなった現在の身長9

0cmのイーブが丁度人を斬り殺し易いと感じる刃渡り20cmの帝に語りかけた。もうこの三年間帝を持ち続けて感じていた違和感はなく無く、帝を持った時から響いていた怨嗟の声も無く、極度の殺人衝動も自殺志望も無くなっていた。

こうして御剣 帝改め、スコウエルト・イーブは師である創造主のラヴィサメを殺し、そして彼の新しい生活が始まるうとしていた。

イーブがラヴィサメを殺して数日が経ったある日。この島が無
人島と知らないのか海賊が来た。

ところ変わってその海賊船の空気は異常にピリピリしていた。というのも原因は彼らを追っている海兵にある。しかし彼らは一偉大なる航路(グランドライン)でも多少有名な海賊。船長は賞金五千万ベリーの“惨劇”のディティールと名乗り海軍の軍艦一隻位なら余裕で勝つことの出来る猛者である。しかしそんな彼らが今たった一人のただの海兵に撤退をしている。……いや、海の上で自転車こいでる時点ですぐの海兵な訳がないが。

「船長!!向こうに島があります!!」

「よし!直ぐに着陸して住民を人質に取るぞ!」

「!!!!おっ!!」

と僅かな生存の兆しにすぎり自分に気合いを入れるために叫ぶ海賊たち。この世界では人質なんて常套手段である。例外はあるものの大抵の海兵はこれですぐに出来る。

数分後、無人島ではイーブの目の前にあるのは大きな船。しかもマストにはドクロのマーク。間違いなく海賊船である。

そしてそこからゾロゾロと五十人ほど人が出てくる。

そしてリーダー的な人が、

「いっちにきなクソガキ！」

と叫んでいるが彼は誘拐の初心者なのだろう。そんななりでそしてそのような口調で子供が寄ってくるだけでも 思っているのだろうか。尤も誘拐の上級者というのも可笑しな響きだが。

つまり普通の子供はこんなにかついオッサンに近寄る事なんて有り得ない。しかし、

「おk」

スコウェルト・イーブは子供の中でも異質の中の異質。例外中の例外である化け物である。たかが賞金額五千万程度の男に臆することなく、むしろ男の目にも止まらぬ速さで近寄ると、

「えいつ」

と可愛らしい掛け声と共に軽く蹴りとばす。しかしその威力は掛け声とは裏腹に馬鹿げたものであり、海賊はまるで最初から居なかつたかのような速さで飛んで行き、少し離れたところにある大きな岩を破壊してやっと止まった。

「軽く蹴っただけで死んじゃうなんてここの海賊は本当に弱いね。こ

「こつて一東の海（最弱どもの巢窟）なのかな？」

偉大なる航路でもそこそこの有名な一大型新人（ルーキー）である船長がこんな小さい子供に子供扱いされさらにディティールの部下である自分らも侮辱されたがは怒ることなんてしない。彼らは今の一撃で目の前にいる相手が自分とは次元が全く違う生き物であることを悟ったからだ。奇しくも転生者であるスコウエルト・イーブに対する彼らの評価は正しく、スコウエルト・イーブは文字通り次元の違う生き物である。そんな化け物が目の前にいるときにとるべき行動は当然逃走の一択しかあり得ない。逃げる事は恥ずかしい事ではない。勇気と無謀は違うものであるし、そもそも人それぞれ価値観が違うから恥ずかしい事も違う。しかしイーブは禍根を残さないように船長を失った船員が騒ぎだして船に戻る前に、

「嵐脚『大鎌』」

巻き付くような『嵐脚』によって、一撃で全員の上半身と下半身を泣き別れさせる。

因みにこな嵐脚『大鎌』は名の通り嵐脚の応用技で、攻撃範囲の広さに特化したものである。彼の師匠であるラヴィサメが見せたときはたったの一撃で島の木々を全て刈り取ってイーブをドン引きさせたのは彼の記憶に新しい。

一応イーブは見聞色の覇気で船員はもう居ないことを確認する。しかし海賊ではない誰かが自転車でここに 向かっていることを認識した。ONE PIECEファンならば自転車で海を渡るような人間に心当たりがあるだろう。当然イーブも前世は熱烈なONE PIECEファンであったため直ぐに分かった。

「いきなり青キジ大将に会えるなんて僕はついてるね」

しかし、青キジが全身をラヴィサメと海賊の返り血で染めた帯刀少年(帯刀と言っても今持っている“帝”は刃渡り五十cmしかないが)をどう認識するかはイーブの中でも不安である。

「あらら、これは人質を取られる前に凍らせるべきだった……か？」

未来の青キジ大将で現在中将であるクザンは島に上陸する前に異変に気が付いていた。海賊が人質を求めて島に上陸したら必ず何かしらの騒ぎになるはずである。しかしそれが全くない。恐ろしいほど静かである。

「何があったか確認したほうがよさそうだな」

とクザンが少し自転車の速度を珍しく立ち漕ぎすることで上げて島に上陸する。そしてそこにいたのは大きな岩を砕いて死亡している海賊らしき男と上半身と下半身がバラバラになっている海賊らしき男たちの死体の数々。そしてその死体と血だまりの上に立っている返り血で全身血塗れで帯刀している四才くらいの男の子だった。

状況的には確実に少年がこの事態を引き起こしているが普通に考えて男の子とはいえ小さい子供が偉大なる航路で有名な大型新人を倒せるはずがない。そこで当然ながらクザンは事情聴取をすることにした。

「おい、そのボウズ。ここで何があった？」

「……いや、特に無かったかな」

勿論イーブにとっては、である。イーブは今まで命のやり取りなん

て日常茶飯事であつ、この程度の雑魚を倒したくらいで「タ」海賊」を倒した何て言っていたら「一週間で」四皇」やその傘下の海賊たちの首で「山築けるだろう」と思っているのだ。

それを察したのか察しなかったのかは定かではないがこのままでは話が進まないと感じたクザンは質問を変えることにした。

「じゃあ、この海賊たちを倒したのはお前さんか？」

「うん、そうだよ。まあ、東の海で海賊旗掲げるのに満足してて実力も伴ってないようななんちゃって海賊たちを「海賊」って呼んでも良いかどうかは疑問だけどね」

重ねて言うようだがイープの認識がおかしいだけである。彼がさっき倒した海賊は「惨劇」の二つ名を持ち、さらに懸賞金五千万ベリーの将来有望な大型新人として注目されるほどの実力者であったことから、世界で指折りとは言わないがそれでもそこそこ強い人間であることは確かだったはずである。しかし、彼の認識がおかしいのも仕方がないだろう。何故なら彼が今まで戦った相手は「神」であり世界で指折りの強者だけだったのだから。

「お前さん、名前は？」

「スコウェルト・イーブだよ」

「歳は？」

「うーん、多分四才くらいだね」

「……で何してるんだ？」

「生活してたよ」

「親はどうした？」

今までの質問では淡々と答えてたのにこの質問では 答えるときにイープの顔に影が差した。

「わぁ？ぶつでもいいよ、そんなの。忘れたよ」

話を聞いているとこの少年は親に捨てられた孤児だろう。実際は違うしクザンも違和感を感じ取ってはいたが今は信じることにして、

「お前さん、海兵になるつもりはないか？」

イープに飴玉を渡してクザンが尋ねる。この大海賊時代なんて言われる今、海軍は人材の確保に忙しい。素性が少しくらい怪しかろうと、その子が四才児であろうと、懸賞金五千万ベリーの大型新人を雑魚呼ばわり出来る程の実力者ならば海軍は喉から手が出る程欲しいのだ。そんなことをしているからドンキホーテ海賊団のヴェルゴがG 5支部の基地長になるのだ。

そんな話は置いておき、イープにとってもこの申し出は嬉しいものだった。例えばヴィサメから生きてるだけでいい、と言われようが彼女の性格の改変によって超好戦的な戦闘狂と化しているスコウエルド・イープ。出来れば暴れるとしたらやはり、合法的に暴れるのである。彼の中には多少海軍本部と全面对決したいという願いもあるがやはり、合法的に暴りたいのである。だから勿論返事は、

「はい」

に決まっていた。

こうしてこの物語の主人公「最強の転生者」スコウエルト・イーブの人生が始まった。

ここは誰かの研究室。そこにいるのは白衣の研究者と絶世の美女ラヴィサメだ。

「ちょっと…ラヴィサメ先輩また僕の世界に入れましたね！」

と叫ぶ研究者。彼女のイタズラは間違えなくろくなことにならないと彼は経験で知っている。

「ああ、オマエこの前プリン買ってきたろ？アタシが食べたかったのは「コーヒージェリーだ」

「ええっ、この前はプリンが食べたかって言ってたじゃないですか!？」

「ああオマエが行った後に心変わりした。察しろ」

「念話使って下さいよおおー！」

山の天気と女心は変わりやすいと言うがこれは酷い。ラヴィサメの心変わりは酷い。この研究者はラヴィサメの心変わりを察する程鋭くない。ここで研究者はラヴィサメの腰に本来あるべき刀が無いことに気付く。

「あれ…ラヴィサメ先輩「帝」はどうしたんですか？」

「あれか？あの世界に送り込んだ奴にやった」

それに研究者は信じられないと言ったような驚きの顔を見せる。

「何やっちゃってるんですか!?」近代三大妖刀”をあげるだなんて正気ですか!? しかもよりによって”心”の妖刀”帝”って……”よりによって封印をしてない”帝”って……”なんで封印してる”將軍”か”法王”にしなかつたんですか!?”

「いいじゃねえか減るもんじゃあるまいし。それにあの二振りはやっても面白くないだろ。チート過ぎる」

頂垂れる研究者を慰めるラヴィサメ。しかし元凶に慰められても、なんの意味もない。しかも、

「減りますよ！主に”帝”と人命が！忘れたんですか!?先輩があの世界の八千年前にしたことを!?あのときは三億人が死んだんですよ!?”

前回ラヴィサメが面白半分で送り込んだ転生者は実はそんな惨劇を起こしていたのだ。そしてそれに関しては悪いと思っっているのか目を反らすラヴィサメ。

「胃薬買ってきます」

研究者は今回は胃に穴を開けまいと失敗から学ぶ。

第三話 海軍本部で剣士はぬるい試合を

伝説の転生者の物語改第二話

つい先日海軍にスカウトされて勢いで頷いてしまったスコウエルト・イーブ。彼は今海軍の“正義のコート”を羽織っている海軍将校の中でも上位、具体的に言うと中將から元帥の目の前に立っている。

なんでこうなったかと言うと数時間前に遡る。

イーブが今クザン中將に連れられて、海軍本部マリッジフォード内の何処かへ向かっている。

そして目的の部屋に着くとクザン中將がドアをノックし、

「センゴク大將入りますよ。」

と言って中に入る。

やっぱりか、と内心でイーブが呟く。この部屋の中にクザン中將すら霞んで見える程の人がいるということは既に察知していたのだ。それがまさか原作では元帥になっていたセンゴク大將だとは思わなかったが。

確かにかんりの実力を持ちその上悪魔の実超人系”ヒトヒトの実モデル大仏”を食べた大仏人間であるセンゴク大將は海軍本部大將を名乗るに相応しい実力の持ち主である。しかし一対一で戦ったらやはりイーブが勝つだろう。センゴク大將は良くも悪くも万能型、つまりは器用貧乏なのである。尤もそれでも海軍本部大將の名は伊

達ではなく、それに勝利出来るであろうスコウエルト・イーブはやはり異常なのだ。

その内会話が進んでいき本題に入った。

「これ程の才能の持ち主だから俺はこの子を海軍にいたいんですけど」

「しかしこんな子供を海兵にしたことが無いからな。他のものに聞いてみることは…」

実力があるので海軍に是非とも入れたいクザンと子供であるイーブを海軍に入れる事に反対なセンゴク大将。しかし本来は上官であるセンゴク大将がやろうと思えばイーブの海軍入隊を黙殺出来る。だからあえてそれをしないのはやはり大型新人であった“惨劇”のデイトールを一方的にそしてインスタントラーメンよりも手軽に倒したという実力があつたからである。このまま二人の独断、二人だから独断と言っているのかは疑問だが、決めていい問題ではないということになり開かれた緊急会議。そして現在に至る。

ここでイーブが気になっているのは知った顔つまりは原作キャラが全然居ないことである。彼が知っている面子といえば、ゴンゲ元帥、センゴク大将、クザン、ボルサリーノ、サカズキ、おつる、ガープ中将くらいである。

モモンガ、ストロベリー、ダルメシアンとかはまだ少将、准将なのだろう。

そしてこの会議は『この子が強いんじゃないじゃね?』って言う方向で固まりつつある。ということ。でイーブの強さを証明するためにいま王下七武海の一人“鷹の目”ジュラキュール・ミホークと

戦うことになった。どう考えても腕試しの相手としてはおかしいだろう。しかし入隊に勝敗は関係ないという ことになってはいるし、何よりイーブ本人がやりたいと言っているから問題は無いだろうが。

今が原作開始十五年前であるからあの少し若いおじさんといった風貌の原作開始時では四十一才のジュー ラキユール・ミホークも26才である。他の人たちも凄く若かく、ガープ中將も白髪が目立っていない。ただ、今は白髪染めをしているだけかもしれないが。

閑題休話。

突然だがスコウエルト・イーブは“勝負”というのは苦手である。あの島では手加減する必要無かったし、すれば百パーセント自分が痛い目に遭うからだ。そもそもラヴィサメの持論では“真剣”というのは殺す道具であって、勝負に使う物ではないとのことである。そしてイーブもその考えに賛成である。しかし、やるからにはちゃんと殺らない程度にそして殺られない程度にやるが。

と飴をかみ砕き棒を捨てて、ズボンを引きずりながら剣を構える。

因みにイーブの今の服装は海軍で支給された制服の半袖が手首を覆っていて、本来太ももが来るはずの所に足の裏がきている超ビツクサイズの服を着ている。サイズが合わなかったただだが。その時はイーブが『これが身長格差だね！』と叫んでいた のは今は関係ないだろう。

また、久々の文明食の棒つきの飴に感動して食事、睡眠中以外はずっとなめ続けているのも関係ない。

話を戻そう。

イーブが“帝”を構えたのに対してミホークは首についている小さな短剣を取り出して、

「悪いがこれより弱い剣は持ち合わせていない」

と言った。相手が大型新人を簡単に倒したとしてもそれくらいは王下七武海のミホークにだって出来る。だからそれを加味したとしてもこんな小さい子供が強者な訳がない、という考えに行き着いて改めて愛刀の“夜”を抜かない事にしたのだ。

ただしそれが間違いだと直ぐに気が付く。

「一回死んだね、ミホーク」

と構えた短剣を斬ってそのまま“帝”ミホークの首に突き付けるイーブ。

「成る程」

ミホークがとだけ呟いてイーブに掌底を放って距離を取る。そしてその隙にミホークは背中の“夜”を抜いて構える。イーブもそれに合わせて“帝”を静かに構えて双方隙を窺うように固まる。

しかしその膠着は思いもよらない形で破られる。

ハックシヨン！

「クザン中将オ、やっぱりキミの周りは寒いねエ」

この台詞を合図にイーブとミホークはお互いに斬りかかる。イー

プが上に飛んで袈裟斬りを、ミホークはそれを弾きとばすかように横風ぎに“夜”を振るう。

因みにこの後ボルサリーノ中將はセンゴク大将にきつちり怒られる事になる。海軍大将たるもの寒さくらい我慢出来なくてはいけないのだ。

そしてイーブが弾かれて空中で数回転してからミホークの背後に着地し、その瞬間にロケットスタートで鷹の目に斬りかかる。しかしミホークも直ぐに振り返って斬りかかり今度は鏝迫り合いになる。

「本気で来ないと叩っ切っちゃうよ、鷹の目？」

「それは「ちら」の台詞だ」

「僕のはウォーミングアップだからね。鷹の目は僕のことまだ舐めてるからだよね？」

「ふん」

とミホークはイーブの挑発に短く返しそれからお互いに離れる。

互いに体が温まってきたことろなのでそろそろ双方本気を出さるう。周りに迷惑を掛けない常識の範囲内で。

イーブはミホークが剣先を少し下げた瞬間に急接近し下から首に向かつて“帝”を振るう。ミホークが“夜”を突き刺すように動かすがそれを無視して相手から一本取るために“帝”を振るう。

グサッ

左肩に夜が貫通するがそれでも僕は“帝”を振るう腕を止めない。 覇気がかなり込められて痛むが気にしない。イーブはどうせ発動が遅いが自然系である。“ドロドロの実”を食しているのだ。怪我だって必ず治る。それにこの程度で一々反応していたらあの鳥で本当に死んでいたであろうことが三桁を軽く越す。

しかしやはりその一撃で軌道がずれたのだろうか、イーブの一振りには空を切る。そしてミホークはイーブの左肩に刺さった“夜”を抜こうとするが、僕は“夜”の無駄に大きい鎧を左手つかんでそれを阻止する。なんとも無茶苦茶な戦い方だが、『肉を切らせて骨を断て。楽しいことにリスクが無いわけなんか無いだろうか？ 最っ高のメインディッシュのためならどん　なスパイスも使うべきだ』というラヴィサメが三年間言い続けたモットーをイーブは貫く。イーブは――最高のメインディッシュ（勝利）のためならどんなスパイス（命の危険）も使うし楽しめるだろう。

そして“夜”を引き抜けなかったせいで態勢を崩したミホークの顔に向かって一々は“帝”を突くように振るう。しかし今度はミホークが“夜”を手離してイーブの脇腹に蹴りを入れてきたことよってイーブの態勢が崩される。その隙に僕の肩から夜を抜くミホーク。

「ああああああー！」

“夜”の刀身が長いからより痛いだろうがやはり二人はこの程度では止まらない。

「まさか今のを避けるとわね」

「まさか先程のを避けないとわな」

「これは殺し合いじゃなくて勝負だからね。効果も有効も技ありを何百回とら無かったとしても、たった一回の一本でいいんなら無駄なこととはしたくないからね」

勿論これは勝負だったら、の話だけだね。とイーブは笑って付け加える。

今度は“帝”を水平に構え、

「『判』」

急速にミホークに近付いて、腹に向かって“帝”を振るう。しかし同時にミホークの“夜”がイーブの首に迫る。これをイーブはかわしてミホークの後ろに回り込み、背中に“帝”を突き立てようとするも、第六感が警鐘をならし悪寒を感じたのでイーブは後ろに跳ぶ。

その瞬間にイーブの頭があつた所に“夜”が通り過ぎ、イーブの鼻先を少し切る。

双方かなり本気を出してこのままでは流血では済まないほど闘いは過熱してきている。今の一撃も完全にイーブを殺る気だったことからそれが分かるだらう。

取り敢えずイーブは少し離れてから息をついて間合いを取る。それによって再び訪れる膠着状態。しかしこれもまた直ぐに破られる。

イーブがミホークの目の前に移動し今度は心臓に“帝”を突き立てようとする。しかし今度は“夜”に“帝”を払われて回避される。しかしイーブはその払われたときに生まれたエネルギーを殺さずにそのまま利用して回転して背中に斬りかかるもそれは“夜

”に 受けられて成功しない。だがここでイープの攻撃は止まらない。

イープは”夜”に這わせるように”帝”を振ってそのままミホークの首を狙うもミホークは上を見るように してかわす。ならば、と今度は距離を取って、引きながら”飛ぶ袈裟斬り”を放つも今度は横に跳んでかわされてしま う。

そうして互角の切り合いは数時間続いた。いや、これは切り合いとは呼べないだろう。なぜならイープ は頭、首、心臓、お腹等の急所を狙い全てかわされたり、受け止められたり、受け流されたりと捌から れているが、ミホークは手や足などの末端を狙い少しずつではあるが確実にイープにダメージを与えている。それによってイープは手足を切られてポロポロに、 対照的にミホークの方は服がよれているが全く傷が見当たらない。

しかしこの場では”世界最強の剣士”を相手にこんな状態になってもまだ互角に打ち合えるイープの頑張りを褒めるべきだろう。尤もスコウエルト・イープ は”世界最強の剣士”相手に”互角”程度じゃ決して満足しないだろうが。

しかし今度こそ勝負に終止符が打たれる。

最初と全く同じように跳びながら打ち合い、着地した瞬間にミホークに接近し、首をとろうとイープは ”帝”を振るう。そしてそれに合わせるようにミホークも”夜”を突き刺そうとして突き出す。ただし今度はイープの腹に。下手すれば致命傷にも関わらず今回もイープはそれを無視し、今度はミホークの首に帝を突き付ける。

そして、

『紙絵』

サクッ

とかわしきれずに「夜」が僕の脇腹に刺さる。しかし『紙絵』のお陰で急所は外せたから、

「僕の勝ちだね」

とだけ言って勝者は意識を失った。

その後医務室のベッドの上で目を覚ましたイーブは、まず、医務室の先生に無茶のし過ぎだと怒られた。どこの世でも医者強いものである。少し手を抜いたとはいえかなり本気で来た。王下七武海「一人」鷹の目「ジュラキール・ミホークに勝ったスコウエルト・イーブもこの時は何も言えなかった。

因みにこの後重症を負ったが四才児が王下七武海の一人に勝利したという大番狂わせを起こしたことでスコウエルト・イーブの海軍入りが正式に許可された。ただし階級は雑用係であるが。何やら一応は年齢を意識した采配らしい。王下七武海クラスの雑用係。すこし間違っているような響きである。

また、雑用とは言え「鷹の目」に勝利し、その闘いっぷりを見ていた者がイーブの二つ名を考えたらしい。その二つ名はイーブの得物が「帝」であり、「世界最強の剣士」に勝った剣技は「剣の王」の様であったことからスコウエルト・イーブの二つ名は「剣帝」となった。

「剣帝」スコウエルト・イーブ。

これが一時期都市伝説で海軍最強と呼ばれる海軍将校の名前である。

イーブ本人は結構カッコいいからという理由でこの二つ名を気に入っているらしい。

第四話 海軍本部で強者は怠惰の乱戦を

伝説の転生者の物語改第三話

前回王下七武海に勝利して最強の雑用になった「剣帝」のスコウエルト・イーブ。最近名前が売れて「あの「王下七武海」に勝った「四才児」に勝てば出世は間違いない」と子供なら勝てると勘違いした海兵たちがイーブに恐ろしいほどの量のラブコールと言う名の果たし状を送ってきている。しかも主に三丁一等兵から。この程度ではイーブの食後の軽い運動にすらならない程大したこと無い。海軍本部の食堂で右手でカレーを食べて左手で海兵を吹き飛ばすのが海軍本部の日常と成りつつある。しかも吹き飛ばす海兵は一撃で十人単位である。相手が四才児の雑用なら勝てるとか思った新米海兵に辛い現実を伝える良い機会となっているだろう。

しかしそんな熱烈なラブコールも数週間続けば煩わしく感じられる。その時イーブは一気にそれらを解決する素晴らしい手段を考え付いた。

「ねえ、クザン中将。明日、僕と戦いたって言うてる海兵を何処か広い所に集めてよ。最近僕に寄ってくる海兵の相手をするのが面倒臭くなっちゃってね。まとめて倒しちゃうおうかなって思ったんだよ」

と中将にお願いする。

すると翌日、千人を超える海兵たちがあんまり使われていない第八軍事習練場に集まった。

「じゃあ僕を相手に何人がかりで来ても良いから早く始めようよ、何

なら千人全員で来ても良いよ？」

悪魔の実自然系「ドロドロの実」を食した泥人間であるイーブを相手にしたとき雑魚が何人集まったとしても絶対に勝てないことから来る絶対的な自信。勿論この程度能力が無くて「帝」を抜かなくとも余裕で勝てるが。こうして海兵約千人VS「剣帝」スコウエルト・イーブのバトルロワイヤルが始まった。尤も、大体はぶん殴ってぶっ飛ばして終わりだからあんまり張り合いは無いが。

しかしこのバトルロワイヤルをぶっ続けて丸三日、ここで嬉しい誤算があった。それはまた新しく原作キャラに会えた事である。

それはイーブの右ストレートで大尉一人、中尉三人、少尉十人をまとめてぶっ飛ばしたときのこと。

(海軍のレベル低すぎないかな?)

なんて失礼である事実を考えながら場を進行させて行くイーブ。

「じゃあ次の人ー。」

とイーブの声に出てきたのは三人の男女。

これが原作キャラの現在スモーカー少佐、ヒナ少佐、ドレーク中佐である。

原作キャラに会うとやはり「ONE PIECE」の世界に来たんだって実感わくものである。さらに出会ったのはイーブが生前に原作でも好きなキャラだった「白蠟」「黒檻」「赤旗」の三人である。一見いつもと変わらない様子のイーブだが内心ではかなり興奮している。勿論手加減無しでぶっ倒すが。

「じゃあどいつからでもどいつぞー」

と強者らしく相手に先手を譲ってあげるイーブ。この一言を合図にまずヒナ（現）少佐が攻撃を仕掛　けてくる。

「裕羽檻ー」

ヒナ少佐は両手を広げてイーブを囲むように檻を展開。さらに両手を閉じてイーブを拘束しようとする。

どうしようかな、とここでイーブは悩む。このまま拘束されて皆の攻撃を食らうてからその攻撃が全然効いてない事をアピールして倒すか、相手の手の内を全部晒させてなおかつそれらを全てかわして無傷で圧倒力量差を見せ付けるのか。イーブの中では両方とも捨てがたい戦闘方針である。取り敢えずイーブが自分の強さを相手に見せ付けることは確定なのであるが。

コンマ数秒悩んだあげくB案である『相手の手の内を全部晒させてからの無傷で圧倒俺TUEEE!!』作戦（イーブ命名）を決行することを決める。

だからまずイーブはヒナ少佐の裕羽檻に捕まる前に、

『『』』

急接近して、

「なっ!？」

この一言しか言う間を与えずに溝尾に蹴りを入れる。そして

イーブは『月歩』を使ってバク宙しながら檻に捕まらないように着地する。

しかしヒナ少佐は既に意識がなく、イーブのようにはいかなかったようで、5mは吹っ飛びその後何回かバウンドして止まった。一応確認のためイーブは見聞色の覇気でヒナ少佐意識の有無を調べてちゃんと意識がなくなっていることを確認する。

その時左から、

「ホワイト・ブロー」

スモーカー少佐のロケットパンチが文字通り飛んで来るが、

「『紙絵』」

イーブはそれを回転しながらかわして、その勢いを殺さずにスモーカー少佐すぐ脇に回り込んでイーブの右ミドルが刺さる。

……はずだった。

実際は、

「白蔓（ホワイト・バイン）」

彼の食した“モクモクの実”の能力で体を煙の蔓みたにして上空に逃げられてしまう。

「まあ、空くらい僕も歩けるんだけどね。」

と『月歩』でスモーカーに迫るつとしたとき、

「ギャアアアオ!!」

と巨大な恐竜がイーブに襲いかかる。

これは動物系古代種“ジュラジュラの実モデルティラノサウルス”（仮）を食べたドレーク中佐である。

「そんな攻撃だったら全然当たらないよー」

しかしただ巨体故の剛力を単調に振り回すだけの攻撃がイーブに当たるわけがなく、簡単に見切ってドレーク中佐の直線的な攻撃を右左にクルクルと踊るようにかわしていく。

因みに周りには海兵が邪魔にならないように大体二日目くらいから所狭しと並んでイーブたちの戦いを見学している。

ここでドレーク中佐が勝負に出たのか今まで単調で直線的だった攻撃がより直線的になって、と言つか馬鹿正直に真正面から大口を開けてイーブに迫る。

（勝負を焦ったドレーク中佐もここで退場かな？）

とイーブがアッパーカットを決めようと拳を構えると今度は後ろから、

「よそ見してんじゃねえよ、ホワイト・ランチャー」

とイーブをドレーク中佐と挟み撃ちにするように迫って来るスモーカー少佐。

それをイーブは、

「とっつ」

とバク宙でスモーカー少佐の背中を取り、

「カーフ・ランディング！」

スモーカー少佐の頭を地面に叩きつけ、地面に大きなひび割れを入れる。大人の事情で一部伏せ字にさせてもらったが、このネタを分かる人は少ないだろう。

そしてさらにジャンプで一気にドレーク中佐の目の前に移動して強烈な蹴りを顎に入れる。そのままドレーク中佐は縦に3回転してそのまま落ち、当然意識もおちてしまった。イーブとしては折角3回ったのだから「ワン」と言って欲しかったのだが、残念ながら言うてくれなかったという不満は残るものの、海軍の佐官相手に完封勝負だった事は本人がどう思っているかは別として誇れることだろう。

「次の人どうぞー」

とやはり海軍本部の佐官に勝ったことも大して喜ばずに次に進めようとしたが、

「まだ終わってねえ……！」

とスモーカー少佐が辺り一帯に煙をまいて目眩ましをしながら言う。しかし海軍本部将校のくせにこの人は“見聞色の覇気”というものを知らないのだろうか。それともたった四才児には使えないと思ったのだろうか。少なくともさつき自然系の自分に攻撃を当てたのは紛れもない“武装色の覇気”だったというのに。しかし見聞色

の覇気とか言うそれ以前に気配消すのが下手すぎてスモーカー少佐の位置がバレバレなのであるが。いくら疲れたからってさすがに息が荒すぎるだろう。そのような様子では決して隠密行動なんて不可能である。

そしてイーブは悪あがきをするスモーカー少佐を蹴っ飛ばす。これで本当に完封勝利だ。

「次の人どうぞー」

というイーブの呼び掛けで出てきた人に彼物凄く驚く。

その面子とは、

「英雄」ガープ中将と「智将」センゴク大将か…凄いね、これから「金獅子」でも倒しに行くのかな？」

「万全のアイツ相手にはワシらじゃ力不足じゃよ」

とイーブの虚勢に軽く返す「英雄」ガープ中将。確かに三日三晩海兵をぶっ飛ばしまくって、ついさっきも海軍本部の佐官相手に完封を決めた雑用というのは異常ではあるが、

「海軍の最高戦力の二人って可笑しくないかな？」

可笑しくないことがあるのか、いや、ない。因みにイーブが感じ取った海兵の実力を簡単に示すと、

現黄猿大将　コング「ガープ」現その他の海軍三大将（大きな壁）

未来の3大将　その他の中将　少将　…

といった感じだろうか。しかしイーブも実際に対面して見聞色の覇気を使って実力を測った訳ではないから下手したらすっかり見切れてないこともあるかもしれないが。

「ガープ!! 突然一緒に来いと言ったかと思ったら、なぜ俺たちが雑用に相対しておるんだ!？」

「ガハハハハ！ 気にするな、センゴク！ なあに、ちよいと調子に乗っておる海兵がおると聞いての、力 試しには丁度よいかと思っただからじゃあ!!」

(仕事は大丈夫なのかな、海軍大将!?)

無いことなんて無いだろう。いや支部を含めると十万を超える海兵がいてそのトップなのだ仕事は寧ろ世界トップクラスにあるはずである。しかしガープ中将にセンゴク大将が無理矢理連れて来られたんなら仕方なく…

「無いよー…ぶっして部下に振り回されているのかな、センゴク大将!？」

地の文に突っ込まないで欲しい。

ここでイーブの体がブルリ、と震える。体中の血液がざわついていような違和感がイーブの体を駆け抜ける。恐怖心だろうか。いや、イーブに限ってそれは有り得ない。三年間死にかける事が自然系にも関わらず両手足の指では数え切れないほどあったのだ。今さら死ぬことに恐怖心を感じることもなんて無い。あり得ない。ではこの感情は何なのだろうか。イーブは自分の内面を見つめ直して考えること数秒。その答えにたどり着いた。それは「喜び」であった。

「ここ数日本気で戦うことはなく、ましてや命の危険が全くないような生ぬるい勝負ばかりであった。そこに本気で殺り合えるような相手に会えた事に対しての喜びだろう。ただし実際に万全の状態で殺し合うのではなく、使用するのは愛刀の“帝”ではなく木刀だが。

「ちょっといいかな、センゴク大将、ガープ中将。僕はこれから本気でやっても…本気で殺しても良いんだよね？」

「こんな不敬極まりない願いだとしても「いい」と答える事を願う。今イーブはこれからの死闘を想像して最高の笑みを浮かべているんだろう。」

「そんなこと、当たり前じゃあー！」

「無論だ。それくらいで来なくては俺たちの相手にすらならんだろう。」

「よかったよ。じゃあ…行くよー！」

とイーブは木刀を居合い切りの構えにも持ち直して言った。イーブにとって“帝”を使えない事は確かに不満だが、今回はジュラキュール・ミホークの時と違って本気の殺し合いだから、と木刀で我慢する。数日ぶりに本気で運動出来るのだ、多少の事は気にするべきではないのである。

第五話 海軍本部で戦闘狂は制限の剣技を

伝説の転生者の物語改第四話

「本気でやっても…本気で殺つても良いんだよね？」

そう言った少年。名前はスコウエルト・イーブ。先日王下七武海の「鷹の目」ジュラキユール・ミホークを倒して密かに世界最強の剣士と呼ばれている海軍本部雑用「剣帝」イーブだ。彼が今これからの戦いに期待して目を輝かせている。まさしく戦いを楽しむ者の目だ。

イーブがどのような正義を掲げるかは今はまだ分からない。しかしイーブは将来間違いなく海軍を引っ張っていく存在になる。それだけの实力がある。

しかし新入りに簡単に負けていいほど海軍大将の看板は軽くはない。それがいくら将来が有望な海兵だからといってもだ。

「無論だ。それくらいで来なくては俺たちの相手にすらならんだろう。」

と言って上着を脱いで拳を構えるセンゴク。

それに対して少年は、

「よかったよ。じゃあ…行くよー」

と言っておびたらしい密度と量の殺気を全身から出した。その殺気の濃さに二人が怯んだほんの一瞬にも満たない。だが文字通り刹

那にも劣る隙をイーブは見逃さない。イーブはまずガープに接近する。そして木刀で首をはねようとする。イーブクラスになると木刀で首はねなど容易い。それをガープ中將は初めは首を軽くのけぞらせてかわす。その時何かに気付いて、

「お前ら、伏せんかあ!!」

と叫ぶ。

当然海兵の皆は一瞬混乱する。しかし流石は世界三大勢力の一つだ。皆上司の言うことを聞いてちゃんと伏せる。この判断は正しい判断だ。なんとと言ってもスコウエルト・イーブは最高クラスの剣士だ。それもあの「鷹の目」にも勝てる程の。そんな化け物の斬撃は木刀でも当然「飛ぶ」。

ガープ中將がかわした事で斬撃はそのまま飛んで行く。そして施設を切る。だがそれでは止まらない。その直線上にある海に着弾する。

ドッゴオオオン!!

そして文字通り海を「叩き割った」。そんなことがあってもこの戦いが止まらない。止まるだなんて有り得ない。しゃがんだまま呆けているガープ中將。当然だ。四才児が木刀で出したとは思えない威力の斬撃を出したのだ。そしてその呆けた顔面にイーブは膝蹴りを叩き込む。が、

「鉄塊『空木』」

とガープ中將は自分の筋肉を硬化して防御する。寧ろ攻撃してきたイーブにダメージを与えようとさえする。しかしイーブも『鉄塊』

を使える。故にダメージはない。鉄と鉄がぶつかり合った耳を塞ぎたくなるような轟音が施設に鳴り響く。半壊した施設は今にも崩れそう。原因はイーブが海兵をお遊びで飛ばしたからだ。先程のガープの『空木』でダメージを負わなかった。だからイーブの攻撃は終わらない。いや負っていたとしても止まるわけがない。そのまま足を振り抜いてガープ中将を吹っ飛ばす。いや実際は吹っ飛ばすことは出来なかった。十数m後退させる程度に止まっている。

この戦いは二対一。相手は“英雄”ガープだけではない。イーブはガープに攻撃をしている集中していた。その隙に左側からセンゴクの豪腕が迫る。ガープを蹴った為にイーブは今空中にいる。このタイミングであれば間違いなく直撃する。そしてイーブはぶっ飛んでいくだろう。それはもしもイーブが六式使いでは無かったらの話であるが。

『月歩』

これでイーブはセンゴク大将の攻撃をかわす。そして追撃しようとする二人を牽制するために木刀を突くように構えて、

「狙撃『大槍』」

回転を加えながら木刀を突き出す。

そのとき発生した先の尖った竜巻が『月歩』を一人に襲いかかる。それを二人は仕方なくそれを回避する。そして二人は直ぐに追撃を止めてかわしたことが正しい選択だったと気付く。それは『大槍』の威力を目の当たりにしたからだ。二人は『大槍』をかわした。それによって竜巻は床に当たった。そして『大槍』はそのまま底が見えない程の大穴を空けたのだ。それも愛刀の“帝”ではなくそこら辺の木刀で。そしてイーブはその隙に体勢を立て直す。

「なかなかやるのう！」

「そう言う君もまだ無傷だよね」

相手は世界トップクラスの戦士。化け物のイーブも本気で蹴ったのに無傷だ。やはり“英雄”ガープもまた化け物である。このような人外クラスの化け物たちには打撃は通じない。木刀も“帝”に比べて切れがいまいちだ。期待できない。しかしセングクとガープも手詰まりだ。何しろ相手の戦力は未知数。その上覇気と『六式』を幾つかの使用が確認されている。下手に仕掛けると間違いなく手痛い反撃を食らう。そういつて戦いが膠着状態になる。だが双方気を抜く事はない。こういつた場合、隙を見せたり先に仕掛けた方が負けるのだ。それはイーブもよく分かっている。自分の体に刻み込んである傷が忘れさせない。

しかし何時までもこうして構えてるだけではいけない。ガープがイーブに向かって接近して仕掛けてくる。しかし途中で躓いて転けてしまう。一瞬イーブは畏かと思う。あの“英雄”が戦いの最中にこのような凡ミスを犯す訳がないと。イーブ動きが止まるもそれは一瞬。直ぐに意識を集中させる。そして当然隙だらけのガープに斬りかかる。畏かどうかなんて関係無い。これが勝つための最善手なのだ。

その瞬間にニヤリ、としてやったりと笑うガープ。そう、イーブはも謀られたのだ。しかしここで仕掛けるべきであろうセングク大将は何の動きを見せない。

(もしかすると連携ミスかな?)

どちらにせよイーブは隙だらけのガープに退場してもらうことに

する。イーブは木刀でガープに斬りかかる。あと少しでガープを切り伏せられたところでガープが動く。ガープが思いつきり地面を叩いて空気中に砂埃を舞わせる。その瞬間にイーブの第六感が警鐘をかき鳴らす。

(左側から何か来る！)

この場で手を出ることが出来るのはセンゴクのみだ。多分大仏化しているセンゴクがいるであろう所に勘でイーブ斬りかかる。

自然系や、動物系などは能力で体の一部分を変化させる。そしてその能力は多かれ少なかれタイムラグが生じる。つまり体を変化させる瞬間は完全に無防備なのだ。ガープの目眩ましはその為の時間稼ぎだったのだ。だからこの瞬間にセンゴクを落とせばイーブが有利になる。逆にこれを外せば今度はイーブが無防備になる。そしてセンゴクの変身を許すことになる。そうなれば二人によって袋叩きに遭う。全員にとってこれは一か八かの賭けなのだ。そしてイーブはその賭けに勝った。

イーブの手に感じるのは斬撃が届いた感触。そして周りの砂埃を真っ赤に染める鮮血。そう、センゴクを右肩から左脇腹にかけてイーブが木刀で切り裂いたのだ。

しかしその斬撃が決まっただけで勝負が決まるわけではない。その瞬間にイーブの右脇腹に重い衝撃が走る。そしてそのまま吹っ飛ばされる。ガープに殴られたのだ。一方が攻撃されればもう一方が敵を攻撃する。それが二対一の戦い方である。この“英雄”の一撃は重かった。これでイーブのあばらが何本か逝ってしまった。

「大丈夫かあ、センゴク!？」

と負傷したセンゴクにガーブが気を取られてほんの一瞬油断する。

「ゴフッ…僕と戦ってるのによそ見るなんていい 度胸だね。」

そしてその一瞬をイーブが見逃すはずがない。背後を取りイーブは血を吐きながらも木刀を構える。

「そげ…クッ！」

しかしガーブに止めを刺そうとした瞬間に邪魔が入る。イーブはセンゴク(大仏ver)の衝撃波を防ぐ為に攻撃を中止する。そして木刀を前に出してで守りの体勢に入る。

ゴオオオオオン!!

と数m飛ばさせながらもセンゴク大将の攻撃を防ぎきったイーブ。そしてセンゴク大将は今度こそ力尽きて倒れた(死んではない)。しかし、

「あーあ、木刀が粉々になっちゃったよ……」

片や得物を無くしてあばらが何本か逝った状態であるイーブ。片や無傷でなおかつ化け物クラスの防御力ほ誇る “英雄” ガーブ。これはイーブのゴムピーンチ状態だ。

(下手したら “あれ” しか通じないかもしれないけど “あれ” は下準備にかなり時間がかかるし却下だね)

今イーブが使える最高威力の技というのは『指銃』だ。因みにイーブは『六王銃』を使えない。どうしても『紙絵』を攻撃に応用出来なかったからだ。

閑題休話。

とにかく今イーブは六式を駆使してガーブを倒さなくてはいけない。イーブにとっては得物の使えないここからが本番である。

そしてそろそろメインディッシュを始めようかと、お互いに拳を構えたとき、

「海賊船だあ!!」

「あれは、総合懸賞金額三億二千万ベリーの“銃撃” 海賊団だ!!」

と海兵が叫ぶ。

ここは海軍本部があるマリソフォード。海賊船が来るなんて本来有り得ない。それに海賊は総合懸賞金額三億越程度。その程度で海軍大将の耳に入れるのは間違っている。本来は大将が戦闘することなど有り得ない。大将には事後報告だけで敵は最大で中将が処理すべきなのだ。しかし今は状況が違った。イーブと海軍本部のトップの戦いを見ようと人が集まっていた。海軍本部にいる少将以上は全て。つまり報告すべき上官も海賊の相手をする者も全てこの場に居るのだ。事情が事情なため海軍大将の耳を煩わせても仕方がない。

しかしこの“銃撃”海賊団は愚かだ。海軍本部にケンカ吹っ掛けて勝てる訳がないのに。そしてイーブが一番感じているのは、

「総合懸賞金3額億程度のせいでこんな楽しい時間を止められたって
いふのかな?」

“怒り”以外の何物でもない。相手は自分たちが最強と思ってい

る残念海賊。確かに懸賞金は上限の三億だ。だがそれは船員の懸賞金の合計。みんな集まってやっとその程度なのだ。その程度の実力でイーブとセンゴクたちの戦いを止める事は許されない。

「はあ、これじゃあ模擬戦は中止だね…。最悪だね…。じゃあ、ちよつと潰して来るよ」

とイーブは言って楽しい模擬戦を中止する。そして帝"を片手に外に出た。

ここはマリンフォード海岸。イーブの目の前には(といっても200mぐらい先にだが)ボロ舟が一隻。大体海軍の軍艦の10分の1もない。しかも相手は雑魚が五十人弱。准将一人、又は大佐一人と中佐一人の二人が向かえば余裕で制圧が可能なレベルだ。勿論この程度で本気でマリンフォードを制圧出来ると考えていない。そこまでこの海賊団は愉快的な思考回路をしてない。一言でいうなら運が悪かったのだ。航海の最中に偶然出会った格上の海賊。彼らに船長をはじめとした主戦力を全員倒されてしまう。そしてそのまま遭難していった。すると偶然マリンフォードに到着してしまったのだ。何とも間抜けで救われない海賊だ。だがここは偉大なる航路。そのような理不尽が日常的に起こる。だが被害に遭ったのは極悪な海賊。故にこのような仕打ちは理不尽でも何でもない。

ここまで呆気ない程の弱小海賊。たしかに彼らは総合懸賞金額三億越えではある。だがイーブのテンションは下がるのは仕方がない。イーブは密かに期待していた。相手はマリンフォードに殴り込む海賊。だから実力は王下七武海クラスは在ることを。だがそんな淡い期待を打ち破られた。それ故イーブは凄惨な脱力感に襲われている。しかしそんな脱力感も数秒だけだ。それからは怒りが沸き起こる。当然期待に込えてくれなかった海賊に対してだ。

「君たちのせいで折角の時間が台無しじゃないかあ　ああ!! 狙撃『大
槍』い!!」

海賊船にその怒りをぶつける。八つ当たりではない。妥当な攻撃だ。イーブの心からのシャウトと共に爆音が響き渡る。そして一撃でボロ舟をバラバラに解体する。今残っているのは鉋で削られたような木の皮と成り果てた船だった物。そしてバラバラな肉片すら残っていない人だった物だけだ。そしてその後ら巻き上げられた人肉と舟の残骸が海に落下する。それを見ていた隣の海兵が、

「回収がめんどくさいな。」

なんて言っている。それを気にする必要は無いだろう。そもそも回収するものが残ってないのだから。

第六話 海軍本部で新入りは驚愕の出航を

伝説の転生者の物語改第五話

先日、センゴク大将とガーブ中將を相手取ったの見事な立ち回り（他の海兵談）と海賊船と海賊を一瞬で海の藻屑に变えるといった劇的ビフォーアフターが認められたことによって少佐になった“剣帝”スコウエルト・イーブ。何やら海軍の上層部が海軍三大将クラスの化け物に与えられた階級が雑用というのは何かが違うらしく、しかし四才児に高い階級を与えるのも違うようなので一等兵という階級に落ち着いたらしい。つまりは年さえ取れば幾らでも出世が約束された存在と言うことである。

因みに未だにダボダボな制服に、ダボダボなズボンを履いて常時飴玉をカラコロと鳴らしてをなめているというスタイルを維持してる。イーブにとってはこれがアイデンティティーなのである。

またこの前調子に乗りすぎてしまいセンゴク大将を思いっきり切り伏せ重症を負わせてしまった事については、センゴク大将曰く、

「俺の実力が足らなかつただけだ。それにイーブ一等兵の事をなめてかかってた俺が悪い。一等兵にはいらん心配をかけたみたいだったな。本当にすまなかつた」

とのこと。

イーブからすればこの言葉は結構嬉しかっただろう。下手したら反逆罪で処刑台コースもあり得るんじゃないと不安に思っていたのだから。尤も、その時はイーブも全力で抵抗するしイーブも多少はその展開を望んではいたのだが。しかし逆にいきなり一等兵になると

はイーブも夢にも思っていなかっただろう。普通は三等兵から始めて、殉職したとしても二階級特進なのである。それからもいかに雑用が一等兵になることが異常かが分かるだろう。海軍に入隊して二週間で一等兵になることが当たり前なら、三等兵から始めている他のイーブより年上の海兵が泣くだろう。というかむしろイーブは泣いているのを目撃している。

しかし少佐になったお陰で果たし状の数は格段に減った事は言っておくべきだろう。その為に繰り広げられたバトルロワイヤル大会なのだから減っていなければ困る。やはり雑用なら兎も角、正規の海兵にはあまり強く当たれないようだ。

他にもガーブ中將から、

「そういえば、お前ワシの『鉄塊』を『鉄塊』で受けておつ たな？ それに『月歩』や『剃』も使っておつた。いつの間に修得 したんじゃ？」

と聞かれてイーブは焦った。何故なら六式というのは基本的には海軍のみが扱うの特別な体術であるからだ。それ故に無人島で修得したなんて言ったとしても信じてもらえないわけは無く、逆に自分に対する疑惑を持たれるだけであるのだから。しかしだからと言って、

「だってこの前中將が使っているのを一度だけ見た ことがあるからね。あの位の体術だったら一度見ただけで修得できないと話にならないよね？」

これは明らかに言い過ぎであろう。本当に自分以外の六式使いを見たのはその一回だけではあるが。しかし絶対言い過ぎであっただろう、特に後半。本来は六式の内の一つでも体得するには血へどを吐くような訓練をしなくてはいけないのだ。一回見ただけで、まして

や一日で体得出来る程六式は底の浅い体術ではない。しかしイーブは三年間直ぐに再生する体を持っていたとしても早く六式を完全にモノにしなくては地獄のような苦しみをいや地獄すら生温いとかんじてしまう程の苦しみを比喻表現なく味わう羽目になる生活をしていたのだ。そのためイーブは無茶苦茶な練習を続け、六式を完全にモノにすることが出来たのだ。そのことから廃人又は死人になる覚悟があれば一般人でも三年間でかなりのレベルの六式使いになれるということが分かる。尤も、本当に死人になる確率がかなり高いが。

イーブが自分で掘った墓穴に反省してのトリップしているが、そんなことは気にせずセンゴク大将とガープ中将は会話を進め、大将たちの中でイーブがより化け物認定されていた。

そして最後にイーブの近況報告をもう一つ。

「お前大丈夫か？」

「何さつきから一人で呟いているの？ヒナ困惑」

なんとあのイーブに友達が出来たのだ。そう、二人も友達が出来たのだ。

「三年くらい無人島で暮らしてほぼ完全に「コミュ障」であろう僕に友達が二人もできたんだよ」

大事なことから地の文を含めて二回言っておいた。

「自分の事をそんなに悪く言ってるじゃねえよ、お前」

「大丈夫。あなたとはちゃんと「コミュニケーション」が取れてるわ。ヒナ激励」

もうわかってると思うがその2人とは、

「二人とも励ましてくれてありがとうね。スモーカー、ヒナ」

の二人である。あの大規模化した模擬戦の後イーブが正規の海兵になった事により二人と仲良くなったようである。

「ちっ」

と照れ隠しに葉巻を取り出すスモーカー。

「待てや」

とイーブはその葉巻を火が付けられる前にどっかに蹴り飛ばす。

「四才児の前でよく吸おつと思えるよね」

イーブの前世では分煙、禁煙が進んでいたのである。

「子供の前で葉巻を吸おつとするなんて最低ね。ヒナ激怒」

そしてこの世界にも分煙、禁煙という言葉はあるようだ。ヒナだっ
ていつも煙草を吸っていて今も吸いたいがそれを我慢しているのだ。
しかもっと分煙・禁煙を浸透させるべきだろう。

「じゃあその子供に大量の荷物を持たせている君は何なのかな、黒檻
嬢？」

「その名前では呼ばないでって何回も言わせないで、ヒナ激怒。あと
あなたは子供である前に男だから、ヒナ解説」

そう、今イーブたち二人はヒナの買い物（主に服）に付き合わされ、男二人は定番の荷物持ちをやらされているのだ。しかし海軍という殺伐とした職場でおしゃれする暇というのは無いだろう。宝の持ち腐れである。

「男である前に子供だから、イーブ断定」

「人の口癖を真似しないで、ヒナ命令」

「却下、イーブ拒絶」

「オイ、俺は空気か？」

とここで会話に入ってくるスモーカー。

「君は空気じゃなくて煙だよね、白蠟少佐」

と言ってドヤ顔をきめるイーブ。本人の中ではかない上手いことを言ったようである。

「煙は鬱陶しいから黙ってて。ヒナ補足」

そして清々しいくらいに酷い言われようのスモーカー。やはりいくら自分が空気になるのが嫌だからといって会話に入るタイミングを図り間違えると、間違えた者は「KY」という屈辱的な称号を手に入れてしまうのである。

因みにこの「黒檻嬢」と「白蠟少佐」と言う渾名はイーブが二人に付けた渾名で、二人をからかう時に使っているものである。普段はちゃんとヒナ、スモーカーって呼んでいる。また階級が上だからっ

て決してイーブは敬語は使わないし、「スモーカー少佐」とも「ヒナ少佐」とも呼ばない。これは子供にだけ許される特権である。

「そーいえばさ、ここって服屋とかレストランとかはあるのになんで遊園地とかゲーセンとか無いんだろっね？」

とのイーブの問いに、

「ゲーセン？なんだそりゃあ？」

スモーカーが答える。この世界にはゲーセンというものが無いのだ。この世界の科学というのはどちらかというと軍事方面に進行していて、レクリエーション系にはほぼ全くと言っていいほど進歩してないのである。

「でも遊園地だったら近くのシャボンディ諸島のシャボンディパークがあるから無いっていう話を聞いたことがあるわ。ヒナ伝聞」

「へー」

とイーブは目をキラキラと、そう物凄くキラッキラと輝かせながら相づちを打つ。

「そんなに行きたいんなら今度皆で行く？ヒナ勧誘」

「行くっ！絶対行くっ！いや、行かせてくださいっ」

最近イーブは肉体に心が引つ張られて思考が幼児化しているような気がするが、彼にとってはその程度の事は遊園地に行けるのなら今はどうでもいいのである。

「スモーカーも行きたいよね!？」

「俺は別に……ちっ、仕方ねえな」

流石の海軍本部少佐といえど見た目四才児が涙目になってさらに上目遣いでついでに脅しで“帝”を少し抜くコンボには屈せざるを得なかったようだ。このコンボの破壊力抜群である。主に“帝”の効果だと思われるが。その他二つなんて誤差の範囲だと思われるが。自分より実力が圧倒的に上の戦闘狂にそんなことをやられたら断ることなんて出来ないだろう。

そしていつも通りまた今度と別れてそれぞれの家に戻る。

「ただいまマンボウ」

「お帰り」

因みにイーブは今クザンの家に居候している。理由はかき氷が食べ放題だからである。彼は冬場はどうするつもりなのだろうか。いや、何度もラヴィサメに冬場に液体窒素を飲まさせられていた凍死させられていたイーブにとっては冬場のかき氷なんて夏場のかき氷とそう大差は無いのだろう。

実は仕事をしなくてズボラだと思われるクザンだが家はけっこう綺麗であるし、中將という職に着いているので当然家も広いしお金もかなり持っている。これはイーブもクザンもあまり使わないが。さらに当人は意外にも家事スキルもかなり高かったりとかして予想外にもかなりの優良物件であるのだ。ただイーブに不満があるとすれば、

「今日も冷しゃぶだから」

そう、冷たい食べ物しか作らないのだ。
本人曰く、

「あつたかい物食ったら死ぬ」

とのこと。悪魔の実自然系の“ヒエヒエの実”を食べた氷結人間からしたら当然と言えば当然だろう。だからどうしてもイーブが温かい物が食べたくなつた時はヒナ少佐の所に行って作ってもらっている。女性であるヒナは案の定料理が上手である。因みにイーブはヒナの鯛の塩釜が好きである。ヒナの鯛の塩釜への閉じ込め方がそこら辺のプロの料理人を凌駕するほど上手いのだ。流石“オリオリの実”の能力者。

そして夕食も食べ終わりだらけきつていたところ、

「そついえば明日から俺たち航海するから。」

「俺”たち”？」

「ああ。言ってなかったか。お前さん、今までは俺の舞台所属だったけど今日付けで”ある人”の部隊所属になったから。明日午前三時に俺たちの部隊と一緒に海に出るから準備しとけよ」

「待てるー！情報の伝達遅すぎないかな!?っていうかどう考えても遅すぎるよね!?!」

少し古い仮名が使われたが確実に悪いのはイーブの目の前にいる男、クザンだろう。

「因みにモチロン船は別々だからな。寂しいか？」

「少し黙ろうかな!？」

自分の所属を知らなかったイーブも悪いかもしれないがそういった情報を保護者であるクザンは迅速に知らせる義務があるだろう。少なくとも今日までイーブは無断欠勤である。ちゃんとクザンが伝えていればイーブは自分の部隊に顔を出しただろうし、ちゃんと航海に出る日程も今日で異動になっていることも伝えられていただろう。

「悪い。今までサボってたからそのことを俺も今日知ったから」

「仕事しろー!!」

クザン宅は今日も賑やかである。

因みにシャボンディパークには帰って来たら直ぐに行くことになった。これは重要だ。

第七話 偉大なる航路で紅鶴は綿密な強襲を

「これからお前の教官となるゼファーだ。階級は特にない」

港で右手を出しながら挨拶するのはまだ両手のある後のネオ海軍総帥ゼットこと、「黒腕」のゼファー元海軍大將だ。彼は全力で『剃』と『月歩』を駆使して何とか時間ギリギリに間に合ってきたイーブを温かく迎えた。

「僕の名前は」「劍帝」スコウエルド・イーブだろ？」そうだよ。よろしくね、ゼファー先生」

イーブはそんなゼファーの差し出された右手を笑いながら握って応えた。しかしイーブの内心は決して穏やかなものではなかった。なぜならばイーブはこのときゼファーの力を計れなかったからだ。いや、厳密には計れないことが計れたからだ。こんなことはイーブにとってラヴィサメ以来初めてである。

しかし一方のゼファーも驚きを隠せずにはいた。ゼファーは確りとイーブがゼファーですらもう遅刻確定な時間にクザンの家を出たのを「見聞色の覇氣」で確認していた。しかし結果はギリギリではあるもの間に合ってきたのだ。つまり速度だけに関してはイーブは自分の上にいるということなのだ。確かにゼファーは自分の老いを感じてはいるものの、そこらの新兵に負けるつもりは無い。だからイーブは自分を越えるほどの才能を持っているということだとゼファーは直感した。

そうして見た目穏やか、中身は戦々恐々としたイーブとゼファーの邂逅は終わった。また時間ギリギリにここに来ることになった原因のクザンを後でぶん殴ると二人して決意したのはまた別の話。

「お前の耳に入れておきたいことがあるんだが、ジョーカー」

暗い部屋にいるのは男二人。見た目では分からないが雰囲気での関係が主従関係であることが分かる。

「フッフッフ、オレに伝えたいこととは何だ？」

主と思われる男は笑ながら応える。

「海軍の情報だ。新しく入った“剣帝”スコウエルド・イーブ。階級は一等兵。こいつは本気でないとはいえ王下七武海の“鷹の目”ジユラキュール・ミホークと“英雄”ガープ中将、“仏”のセンゴクペアを打ち破っている期待の新人だ」

「……………!? ほお、だがそこまでの実力があるのに何故一等兵なんだ？」

男の報告に主は疑問を投げ掛ける。

「それは簡単だ。“剣帝”がまだ四つのガキだからだ」

「……………フッフッフ、成る程。ソイツは将来危険な存在になるな……………で、“剣帝”の現在の所属はどこだ？まさかマリソフォードの温室でぬくぬくと過「して」る訳じゃ無いだろうっ？」

「ああ、そつだ。今現在の“剣帝”の所属は“黒腕”のゼファー元海軍大将の教導部隊だ」

「……………!? “黒腕”のところか……………フッフッフ、計画を前倒ししなくてはならなくなったが仕方がないし問題ない。ブリーに連絡しておいてくれ『あれ実行する』と」

物語は加速する。

イーブの預かり知らぬ所で不吉な会談があったから一月たった頃、現在イーブはウォーミングアップで他の船員を軽くほぐしてゼファーと組み手をしているところだ。

「ソ」はそうじゃねエだろオが、イーブ！」

黒い左手で軽く「帝」を持つ右手を流してゼファーは無防備なイーブの脳天に拳骨を落とす。

「いったー！」

「全く、何時もいつてるだろオが速さは力より大事な要因だが「速さだけじゃどうにもなら無いやつもいる、だよな？分かってるよそんなこと…」だったらちゃんやりやがれ!!—からやり直した!!」

「つーーー!!」

踞りながらも何とかゼファーの何時もの言いつけを復唱したがその言い方が気に食わなかったのか、再び脳天に拳骨を落とされるイーブ。

「テムエらも何時までも寝てんじゃねエよ！テムエらも—からやり直した!!」

ゼファーの怒号で復活した船員を今度はゼファーが吹っ飛ばす。イーブは午前の分はもうこれで終わりなので、立つことも億劫なのか転がりながら船内の食堂に向かった。

「……海賊？」

イーブとゼファーは九時の方角に顔を上げて午後の組み手を中断した。

「距離は…3km弱かな？じゃあ行ってくるよ、『月歩』！ヒヤッハー！！」

イーブは奇声を上げながら自分のことを止める声を見殺して海上を駆け出す。

途中飛んでくる大砲なんて基本無視、邪魔ならば蹴り飛ばすだけのことと言わんばかりに海賊船に向かってイーブは直進する。

「イーブ一等兵は大丈夫だろうか？」

「問題ないだろ。なんてったって『あのイーブだぜ？それこそ』四皇『じゃなきゃイーブ一等兵を倒せねーよ』」

「そりゃそうだ……うえ？」

後輩のイーブを一応は心配する海兵だがイーブの武に対する信頼が強いのかイーブの身を案じる声は少ない。そんな他愛の無い会話をしていた海兵の一人が突然刺されすつとんきょうな声を上げる。しかも下手人は同僚。

「お前…何をやっている!!」

「違う！俺は何も……」

下手人の海兵に他の海兵が詰め寄るが今度はその下手人が持っていたナイフを首に突き立てて自殺してしまつた。

「おい！これはどういふことだ!？」

混乱察知した上官が怒鳴りながら看板に上がる。そしてその上官を撃つ海兵。

「な!？体が勝手に……!？」

下手人の海兵が泣きながら他の同僚を撃ち殺す。その海兵を取り押さえた者も他の海兵に殺される。そして互いに疑心暗鬼になり殺し合いが始まるのは当然の流れだった

「落ち着け、テメェら!!」

……この船の艦長がゼファーではなかったら。看板に出てきたゼファーはまず周りを静めて的確に指示を出す。

「覇気の使える奴はここに残り、他は船内の食堂で待機!」

ゼファーのこれまでのとは質の全く違う怒号に啞然として固まる海兵たち。

「返事は!?分かつたんならさつさと動け!!」

「了解!」「」

「出てこいよ、”天夜叉”ドンキホーテ・ドフラミンゴ！」

「フッフッフ、流石は海軍大将。バレてたか」

ゼファアの怒りの声に仕方なくといった雰囲気で見せるドフラミンゴ。その表情は海軍大将を前にしているにもかかわらず余裕の笑みを浮かべている。

「えらく余裕じゃねエか、かアーイーぞオーくウー!!」

「そうだな。ゼファア、お前は勘違いしている。”覇気使い”を集めれば俺をどうにか出来る」と

ガクン!と首を乱暴に上に振った瞬間に殆どの海兵の意識が失われる。

「これは…”霸王色の覇気”!」

ギリギリで意識を保った女海兵アインが驚きの声を漏らす。

「フッフッフまず一番弱い奴から、戦いの常識だ」

アインを狙いに定めてドフラミンゴが一気に飛び出した。

同時刻、イーブはドフラミンゴに呼ばれた傘下の海賊ブリーの船の船長室に突っ込んでいた。文字通り軍艦から船長室の最短距離の船の側面をぶち抜いて。

そして横一線でイーブは軽くブリーを二等分して頭を踏みつけて言った。

「海軍だよ。投降してね、そしたらこっちからは手を出さないからね」
やっつてることと言ってることの順番が逆である。

「あーあ、だから素直に投降してって言ったのにね。言わんこっちゃないよ」

だから順番が逆である。

「まっ、海賊なんて掃いて棄てるほどいるから別に死んでもいいよね」
カラカラと笑ながら独り言を呟くイーブの顔には罪悪感や良心は全く浮かんでいなかった。

「な……んで……？話が……違「ウゼ」」

羽虫を潰すのと全く同じ声色で呟いて、イーブはそれと大して変わらない心境でブリーの頭を踏み潰した。ブリーが誰からどんな話を聞いていたのかはイーブには全く興味がない。何故ならそんなこと全員殺せば変わらないからだ。

「ゼファーせんせえも中々面白そうな人とランデブーしてるみたいだし僕も早くあっちに戻るっかな」

イーブがそう言うや否や、イーブはブリーの海賊船を真つ二つにした。これの目的はこの海賊船を沈めることではない。そんなこと二の次である。目的はこの海賊船の帆。イーブはそれを手に取り軍艦に向かって投げつけてその帆に乗った。イーブは『バホバホ』言ってる魚人の能力者を参考にしたのだが意外と出来るものである。

「たっだいまー!!イヤッハー!!」

そしてイーブは奇声を上げた。

「ああ、イーブか…」

増援が来たにも関わらず、しかしゼファアの声に力が入っていない。それも当然だ。ゼファアの右腕は切り落とされ、全身には深い浅いはあるもののくまなく切り傷が刻まれ、拳げ句の果てに部下は三人を残して皆殺しにされて動揺した精神。いくら海軍大将といえど消耗しても仕方がない。

「フッフッフ、お前が『剣帝』イーブか」

逆にドフラミンゴの声は明るい。それも当然。人質を取り、あえて部下を狙い庇わせ、ついでに部下を嘲笑いながら皆殺しで海軍大将を虫の息に追い詰めることに成功した。さらに目的のイーブの方もドフラミンゴの予定通り自分達の面汚しの方に向かい、残念ながら消耗はしなかったものの、殆ど事が終わりにかけた時に現れてくれた。

ここで笑わず何時笑う?ここ嘲らずに何時嘲る?ここで調子に乗らずに何時調子に乗る?そして、此处で殺さず何時殺す?

「うん、そーだよ」

イーブはドフラミンゴの『霸王色の覇気』に当てられて、しかし、ふやけたような笑みを浮かべながら内心ドロドロとした殺意を必死に抑えながら答える。

「だったらどっしりするのかな?」

「お前を殺す。安心しろ、皆殺しだ」

ドフラミンゴの返答を合図にイーブの縦一閃の斬撃がドフラミンゴを襲うが、ドフラミンゴはそれを難なくかわし、指に付いている十本の糸でイーブに反撃する。

「ふーん……中々トリッキーな動きをする上に見えづらいけど……まあ、それだけだね」

しかしイーブはそれを足止めにもならないと言わんばかりに馬鹿にしながら糸を切りドフラミンゴに迫る。

だがそれがドフラミンゴの狙いだった。右手の糸を複雑に絡ませ五体の死体を支配下に上下背後左右から襲わせ、ドフラミンゴ自身も正面から左手で襲い掛かる。

「味方に囲まれたこの状況。お前ならどうする、イーブ？」

「うーん、そうだね……どうかな？」

ドフラミンゴの問いにイーブはドフラミンゴの右手の糸を断ち切ることで応える。こうすれば左右上下背後から迫る五体の全てに同時に対応出来る。まさに一石五鳥の一手だ。

糸を切った勢いを殺さずイーブは帝で斬りかかるが、それはドフラミンゴにかわされ逆に左手の糸の斬撃を食らってしまう。

流石に五本の不規則な斬撃を『紙絵』でかわすことは出来ない。イーブは判断したが当然ただイーブも何もせず斬られる訳にもいかない。最高の『鉄塊』、『鉄塊・剛』で皮膚斬らせても肉は斬らせない。

「戦況は僕かな」

バツと両手を広げてイーブは余裕の宣言をする。傍目から見ると傷だらけのイーブに得物を一つ失ったドフラミンゴで戦況は五分五分だろうが、当人たちは違ふ。ドフラミンゴはタダで得物を一つ差し出してしまったのだ。本来であればイーブの四肢のどれかは道連れにしくちやいけなかったのに、派手に見える傷は全部浅い。これで勝負は大体決した。尤も、最期まで何があるか分からないのが殺し合いだからどっちも緩まないが。

「フッフッフ、それはどうか…！」

ドフラミンゴが今にも飛び掛かりそうに構えているなか金色のレーザーが横槍をいれる。

「……戦況はお前”ら”にあるみたいだ」

「あーあ、ボルサリーノ……」

ドフラミンゴは計画を達成しきれず、イーブは折角のご馳走で消化不良をおこして、不満顔をする。

「フッフッフ…お前が生きていればまた会っだろう」

「それは無いかな」

ドフラミンゴは捨て台詞を吐いて『空道』で去ろうとするが、イーブはその捨て台詞を否定する。何故なら、

「狙撃『大槍』！」

イーブは生きててもドフラミンゴが死んでいるからだ。しかしそのまま『はい、そうですか』と刺されるドフラミンゴではない。ドフラミンゴは残った左手の糸で瓦礫を操りかき集めて壁を作る。

イーブの『大槍』はそれを拮抗したものの一撃で破壊したものの、

「流石は鳥だね。飛ぶのだけは速いね」

見事に逃げられてしまった。

第八話 バカンスで巨腕は憤怒の粉碎を

ドフラミンゴがゼファーを襲撃して一週間がたった頃。目が覚めたゼファーは自分の切り落とされた右腕が何やら巨大なメカになっていることに気がついた。しかし気がついていてもあまりのことに脳が処理できてない。ポンポンと二度ほど左手でその巨大な右腕を叩き、そして深呼吸してから、

「なんじゃ「リヤ!!!」」

海軍の実験室にゼファーの絶叫が響き渡った。

「あれ、気に入りませんでしたか？」

「気に入るか、こんなもの!!腕返せ!!」

「はい、それは「スマッシュャー」という武器で…」

「聞いてねえ!？」

自分の最高傑作の説明を早くしたいからとゼファーが何を言っても知らん顔で嬉々とした顔で説明を続ける海軍の科学者。

「……はあ、聞いてませんでしたね?もう一回だけしか言いませんよ?それは「スマッシュャー」という武器で…」

声色は呆れ果てているものの顔は生き生きしているからやはり自分の最高傑作の特徴を何度でも言いたいのだろう。その証拠に結局この科学者は十回も同じ説明をした。気がつけば五時間近く無駄に縛られていたゼファーには同情を禁じ得ない。

この「スマツシャー」という武器は「対能力者超特化型」の武器である。その理由は簡単、この「スマツシャー」は悪魔の実の能力者の一能力「チカラ」と一力「チカラ」を奪う「海楼石」で出来ているからだ。しかもどこぞの「白狐」の先端に申し訳程度に仕込んであるようなちやちなもんじゃなく、敵を掴み取る掌は当然のごとく、それだけでなく内部のネジ一本まで全て海楼石100%使用である。さらに能力者を掴み取ってから腕を振ると機械が連動して手から爆発が発生する『スマツシユバスター』など色々なからくりがありこの「スマツシャー」は間違いなく現在の科学の粋を結集した地上最強の装備と言える。RPGゲーム出てにいれる伝説の聖剣すら目じゃないほどだ。

「くそっ、こんな武器いい迷惑でしかねえ」

「利き腕がそんなになっちゃったらお箸とか持てないよね」

慣れないスマツシャーをこぼすゼファーにアハハと軽いノリで返答するイーブ。物怖じしない子供ポジションのイーブにしかできない上官を嘗めた口のききかただ。

ほぼ全滅した部隊の隊長で海軍大将のゼファーが大怪我負ったと聞いた本人を除く海軍上層部はゼファーに安静にし怪我を早急に治すことと、ゼファーの右腕にくっついているばかでかい武器、スマツシャーに慣れるという指令という建て前で彼に三週間の長期休暇を与えたのだった。腕と大切な部下を失い落ち込んでいたゼファーを憂いた生き残りの部下三人は勝手にそれを承諾しゼファーを説得して今は一偉大なる航路（グランドライン）のとある春島に来ていたのだった。

そこではバカンスだから当然訓練、教導の禁止、航海は基本的にな

くて仕事を忘れる。といったルールをイーブが勝手に決め、ゼファア
隊の残党四人でのんびり二週間ほど過ごしていた。

しかしそれもある日の新聞、ニュース・クーの一面で一氣に変わ
る。

「どういふことだ、世界政府!!?」

「どう、どうしたんですか、ゼファア先生!!?」

その記事を見たゼファアは激昂し、その怒号を聞いたアインが恩師
の元に駆け寄る。

「どうしたのかな、こんな朝早くに?」

「どうしたで御座るか!?!」

今一眠そつで覇気のないイーブに朝から元気なビンズ。これが海
兵のあるべき姿だ。見習え、イーブ。

ビンズが愉快的な忍者姿じゃないとか朝からウザい程元気とかそん
なことはどうでもいい。

「今朝の新聞の一面だ。見てみる」

『新王下七武海誕生!!』

世界政府は昨日“天夜叉”ドンキホーテ・ドフラミンゴの王下七武
海入りを発表。当人は新世界にあるドレスローザの国王務めており
当国も同時に世界政府に認定される模様。海賊が国王を努める国を

世界政府が認めるのはこれが初めて……………」

バサリ、机に放り投げられた新聞の記事を読んで驚く二人。イープの関心はもう記事にはなく、先日のドフラミンゴとの戦いを思い出してふやけていた。

「こんなことって……………」

「……………」これでは仲間達が浮かばれないで御座る」

しかしイープを除く三人はこんなこと納得出来る筈がない。海兵であるが故に同僚、上官、友人そして恋人はいつ死んでも可笑しくないということは当然分かってはいる。だが当然それに納得出来る筈がないし、そしてその仇が自分達世界政府によって保護されるだなんて認めたくない。

ただイープだけは、皆弱かったね、程度にしか感じておらずもう誰一人の顔も覚えていないが。

それからのゼファアの行動は早かった。そして単純だった。皆に少ない荷物を纏めさせ、港に来るように伝え自身は直ぐに港に向かい船が出港出来るよう準備した。

準備が終わった頃足音よりも大きな音で飴玉をカラコロと転がす音を聞き、ゼファアはやっと来たかと振り返って言った。

「俺は今ここで海軍を辞める！アイン、ビンズ、イープ！お前らはどうする？」

「はいっ！私は先生に着いていきます、どこまでも」

「拙者もゼファー先生に忠誠を誓った身、何処までも御供します！」

「で、イーブ、お前はどつする？」

アインとビンスは即答したがイーブはまだ悩んでいる様子だった。

「僕はいいや」

「イーブ！」

たしなめるアインを無視して、フワワアと欠伸し、バリバリと飴玉を噛み砕いてから新しい物を舐めながらイーブは返した。

イーブだって少しは考えた。一応は尊敬する先生に着いていき犯罪者となるか、今まで通り海兵として過ごすかを。そしてイーブは断った。それは犯罪者の方が不自由だと思ったからだ。

ゼファーの目的は当然復讐だ。だから緻密で正確な計画を長い年月をかけて実現しなくてはならない。そこにイーブが自由気ままに振る舞う余地は当然ない。逆に海軍の目的は平和であり正義だ。その二者は曖昧で大雑把であるが故に一見厳しい規律があるように見える組織であっても、自由度が大きい。例えば海賊ならばどんな人権を無視した扱いも許されるし、派手に虐殺しても内々に処理される。

つまり悪人になることと善人になることを比べると、矛盾しているかのように聞こえるかもしれないが、善人の方が自由勝手気ままに振る舞うことが許されるだろうとイーブが判断したが故の返答だったのだ。

「じゃあお前はどつする？」

「どうして欲しいのかな？」

先程と同じで違う質問。

「止めとけ、俺はお前を殺したくない」

これがイープのに対する最終警告。短い期間とはいえゼファーには人を見る目があるからイープがどんな人間か分かってるつもりだ。そして今から何をしようとしているのかも。しかしイープはその警告に対して耳を貸さなかった。

「僕は死んでもいいや」

これが宣戦布告であると同時に戦闘開始の合図だ。

「『荆』」

「上か！」

宣戦布告したその瞬間にイープが跳びその斬撃をゼファーはスマッシャーで弾く。

「威力が上がってるな…俺の言ったことをちゃんと覚えてるみたいだな『速さは力より大事な要因だが』」

「『速さだけじゃどうにもなら無いやつも』」

いる』だよ。正にゼファーせんせえがそれだね」

「いや、俺以上にそんなやつも世の中『トロトロ』るぜ」

二人にとってはまだまだウオーミングアップ、どちらも先を急がないで先ず戦いのリズムを組み立てる。

「アイン！ビンズ！お前たちは先に船に乗ってる！」

「ですが先生！私も……」

「今のお前らじゃ邪魔なだけだ！」

アインの申し出をゼファアは即座に切り捨てる。残念ながら弱すぎる今の二人ではゼファアの横に立つことは出来ないのだ。それほどまでにゼファアとイーブの二人はアインとビンズの二人の遙か上をいっている。

「安心しろ。海軍本部から大将が来る前にカタは着ける」

「大体二週間かな？……意外と時間が無いね」

イーブは思わず息を吐く。普通は元海軍大将を相手にするとなれば援軍が来るまで時間稼ぎに徹するのが常識だ。だがイーブは違つ。『こんな美味しいメインディッシュをハイエナにたかられるなんて、なんて勿体無いことだろうかねえ!!』そう傲慢に考えるのがイーブなのだ。我が辞書に敗北の文字は存在しない、とイーブは言っている訳ではないがそれでもイーブは自分の勝利を疑った事はない。例え師匠のラヴィサメに殺されかけるその直前ですらだ。

『スマッシュバスター』!!」

「狙撃『大槍』!!」

イーブが距離を取った瞬間にゼファーに搭載されたスマツシャーが火を吹いた。しかしイーブだってみすみす焼かれるつもりはない。相手が覇気の達人ならなおさらだ。イーブは回転のかかった突きで炎を巧く受け流す。

「そろそろギアを上げようかな」

眠気で濁っていた目を今度はらんと輝かせたイーブは帝の切っ先をゼファーに向けながら言った。

それからあつという間に二週間がたってしまった。観光地だった春島はもうその面影を残さず焼かれ、抉られ、潰され、切り刻まれてしまっていた。

「はあはあ…流石は元海軍大将だね」

「お前も一年生海兵とは思えねえな…」

互いに同じ位疲労困憊、満身創痍で戦局も外から見ればほぼ互角なのに、当事者二人から見ると決着はもう着いていた。

それはゼファーの勝ちだ。

「(底が見えないね)」

ゼファーは99・99%で迎え撃っているかもしれない。だがイーブは100%全力全開だ。同じ0・01%の差であっても99・9%と99・98%の差と99・99%と100%差には大きな違いがある。それは後者は一方が手を抜いていても一方が全力であるということだ。つまり自分は相手とは一枚上手であると示していることになる。逆にここでもう一方も100%を出してしまうとそ

れは互いが全力でやり合う死闘になってしまふ。これでは格下相手に実力の差を見せ付ける闘いから態々格下相手にある意味でレベルを合わせることになるのだ。

確かに手を抜いていてやられてしまったら元も子もないと思うだろう。だが手を抜いて負けるやつは三流。見境なく全力を出すやつは二流。一流は能ある鷹は爪を隠すかの如く本当のピンチにならないければ全力を出さないのだ。例えそれで負傷したとしてもだ。

さらにイーブが敗北を見たのはもう一つ理由があった。それは覚悟の差だ。イーブは『死んでもいいから強い奴と戦ってそいつを帝で切り殺したい』と思いつながら戦つてる一方、ゼファーは『自分が背負っている物を守るために死んでもこいつを殺す』と思いつながら戦つているのだ。背負うものがないイーブと背負うものがあるゼファー、どちらの覚悟が強いかなんて明白だ。

格と覚悟、この二つで劣るイーブは自分の事を強者と感じた師匠を殺したあの日以来初めて勝ち方の分からない男に出会った。

「やっと捕まえたぞ」

疲労と絶望で動きがイーブをゼファーのスマツシャーが捕まえる。

『スマツシュブアアアスタアアア』!!!

ガチン！とスマツシャーの起動音が鳴り、能力者であるが故に身動きが出来なかったイーブはそのまま炎に包まれた。

「ゼファー先生、イーブはどうなってるのですか？」

海軍の船が向かってきているという情報が入ってきてすぐにゼファーが船に戻ってきたことで安心した二人は元部下の身を案じた。

「もうじき海軍が来る。あいつは死ぬときは死ぬべき時に死ぬ、そういう奴だ。それはいまじゃねエ」

ゼファーは自分の最高の部下のことは分かっているつもりだ。

第九話 偉大なる航路で将校はぶつちぎりの戦力を

海軍を離れたゼファーにやられたイーブは気がつけば海軍本部の医務室にいた。

「……知らない天井だ」

「お前さん漸く目を醒ましたかい」

「おはよー、クザン中将」

隣のクザンを見るや否や二回転宙返りを決めてビシッと敬礼を決めるイーブ。ただしその口調はだらけきっている。

「……お前さんが元気そうなら別に問題無いか…おい、イーブ。センゴク大将がお呼びだ、元気そうだし今のうちに行っとくか？」

「ひふ、いひよ」

アポなしで大将に会える一等兵がすごいのかアポなしで大将に会える海軍が緩いのか。

「……っていうことだね」

「……そうか」

イーブの事の経緯の説明を聞いて返事をするセンゴク大将。だがイーブの話聞いたのは彼だけでなく上級将校全員だ。何せ元とは

いえ海軍大将が謀反を起こしたのだ。元であるためそこまで大々的な事件としては扱われてはいないが海軍本部からしてみると海軍史上希に見る大事件だ。海軍本部がこれだけ事を構えても何ら不思議はない。

「ご苦労だったイーブ少尉」

イーブはこの事件でゼファーを取り逃がしたとはいえ二週間も足止めすることに成功したという功績で一等兵から一気に海軍本部将校の少尉にまで昇格したのだ。ただ先程の理由は建前で本当の理由は、イーブが保護されたときゼファーの「正義のコート」がイーブに掛けられており、イーブがゼファーの海軍を想う最後の意思だと汲み取った上層部はイーブをそのコートを身に付けることが許される海軍将校にすることに決定したのだ。

「はい」

一応上司であるセンゴク大将に口に棒つきの飴をくわえながら気のない返事をイーブは返した。

イーブが普通の飴から棒つきののに変えたのは昆布を何時もくわえていたゼファーを真似たものだった。イーブにも憧れという感情はあるのだ。

「うん、それで直ぐに出港するんだね」

広い大将の間から出たイーブとクザンはそのまま港に直行し、そしてそのまま船に乗り出港した。

「言っていなかったか？お前さん、俺の部隊所属になったから」

「言っていないよね?!」だって僕、今まで寝てたからね!!」

ヤケクソ気味に叫ぶイーブだが叫んだからといってマリソフォー
ドに帰れる訳じゃない。まあ、帰れる訳じゃないからこうしてヤケク
ソ気味に叫んでいるのだが。

「三時の方向に海賊船発見！距離は約6kmほどー」

「えー、メンドクサイ…足はどう?」

海賊船発見の報告に言ってはいけないことをクザンは言ったよ
うな気もするが一応仕事をする。

「すごく速いですーぐんぐん離されていきます」

イーブはそんな会話には興味ないとばかりに舐め終わった棒を海
に捨て、新しい飴をくわえる。

「ふーん…諦めるか」

「諦めるの?」

しかしクザンのやる気のない発言に思わず突っ込む。

「だってよお、」の距離じゃどっしょうもないじゃない」

「えー、じゃあ僕があれを沈めとくよ」

イーブの荒唐無稽な発言に失笑を漏らす海兵とクザン。取り合え

ず彼らは後でシメる事を決めてイーブは船の壁の上に立ってそして帝を構える。

体は半身。帝を右手に持ち、それを掲げて、左手で切っ先を摘まむ。そして左手を引いて集中してから解き放つ。

『一刀両断』

無音。クザンの同僚のサカズキの『大噴火』やボルサリーノのレーザビーム、クザンの恩師のガープの『拳骨流星群』の様な音の派手さは無いが、イーブの『一刀両断』は見た目の派手さで言えばそれに引けは決して取らなかつた。海を斬ったイーブの『一刀両断』は意図も簡単に海賊船を斬った。いや最早あれば斬撃が海賊船を通過したと表した方が正しいだろう。それほど圧倒的で、理不尽な斬撃だった。

ちなみに海賊船の回収や海賊の逮捕に船を寄せた際、イーブはクザンと先程イーブを笑った海兵を投げ飛ばして一足先に回収に参加してもらったのは当然だろう。

「今晚は」

その日の夜、イーブは船長室に呼び出されていた。

「今日の一撃、中々だったぞ」

「まあね、で、本題は？」

クザンの挨拶をイーブは軽く流すとバリバリと飴を噛み砕いてま

た飴をくわえる。

「今日の話はその正義のコートの話だ」

「ふっん」

眠たい話だったら直ぐに帰ろうかと思ってたイーブだがクザンが思ったより真剣な様子なので一先ずイーブも真剣な表情を作る。

「全員って訳じゃないが、そのコートを着てる海軍将校は大体海軍の絶対的正義の他にそれぞれが信じる正義を持ってるんだ、ちなみにオレは“だらけきった正義”な」

「うん、取り合えずその正義は早急に直すべきだね」

「それで互いに色々な正義を掲げてりゃ色々なゴタゴタがあるワケよ。下手すりゃ海兵同士が殺しあいになることもな」

原作でサカズキが自らの“徹底的な正義”の名の元にコビーを殺そうとしたことが良い例だろう。

「お前さんみたいな子供に聞くのはおかしいのかもしれない。でも先生の意思を、コートを継いだイーブ、お前さんはどんな正義を持っているんだ？」

そう言ったクザンの目は何時になく真剣だ。やはりクザンの恩師はガープだと言えど、クザンにとってゼファーは尊敬する海兵なのだ。

「うん、僕の正義は『自分勝手な正義』かな？」

『自分勝手な正義』？そりゃ、ボルサリーノの『どっちつかずの正義』みたいなモンかい？」

少し考えたイーブの答えに疑問の声を上げるクザン。

「いや、僕のはそんな現役の中将ほど芯の通ったものじゃないかな。僕がやりたい時にやりたい所でやりたい事をやりたい様にする。そんな自分勝手に我が儘な正義が僕の『自分勝手な正義』かな」

「……成る程な。そこまで芯の通った正義ならゼファー先生のコートも相応しいな」

イーブはこの正義を我が儘で自分勝手と称したが、クザンは逆に何時何処でも自分は必ず正義であるという自信に満ち溢れた正義のように感じた。

昨日クザン中將から自分の『正義』について聞かれ、海軍少尉としての自覚を認識した。剣帝。スコウエルト・イーブ。その後クザン中將から、

「これならお前にも船を任せられるわ」

とか言われてイーブは誉められたかと思った。しかし現実には、

「どこいったんですか、クザン中將ー！」

「まだ近くにいるはずだ、探せー！」

「六時の方角には見当たりません！」

「三時も同じく！」

「十二時も同じく！」

「九時も同じく！」

「くそっ、本部に連絡しろ！指示を上げ！」

「了解！」ドタバタドタバタ

クザン中將が脱走したのである。つまりあれは「これで安心して逃げられる」っていう意味だったのだ。本当にそれで良いのか、海軍本部中將。因みにさっきの台詞はイーブ イープの上司 海兵 海兵 海兵 海兵 イープの上司 海兵の順である。

「本部に連絡したところ、『何時も通り引き続き航海を続ける』とのことですよ！」

「本部がそう言うなら仕方がない！これからは中將抜きで航海を続ける！」

「ううん！」

そして本当にそれで良いのか、海軍。仮にも有事の際には大將に何時でもなれるようにしておくべき階級の中將であるクザンが脱走したのだ普通は大問題である。そして海軍の人事も問題が大有りだろう。そんなときどき脱走するような人が中將になっていて良いのだろうか。いや、原作ではかなり仕事態度に難があるあのガープ中將でも大將に再三誘われるくらいだったのだ、実力さえあれば、と言ってしまったら少し語弊があるが、明らかに管理職に向いていないような生活態度でも実力が伴っていればいい組織なのだ、海軍とい

うのは。そしてイーブもその組織の一員である以上は言われたら従う。

それにイーブからすれば、

「クザン中将の分も僕が潰せるしね…」

寧ろやり放題、殺りたい放題の好機である。後日談だが部下によると、この時イーブはかなり不気味に笑っていたらしい。

そしてそれから二週間が経った。しかし全く帰ってくる兆しすら見えない。本当に海軍将校の在り方に疑問を抱かざるを得ない。いや、しかしもうここまでくると清々しさすら感じる。勿論だからといって、真似は決してしてはいない大人の見本だが。因みにイーブは今この船の中でかなり頼られた存在になっている。何故かと言っと、

「おっ、十一時の方角、3000m先に海賊船はっけーん！狙撃『大槍』!!」

耳を塞ぎなくなる程の大きな爆発音が鳴り響き、こうして世界から悪がまた一つ減った。

「回収宜しくね〜」

このような感じで二二週間のsearch(超高性能の見聞色の覇気)&destroy(文字通り“破壊”瓦礫すら残さない)で海賊船を大体二十隻以上沈めてきたからである。これはイーブが楽しんでなおかつ海兵さんたちが安全に海賊を捕らえられるといった完璧な一石二鳥である。

しかしイーブも自分の力がここまで通用というか、通用し過ぎるとは思つてはおらず驚きを隠せない様子だ。

そして一カ月が経った。もはや当然かのごとくクザン中將が帰ってくる兆しが全く無いが、船員の皆はもう全く気にしていない様子だ。過去に何度もあったのだらう。慣れというのは恐ろしいものだ。しかし中將をスルーする部下もいかなものかとは思つが。

「ねえ、クザン中將が帰ってきて無いけど探さないの？」

「ああ、中將は二週間で見つからなかったら絶対に見つからないからな。」

とイーブの問いに中佐が答える。この中佐の回答からもクザン中將の日頃の勤務態度の悪さがうかがい知れるだらう。とイーブは今まで何度も確認したことを再確認する。

とここで海賊船を察知。

「五時の方角に海賊船はっけーん！」

しかし何時も通り『一刀両断』や『大槍』ばかりで海賊船を沈めるのにもそろそろ飽きてきた頃である。だから今日は何時もと違う潰し方をしようとイーブは決める。今回は“帝”を体に巻き付けるように構え、

「『地平切り』」

ヒュッと軽く風が切れるような音が無言の海軍の軍艦内に響く。更に追い打ちをかけるかのよつに、またさっきの構えをして同じ様に“帝”を振るう。すると静かに船がずれていつて見事に三等分され

て沈没する。

「今日も回収宜しくね。」

さらに三カ月後、クザン中将が戻ってこないという職務怠慢のペナルティを部隊全体で負わされて未だ航海をしているトップ不在のクザン中将の軍艦。理不尽きわまりない思いをしているのはイーブだけではないだろう。しかし、あと二カ月でマリンフォードに帰還する許可が降り、やっとシャボンディーパークに行く目処が立ちそうなのである。これを聞いたとき、イーブはそれはもう年相応の子供の様にはしゃぎ回っていた。当然クザン中将は 帰ってくる気配すら無い。あの人はその内ふらつと帰ってくるだろう、 というのがこの船の皆の認識である。

ところでこの船のイーブ以外の皆の階級が全員一つ上がったのだ。そう、イーブ以外の。何でもこの部隊はもう軽く三桁くらいの海賊を壊滅させているらしく、その功績が認められたようなのである。しかしその100%はイーブが潰した海賊なのである。何が何でも四才児のイーブを余り高い位に海軍上層部は就けたくないようだ。しかし待つて欲しい。勤務態度があり得ないけど大人のクザンは中将であるのに対して、理想的な勤務態度のイーブは少尉なのはおかしいだろう。しかも実力もイーブの方が断然上である。イーブの勤務態度は本当に良い。書類仕事とかも愚痴を溢さずちゃんとこなすし、抜け出さないし、ここ近海の平和にかなり貢献していると断言出来るし。海軍上層部は本当に何が気に入らないのだろうか。とイーブが悩みに悩んだ結果で行き着いた答えが、

「コートなの!?!コートの着方が気に入らないのかな!?!」

これだった。間違っているのは明らかである。そして周囲からは違う、とかそんな訳無い、とか聞こえるがイーブは気にしない。その

まま解決策を考える。

「はいちゅーもーくー！じゃあ皆に質問だよー！」

とイーブの掛け声で看板に出ている皆が一斉にこっちを向く。

「僕が今着ている正義のコート、これ前を閉めた方が良いかな、それとも全開の方が良いかな？」

と質問してみる。

「やはり他の将校と同じ様に全開の方が良いのではないのでしょうか」

と一人が言うと、

「いやっ、ここは全部閉めた方が子供らしくて良い のではないでしようか！」

と他も発言する。

そのうちかなりの大激論になったが、

「うーん、全開が七で全閉めが三かー、よし、じゃあ 全開で決定！パチパチー！」

と面倒臭くなったイーブが強制終了する。更にその後、『では正義のコートの下には何を着るか』についてまた大激論になったが、結局黒地の白いドクロに真っ赤な×印をつけた物に決定した。因みに下に着るものはイーブが自分の案を押し通して決めた。流石に真っ赤な×印が入った奇抜なTシャツは無かったので自分で書いて作ることにした。勿論黒地に白いドクロの入ったTシャツを買って、それ

を自分で赤い×印を付けることだけをする。綿花からとかそんな無謀な自給自足はしない。素人が書いた絵柄だがイーブ本人が結構気に入ってたりするので問題無しだろう。

第十話 偉大なる航路で少尉は思わぬ拾い物を

その翌日、今イープは自分の上司である大佐（昇進した）と向かい合って互いをにらみ合っている。そして大佐の方は自分の身長と同じくらいの長さの金棒（約3m）を右手で担ぎ、一方イープの方は両手で飴であるチュッパチャップスを構えている。

何でこうなったかというのをアバウトにまとめてみると、船員の一人が「大佐と少佐ってどっちが強いのでしょつか？」と言いい、じゃあ実際にやってみよう的な雰囲気になって成り行きで互いに一触即発状態なのである。海兵たちも最近戦闘が無くてフラストレーションが溜まっているのだ、たまには発散しなくてはいけないのだ。

「少尉、本当にそんな武器で良いのか？」

「大佐にチュッパチャップの武器としての素晴らしさを教えてあげるよ」

その一言を合図に大佐が金棒をイープ目掛けて降り下ろす。巨大な質量を持ち重力を味方につけた重い一撃はイープの得物とぶつかった時ガン！という大きな音をたてるがそれだけである。それをイープは右手のチュッパチャップス、いやチュッパチャップメイスで軽く受け止める。

「なっ、そんな糖分の塊のような物で俺の一撃を防げるのか…！」

「技術（覇気）の差だよ、大佐。そしてチュッパチャップスの利点その一としては軽いから両手で扱えることかな」

そう、何を隠そうこのチュッパチャップス、本当種も仕掛けもない

ただのチュッパチャップスなのである。よって非常に軽いのだ。

イーブはそう言って左手のチュッパチャップスで大佐の金棒を殴り壊す。普通はあり得ない事だが、この世界には「覇気」という不可能を可能にする素晴らしいものが存在するので飴で鉄の塊を壊すことも出来るのだ。

「んなっ」呆けている暇なんて無いよ、大佐あー？」……くっ、鉄塊『剛』！」

と大佐は最強の『鉄塊』で受け止めるがそれでは甘い。チュッパチャップスのイチゴ味の10倍は甘いのである。そんな甘っちょろい『鉄塊』じゃあイーブの蹴りを防ぎ切れるのは判断が甘いと言える。当然イーブは大佐が『鉄塊』をかけているのにも関わらず力のごり押しで大佐を蹴り飛ばし、壁に叩きつける。

「チュッパチャップスの利点その二は、安いから大量生産が可能なことだよ！」

本当にこれは安い。もう剣一振りとか銃弾一発と比べるのが間違っているくらいに。まさかの驚異の四十ベリーである。大体前世でも同じ値段だったことからやはり「ベリー」＝「円」なのだろう。ガープ中将も「拳骨流星群!!」とか言って鉄球を飛ばすよりもこの飴を投げ飛ばした方が遥かに海軍の財政のためになる事は言うまでもない。それに並みの海賊ならそれでどうにかなるだろう。

そんなことをイーブは考えながらコートに仕込んでおいたチュッパチャップスを何本か取りだし棒の部分の先にして投げる、投げる。そして大佐の服をチュッパチャップスで縫い止め、更に持っているチュッパチャップメイスを大佐の首に突き付け、

「この勝負は僕の勝ちかな」

「ああ、そうだな。俺の負けだ」

と試合を終わらせる。

「チュッパチャップメイスの利点その三は、非常食になる。あ、食べる」
「？」

と言ってイーブチュッパチャップスを一本くわえながら大佐にも一本渡す。因みにイチゴ味である。これはイーブのお気に入りなのだ。

こうしてイーブは自分がこの船で最強であることを証明した（クザン中将よりは強いけど、まだ戦っていない）。

というかクザン中将は何時になったら帰って来るのだろうか。

昨日この船で渴れの名が最強であることをここに証明したスコウエルト・イーブ。別にFORTISS931を名乗るつもりは無いが。名前は“スコウエルト・イーブ”で充分である。そして昨日の一件のお陰でイーブの発言力が更に大きくなったりしている。最早実質の船のトップである。

海軍は四才児に色々任せてて大丈夫なのかどうか不安である。しかしイーブの中身はもう既に二十二才程でそこそこの青年であるが。いや、それでも見た目四才児に任せている海軍は倫理的に問題があるだろう。

ピクンッ、と何時も通り海賊船の存在を相手に気取られる前に感知する。

「はい、皆さん！海賊船を発見したよー！二時の方角に2km！」

今回も趣向を変えてみようと“帝”を構えるイーブ。いつも通り軍艦の壁の上、海賊船に最も近い所に立って“帝”を使って海を『地平切り』の要領でたたき切る。

「しょ、少尉が海を切って津波を起こしたぞー!!」

ザツバァン、と当然イーブに作られた巨大な津波は海賊船を飲み込み海の藻屑へと劇的なイメチェンを施す。これをどうにか出来る人はもう人間辞めてるだろう。こんな災害級の大技を遊び半分で出来るイーブも十分人間辞めているが。

「よーし、今日もいつも通り回収宜しくねー」

何処をどう回収できるのかは分からないがこれは決まり文句なので仕方がない。しかしそれにしても、最近海兵の中でイーブが本格的に人外として扱われてきているのは決して気のせいではないだろう。

例えば今、イーブのことを約九割の海兵が化け物を見る ような目で見てる。それに食堂へ行くと入口で海兵が敬礼しながら道作る。極めつけはその時に「お勤めご苦労様です！」なんて言ってくるのだ。正直ここまでくるとイーブも困る。イーブは自由業の人ではないのだから。どちらかというのを皆を守る海兵なのだから。加えて言うならば、チュッパチャップスが切れたときに「早く補給してこい！少尉がこの船を沈めるぞー！」とか言ってくるのだ。海兵の中でイーブは何なのだろうかと小一時間問い詰めてやりたい。もっとも、そんな悩み事は翌日になればもう今日は吹っ切れているものだが。いや、

吹っ切れたというかつか悟った（諦めたとも言つ）という方が正しいが。

そして今日もいつも通り海賊船を潰しているよ、

「七時の方角に海賊船発見！距離は5km！でも……この感じは中に奴隷がいる……？」

『奴隷』。その一言で船内がざわつく。奴隷と言ったら言わば人質のようなのであるからだ。サカズキ中将ならば問答無用で焼くだろうがイーブをはじめとするクザン中将の部隊の人たちはそこまで過激ではない。

「あの罫體は……」外道「のラーチェトの海賊団だね。あの船に寄せられそうかな？」

とイーブの問いに、

「いえ、あっちの方が船脚が速いので追い付けそうにありません！それに追い付けたとしても、あちらには“人質”がいるのでそれは得策ではないかと……」

と海兵が答える。確かに相手に人質がいたら海兵も全力で戦えないだろうし、それは命の危険に繋がるからだ。

「うーん、じゃあ僕が直接奴隷を人質に取られる前に殲滅するしか無いね」

と言い海兵が次になにか言つ前に

『月歩』

船を離れる。イープはあの島で体力もかなりつけたから、5 km ならギリギリ『剃刀』でいけるのではないかと思い『月歩』から『剃刀』に切り替える。だが途中で無理だと悟ってやはり『月歩』で走ることにしたのだが。海賊船の上空で海賊たちに悟られないような高度にいるイープ。しかしここまでではほんの準備運動に過ぎない。ここからが本番である。まずイープは人質の閉じ込められている部屋を見聞色の覇気で探す。それで人質は皆船の中の下の方にかためられていると分かった。つまりは看板でどれだけ暴れても大丈夫、問題無いということである。

そして船の真ん中に『剃刀』で降り立ち、

「スラムツパギー、海賊の皆さん。海軍本部少尉の「剣帝」スコウエルド・イープですよー」

と近くにいた海賊を斬って着地、自己紹介をする。

「早速だけぐれ…」

満面の笑みを浮かべながら一度一呼吸置いて、「帝」を両手で体に巻き付ける ように構えて、

「壊滅しなよ、『ミキサー』！」

一気に横薙ぎに振るう。そして、

グロオオオ！と看板上にある全て、人も壁も食べ物も財宝も、同じく無慈悲に天まで届く巨大な竜巻が巻き上げる。多分これが「普通」の竜巻だとしても彼等が無事であるわけは無いが、この竜巻は「剣帝」スコウエルド・イープクオリティの斬れる竜巻である。多分今頃

巻き上げられた海賊たちはミキサーにかけられた野菜ジュースの様になっていくだろう。

同時刻、先程イーブ少佐が飛び出して十分も経っていない軍艦では職務怠慢も良いところだがトランプに洒落こんでいた。上司も上司なら部下も部下である。ただし、中將の直属とあって実力は折り紙つきだが。

普通四才の子供が六式の一つである『月歩』なんて使ったら驚くべきなのだろうがこの船ではそんなことはない。何故ならばその子供が「スコウエルド・イーブ」だからである。そう、この物語の主人公である彼はたった数カ月で軍艦の海兵全員から圧倒的な信頼を勝ち取ったのである。

そして海兵の一人が、

「そろそろ回収に向かった方が良くないか？」

と口にしたその時、

グロオオオ！と轟音が鳴り響き、天まで届く巨大な竜巻が発生する。そして海兵の全員がその瞬間にこれを引き起こした人間が誰であるか悟る。実力のある海兵全員がドン引きである。

そんな中、海兵の1人が呟く。

「俺、少尉に昇格出来る気がしないんですが…」

彼は期待の新人としてエリート街道をまっしぐらするつもりだったのだが目の前にいるスコウエルト・イーブ少尉に海軍本部将校の絶対的な越えられない壁を見せ付けられて諦め気味である。

「大丈夫だ、イーブ少尉が異常過ぎるだけだ」

落ち込んでいる部下を慰めるのは上司の役目と言わんばかりにこの船で最も位の高い大佐が新人をフォローする。そのフォロー船員の全員が激しく同意した日常の一幕であった。

船底しか残っていない海賊船ではイーブが一ヶ所にまとめられて鎖で首と両手を繋がれている男女五人を見つめる。

「スラムツパギー、海軍本部少尉の“剣帝”スコウエルド・イーブですよ。皆をこれから保護するけど…」

と五人を一瞥して、

「君、賞金首だよな」

と一人の男の首を何の予備動作も躊躇いもなくはねる。

「他の皆は大丈夫だね」

と残った四人に言うもののイーブと彼らの間には既に溝があるようだ。当然だろう、見ず知らずの子供に目の前で一応知り合いが殺されそれから返り血で全身を染めながら何事も無かったかのように接してくるのだ。彼らはイーブに対して恐怖以外の感情は抱けないだろう。

「じゃあ鎖の鍵鍵鍵かーぎゃ…」

と皆を解放するために鍵を探すイーブはあることに気が付く。

「あつ鍵、斬っちゃったわ」

語尾に“(笑)”なんて付きそうな口調で言うが全く笑えない。非常に笑えないだろう。何故ならこれから一生涯この鎖と仲良く暮らしていかなくてはいけないのだから。つまりは自分が奴隷であったことを一生周囲に知らせながら生きていかなくてはいけないのだから。しかも都合悪く鎖は海楼石製、絶対に斬れないのだ。だから首の繋がっている四人はイーブを睨み殺すかの様な勢いで睨む。

「てへ、悪かったね、ごめーんね。でもまさか鎖が海楼石製とはね…ちよっと首出してくれないかな？」

と言って“帝”を抜く様は自分の不祥事の証拠隠滅のために目撃者を殲滅するようであるため誰も首を差し出さない。差し出す訳がない。

「むー、やりにくくて少し難易度は上がるけど…」

と言ってイーブにとっては無造作に、しかし見る者が見れば美しく洗礼された刃物さばきで“帝”を振るう。ガチャンと一斉に海楼石製の鎖が断ち切られて、奴隷たちが解放された。これは技術さえあれば何でも斬れる異世界最高の名刀“帝”とそれを持つに相応しい世界最高の剣士スコウエルド・イーブだからこそ出来る技である。こうして男三人女の子一人の計四人の元奴隷を救出したのであった。

そして無事に元奴隷たちを保護し船底しか残っていない海賊船に軍艦の方から来てもらい彼らに乗せた後にイーブが一言、

「拾ってきたは良いけど育てられる自信がない」

「……犬じゃねえよ！……」

呟いた瞬間に示しあわせたかの様に皆でツッコミを入れる。しかし厳密に言えばツッコミを入れた皆は間違っている。何故なら、

「ゴロニヤーン」

「よしよし」

元奴隷だった紅一点のイーブよりも年下だった女の子は悪魔の実動物系“ネコネコの実モデル三毛猫”の能力者だったからだ。しかし三歳位の女の子を奴隷として飼っていた海賊たちは色々問題だろう。やはりペースト状の肉肉ジュースにしておいて良かったのである。勿論大変美味しくいただきましたませんでした。

「あと奴隷の一人、海賊だったから首はねといたよ」

今回は珍しく死体が残ったので回収して本部に持っていかなくてはいけない。面倒だな、と言いながら海兵が辛うじてお世辞なら船と呼べるかも知れない木片に行って死体を回収してくる。

「で、お前らは何処に連れてけば良いんだ

」？

と大佐が事務的な話に移行する。当然と言えば当然の話だろう。彼らにも家庭があるのだ。奴隷から解放してもらったところで両手を挙げてハッピーエンド、なんて訳は無いのだ。寧ろここから家に帰るまでが本番と言っても過言ではない。

大佐が皆から下ろして欲しい場所を言っていき、紅一点の猫娘名前はシロン・スチルドパッドは家が無いということが分かった。というかどこにあるのか覚えてなかった。

「貴方には渡せない！この子はうちで引き取ります！」

「……何処で覚えやがった、そんな表現を！」「」「」

「いやでも実際マジで年が近い僕がこの子と一緒にいた方が良くと思
うんだよね、うんって言うか少尉命令異論は認めん」

「……まあ、この子がいいって言うのなら良いだろう」

キリツと効果音が付きそうな勢いで後半捲し立てるイーブ。これ
には上官の大佐も頷くことしか出来ずにいた。

「で、スチーはどうしたい？」

「にゃん？すちー？」

「うん、スチルドパッドだからスチー。スチーは僕の妹になりたい？
それともなりたくない？」

「にゃん、よろしくお願いしますにゃん。おにーにゃん」

「くり、と頷いてイーブに同意するスチー。

「こっちこそ宜しくね、スチー！」

「ふにゃあああん！」

と抱きついて喉を撫でるイーブとその高い技術に悶絶するイーブ
の妹シロン・スチルドパッド。名字も違つし血も繋がっていないが良
い兄妹になるだろうとこの場にいる誰もが思った。

第十一話 偉大なる航路で為正者は引き継いだ 清を

「ここは偉大なる航路のとある海域。上も下も青一色だ。」

「きゅぴーん！海賊船発見！狙撃『大槍』！」

「こんな平和な晴天の空、また悪が滅んだ。」

「わああああ、おにーにゃんすごいにゃん！」

イーブの超長距離型殲滅砲、通称狙撃『大槍』はスチルドパットの
お気に召したようだ。彼女曰く、

「ぶおんがだーんとなつてどっかんがすごいにゃん！」

とのこと。何言っているのは分からないが彼女が気に入っている
のならばそれで良いだろう。

「うにゃー、すちーお腹すいたにゃん」

くうーと可愛らしい音を立ててしょんぼりするスチルドパット。
お腹の音があれだったからといってオレンジジュースで済ます気は
イーブにはない。

「スチーはお肉派？お魚派？」

「どっちも好きにゃん！」

イーブの問い掛けにはんざいで元気よく答えるスチルドパット。イーブはそれにふむふむと答えると『月歩』で何処かに行ってしまった。

そして巨大な海王類の巣窟、凧の帯上空にイーブは到着して叫んだ。

「肉と魚の両方食べたいなら魚肉が良いよね！」

イーブの中では牛肉の様な肉を持つ魚の肉が魚肉らしいのだが彼がそう思っただけならそうなのでしょう。

しかしこんなところでおちおちしている暇はない。今のイーブの唯一の家族で最愛の妹、スチルドパットがお腹を空かせてにやーにやー言っているのだ。時は一刻を争う。

「海は潜れないけれど！鋸は突けないけれど！帝で奴らを刺し殺せる！狙撃『大槍』！」

丁度海王類の心臓を射抜くように手加減をして巨大な海王類を一匹仕留める。仕留めて浮き上がったきた海王類を背負って後は船に戻るだけだ。

「わああああ、おおっきいにゃああん!!？」

少し頑張りすぎたせいで非常に疲れたがそれもスチルドパットの笑顔を見れば吹き飛ばすというものだ。

スコウエルド・イーブが会って間もない子供を家族として迎えて、そしてここまで手厚く、大切に扱っているのには理由がある。スコウエルド・イーブの前世、御劔 帝は家族という物を知らなかった。別に両親と死別した訳ではない。ただ両親が全く御劔の相手を、子育てをしなかったのだ。所謂ネグレクトというやつだ。

それは御劔が物心ついて割りと直ぐの事だった。『もう子育てに疲れた』とだけ言い残した両親はそれっきり食事、洗い物、洗濯、掃除、ゴミ出し、それら全てを放棄したのだ。親のしたことといえば気まぐれにリビングの机になけなしの生活費を出すだけ。なまじ賢かった御劔は家事を少しずつだがマスターしていった。しかし自分の作った料理がどれだけ美味しく出来上がるかと、自分の編み出した食器洗剤の配合がどれだけ上手くいったとしても、ちょっといい洗剤を使って衣服がどれだけ上手く柔らかく仕上がっても自分で作り上げた小道具で家がどれだけ綺麗に成るうとも、ゴミ出しで近所の人にどれだけ誉められても御劔は満たされなかった。もつと御劔自身も何かは分からないなにかに飢え求め続けた。それが家族ということに気がついてからはいくら彼らの気を引こうと努力したが出来たことと言えは高校の授業料を払うようになっただけだった。

そんな飢えに飢えていた御劔 帝だったからこそ事故で死んだ後ラヴィサメに見初められてその世界に連れてこられたのだ。そしてラヴィサメとの死合で「殺し会うことで人と繋がれる」ことに気がついたイーブはこんな性格に捻り曲がってしまったのだ。そしてそんな捻り曲がったイーブだからこそイーブは病的に家族を愛するのだ。

そんな船長脱走の連帯責任を取らされて和気あいあいと追加の航海を上から申し渡された一行に新たな指令が入る。

それは『定時の連絡が無かったとある軍艦の調査』だ。偶然本来連絡が無かった船が居るはずである場所の近くにこの船がいたから下った命令なのだが、これが終わればマリンフォードに帰っていいと許可が降りたので渡りに船、即刻首を立てに振った大佐であった。

その三十分後。

「おーおー、例の船はっけーん。状況は……成る程ね、うんうん、腐ってるね」

「……腐ってるとはどういう意味だ、イーブ少尉？」

見聞色の覇気のこの船一番の使い手であるイーブだけが例の船の状況を知ることができた。

「軍艦が謀反を起こしてるね。そして逆らうやつは皆殺しと。生き残った“海兵”はただ一人だけだね」

「まっ待ってください、少尉！」

「んー？」

状況を伝えてさっさとその軍艦まで飛んでいこうとするイーブだが部下の忠言に一応耳を傾けておく。

「あの船の船長といえば海軍本部少将“元”少将ね」海軍本部元少将キクリング・ポロは覇気を使って更に悪魔の実動物系“トリトリの実モデル軍鶏”を食べた能力者で次期中将は確実と言われた猛者なんです！いくら少尉がめちゃくちゃだとしても…悪いことは言いません！悪魔の実シリーズ最強の自然系“ヒエヒエの実”の能力者のク

ザン中将を待ちましようー！」

この新兵は色々間違いを犯している。先ずはイーブ自身も彼の言う悪魔の実シリーズ最強の自然系「ドロドロの実」の能力者であることだが、一番の間違いは違う。彼の一番の間違いは、

「僕が」たかが「能力者の」たった「少将」風情」に負けるはずがないよね。ね、スチー？」

「おにーちゃんは無敵にゃんー！」

イーブの実力が少将以下だと思ってたことだ。スチルドパットの声援を背にイーブは『月歩』で敵艦まで走っていった。

「スラムツパギー、皆。僕は海軍本部少尉」剣帝」スコウエルド・イーブだよー」

船に残った唯一の生き残りの十五、六ほどの女を庇うようにイーブは着地して高らかに宣言した。

「ふえりきつ、君ーここは危ないから逃げてくださいー！」

海軍のダサイ制服を着ているところを見ると彼女は一等兵以下。それなのに少尉のイーブに命令とはどういうことか。この船の船長のやっていることを鑑みると部下への教育が不徹底であることも頷ける。

「うん、先ず君、僕より階級下だよ。僕海軍本部将校だしね。敬語使おうか」

だがそれに納得できるかはまた別問題だ。例えイーブが敬語なんて使う気が全く無かったとしてもだ。

「ふっ、ふえ!?しょっ、しょしょ少尉!もっ、もももと申し訳ありません!私は海軍本部雑用クランカー・ドーです!」

まさにこの紋所が目に入らぬか状態だ。びしっ、と敬礼を決め直立不動のドー。

「「「無視してんじゃねー!!」」」

「うん、クランカー・ドーだね。じゃあドー、君は泳げるかな?」

「ふえ!?はっ、はいっ!泳げまする!!」

口調が色々おかしなことになっているがそれが彼女の愛嬌なのだろう。

「「「だがら無視すんなー!!!」」」

周囲が何やら五月蠅いがそこは無視だ。イーブはドーの襟を掴んで、

『クランカー・ボール』発射っ!」

船まで投げた。彼女はギャグ補正でなんとか助かっているだろう。メタい。

「んで、誰がキクリング・ポロなのかな?」

ドーを投げ飛ばしたイーブは『良い仕事しました』と全身でアピール

ルして一応聞いておく。覚えていたら彼の死体だけは身元特定できるようにしておこう、というイーブなりの配慮なのだ。

「ああ？海軍本部少将の俺に何の用だ、海軍本部本部少尉君？この人数相手なら逃げた方が身のためじゃねえの？ギャハハハ！」

群衆の中から出てきた大柄な男彼こそキクリング・ポロ。しかし彼もまた新兵と同じ過ちを犯している。

「はあくだからさ、」 たった「二百人と」 たかが「少将程度に僕が負けるはずがないよね」

そう言っちゃ否やイーブは身近に居た雑魚を真上に投げる。

「GO！GO！GO！GO！GO！GO！GO！GO！GO！GO！GO！GO！GO！GO！GO！GO！」

投げる。投げる。投げる。投げる。投げる。

「……………まあ、「これで」 たかが「少将風情だけになったけどね」

「はっ、雑魚が何人居ようと居まいと関係ねえよ！ギャハハハ！俺はあんな雑魚の様にはいかねえ！」

キクリングが身構え能力を発現しようとするが、ドカン！という破裂音と船の揺れによって失敗する。

彼はいくら雑魚は要らないという信条を持っていたとしても今回はイーブを止めるべきだったのだ。もしそうしていれば船は失わずに済んだだろう。

『ゲリラGO!雨』。うん、即興で作ってみた技だけど中々良さげだね」

落ちてくるのは先程イーブが投げた人、人、人、人。イーブの武装色の覇気は纏った彼らの死を防ぐことは無かったが一人一人が高威力の砲弾に見せた。計二百発の砲弾に晒される船の末路は沈没しかあり得ない。

「嘗めやがってクソガキが……お前も道連れだ！」

船が沈めば能力者のキクリングも一緒に沈むことになる。駄菓子菓子、この下手人のイーブを道連れにしようとするのは当然の流れだ。

メキヨメキヨとキクリングが能力を発現してその姿を変えてゆく。

「わぁ……」

背も元から99cmイーブの二倍の2mあったのだが三倍の3mに伸びた。だがイーブが一番驚いたのはそこではなく、キクリングの姿だった。

「バツ、バシャーモ……!」

確かにバシャーモの進化前は若鶏かもしれないがこれは無いだろう。"白ひげ"がこの世界を滅ぼす能力者ならばキクリングは世界観を滅ぼす能力者であろう。

「お前だけは生かしておけない『二度蹴り』！」

著作権的に非常に危険な技を放つキクリング。この小説ごとイー

プを葬る気が。

『紙絵』でキクリングの『二度蹴り』をかわし、『剃』で距離を取ったイーブ。しかしまたキクリングがしでかす。

「『高速移動』！」

彼の父親も『高速移動』を使えたのだろう。イーブの『剃』に近い速さでキクリングも移動し更に『二度蹴り』。イーブはこれもかわして先程よりも速い『剃』で距離を取るもまた追い付かれる。

「俺は時間が経てば経つほど“加速”するぜ！」

最早何も言うまい。確かに夢の世界の彼は“加速”する使用であるのだが。何だこの釈然としない気持ちは、とイーブは首を傾げる。その答えは『違和感』だろうがそう答える人はいない。

しかしいくら加速したからって、

「いくら雑魚の素早さが四倍になったところで僕に追い付ける筈がないし、僕に勝てるわけが無いのにな」

これが80族の限界。確かにキクリングは今までは一度相手の攻撃を見切ればどんな相手より速くなれる様に調整してきたかもしれない。だが今キクリングが相対しているのは130族、160、180族なんて枠組みに当てはまらない真正正銘の怪物“剣帝”スコウエルド・イーブだ。こんな下司に帝を抜かないと決めているイーブだが、それでも二人の差は埋らない。

「ここまで来たら…反動がキツイがそんなことは言ってられねえ！食らえ最終奥義『フレアドライブ』！」

炎を纏ったキクリングがイーブに向かって自らを燃やしながら突進してくる。まさに最終奥義、ウルトラダイナマイトだ。

しかしいくら燃えてようが覇気を纏ったイーブには関係ない。

「えい」

そのまま突撃してくるキクリングの首を掴まえると、乱暴に背負い投げするかのようにつまみながら投げ、首から下を遠心力で何処かへ吹き飛ばした。

「あっ、手羽先どころか行っちゃった！」

イーブは何時何処でも平常運転だ。

第一章あとがき

こんにちは、作者のゆっぴーです。新章突入かと思いましたが？残念あとがきです。

今章ではイーブの強さ、いい加減さ、そしてヤンデレ的家族愛を中心に書いております。伝わりましたか？伝わったら何よりです。伝わっていないのなら今伝えました（笑）。

また、生きているオリキャラは何人いたでしょうか？今思い出せるだけあげていきましょう。

ラヴィサメ…大体こいつのせい。種族“創造主”。ただしワンピースの世界を作ったのは彼女ではないため全力を出せずイーブに肉体を破壊される。この世界では実力は大将以上。得物は“帝”、“將軍”、“法王”。彼女は自分の世界を救った英雄。改造人間。戦闘狂で狂人。

白衣の男…ラヴィサメの後輩。種族“創造主”。ワンピースの世界を作った人。昔自分の作った兵器“帝”、“將軍”、“法王”が世界を滅ぼしかけて以来兵器開発ではなく種族を進化させることに邁進。その成功例はラヴィサメただ一人。胃痛持ち。名前はまだ出てないはず。出てないよね？

クランカー・ドー…イーブの友人。決してイーブのヒロインではない。雑魚。ドジ。馬鹿。容姿は“日常”に出てくる“東雲なの”。勿論背中にネジはない。

シロン・スチルドパット…イーブの妹。元奴隷。“ネコネコの実モデル三毛猫”の能力者。一応海軍本部雑用。仕事はしていない。血

縁には姉がいる。髪の毛は黒、茶、オレンジの三色。

スコウエルド・イーブ…この小説の主人公。前世の名は「御劔 帝チートオリ主」。「ドロドロの実」の能力者。得物は「帝」という刃物。六式は修得済み。ただし六王銃は使えず。しかし本命は「帝」な為そんなことはどうでもいいと思っている。また同じ理由で自分の悪魔の実にも大した期待はしていない。髪も目も濡れたグラウンドの様な茶色。自分の正義は『自分勝手な正義』。

これがオリキャラ紹介です。疑問があれば感想へ。ある程度お答えします。作品との矛盾があれば感想へ。書き直しします。

これからは用語紹介です。

自分勝手な正義…イーブが自分が正しいと思った時に正しいと思つた場所で正しいと思つた理由で正しいと思つたように正しい事をする正義。

この世界：白衣の男が作つた世界。作つた理由は人智を越えた「英雄」ができるまでを観察し自分の研究に活かすため。よつて彼は世界に手を出すことを嫌う。

世界：「創造主」が作つた世界。世界によって色々な法則が存在する。作り方は意外と簡単で小学校高学年の夏休みの自由研究でよく世界が作られる。

近代三大妖刀：「帝」、「將軍」、「法王」の三振り。白衣の男に作られた兵器。盗まれて世界が滅びかける。三振りは何があつても折れず、刃こぼれせず、持ち主と共にある。

將軍…作られた兵器。形は大劔。別名「力の妖刀」。これを一度

振ればどんなに離れた星も一撃で粉々というトンデモ兵器。ただし反動で使用者も木っ端微塵になる。その威力故にある程度封印されて万人用に使っていたところ盗まれて、世界が滅びかける。"帝"、"法王"も悪用されたが、これによる犠牲者が一番多かった。現在はラヴィサメが封印無しで所持。

法王：作られた兵器。形はサバイバルナイフ。別名"技の妖刀"。一度これを抜けばその惑星上の物をオートで使用者を含めて原子単位に切り刻むというトンデモ兵器。その威力故にある程度封印されて万人用に使っていたところ盗まれて世界が滅びかける。現在はラヴィサメが封印無しで所持。

帝：作られた兵器。形は使用者が一番人を殺すのに最適と感じる形状。これを持つものは常時人を殺すのに最良の手段を考えるようになる。また、死ぬ程殺人欲求が高まる、我慢すれば自分を思わず殺してしまいそうになるほどに。心の弱いものは"帝"に飲まれて常に人を殺し続ける殺人マシンとなる。持ち主は殺されなければ変更はされない。持ち主以外が"帝"を持つと持ち主の数倍以上の精神汚染に遭う。他の二振りと比べて能力がシヨボいので封印抜きにしておいたところ盗まれて世界が滅びかける。これによる犠牲者は一番少ないが唯一成功例のラヴィサメを殺しかけた兵器となる。現在の持ち主はスコウエルド・イーブ。

原作との相違点

ゼファアの海軍離脱が九年前から十五年前に

次は次回予告。どれが誰の発言か…皆予測がなばp(^ ^)q

「ふっ……ふむけるな……!!」

「イーブ少尉、あの海賊船を全て」今すぐここで「殲滅しろ」

「……」デザート」を食べさせてくれないかな？」

「『四皇』と『王下七武海』の名前は伊達じゃないね。まるで化け物だ」

「同じ海兵で殺し合うなんて絶対に間違っています！」

「やっとシャボンディーパークに到着したねー！」

「サトリます」

「ほう、では嫌だと言ったら？」

「こんな所で会うとはね、フィツシャー・タイガー」

「自分が最強だと勘違いしている自然系の寿命は短い」

「海軍本部大将がそう簡単にやられてたまるか」

「蛇みたいだね。気持ち悪いよ」

「俺は人間は嫌いだ、俺が思ってる人間が全てではないことが分かった」

「そんなに私たちが信用できない？」

「自分の作った檻に閉じ込められて死になよ」

「ぬりィ、ぬるすぎんぞ！そんなんで俺様を本当に焼くこと思ってん

のかああ!？」

「全く役に立たないと思ってたのにね、ウォッシュウォッシュの実」

「言っとくけど、君たちのほとんどが僕と戦う資格すらない位弱いつつ」
「うん、気付いてるのかな？」

「強者との楽しい死合い」

それでは第二章。そつだ新世界に行こう。お楽しみに!!

第十二話 海軍本部で帰還者は不意打ちの出航を

前回割とあっさり少将を潰した「剣帝」スコウエルト・イーブ。因みにこの前聞いてみたところ、海賊を潰したボーナスやら、少佐の給料やらで、イーブの貯金がもう五百万ベリーを超えている。これを聞いて少ないと感じる人は多いかも知れないがこれは実際はかなり多い。まずイーブはそもそも皆殺し前提の大規模殲滅技である『大槍』『一刀両断』『地平切り』『ミキサー』しか用いず、生き残る賞金首はまづいない。これでまず公開処刑を望む海軍はイーブにボーナスを満額渡さないのだ。さらにここは偉大なる航路の前半である「楽園」。総合賞金額も高くて一億弱なのである。そんな億越えが前半の楽園に頻繁に出没するようになった暁には海軍は壊滅的なダメージを受ける事になるだろう。加えて仕事で海賊捕縛をやっている海軍には当然賞金を満額渡さないし、渡した賞金（ボーナス）も部隊で山分けなのだ。寧ろそんな条件の中で貯金が五百万貯まったイーブが異常なのだ。しかしいくら貯金しても衣食住が保障されてるから別にそんなにお金は要らないのだが。と言うかこのペースで行ったら直ぐに一億ベリー貯まりそうである。使う機会は無いだろが。給料はいいけれど使う暇がないから宝の持ち腐れ。恐ろしい職場である、海軍本部は。

そんなこんなで更にまた海賊船を十隻ほど消して、海賊だった物たちの一部を確保している今この頃。

この前沈めた元少将のこの唯一の生き残り、クランカー・ドールとイーブ、スチルドパットは結構仲良くなった。しかし事情は知らないのに本人は自分のことを『お姉ちゃんと呼んでください！』などと言っているが、イーブもスチルドパットすらも彼女をそう呼ぶことは一生ないだろう。何故ならどんくさいから、いやどんくさ過ぎるからである。彼女は姉ではなく放つとけない幼馴染みといったこ

るだろうか。彼女の失敗を挙げるときりがないが、その一部を紹介するとすると、この前イーブの為にカレーを持ってきたと言い、そのカレーをイーブの頭の上にひっくり返して渡してきたり（要はカレーを頭にかけられた）、突然原因不明のタックルをイーブに喰らわせて（足がもつれたらしい）海に放り出したりしていたなどがある。因みに海に放り出された後にイーブはファーストキスをよく分からんウシ顔の海王類に奪われてしまった。別にあまりにそういったことを気にする質ではないが腹が立ったのでその海王類は八つ当たり気味に切り刻んだ。やはりそれに比べたらスチルドパッドが良かったと言うのが本音だ。他にもなぜか火のついた蠟燭を持ったドーがうっかり手を滑らせてイーブの左肩に引火。直ぐに消したがイーブの弱点属性の火による不意の攻撃（？）であった為普通に攻撃が通った。最早悪意が感じられるほどのドジっぷりだが、見聞色の覇気の使えるイーブにはそれに悪意が無いことが分かっている。分かっているから寧ろ余計に腹が立つ部分もあるのだが。

因みに炙られた部分は凄く固くなり、関節も動かなくなった。しかしそこは火傷が治るとまた動かせるようになるのだ。ただし、火傷痕は残ったが。

などと色々有りながら（主にドーのせい）もマリソフォードに到着。港ではヒナとスモーカーが出迎えた。

「皆おひさー！突然だけどこの娘の紹介するね。僕の頭の上に乗っている猫はシロン・スチルドパッド。僕の妹だよ。スチー、人に戻って。」

「よんこくじゃん」

とイーブの紹介で挨拶をするスチルドパッド。なんだこの可愛い生き物は。

「とういづかイーブ、その娘はどうした？」

とスモーカー少佐がイーブに問いかける。

「拾った」

返ってきたのは最低の返事である。もっと良い表現は無かったのだろうか。

「おい「ら、その娘の親はどうした」

下手すれば誘拐である。スモーカー少佐の語尾に怒気がこもる。

「僕がこの子の父親で兄だよ。ねー、スチー？」

「にゃん！すちー、おにーにゃんのいもつとー！」

「そういう意味じゃねえ！その娘の本当の親はどうしたっつってんだよー」

と散々はぐらかされて口調が荒くなるスモーカー少佐。しかしそれも、

「さあ、知らない。僕も知らないし、この子も知らない」

突然冷たくなったイーブの声で何も言えなくなる。イーブがスチルドパッドに優しくするのは似た境遇であることも一因なのだろうか。

とりあえず今分かることはスモーカー少佐のしていたことは人の

触れられたくないことに触れるようなお節介、所謂余計なお世話であるということだ。それによってスモーカー少佐が言葉に詰まって会話が途切れるも、

「それでこっちの娘はクランカー・ドー。階級は海軍本部雑用ね。そんでスチーとドー、この怖い男の人は海軍本部少佐のスモーカー、女の人が同じくヒナね」

「ふえ？よっ、よろしくお願いしますー！」

イーブが何事も無かったかの様に会話を再会しさっきまでの問答を無かったことにする。

「ああ、よろしくな」

「「こちら」そよろしく。ヒナ相槌」

大人な二人の海軍少佐は直ぐにこの二人と打ち解けるだろう。

「そつだ、テメエがこの前言ったシャボンディーパークに行く手筈がもう済んでるから何時でも出発出来るぞ」

とスモーカーが思い出したように言う。

「グッジョブ、二人とも!!よし行こう!さあ行こう!! 今すぐ行こう!!!……あっ、ドーも行く?」

と、こっで完全に忘れ去られた存在に気付く。スチルドパッドは連れていくこと確定である。

「ふえ?!?!じゃ、じゃあ一緒に行かせてもらいます…」

さすがのドーも海軍本部の将校三人とどこかに遊びに行くのは緊張するのだろう。ただ、本人が行くって言うてるから連れて行くが。

「じゃあ、ドーの準備も必要ね。ヒナ思考」

「ふえ!?じゃ、じゃあ今すぐ取ってきます!!」

と言って猛スピードで自分の寮か家に向かおうとしたとき、

「スコウエルト・イーブ少佐!雑用のクランカー・ドー!二人はこれからサカズキ中将の部隊に所属することになりました!サカズキ中将が今から航海に出ることになった。準備はこちらで済ませているので早急に出頭せよ、とのことですよ!」

と海兵が来て言った。

ドーの方は、

「ふえ!?かつ、かしこまりました!」

と言って走って行ったが、

「シャボンディーパークは次の機会にするわね。ヒナ提案」

「まあ、そう落ち込むなって」

「……………ふっ、……………ふざけるなー!!」

イーブは納得など到底出来ない。何故海軍上層部はイーブの嫌が

ることばつかしてくるのだろうか。イーブだけ出世出来なかったり、さっきの航海だって滅茶苦茶期間長引いたのに加えて、やっと帰ってきてついにシ ャボンディーパークに行けると思ったのに今度は異動で直ぐに出航らしい。

「ふっ、……ふざけるなー!!」

バアアアアン!と地面に八つ当たりをしてクレーターを作り、文句 をタラタラ言いながらもすっかり中将の所には向かう。やはり組織に属している以上は無闇に上司には逆らうのは得策ではない。

そしてサカズキ中将の船に到着。イーブは当然テンションが最低なのに対してドーの方はテンションが最高のようだ。この温度差は何なのだろうか。ドーは中将閣下の船に乗せてもらえるのが嬉しいのだ。あの時はいなかったとはいえ、一応前の船も中将の船だったのだが。

そんなこんなでイーブはサカズキ中将とご対面。

第一印象は

(何、このいかついおっさんは?)

である。勿論口には出さないが。イーブの元の世界でやのつく職業をやってそうな顔立ちに、その人たち顔負けの殺気。十中八九子供には好かれないだろう。と言うかその雰囲気では好かれたら子供が好きなのに好かれない人たちが可哀想である。

実力ではサカズキ中将はイーブの弱点である『火』の上位能力、『マグマ』の能力者であるから多分攻撃は効くだろう、しかしそれを考慮したとしてもイーブが圧勝出来るだろう、将来はまだ分からないが。

とここでサカズキ中将の船の船員に会い、

「「「「「子供!?」「「「「「

「…………潰すよ?」

非常に失礼なことを言われた。確かに子供だが、このコートを着ているという事は少なくとも将校なのである。子供とはいえど少しは上官である少尉を敬う気持ちくらい持つべきである。

そんなことを考えているうちに、

「では次つ、イーブ少尉!自己紹介を!」

と指名される。"イーブ少尉"という名前が出たときに、周りが一斉に、

「あいつがキクリング元少将を海に沈めたあの"剣帝"スコウエルト・イーブ少尉か!」

「まさか!まだあんなに子供だぞ!」

「俺、数カ月にイーブ少尉を見たことあるけど、あいつだぞ」

「あんな子供が"逃走成功率0%"のイーブ少尉か!」

「本当にあの子供が"海軍大将クラスの化け物"のイーブ少尉か!?!」

「あんなに小さいのが"常笑いの破壊者"のイーブ少尉なのか!」

「あの娘が飴で大佐に勝ったと言われるイーブ少尉か!？」

とざわつく。なにやらイーブについての噂が凄いことになってる。ただし嘘は無いのだが。しかし最後の人の『あの“娘”』は止めてあげるべきだろう。いくら中性的な顔立ちだからといってモイーブは“男の子”なのである。“男の娘”なのでは決してない。男の子である。大事な事なので二回言っておいた。

「……おっけー。取り敢えず、僕のそのデストラクティブな二つ名については後でゆっくり、ゆっくり話し合うとして、自己紹介をするよ。僕は多分“その”スコウエルト・イーブ、階級は少尉だね。歳は大体四才で、好きなものは飴。得物は見ての通り刀だよ。それで僕の上に乗っている猫はシロン・スチルドパッド。僕の妹だよ。」

と短すぎる“帝”を刀と言い、名字の違う猫を妹と言うイーブ。事情の知らない海兵たちにはイーブがただの変人に見えただろう。こんな感じで簡単に自己紹介を済ませて皆船に乗り込む。

やはり皆クザン中将の所と比べると行動がきびきびしてる。これが上司の差なのだろうか。

そしてサカズキ中将の船に乗り込んでしばらくたって、中将の副官から、

「すまないが、皆に稽古をつけてやってくれないか？」

と言われたので、

「はい」

と快諾。

看板に皆を集めて、

「今から訓練として、『皆VS僕』をやるから、どっ からでもかかって来てねー！」

と言って稽古を開催する。

勿論皆容赦なくぶっ飛ばす。 さっきの自己紹介で色々言われたこともあってクザン中将の所で稽古する時よりも三割増しで厳しくしている。 さらにスチルドパッドも興奮して、

「皆びゅーんすっくじやん？」

何て言うから、イー普の海兵たちをぶっ飛ばす腕にも力が入る。

稽古が終わった時にはちゃんと「イー普少尉閣下」と呼ぶようになり、何やら尊敬？畏敬？の眼差しで見られるようになったので色々な意味で良い時間だったと言えるだろう。

そして眠って次の日、イー普ら一行は偉大なる航路の後半の海、『新世界』に来ていた。 トンネルを抜けたらそこは雪国だった、的なノリで。

「よお、遅かったじゃねェか」

ここはイー普が今現在いる海の新世界にある、ドレスローザ王国の謁見の間。 そこにいるのはこの国の王であり晴れて王下七武海入りを果たした、ドンキホーテ・ドフラミンゴと彼お抱えの情報屋の二人

だ。

「済まないな。だがその分深く例の奴のことを調べられた」

「ほう」

ドフラミンゴは手元の蒸留酒を傾けて続きを促す。

「現在奴はサカズキ中将指導のもとそいつの船に乗って新世界に来ている」

「他にもあるんだろう、例えば奴の交遊関係とか」

「勿論だ。先ず奴が異常なほど愛してやまないのが義妹のシロン・スチルドパット。年は二つ前後で動物系”ネコネコの実モデル三毛猫”の能力者だ。次に奴の友人は三人だけてま、今はマリソフオード待機のヒナ少佐とスモーカー少佐だ。女は超人系”オリオリの実”男は自然系”モクモクの実”の能力者だ。もう一人はイーブと同じ船の雑用クランカー・ドーだ。あと近いうち五人でシャボンディー諸島に旅行に行くつもりだ」

「大切な家族が動物系……なるほどな、それでゼファーとはどうなってる？」

「ゼファーは世界政府から離反。その際イーブと戦闘して決別。だがゼファーはイーブに自分のコートを渡し、一部ではそれでイーブをゼファーの遺志として祭り上げる輩もいるみたいだ」

「アイツが”正義”を背負うか……中々滑稽だ…!!じゃああの辺にいるブレードとシャボンディー諸島にいるアイツらに………と伝えておいてくれ」

「分かった」

危険な男ほど暗躍する。

第十三話 新世界で破壊者は傀儡の暴走を

少し前、寝ている間に偉大なる航路の後半の海、「新世界」に入ってしまった「剣帝」スコウエルト・イーブ少尉。

しかしいくら偉大なる航路の前半とは比べ物にならない程きついと言われている「新世界」でもイーブの剣技で壊せない船は少なく、というか今のところ全く無く、今までと同じように海賊船の撃墜スコアを順調に伸ばしている。ぶっちゃけた話、今までと全然変わらな。この調子でいったら「四皇」にだって勝てるのではないだろうか。

「また殲滅しおって。公開処刑にしたいから生け捕りに言うちよるじょろつが」

「にゃははは、気にしない気にしない。それとも手柄が立てられなくて嫉妬でもしてるのかな？」

しかし上司とは上手くいっていないらしい。前世の世界では上司と上手くいっていないという理由で退職する若者が多かったがイーブは大丈夫なのだろうか。

「んなっー」

イーブの挑発にゴボゴホツと体を溶岩化させるサカズキ中将。彼らはどうしても馬が合わないらしい。イーブが大将になるとすれば多分「黄猿」と呼ばれるだろう。「赤犬」と仲が悪いから。

「気にしなけん気にしなけん」

スチルドパッドは兄の真似をしたがる年頃らしい。しかし兄の挑発を真似されると火に、いやマグマに油を注ぐようなものだ。

「そついえば貴様は何者じゃあ？イーブの妹？部外者はマリソフォー
ドで待つとらんかい！」

案の定噴火するサカズキ中将。 勿論比喩表現だ。

「うわー、こんな美少女を家で一人きりにしろだなんてサカズキ中将、
鬼っ畜ー」

「きつちくーにゃん」

「良いじゃろう。そんなに焼かれないなら望み通り焼いぢやるわ
ー！」

と溶岩の拳を構えるサカズキ中将。 本気で『大噴火』を撃つつもり
である。 非常に大人気ない。

「きゃー逃げろー」

「にげろにゃん」

と『大噴火』を撃たれないように船内に避難するイーブとスチルド
パッド。 流石に一時の激情に任せて自分の船を焼くほどサカズキも
バカではない。 勿論イーブがその気になればサカズキ中将の一人や
二人無傷で対処出来る。 寧ろあいてが弱点を突いてくる程度で苦戦
してる様ではラヴィサメには勝てなかっただろう。 しかしこういう
のは雰囲気を楽しむのが大切なのだ。 その様な感じでここに来てか
らはきつちり書類仕事をし、さらに海賊討伐をやったりと仕事に精を
出してなおかつスチルドパッドと遊び、かなり充実した生活を送って

いる。しかしそんな日常が続いていた今日に事は起こった。

「十時の方向、4 km先に海賊船の艦隊を発見！海賊船は少なくとも百はあります！あの海賊旗は多分……」大艦隊」のフレードです
「！」

と海兵が叫ぶ。百なんて大艦隊は普段「四皇」だって組まない。そんなことをすると動きがどうしても遅くなるし、戦争をするのならともかく日常の航海ではそんな大艦隊は邪魔なだけである。しかしこのブレードはそんな大艦隊をひっさげてこの「新世界」を航海している稀有な海賊なのだ。

「そんなのはずっと前から認知してるし、正確には 百二十六隻ね。まあ、潰そうと思ったらもう数km遠くても余裕で全部沈める事が出来るんだけどね」

「だったらなぜそうしないのですか!？」

と聞き返す海兵。当然である。いくら多大な戦果を挙げているサカズキ中将の部隊といえど、こんな大艦隊を相手にしたら全滅だつて有り得るのだ。ならば出来るのなら早く殲滅してもらうに越したことはない。

「うん…奴隷がいるんだよね。全部の船に。しかもかなりの数。本当に趣味悪いね、この海賊は。だからこの人たちを救出して、なおかつ海賊を一網打尽出来ちゃうような画期的な作戦はないかなあ、なんて考えてたんだよね」

「……それでいい作戦は浮かんだのですか…?」

と少し間を空けて他の海兵が聞いてくる。

「全然だよ。サカズキ中将の能力は大規模破壊が得意、っていうかそれしか能がないし、僕の剣技もどちらかと言うと大規模破壊に特化しているからね……」

イープの言葉に一気に船の雰囲気は暗くなる。因みにイープの剣技の師匠とも言えるラヴィサメが大規模破壊に特化した技ばかり教えたのは、いつか来るであろう国家クラスの大部隊との対戦に備えるの事だ。そんな日は何時か来るのだろうか。そして人のことを信じるのは良いことだし、イープも自分の言葉を信じてくれるのは嬉しいのだが、それにあまりにも大袈裟に一喜一憂する海兵は如何なものか。一応まだイープ四才なのである。

「だから僕がああ船に乗り込んで大暴れしてかなりのダメージを与えてその後に皆が船で接近して砲台とかで攻撃。んでもって皆で乗り込む。これが僕の思い付く最高の作戦かな……。でもこの作戦だったら、結構味方が傷付くだろうけどね」

最後に少し不穏な事を付け加えるが、ここで嘘はつかない方がいいだろう。しかしここでサカズキ中将が出てきてイープに命令をする。

「イープ少佐、あの海賊船を全て〃今すぐここで〃殲滅しろ」

「これにはイープも絶句する。

「(話聞いてたのかな？ 海賊船の殲滅は奴隷がいるから出来ないって言ってたのに)」

「ええっと中将、ですからあの海賊船にはなんの罪 もない奴隷が多数乗っているから殲滅出来ない」構わん、潰せ「……」

「この人聞いてたよ。聞いてた上での発言だったよ……」

「ここで海兵を失うくらいだったら奴隷ごと海軍の掲げる『絶対的な正義』の為に海賊ごと沈めた方が、世界のためだって言うちよるじやろうが。それにその 奴隷の中にも海賊があるかもしれない」

確かにここで海兵を失うのは良くないかもしれないし、奴隷の中には殺されて当然のような人間もいる。現に元海賊だった奴隷を殺すことにはなんの戸惑いもイーブは無い。しかし、それが残りの無実な人間を見捨てていい理由にはイーブとってはならない。今現在のイーブの『自分勝手な正義』にそれは反する。

「それでも、残りの無実な人間を見捨てていい理由 にはならないと思うよ……多分……」

「だが、この大海賊時代で今海軍は深刻な人手不足 だ。そんな中海兵と奴隷、どっちを取るべきかわかっちゃるのかあ!？」

サカズキはイーブを凄じい剣幕で怒鳴る。これが海軍内でも“過激派”と呼ばれる一派の頂点にいるサカズキ中將である。数年前にもオハラで考古学者が乗っている“かもしれない”、という理由で住民が避難するための船を沈めただけのことはある。確かにサカズキ中將の言っていることは海賊を倒す事だけを考えたら非常に合理的で場合によってはそれが“正義”と言われる事もあるだろう。しかしスコウエルト・イーブの“自分勝手な正義”はそれを完全な是とはしない。確かに海兵たちが犠牲になるのも避けたいが、それでも単なる被害者をただ正義を実行する、そのために切り捨てたのであれば海軍の存在意義はイーブの中では無くなってしまふ。しかしスコウエルト・イーブの掲げる“自分勝手な正義”はサカズキ中將の掲げる“徹底的な正義”よりも芯のある物ではなかったこと。さらに人は極限状態に追い込まれると普段の性格なら決してやらないような事を考

え、行動をしてしまう生き物であること。今回はその両者が重なってイーブは暴走してしまった。サカズキ中将に「殺せ」と言われ続け、海兵の安全と奴隷の解放という出来もしないことを望み、思考がループし続けた先の答えが、

「そつだ。みんな壊しちゃえば良いんだよ」

これであった。これは昔ラヴィサメにもよく言われていたのだ、

『困った事があつたら取り合えず壊しとけ。全部壊したら大体の事は解決してる』

と。悩むような性格ではなく、時々憂いがあるすれば自分の観察する世界が面白くない事くらい。そんな世界なら壊してしまえ、と考えるのがラヴィサメなのである。

今回の事をイーブは確実に後悔するだろう。そしてイーブら奴隷を救いながら他の海兵も傷つけずに戦う事の出来ない自分の弱さを恨むだろう。イーブはこれから罪の無い奴隷たちを自分の手で殺したという十字架を背負い続けるだろう。

だからイーブはこれからもっと、もっと、もっと「強さ」を求める。例えそれが茨の道だったとしても。それでもイーブは強くならなくてはいけない。一人で世界中の海賊を相手取れるくらいに、そして自分と帝一振りで世界を変えられるくらいに。だから今は何も考えずにただ「帝」を振る。

『「ミキサー」、狙撃「壁」』

イーブは「帝」を四回振って左右二つずつに『斬撃攪拌』の斬撃の竜巻を発生させ、艦隊の横の逃げ道を封じる。そして無数の狙撃「大

槍』によって形成された弾幕、『壁』が無慈悲に艦隊を襲い、跡形も残さない勢いで破壊していく。

そしてイーブが“帝”を振って数秒たったとき、“大艦隊”フレード海賊団全百二十六隻は消滅し、その船に乗っていた人間は海賊もそうでない人間も同じく全員の消滅を確認した。

「あつ……あつ……僕は……何を……何をしたの……？」

失敗というのはやって気が付くものである。やってみないと失敗するかどうかは分からないが今回はイーブから見たら確実に失敗だろう。ただしイーブから見たら、の話ではあるが。

「流石は“剣帝”の二つ名を持つことだけはあるみたいじゃのう。成功じゃ。誇って良いぞ、“剣帝”スコウエルト・イーブ」

「ちっ、回収してよね……」

と上官の労いの言葉を無視して船内に入ろうとするが、

「貴様、少尉だからといってあまり調子に乗るなよ……」

「邪魔だよ」

扉の近くに立ってたサカズキ中将を盲信している海兵を船の外に蹴り飛ばす。今のイーブにとっては同じ海兵とさえど“サカズキ派”の連中は敵にも等しいのだ。今は理由が無いが少しでも、下手すればごじつけ程度の屁理屈だとしても理由ができれば嬉々として彼らに手をかけるだろう。

「一人になりたいから入って来たら殺すよ……？」

ギロリと看板にいる海兵を睨むとそれだけ言い残して扉を蹴破つて中に入った。

「っ、おっ、おにーじゃん！」

と言って最愛の妹が心配して飛び付いて来るも、

「一人にして欲しいんだけど」

とそっけなくあしらってスチルドパッド甲板に置く。最愛の妹に対して随分な扱いだが最愛の妹だからこそこの対応だったのだ。それ以外の人間が呼び止めていたら即座に良くて半殺し、普通は首をはねられている。

「あー、最っ悪だよ！」

と悪態をつきながらイーブはあるいていった。

第十四話 新世界で狂人は甘美なデザートを

「ちっ、くそったれ！」

バン！と乱暴に将校以上になると与えられる自分の個室の扉を蹴破ってズカズカと床に穴を開けそうな勢いでベットまで行きそこでバタリと意識を失ったかのように倒れ、そのまま眠りにつく。

ドンドンと近くにいる海賊同士のいざこざが起こったせいで目が覚めたイーブ。近くといっても5km程は離れているのだが。それでもぐっすりと眠っていたイーブを起こすには十分だった。そしてぐっすりと眠っていたところを起こされたイーブの機嫌はバロメーターの最低を軽く振り切っている。振り切れすぎてバロメーターが壊れないか心配なほどだ。そして少し今のことを忘れたいから、イーブが軽い運動でストレス発散をしようと思った時点で海賊たちの運命は決まった。手配書には *dead or alive* とあるかもしれないが今のイーブにとっては海賊なんて *dead only*。ストレス発散の為の軽い運動相手でしかないのだ。

そしてイーブは自分の部屋から甲板に出る。

「あー、その君、うん君だよ君。首を繋げてたいのなら早くこっちなよ」

当然海兵をクビにするという意味ではなく、生物学的に首を切るという意味である。

「へっっ？あっ、はいすみません！」

と常に異常だが何時も以上に異常なイーブを刺激すると本当に首

をはねかねないので海兵がイープの元へ直ぐに行く。

「あそこ」の海賊船、壊してくるから」

とだけ言い残して、イープは小競り合いをしている海賊船二隻の元へ『月歩』で行く。

一隻の海賊船の帆の真上に移動したイープ。当然海賊に悟られるようなことはしない。といっても海賊たちは目の前の海賊に夢中だ。派手に音をたてない限り気取られる事なんて無いだろう。

「全く、近所迷惑」の上ないね、世界の害虫どもが。皆死ねばいいよ」
と誰にも聞こえないように小さく呟き、帆の先を軽く持つ。

「やっぱり遠くから“帝”を振って海賊船を沈めてるだけじゃ体が鈍っちゃうからね。たまには運動しないとイケないよ…ね！」

と語尾に力を込めて海賊船を持ち上げる。確かに海賊船はガレオン船と呼ばれる程大きくない。寧ろ小さい海賊船と言えるくらいだ。それでもだからといって海賊船を鈍器として空中で振り回すような人間はいないだろう。そもそも暗殺向けの六式に力任せの戦い方なんて本来はない。そして目の前で敵船が持ち上げられている海賊も、突然自分の船が持ち上げられた海賊も状況が飲み込まずに何も出来ないでいる。海賊船は逆さに持ち上げられたので当然海に落下する海賊もいる。そして彼らの断末魔の叫びが残った海賊たちを現実に引き戻す。

「おいつ、何かに掴まれ！落とされるぞ！」

「なになっ、何だありゃあ!？」

「いくら『新世界』でもこんな化け物がいるなんて」

「おい…テメーら…一時停戦だ！こいつをどうにかする！繰り返す！この化け物海兵をどうにかするぞ！」

と持ち上げられた海賊たちは混乱の極みにいたが最後に叫んだ男、この船の船長によって混乱が治まり、そして敵対していた海賊とも連携を取るようになる。

「全く…。ゴミがどれだけ集まったとしても粗大ごみにしかたかなって理解しなよ」

「ドドロドロの実」を食しているイーブには格下がどれだけ集まろうと傷一つ付けられないのだ。

「君らを見るのも飽きたしそろそろ終わらせようかな」

ととっても海賊船を斧のように振り下ろす。当然狙いは海賊船。振り下ろされた海賊船の船首がつかはしのように看板に見事に刺さる。バキバキッと今度はそれを強引に横に振って船の側面にも多大なダメージを与える。

「ふわぁ〜。皆ゴキブリみたいにしぶといね」

しかし船に対する攻撃はそれだけでは済まない。バキィ、バキィと今度は剣道の稽古で素振りをするかのように海賊船を振り下ろし続ける。海賊船が完全に沈んでも振り下ろす手は休めない。海賊船が海にぶつかる度に波が起き、海賊たちを海の中に引きずり込む。例えば泳いで逃げようとしてもイーブがそれを許さない。今度は海賊に向かって直接海賊船をぶつける。そして海賊船から船員が全員追い出

され、海賊たちが海の底に沈んだ頃に、

「あーきた。全然面白くない」

と海賊船を無造作に捨て、パパッと三枚下ろしにする。しかしここ
まで体を動かしているのに全く心が晴れない。イープの目に見える
世界全てが色褪せて見える。何もかもがつまらない。

「はぁ…全然面白くないね」

と言って何も無かったかの様に軍艦に帰還する。

「勝手に船を飛び出してどうしたんじゃあ？」

と帰ってきて早タイプが最も会いたくない人物サカズキ中将に
会う。下手すればここで戦争が起ころうともおかしくはない。

「別に。大したことは何も無かったよ。っていつかあいつに言っとい
たのにね。殺してやるのかな？」

「奴は関係無いじゃろうが。何故ワシの許可なく出動したのかと聞い
とちよるんじゃあ」

「正義の為だよ。ほら、サカズキ中将は大好きだよな。皆殺しの正義
…？もういいかな？だるいから戻ってるよ」

とサカズキ中将に憎まれ口を叩いてイープは自分の部屋に戻る。
そしてシャワーも浴びず、食事もとらずにまさしく泥のようにつに眠る。

そのまま海賊が全く現れずに三日間イープは食事もとらずに過

す。しかし今は“大海賊時代”。海賊に対するエンカウント率は最早確変クラスである。

「……六時の方向に海賊来てるよね…？」

勿論これは確認の問いだから「いいえ」なんて返答は有り得ない。だから当然海兵の答えは、

「はいっ、六時の方向に海賊船が見えますっ！」

しか有り得ない。この海兵はろくに確認せずイーブに話を合わせているだけだがこの海兵を責められる人間はこの船にはいない。誰だって命は大切なのだ。

「じゃあ僕があのかの船に直接乗り込んで潰して来るよ…」

とだけ言い残して『月歩』で海賊船に向かう。

さつき船内から出てきたイーブ少尉を見て質問された海兵は思わず後退りをしてしまった。説明しがたいが、今すぐにでも自分がイーブに殺されるような、最初に刃物の様な冷たい物を押し付けられている様な感覚に陥ったのだ。しかし彼の感覚は決して間違っていない。イーブは今この船の妹のスチルドパッドと友人のドー以外の全員に殺意を向けているのだ。確かにスコウエルト・イーブはかなり好戦的で時々結構洒落にならないような殺意を出すこともあった。しかし周りに、それも長時間振り撒いたのは初めてだろう。

イーブがこんなに急に人が変わってしまったのも、この前のサカズキ中将の命令のせいなんだろう。そうに決まっている。サカズキ中将の船に乗って長い古参の海兵でさえあの命令には少し引いたのだ。

やはり新参者のイーブへのダメージは計り知れないだろう。海兵たちの胃袋の為に早くイーブには立ち直って欲しい限りだである。

イーブが例の海賊船に乗り込んで十数秒たった頃、イーブは結構な数の海賊に囲まれている。対するイーブは今は自分の中で沸き起こっている殺意を押さえるので必死だ。何事にもやるタイミングとというのは重要だ。その時にイーブから出る汗が海賊たちには不安の汗と勘違いされ、さらに彼らを助長させる。イーブは“この世界”に来てからやはり大きく変わった。まず、殺しに何も感じなくなった。いや、むしろこの前みたいに殺し合いをしているとワクワクするらしくるのだ。元日本人としては考えられない事である。それも四六時中殺しをしてなくちゃ落ち着かない、所謂殺人中毒状態である。ただし海賊限定である現在はまだまだだ。

「ったく、海兵のガキが俺様の船になんのようにだ、ああ!？」

とイーブがボーツとしてたら船長らしき人に話し掛けられた。そろそろ開始である。あの島にいた時ラヴィサメが言っていた事にこんな言葉がある。

『戦いには二種類の楽しみ方がある。理性をぶっ飛ばすような強烈な強者というスパイスの効いたメインディッシュ。もう一つは理性を溶かすような甘美な弱者というソースの引き立ったデザートだ』

今からイーブが楽しもうとしているのは甘美なデザート。つまり弱者を徹底的に潰し、弄び、絶望させて断末魔という最高のソースのかかった殺しというデザートを楽しむのだ。

「僕さ、今結構機嫌悪いからさ……」

とここで台詞を一旦切り、その男に近付く。

「……………デザート…を食べさせてくれないかな？」

と言うと同時にズドン、と『指銃』を海賊の男の腹に決める。さらにちゃんと指が刺さってる事を確認して一気に腕を振り抜く。

「がくあ…!？」

と腕が貫通して漸く自分が何をされたのかが分かり断末魔の叫びを上げようとするがもう遅い。イーブが乱雑に腕を引き抜いた事で傷が広がり男は満足に悲鳴も上げられずに絶命する。

「おい、クソガ…」

と近付いて来る男に最後まで言わずに股間を蹴りあげる。しかもた だの蹴りではなく、しっかりと『嵐脚』を飛ばして。イーブの『嵐脚』は男を見事に二等分し、男の半身が同時に地面に倒れる。

ゴトン

この音を合図にすぐさま移動を開始。振り返って、真後ろにいる男に急接近。完全に相手の隙をついて、

「指銃』『裂』

男の左肩から右脇腹に向かって大怪我を負わせる、と言うか切り落とす。大怪我じゃ済まない、致命傷だ。そしてその男も自分が何をされたのか気付く前に絶命してしまふ。

「あああああああああ
!!!!!!」

と後ろから錯乱した他の海賊が迫ってくる。しかしこういうのは死亡フラグである。イーブは少し飛んでその男の顔に迫り、両手の指を相手の上の歯と下の歯にかけて、ブシヤアッと頭と顎をひきちぎる。こんな死に方がある映画を前世で観たことがあったのでイーブはそれを参考にしたので。

そして空中に居るときに僕に向かって放たれた弾丸を『月歩』と『紙絵』でやすやすとかわし、その銃を持っている手を捻って組伏せ、その腕をしっかりと持ち、次にイーブがバク転をして更に捻りを加える。そしてその腕を引っ張って、腕を肩から捻り千切る。だめ押しにその男の頭を左足で踏み潰し、千切った腕を海賊に向かって投げつける。その腕は見事な直線の軌道を描き、一人の男の腹、別の男の胸を貫通し、もう一人の男の頭に綺麗な赤い花を咲かせた。

さらに振り向いて、

「嵐脚『手刀』」

飛ぶ手刀を飛ばして、前にいる男の刀ごと首を切る。

次に視界の端に映った、海に逃げようとする男に狙いを定める。

男の背中に『剃』の速さでドロップキックを繰り出し、倒れたところを上向きにする。そして鎖骨から一気に肋骨をえぐりだし、その剥き出しになった胸から心臓を取りだし、周りの海賊たちに、

「次は誰かな？」

と死刑宣告すると同時にそれを握り潰す。

一方サカズキ中将らの軍艦はたった今走って海賊船に単騎で行ってしまつたイーブを追つて、海賊船に向かっているわけだが海兵の全員が乗り気でない。今のイーブには関わりたくないというのもあるが、やはり一番の原因は、

「ぎゃああああああああ!!」

「腕は！右腕しか残って無いんだ！だからこれ以上引き千切らないでくガアアア!!」

「もう、もうやめてくれ!!それ以上刺されたら死んじまう!があああ!!」

「ぞっ、財宝とか全部やるかっ……」

このような感じでさつきから海賊たちの断末魔の叫びが聞こえてくるからだ。だが海兵たちの耳に一番響いているのは断末魔ではなく、

「ハハハハハハハ!!もっともっと僕を楽しませなよ!!」

イーブの笑い声だ。サカズキ中将があんな命令をだすからイーブがこんなになつてしまつたのだ。これからは暫く、海兵胃にクリティカルヒットが続きそうである。

そして海兵たちが海賊船に着いたときに最初に見た光景は、

「ハハハハ……ハハ……ハ……飽きちゃったよ」

と壊れたように笑いながら、一定のリズムでもう死体とは言えない程ペチャンコに満遍なく踏み続けているスコウエルト・イーブ。そして海賊たちの血で染まりきった甲板とその中央に積み上げられている一目で死体とわかる海賊だった物の山。当然この中にまともな死体なんて一つも無く、安らかな顔をしているものも一つも無い。死体とか見慣れている職業であるはずの海兵ですら思わず吐いてしまう程の光景だ。

それでもイーブの気は晴れない。海賊を徹底的に蹂躪していると、きはイーブも自分が今までにないほど生き生きとしているのが分かる。だがその分“デザート”を完食してしまった後の虚無感もその分大きい。あれだけ楽しかった筈の惨殺ショーも数分も経たない内にもう思い出せなくなり、殺した人間の断末魔も顔も全く思い出せなかった。

「しょうじつ……」

イーブの増援という名目で送られてきた海兵はイーブの作り上げた地獄を体験したような死体の山に思わず呻く。

「あ？何か用？」

イーブはその山から飛び降りて海兵の片目を気まぐれで抉り抜こうとしたところ、ふと自分の左手が何かを持っていることに気がついた。

「……ああ、百手（ムカデ）だね」

それはイーブが最期の最後まで弄んだ死体。その死体は身体中くまなく計九十八本の手が突き刺さっていて全部で百本の手が生えた死体になっていた。正直かなり趣味が悪い。どんな猟奇的なド変態

サディストもここまでではない。

その百手を見た瞬間、さっきまでの映像、断末魔、血の香り、肉の味、骨の感触をほんの、たったの一瞬だけ思い出す。でもその一瞬だけでイープの機嫌は少しだけ良くなった。

さらに海兵はイープが飴以外の物を食べていることに気が付く。そして好奇心にかられた海兵は止めておけば良いものを質問してしまふ。

「少尉、一体何を食べていらっしやるのでしょうか？」

と。そしてイープの答えは、

「もも肉。いけるよ。食べるのかな？」

何のとは言わない。ただその時イープは海賊の数少ない腕の残っている死体に視線を投げただけは言っておく。

これから暫くは海兵の胃袋にクリティカルヒットが続くだろう。海兵は全員早急に胃腸薬を買い占めようと決意した。

第十五話 孤島で剣士達は味の濃いディナーを

この前ラヴィサメに言われた通りに甘美なデザートを楽しんだ「剣帝」スコウエルト・イーブ。確かに一時的に嫌なことを忘れさせるにはデザートが一番だ。だがデザートは所詮は一時しのぎに過ぎない。直ぐに嫌なことを思い出す。ただこの海は海賊が多くて嫌な事を忘れるデザートに困ることはないから鬱状態にはなっていないのだが。寧ろ海兵が鬱になりそうである。あれからまだ一週間しか経ってないのにイーブが食らったデザートは軽く千を越え、海賊団の数にするともう二十を突破する。そのお陰でイーブの正義のコートが真っ赤に染まってしまい、自慢の茶髪も返り血で赤黒くなってしまった。デザートを食っちゃ寝なんてしていたらそれはコートの汚れは取れないし、髪だって血がこびりついて固まってしまったら。別にイーブは後悔はしてないが。

しかしあの事を完全に忘れさせてくれるには甘ったるいデザートではダメだ。それでは腹は膨れない。満足出来ない。やはり理性をぶっ飛ばすような強敵、メインディッシュでなくては全然足りない。満腹になるような、満足出来る様などびっきりのメインディッシュでなくては。

そんなある時かなり強い海賊団、しかもその中の二人は下手すると大将クラスの化け物を発見した。これならイーブを満足させられそうである。

「海賊発見。潰して来るよ...」

とだけ言い残していつも通り『月歩』でその海賊船に迫るイーブ。後ろで海兵が色々言ってるけど、そんなものには無視を決め込む。今のイーブにとっての最優先事項はメインディッシュなのである。し

かしその海賊団の掲げるどくろでさっきは皆してイーブを止めようとしてた理由が分かる。左目に二本の傷があるドクロの後ろで剣が交差した海賊旗に、竜の船首。間違いなく「四皇」シャンクスの赤髪海賊団の船レッド・フォース号である。

そしてその船に乗っているもう一人の怪物はシャンクスのライバルで友人、世界最強の剣士「鷹の目」ジュラキュール・ミホークである。

初めて会うシャンクスはともかくとして、一度闘ったことのあるミホークの気配にも気付けないなんて、イーブは相当参ってるようである。

そしてレッド・フォース号に乗り込んで、

「スラムツパギー。久しぶりだね、ミホーク。全然変わってないね」

「そう言っお前は雰囲気が変わったみたいだな」

取り合えず挨拶をする。戦う気は満々だけど、原作でもイーブはこの人たちの事は結構好きだったのだ。速攻で宣戦布告はしないでおく。下手したら戦争になるということもある。出来れば戦争にならないように殺し合いがしたいのだ。

「ちょっと職場の雰囲気合わなくてね」

「だったら俺の船に乗らないか？同じく赤髪だしな」

とシャンクスは誘ってくるが、

「有り得ないね。あとこの髪は海賊の返り血で染まったものだから

ね。本当は茶髪だよ」

速攻で断る。イーブだって正義を背負ってる海兵なのだ。上司が気に食わないからって海賊に身を落とす気はない。

「あっはっは!!そうか、それは悪いことを言ったな」

「別にいいよ」

とシャンクスはすぐに諦める。

「それじゃ」

とイーブは再び口を開き、

「僕より弱い奴の下につく気は無いしね」

と付け加える。ぶっちゃけた話、こっちからでなくあっちから宣戦布告してもらおうように喧嘩を吹っ掛けているのだ。海賊なんて殆どどの奴が単純である。子供に馬鹿にされ、喧嘩を売られたら、

「誰がお前より弱いつて……?」

大抵の奴は買う。笑いながら剣を構えるシャンクス。

「なら試してみる…?」

全てはイーブの計画通りである。しかしやはりシャンクスとミホークの両名は凄い。流石は「四皇」と「王下七武海」である。そこにいるだけでイーブの理性をぶっ飛ばしそうである。

「それでは私もそれに参加しよう」

と“夜”に手をかけるミホーク。役者は揃った。しかしこんな所で三人が本気で戦うとなると被害が半端ない事になる。少なくとも船は沈むだろう。それを避けるために海賊たちが近くにある無人島で戦うように言う。

そして三人が移動して来たのがヤマメツチャオオイ島。この島の名前を付けた人のネーミングセンスを疑うが、確かに山は多い。

そしてイーブたち三人が自分たちの得物に手をかけたまま静止して全く動かなくなる。

これはサシじゃなくて、三つ巴の戦いである。下手に抜刀した瞬間に他の二人から袋叩きにされてしまうのだ。サシだったらまだ対応出来るかもしれないが、流石に世界最強クラスの人間二人が相手だったら化け物と名高い“剣帝”スコウエルト・イーブも流石に不利である。

そして数秒、数分、いや数時間経ったかもしれない。とにかくシャンクスの目が一瞬、ほんの少しだけミホークに向けた瞬間にイーブがシャンクスに仕掛ける。

『剃』で急接近し、

「非抜刀『瞬打』」

抜刀する勢いで“帝”の柄でシャンクスの溝尾を狙う。もっともこの刀身の短い“帝”で抜刀に時間がかかるとは思えないが。それでも抜刀には抜刀の戦い方があるのだ。そしてそのメリットを受けられるために敢えて抜刀術を使ったのだ。厳密には抜刀してないが。し

かし、

「危ないだろ」

とそれを軽々とジャンプでかわす。しかしイーブの攻撃をかわすだけでは駄目である。そのかわした先には『夜』を構えたミホークがいるのだ。

だけどそれを今度はシャンクスも刀を抜いてそれを受け流す。だったら次はイーブの番である。さっきの『瞬打』で『帝』を抜き、その勢いを殺さずに回転してミホークに斬りかかる。でもそれはミホークの『夜』に止められて、イーブがミホークを力技でぶっ飛ばすだけに留まる。

これで皆得物を抜いた。こっからが前哨戦である。

全員が刀を構えて、三人の真ん中に一斉に斬撃を繰り出す。

ゴオオオオオオ！と三人の斬撃が衝突し、その衝撃が曇天の空をこの島の上空の雲だけを切り裂き晴天に変える。

各自相手の遠距離の実力は測れたことだし、次は手元が得意かを計る番だ。

全員同じことを考えていたのかイーブと同時に先程斬撃がぶつかった所に駆け出す。ミホークの『夜』がシャンクスを縦に切り裂こうとし、シャンクスがそれを回転してかわして、そのままイーブを横に切るうと襲いかかる。そしてイーブはそれを跳んでかわし、ミホークの側頭部に『大槍』を入れるも、それはしゃがんでかわされる。

ザアアアン、ヒュン、バアゴオン！と外れたミホーク、シャンクス、そしてイーブの斬撃が海を割り、森を切り、山を破壊する。

「四皇」と王下七武海の名前は伊達じゃないね。まるで化物だよ」

「ふん、私たちとまともに打ち合える貴様も十分化け物だ」

「悪かったな。えーっと、スコウエルド・イーブだっけか？お前は十分強いなー」

と小手調べの感想をそれぞれ述べる。

「でも……」

僕が口元をニヤつかせながら、

「ここからが本番だよ（だ）！！」

と三人でハモらせる。

そして三人で再び打ち合いを始める。今度は本気で。誰かが一人を攻撃すれば、もう一人が攻撃した人間を攻撃し、次誰かが一人を攻撃すればもう一人もその人間を攻撃して、一時的な二対一を作ったりと、戦いはその瞬間に姿形、又優勢劣勢すら変えてゆく。

戦いの余波や当たらなかつた斬撃が、空を割り、山を砕き、森を消し飛ばし、そして海を荒れ狂わせる。まさしく天変地異。この言葉がぴったりと当てはまるだろう。

そして数時間打ち合って、三人とも満身創痍になり、そろそろ限界

に近づいてきた頃。確かにイーブは、もっと冷静に時間をかけてゆつくりと勝利を最優先に考えて戦えば、もう少しは優位に戦いを進められただろう。でも今回はそれが大切じゃない。今イーブが求めているのは勝利ではなく今まで考えている悩み事何かをぶつ飛ばすような強烈な素晴らしい香辛料のかかったメインディッシュ。それを楽しむためなら自分の体を、命を度外視した過激な戦い方をするので。

それで今の状況はシャンクスとミホークに見事に挟まれている状態。相談してないがこのまま挟み撃ちが来るだろう。

そして二人が接近して前後から同時に襲いかかって来るが、二人の攻撃が当たる直前に、

「かかったあー！『ミキサー』！」

ブワアアアアア！とカウンターで完全に決まったイーブの『ミキサー』は世界最強クラスの剣士二人を巻き込んで斬り刻みながら巻き上げる。そして落下した瞬間に二人の脳天に人指し指を構えて、何時でも『指銃』を出来るとアピールする。

しかしイーブは今回はギリギリであった。やはりここ最近食っちゃ寝ばかりで食べた物も肩ロース、タン、ホルモン、ハツ、もも肉だけだと栄養も偏ってしまう。つまりイーブの体調は万全とはほど遠いのだ。だからこの『ミキサー』でもそこそこ斬られはしたが、完全に決まったはずなのにミホーク、シャンクス共に致命傷は一つも無く、落下した瞬間は蓄積してきたダメージがでかくて流石に綺麗な着地は出来なかったものの、直ぐに立ち上がるだけの体力も残っていたのだ。

しかしこんな強烈で美味しかったメインディッシュを味わった後もデザートと違って虚無感がない。残ったのは味わっていた時と同

じ位の強烈な後味である。

それを味わってイーブは今までウジウジしてたことが馬鹿らしく感じた。今の海軍が気に食わないんだったら、自分がトップの元帥になって海軍を変えれば良いのだ。それで世界を変えるには“四皇”と“王下七武海”ぐらい片手間で倒せるくらいにならなくては駄目だ。人は目標が出来るかと努力ができる。そして目標の為の努力は嫌なことを忘れさせるのだ。

「なんか吹っ切れたよ。ありがとうね。二人とも！」

と二人に手を貸して立つのを手伝ってやる。

「気にすんな！」

と笑顔で返してくるシャンクスと、

「ぶん」

と照れて、そっぽを向くミホーク。

そこに現れる謎の海賊船。物凄く興奮めである。空気くらい読めと言いたい。自分らがお呼びでないことくらいは分かって欲しいものだ。

無言で縦と横にスライスするシャンクスとミホーク。そしてイーブは、

「空気読もうよ!! 狙撃『大槍』い!!」

全てを瓦礫に変える。

さっきのは完全に無かった事にして、レッド・フォース号に乗り込む三人。

仲良くなったしシャンクスは討伐しなくていいやと海兵にはあるまじき事を考えているイーブ。

因みにこの戦いが「ヤマメツチャオオイ平野の戦い」として後世に語り継がれるのはまた別の話。

赤髪海賊団から海軍本部少尉「剣帝」スコウエルト・イーブの噂が流れ、海賊の中で大将と同じくらい危険視される事になるのもまた別の話。

第十六話 新世界で海兵は正義の紛争を

前回調子が悪いながらも“四皇”と“王下七武海”を相手取って辛くも勝利したスコウエルト・イーブ。

「イーブ、お前やっぱおもしれーな！どうだ、うちの船に乗らねーか!?」

「これ何回目かな？十八回目だよ！何回も君の船には乗らないって言うてるよね!？」

さっきの戦いが終わって、イーブが勝ったが誰も重傷を負わなかったため、そのままシャンクスの船、レッド・フォース号に乗って、宴会をすることとなった。ミホークは全然喋らないがそこそここれを楽しんでるのだろう、酒の盃が止まること無く口とつくりを行き来している。しかし主催のシャンクスはそんなに酒に強くないみたいで、樽一つ一気飲みしただけでもう泥酔してイーブを再三海賊に勧誘してくるのだ。正直言ってウザい。そしてイーブは、

「はい、飲み終わったよ。もう一つ頂戴ね」

「すげえぞ、イーブ！これで三十樽目だ！」

「もっと飲めー！」

「うげっもう無理。俺の負けだ…」

「おおっ、これで八人抜きだあー!!」

「こんなんじゃないまだまだほろ酔いにすらなれないよ」

がつつりお酒に強い、いや強すぎるみたいだ。イーブの前世でイーブの国では未成年の飲酒は法律で禁じられている。確かに未成年の飲酒を禁止している国もあるが、ここはどここの領土でもない公海、法律なんて無いのだ。つまり未成年のイーブが飲酒しても取り締まる法律が無いので全然罪にならないのだ。

「なあ、イーブ、俺の船に「乗らないよ」……ちえ、つれねーな」

「うーん、そろそろ戻った方がいいかな？ 実は今勤務中だしね」

「おう、なら仕方ねーな！」

「また来いよー！」

「面白かったぞー！」

「次はもっと良い酒用意しとくからなー!!」

と初めて海賊から「また来い」なんて異口同音に言われるという、海兵にしては非常に珍しい経験をして、赤犬のいる軍艦に『月歩』でイーブは戻って行った。因みに結局イーブはエールの樽三十九個を飲み干した。

そして船に戻った瞬間に、

「大・噴・火ア!!」

熱い（比喻表現無し）歓迎を受ける。勿論「帝」で受ける。ぶっちゃけた話イーブの武装色の覇気ならば手に纏えば例え弱点のマグマでも受けられるのではあるが。まさに武装色の覇気万能説。

「今まで仕事サボって何をしとった言つとるんじゃないあ！」

と叫ぶサカズキ中将。

「“赤髪”のシャンクスと“鷹の目”ミホークと僕の三人で殺し合つて、ああ勿論僕が勝つたよ？んで、その後…宴？」

「……何故疑問形!?!?!?!」

と海兵の皆がハモる。

「いや…だって…あの人たち、面白かったからつい つい……（照）」

「……誉めてない!!?!?!?!」

「この世界の人たちってつっこみが上手い。」

「それじゃ…」

と僕が付け加える。

「シャンクスは四皇だし、ミホークは王下七武海で どちら道手出出来ないから良くないかな、宴会しても？」

ただし同じ“四皇”といつても、上納金とか言つて毎月馬鹿みたいな量のお菓子を納めさせてるビック・マムとかであるならば容赦なく潰してその挽き肉を晒してこの世界の平和にでも一役買ってもらつたのではあるが。しかし今回会つた海賊は所謂ピースメイニングな海賊、つまり海賊から略奪する海賊なのだ。寧ろ今のうちには生かしておいた方が世界平和に繋がるだろう。

「……言いたい事はそれだけか？」

とやっとな口を開いたサカズキ中将。

「だったとしたら何かな……？」

と僕は“帝”を構える。

「少し稽古をつけちゃる。殺す気で来い。儂もそのつもりでいつちゃるわい!!」

と手から溶岩を、全身から殺気を垂れ流しながらサカズキ中将が言う。

「って事はもし、僕が中将を殺しちゃっても上から何か言われるなんて事は無いんだよね？」

ちゃんと言質とっておく。これから上官殺しをするのだやはりそれなりの理由が必要なのだ。最早売り言葉に買い言葉状態である。そしてサカズキ中将の返答は、

「勿論じゃあ!!」

に決まっている。先ずサカズキ中将が回し蹴りをするがイーブはそれを跳んでかわす。その時に船から飛び出してしまったが『月歩』を使えるイーブにとってはそんな事は無問題である。

「かかって来なよサ・カ・ズ・キ中将。お得意の『流星火山』、出すの待って、あ・げ・る・か・ら・さ」

と笑いながら中指を立ててクイツ、クイツと挑発的に動かす。

「いいじゃろう。そんなに焼かれないんなら望み通りにしちやるわ
」!!」

と両手を上に掲げて、連続で『大噴火』を行う。

因みにこの時、他の海兵はイープらの殺気にびびって、そして看板に居ては確実に巻き込まれると判断して船の中に逃げ込んでしまっている。海兵のこの判断は正しい。間違いなく看板に居てはこの戦いに巻き込まれるし、巻き込まれれば確実に命は無い。この海軍本部中將の中でも飛び出ているサカズキ中將と世界最強クラスの化け物スコウエルト・イープ少尉の戦いの激しさは例え中將と階級が一つしか変わらない少將でも巻き添えを食らえば命は無いだらう。

そうこうしている内にさっき打ち上げた『流星火山』が落ちて来る。これだけの大規模破壊技なのだ。そのなかでイープに直撃しそうなのは今の所百数十発中の数発くらいだけである。それでも海の上での直撃は避けたいから、

「そんなちんけな小雨程度の技で僕をどうにか出来ると思ってたのかな? 『鎌鼬』」

イープ一振りの斬撃で一気に全てのマグマの拳を撃ち落とす。イープが『鎌鼬』で何回も撃ち落としているのに、全く『流星火山』を中止させる気配の無いサカズキ中將。

しかしただ『鎌鼬』で『流星火山』を撃ち落とすのにそろそろ飽きてきたイープ。だから船の上に戻る事にする。流石に船の上では『流星火山』を打てないだらうという考えもある。

イーブは今度は『剃』で船に戻り、勢いそのままにサカズキ中将の顎を蹴り上げる。

「飽きたから戻って来たよ。なんか他の技は無いのかな？」

と相変わらず挑発的なスタンスは崩さない。サカズキ中将一人くらの相手ならそれ位の余裕はある。

「舐めよって…『犬嚙紅蓮』!!」

グワアアアアアアアアア！と左手を真つ赤な犬に変えてそれがイーブに迫る。しかしイーブは、

『『地平切り』』

と中将の腕を手のひらから叩つ斬つてそれを回避する。

「くすっ、腕が真つ二つでデオキシスみたいだね。もう片方の手もそうしてあげようかな？」

とこの場に誰も分からないであろう(この場にはイーブとサカズキ中将しかいないが)、ポケットモンスターに出てくるDNAポケモンをたとえに出す。分からない人は劇場版を観ると良いだろう。

「中将相手に余裕じゃのう、『冥狗』!!」

と今は無事な右手で溶岩の掌底攻撃を振り切った“帝”では受けられないタイミングでやってくるが、イーブはそれを左の拳一つで受け止める。勿論、覇気を纏ってる。纏わなくては左手がチャーシューみたくなっている。

「んなっ、わしの掌底を拳で受けて無事だどっ!？」

「覇気って言うのはね、目に見えない最高で最硬の鎧だからね。熟達するとこんな芸当も出来るんだよ……格の違いを思い知りなよ、二流さん?」

こっから先はずっとイーブのターンである。イーブは今度は左の拳を開き、爪を立てて、

『五指銃』

サカズキ中将の左の手のひらに僕の手を強引に押し込む。そして肘の辺りで貫通。本気で覇気を込めたから暫くは両手は使えないだろう。少なくともこの死合いで使うことは不可能である。ただどっち道イーブはサカズキ中将をここで殺すつもりだから関係無いが。

スコウエルト・イーブの“自分勝手な正義”とサカズキ中将の“徹底的な正義”は多分相容れることは無いだろう。だからスコウエルト・イーブはサカズキ中将を殺すのだ。“自分勝手な正義”の下に。

イーブはバク宙で一旦距離を取りそこから、

『鎌鼬』

両手足をきつちりと切り落とす。

そして一歩一歩踏みしめるように歩きサカズキ中将の前で立ち止まって、

「なんか言い残したい事ってある?」

一応最期に確認をする。いくら嫌いな人間と言えど一応は上官。そして愚直なまでに“正義”を貫いた海兵でもある。それに敬意を表したのだ。

「わしが本来殺すはずじゃった海賊を貴様がかわり に殺せ。そして最小限の犠牲でより多くの人間に平和をもたらせ」

「勿論。ただし僕は君の実力が足らなくて救えなかった、救えないはずだった人間すら救ってみせるよ」

「そんなの当たり前じゃあ」

と言って諦めたように目を瞑る中将。

「じゃあ先の上で見守ってよ」

と言って“帝”でサカズキ中将の首をはねる。……はずだった。

「なんで邪魔すんのかな、ドー？」

そう、ここでクランカー・ドーが体当りで邪魔をしたせいでサカズキ中将を仕留め損ねたのだ。

「同じ海兵で殺し合っなんて絶対に間違ってます！」

「さっきのサカズキ中将の言葉聞いてくれへんなかったのかな？ 中将は要は『殺しちゃっても問題無い』って言ってたんだよ！ それにさ、殺す気で行かなかった殺されてたしね」

とイーブは頭を押さえながら、ドーに言う。

「それでも勝負がついた今サカズキ中将を殺すのは間違ってると思いますー!」

とドーは断言する。

「ドーはどんな『正義』を背負ってるのな？僕の背負っている正義は『自分勝手な正義』、サカズキ中将が背負っているのは『徹底的な正義』。この二つの正義は絶対に相容れないもだから遅かれ早かれ絶対にこうなってたと思っよ!」

イーブは譲らない。

「……………それぞれが背負ってる『正義』とか難しい事は分かりませんが！それでも海兵同士で殺し合うのは間違ってると思います！お互いに背負っている『正義』が違ふのならば自分の正義を認めさせればいいじゃないですか!？」

「(ドーの背負ってるのはいうならば『甘い正義』って　ところかな)(?)」

「……………はあ、分かったよ。じゃあ、『正しい』と思った時に正しいと思っただ事を正しいと思う様に実行する『僕の』自分勝手な正義』。ちよつと考えてみてよ、サカズキ。じっくり考えて、考えて、考え抜いて、それでも僕の『自分勝手な正義』が間違ってると思っんならまた来てよ、サカズキ中将。今度は確実に殺すからね。だから今回はドーの顔を一応立てて殺さないでおくよ」

とだけ言い残して船内にいる海兵に荒れた看板を片付けさせるためにドーとイーブは入っていった。

第十七話 シャボンデー諸島で休人は恋い焦がれた余暇を

伝説の転生者の物語改第十五話

前回、中将と色々あったが何だかんだで一応和解した、という感じになったスコウエルド・イーブ。

しかしその色々のせいで海兵の皆に結構なトラウマをあたえてしまったのは事実であり(何人か鬱状態になった)、海賊と楽しく宴をしてしまったのも事実であり(これに関してイーブは反省してない)、許可が下りていたとはいえ実際上司を半殺し、あと一歩で全殺しにしてしまうところであったのも事実であり(この闘いで船の沈没の心配をかけた海兵には謝っておく)結構居づらいのだ、現在のこの船は。しかしこの航海が終わったらまた異動らしい。それにしてもイーブは異動が多過ぎるだろう。クザン中将、サカズキ中将とくれば、次はボルサリーノ中将の所に異動だろうか。イーブはボルサリーノ中将は別に嫌ってはいないので問題はない。しかし今回は、今回はちゃんと休暇が取れるとのこと。イーブにとっては嬉しい限りである。

この前イーブは飲酒出来るから法律が無いって良いね!なんて甘っちょろいこと言ってたが、やはり労働基準法はちゃんと定めるべきであると痛感した。やっぱりイーブみたいな子供が休み無しで数カ月間ずっと働かせられ続けられるというのは可笑しいはずである。

そんなこんなでマリノフォードに到着。実はイーブは寝てたりする、かなり。

そしてイープのテンションはもうマックスである。なぜなら、やつとシャボンディーパークに行けるからだ。というかイープは絶対に行くだろう、なにがあっても。「航海に行くぞ」なんて言われてもホイコットか有給取るか、最悪クザン中将みたいに抜け出してでも行くだろう。

そして前回同様ヒナとスモーカーから出迎えられる。

「てめえ、何があつた？」

とスモーカーが開口一番に言う。彼の辞書に“お帰り”の文字は無いのだろうか。

「何がってどゆことかな？」

「少し雰囲気が怖くなった気がする。髪の色も変わったし、ヒナ考察」

「あー、その事ね。まあ、ちよつと職場の雰囲気が合わなくてイライラしてた時期があつてね。軽く鬱になったり、上司と殺しあつたりしてね。所謂五月病？」

「今五月じゃねえよ」

「それに五月病はそんな症状じゃないわ、ヒナ断定」

「気にしない、気にしない。それよりもシャボンディーパークに行く準備って出来てるのかな？なるたけ早く行きたいんだけど…。っていつかまた異動で直ぐ航海、なんてことは無いよね…？」

「ええ、確認したけどそんなことは無さそうよ、ヒナ確認」

「よかった。それじゃあ僕とドーの準備が終わり次第直ぐ行くよ。あとそろそろ何か話さないと空気だよ、ドー？」

「ふえ!?はっ、はい!!今すぐ準備をします!!」

と言って走り去っていくドー。あの娘どこ集まるつもりなのだろうか。集合場所を知らない娘がどこに行き着くのかは見物だが、

「スモーカー、ドーを追いかけて集合場所を教えといてよ……」

今は早くシャボンディーパークに行きたいので、イーブが疲れぎみにスモーカーに指示する。

「集合場所って何処だよ……っていつかなんで俺が追いかける必要やいねえんだよ」

と返してくる。一応女の子（結構失礼）を追いかけるんだから柄にもなく照れているのだろうか。

「集合場所は最北端の港ね。あと僕は準備しなくちゃいけないし、ヒナよりもスモーカーの方が面白いからね」

「面白いからかよ……」

当然である。人生楽しまなくては損なのだ。

「じゃあ、僕は行くから!三十分後に集合ね!」

と言ってスモーカーに断る暇も与えずに脱走。スチルドパッドは何も準備することがなく楽だったがイーブの方は少し時間がかかつ

てしまった。

〜百二十分後〜

「スモーカーとドー遅すぎるよ」

と息を切らせてドーをおぶってきたスモーカーとドーに文句を言うイーブ。

「ちっ、このバカがあるうことか南の港にダッシュしちまって遅れた」

「ふえ!?途中で指摘して下さればよかったじゃないですか!!」

「散々しただろうが、バカ!注意するたび『ふえ!? 何言ってるんですか!?北はこっちですよ!!方向音痴 なんですか!?』って叫んでたのはためえの方だろうが!普通は不敬罪モンだぞ!」

ドーはどこまでいってもドーである。

「スモーカー、もうその辺でいいからね。早く行きたいし」

地味に上手い、スモーカーのドーの真似が。特に『ふえ!?』の辺りが。一番行きたがってたイーブがもう良いと言つのなら、といった感じで皆海軍から貸してもらっている小舟に乗り込む。

そして一時間後、シャボンディーパークのある33番マングローブの港に到着。海賊も驚きの近さである。ぶっちゃけた話、マリ胤フォードからこの距離であるのなら、サカズキ中将の『流星火山』で無法地帯を殲滅出来るのではないだろうか。割りと軽い労力で。それをしないのは多分『無法地帯』っていう犯罪の許された所を作る

ことによつて“無法地帯以外”の法を守るつとしていない
だろうか。『犯罪者は“無法地帯”に行つて適当に法でもなんでも犯
しちやつてくださーい。そしてそこ以外では法を犯さないでくだ
さーい』 みたいな感じだろうか。

その話は置いておいて、

「やつとシャボンディーパークに到着したねー！」

やつと、やつとである。この前企画したときから一体何カ月経つ
たのだろうか。いや、考えるのはよすべきだ。目から大量の汗が流
れ出てしまつ。

「最初は何に乗りてえんだ？」

とスモーカーが聞いてくる。因みに入場料はスモーカー持ちだ。
本人が有り余つて言つて言つてから問題無い。全員お金は有り
余っているのだが。

「やっぱり最初はあれだよねー！」

と言つてジェットコースターを指差す。しばらく待つてようやく
ジェットコースターに乗りこむ。待つことも遊園地の楽しみの一つ
である。

「ふえ…… やつぱりやめませんか…？」

「止めた方が良くわ、ヒナ断言」

乗り気じゃない二人とビビつて何も言えない男、スモーカーが一
人。

「今更すぎでしょ。諦めて楽しみなよ!」

と言いながらもジェットコースターは地獄へ向かって刻一刻と登っていく。面白い表現である、地獄に登るといふのは。

「楽しめる訳なきやああああああ!!」

「じゃんじゃん」

と地獄に到達。一人は楽しんでいるが、二人は叫んで直ぐに意識をシャットアウト。能力者であるヒナはともかくとして、非能力者であるドーはこれより速い『剃』をいずれば修得しなくちゃいけないのだ。これくらいで気絶してたら一生出世出来ないし、何も守れないのだが大丈夫なのだろうか、新米海兵。それにしてもスチルドパッドの身長制限とかは大丈夫なのだろうか。多分大丈夫ではないだろう。だからイーブはスチルドパッドを子猫化服の中に隠したのだ。

ここで横にいるスモーカーの様子を見ると、

「あいつ煙になって逃げやがったなあああああ!」

そこには誰も居なかった。人は勇気と無謀は別物だと言った。しかし今はそんな事を言うべきタイミングではないし、女の子三人と子供一人置いて逃げるとは男の風上にも置けない。煙は風に流れるが。全く、どんな教育を受けてたのだろうか。取り敢えずスモーカーは罰としてもう二回ジェットコースターに乗ってもらおうとする。今度は逃げられないように、イーブが覇気を込めて首を握りしめて体を固定しながら。

次に顔を真っ青にしているスモーカーの手をひきながら、

「今度はあれに乗りたいー!」

とある絶叫マシンを指差す。『剃刀』を使いこなすイーブにとってさっきのジェットコースターは全く大したこと無かったのだ。しかし今回ののは大丈夫だろう。なぜなら名前凄いからである。

「タワーオブすごい」

本当に名前が「すごい」アトラクションなのだ。しかし何かイーブの前世で見たことある建物である。ネズミランドであろうか。いやネズミーシーだろうか。確かそんな感じの遊園地だったはずだ。さっきのジェットコースターに否定的だった女性陣も名前と裏腹に凄そうでない見た目に今回は賛成の模様。

と言うことで早速タワーオブすごいに乗り込もうとする。がここで問題が発生。

「「うちの娘は身長制限により「うちのアトラクションはご利用出来ません」

「タワーオブすごい」、それは身長制限百二cmのアトラクションである。身長が九十cmのイーブよりひくいスチルドパッドに乗れる道理は無いのだ。イーブは十二cmプラスのシークレットブーツを履いているのだ。世界の背の低い男性たちよ、もっと自分に自信を持って。

「なん…だと…?」

とイーブが呟く。

「じゃん、ひらひらじゃん」

と言って蝶々を追いかけるスチルドパッド。

「じゃあ僕らは乗ってるからスチーは蝶々捕まえたらここに戻ってきてね」

と言ってスチーと別れるイープ一行。そして今回はファストパスを取ったのでサクサクと中にはいれた。ここで危険を察知したのか隣でお経を唱え始めたスモーカーを無視して、タワ　ーオブすごいが始動。上下に揺れる、揺れる。イープの『月歩』の方がスリルがあるがこれも中々のものである。しかしスモーカーのキャラ崩壊が激しい。誰だお前。

そしてアトラクションが終了したとき僕が、

「どうだった、スモーカー？」

と横を向いたとき、そこには白目を剥いているスモ　ーカーと、濡れている地面が目に入った。そう黄色い液体で濡れている地面だ。これもしかして、いやもしかなくてもやり過ぎだったのかもしれない。

スモーカーとは逆の方向を見ると、気まずそうに目をそらす女性二人。

とここで目を醒ましたスモーカーにまず、

「スモーカー、ごめんね。ちょっと調子に乗りすぎ　だよ」

「ふえ!? もっ、申し訳ありません!」

「ちょっとやり過ぎたかもしれないわ、ヒナ反省」

とそれぞれ謝る。仕方がない。一瞬なんの事か分からなかったスモーカーも下を見て事態に気が付いたのか、

「いや、ちげえ! 俺じゃねえ!」

と叫ぶ。

「大丈夫だよ。誰にも言わないしね」

とイーブがフォローを入れていると、

「あっ、すみません! 僕のレモン水が零れてましたね! 今拭きます」

とスモーカーの隣の男が謝る。

「……」

「……」

「……」

「……」

気まずい。非常に気まずくて收拾のつかない空気が流れる。

「えーっと、取り合えず降りよっか……」

第十八話 シャボンデー 諸島で兄は怪物的な報復を

タワーオブすごいから降りてき集合場所に戻ってきたイーブたち。

「あれ、まだスチーが帰ってきてないね。じゃあなに食べる？あそこ
でハンバーガーを食べる以外は認めないけど」

とまず言つてが暴君スキルを発動する。別にイーブが肉球持つて
いる訳ではないが。肉球は妹のスチルドパットで十分である。因み
にファストフード店まで決定してたのは先程スチルドパットが、

「あそこのフィッシュバーガー美味しそうだにゃん」

と言つたからである。パスタという意見も出たためにじゃんけん
をすることになったが、結局じゃんけんでイーブが勝つてハンバー
ガーを食べることになる。別にじゃんけんの時に見聞色の覇気を使
うのは反則ではない。その次に問題になったのがファストフード
店が二つあることだ。シャボンナルドとシャボンテリア。どちら
にもフィッシュバーガーがあるのだ。

「迷つた時は全部買つて！どうせこんなとき位しかお金使つとき無いし
ね」

とこれまたイーブの鶴の一声で決定。ブルジョワは違ふのだ。そ
してイーブとスモーカーがシャボンナルド、ヒナとドーがシャボンテ
リアにそれぞれ並ぶことになった。

「そー言えばさー、スモーカー」

とイーブがスモーカーに呼び掛ける。

「うん、どうした？」

「スモーカーってヒナとドーが美人だと思う？」

「ぶっ!!何でそんなことを聞くんだ？」

とスモーカーが吹き出す。すごく汚いがここはスルーしてあげるのが情けだろう。

「いや、僕はさ女をスチーとヒナとドーしか知らないからね。ここは歳上のスモーカーがどう思っているのかな、って思ってるね」

「……海軍学校の卒業旅行みたいだな。まあ、俺はヒナもドーも結構レベルが高いと思うがどうしてだ？……もしかして惚れたか？」

「いやいやいやいや、四才の僕が流石にまだ恋とかはしないよ。恋をするとしたら戦いになかな？」

しかしこの世界にも卒業旅行なるものがあるらしい。何処行くのだろうか。

「普通の四才児は恋とか言わねえよ。あと、お前は仕事が恋人って言うタイプか」

(はい、実は精神年齢は二十歳越えていますよー)

とイーブは心の中だけで呟く。かなり話が逸れた。

「そんなことより、さっき僕がそんな質問をした理由を教えてください」

よ。ほらあの男を見ててね」

とヒナたちの近くにいる男を指差し、イープの両方の親指と人指し指を使って長方形を作り、

「サトリます」

。 某超能力ドラマの能力を見聞色の覇気で実現させる。

「なんだそりゃ？」

「……………マイブーム……………」

ただし、そんなドラマが無いこの世界では誰も分かってくれないが。

「彼は『あの娘たち可愛いなさらっちまおうぜ！』と思っているよ」

「ちっ、あいつ誘拐犯か！」

「……名答。逝ってらっしやい」

とスモーカーが動き出す前にチュッパチャップスを 男のこめかみにぶつけて沈める。

「こんな感じで彼女らを狙う人拐いが多いからね。 実は結構レベルが高いんじゃないかなーって思って さ」

「って事はシャボンディーパークで倒れてる男がやたら多いと思ったら全部お前が殺ったのか？」

「まあ、三十六人だけだよ。殺ってないけどね」

「……十分だ」

そうかなー、これぐらいだったらスモーカーでも出来ると思うけどなー、なんて内心愚痴を溢すがこんな話題を広げても面白くないので口にはしない。

「ってかスモーカー、どさくさに紛れて煙草吸わないでよ！」

「いいじゃねえか。それにこれは葉巻だ」

と訳の分からない言い訳をするスモーカー。

「どっちもおんなじだからね？それに知ってる、スモーカー？煙草の煙っていうのは実は有害で吸ってるのより火がついているところからの煙の方が毒性が強いんだよ？つーまーりー、スモーカーが煙草を吸う事は守るべき一般人に有毒ガスをばらまく事と一緒になんだよね」

と少し誇大広告。確かに副流煙の方が主流煙より一酸化炭素とかニコチンが多いけど、有毒ガスって程じゃない。もしそうだったらタバコは全世界で禁止されているだろう。しかしちゃんとイーブの言うことを聞いてスモーカーは煙草を仕舞った。

そのまま煙草止めればいいのに。煙草というのは寿命縮めるだけ、百害あって一利なしなのだ。ただ、スモーカーは煙人間なので煙の一酸化炭素とかニコチンとかを無効化出来るという事実をイーブは知らない。

そしてその二十分後、イープらは六番グローブ、「無法地帯」にいた。

「あれれえ？」（高山みなみボイス）

何でこうなったかを説明するには二十分前に遡らなくてはならない。

「スチー遅いね」

とフィッツシュバーガーを買ってきて集合場所に戻ってきたイープたち。しかしまだスチルドパッドが戻ってきた様子はない。そこでヒナが口を開く。

「……もしかして“人拐い”に遭ったのかもしれないわね。ここは結構“人拐い”が有名だしスチーは能力者。子供だし良い標的だわ、ヒナ推測」

“人拐い”。この単語で思い出すのは原作のシャボンディー諸島編。主人公らの友人である人魚のケイミーも“人拐い”に遭ったということだ。

（どうして？僕は原作は全巻持ってたし殆んど暗記してたはずだよ！どうして“奴隷”って言う単語は覚えているのにシャボンディー諸島での“人拐い”に失念するなんてミスを!? いやそれだけじゃないね。シャボンディー諸島編の記憶にかなり穴があるね。他の編の記憶は……いや今の問題はそれじゃないね。状況が全く無いんだ、取り合えず探すしか無いね）

と言って思考を中断。スチルドパッドを探すことに専念する。

「僕とドーは一緒に探す！スモーカーとヒナは一緒に探して！集合はここー！一時間後にね！」

とてきぱきと指示を飛ばす。

そしてスチルドパッドを探すこと数分、転機が訪れる。イープの後ろにいる男たち五人の思考が流れ込んでくる。

(おいあの女、結構な上玉じゃねえか?)

(ああ、しかも付き添いの子供もかなり整った顔立ちだぞ)

(ああ、今日はツイてるな。さっきも“猫のガキ”で相当稼がせてもらった後でこんな良いカモに会えるなんてな)

(仲間に連絡しよう)

イープは“猫のガキ”に反応する。原作では敵は大体能力者だが本当は能力者なんて少ない。その中でも今シャボンディー諸島にいるネコネコの実を食べたスチルドパッドではない子供なんているわけが無いのだ。

「アッハ、犯人はっけーん … 調子に乗らないですよ？ウジ虫どもが」

とドーを連れてシャボンディーパークの外に行く。そして歩く距離に比例してイープらの後をつける男の数が増えていく。そして今に至る。

「僕が殿するからドーは全力で走って逃げてね。それでスモーカーに状況の報告を。これは少尉命令だからね？」

「ふえりよ、了解しました！でっ、ですが少尉には“帝”がありませんが！」

とドーが心配するが。

「はあ、僕ってそんなに！」

とここで鎧兜を着た男のに『剃』で接近し、腹部に思いっきりチュッパチャップスを投げ付ける。チュッパチャップスは目視出来ない程の速さで飛んで行きあまりの威力に男の上半身と下半身をぶつちぎって、ヤルキマン・マングローブに激突。

「信用ないかな？」

轟音と共にヤルキマン・マングローブをへし折る。それに納得したのかドーは走ってその場を去る。ついでに人拐いたちも。

「何逃げようとしてるのかなあ？」

とチュッパチャップメイスを地面に叩き付ける。地面がひび割れそれが賞金首たちの逃げ足を遅らす。

「皆、ブ・チ・コ・ロ・シ・か・く・て・い・ね」

そして処刑宣告。敵の数はさっきぶっ飛ばされたのも含めて二十人。“新世界”ですら通用するスコウエルト・イーブにとって“楽園”で立ち往生しているようなド三流以下が何匹集まった所で余裕である。

そこに六人の男が四方から、ある者は銃を、ある者は剣を、ある者

は刀を、ある者はナイフを持ってイーブに襲い掛かる。

「おっそすぎるよ〜」

袖からチユッパチャップスを三本づつ出して彼らに 投げつける。それらは全て彼らに命中し、全員ヤルキマン・マン グローブに激突。当然それらをへし折る結果となる。残り13人。

「選びなよ！僕に立ち向かって殺されるか、僕から逃げようとして殺されるかさあ〜」

とここで男たち全員が僕の方を向いて構える。

「いいねえ〜、じゃあ僕も本気でいこうか…っ！」

と『剃』で男の一人の頭上に移動して『嵐脚』を纏った踵落としを叩きこむ。

スパツという小気味良い音を立てて死体が増える。……但しイーブが踵落としを入れた男の隣に居た男がである。

すぐさま『剃刀』でその場から回避して違う男の顔面辺りに逆立ちの状態で移動。そのまま腰を捻ってサンジの『ターントーブルキックコース』の要領で『嵐脚』を撒き散らして首を跳ねる。

「チツ、能力者だね」

だが残り七人。もう半分も残っていない。

「俺の能力が気になるか？」

とさつき殺し損ねた男が言った。

「勿論」

と即答。自分の能力をひけらかすのは馬鹿か強者のみ。こんな人拐いというちやちな仕事をしていることからこいつは前者だろうとイーブは予測する。

「冥土の土産に教えといてやる。俺様は『ミガミガ』の実を食った”身代わり人間”ダメージを触った人間に身代わりになってもらえるって訳だ」

これでさっきのからくりは判った。そしてイーブはその能力の弱点にも気付く。先ずは”距離制限”がある事だ。もし距離制限が無いのであれば、わざわざ味方にダメージを肩代わりしてもらおう必要など無く、遠くの島民にでも肩代わりしてもらえば良いのだから。同じ理由で多分身代わりは生き物だけだろう。そうでないのなら島にでも肩代わりしてもらえば良いのだから。

「っっー事でさ、俺様に触られるー！」

とダッシュしてくるさっきの男。

「ヤダー」

と腹に『嵐脚』を入れる。当然能力者ではなく近くの男が海ノ賊になる。

「もらったあー！」

とイーブの足に触るつとすが、それを回避して後頭部に蹴りを入

れる。そして突然近くの男の頭が爆散する。それから一旦距離を取る。

「じゃーさー」君のダメージを肩代わり出来る人」を全員殺したら君を殺せるんだよね？」

あと五人。なんて考えているとズズズツと三人の男がマンモス、ヘラジカ、ウサギに変身する。

「ふーん、動物系の「ウサウサの実」、「ゾウゾウの実モデルマンモス」、「シカシカの実モデルヘラジカ」の兎人間とマンモス人間とヘラジカ人間だね」

「俺も忘れんなよ？」

と男の一人が完全な球体になる。

「俺は超人系『マルマルの実』を食った「スーパーボール人間」だ！行くぞ、お前たち！」

と皆がイーブを囲む。そして一人がスーパーボール人間を蹴りとばし、その先にいる人間がまた蹴りとばして…とどんどん加速していく。

ただし、イーブからしてみたら全然速くないが。さてさて自分の妹、シロン・スチルドパッドに手を出した彼らをどう料理すべきかと悩むイーブであった。

さっきからイーブに向かって来るスーパーボールを軽々とかわしについて、ヘラジカの元にスーパーボールが行ったときに、一緒にイーブもヘラジカの所に行き、

『指銃』

スーパーボールの額が描かれてえる部分に穴を開ける。そして、

『番獣敵』

両手を使ったパンチで角ごとヘラジカの頭を吹っ飛ばす。

「あと二人。さあ、カカツテキナヨ？」

とニタニタと口許を歪に歪ませながら片言な言葉を喋り、殺気で彼らの精神をゴリゴリと削っていく。それはもうゴリゴリと。

「ちっ、ギガエレファント!!うああああああ!!」

と完全に獣化したマンモスが5m程ジャンプをしてその右足でイーブを踏み潰そうと落下する。重力を味方につけるといふ発想は良い。だがしかし、

「僕を踏み潰すには……軽すぎるよ」

と右手だけで受け止める。そこに、

『兎跳び』だ。はっ、さっきのギガエレファントはこれの囷だって気付けなかったお前の負けだ」

と逆立ちしたマンモスの後ろ足の乗って追撃をかけた兎がほざく。

「気付けなかった訳が無いよ。うん、そんな気配を消す気すらない君ら程度感知出来ない訳がないね。あと何回も言わせないでよね。僕

を踏み潰すには“君たち二人じゃあ”軽すぎるよ」

今度こそイーブの番である。マンモスの鼻を持って、ハンマー投げの要領で振り回していき、

「はいどーん」

バンバン！と一気に四本のヤルキマン・マングローブをへし折る。

そして重力に逆らえず落ちて来た兎の両足を、

『握食』

両手で握り千切る。そしてほふく前進で逃げようとする兎の、

「さーて問題です。両足をもがれた兎は何を出来るでしょうっか？」

「ひいつ、よっ、寄るな、バケモノ！」

「よいではないか〜」

グチャと簡単に頭を踏み潰す。

「正解は何も出来ないでした〜。不正解者には苦痛を伴った死を」

とニコで周りを見回すと誰も居ない。

「逃げられちゃったか…逃がさないけどね」

と直ぐに覇気で検索を開始。

「みーつけたー。十二番グロープだね」

今一人の元海賊、現人拐いのグズみみたいな男は走って逃げている。誰からだなんて聞くのは愚問である。そんなのは「化け物」からに決まっている。今逃げ惑っている彼は聞いたことも見たことも無いだろう、あんな化け物を。いや、噂だけはあるかもしれない。海賊にとっては海軍大将以上の危険度を誇る快樂殺人者「剣帝」スコウエルトド・イープの名前を。彼ら『億超え連合』全二十人総戦力で行ってもイープはお遊び感覚で今生き残っている彼以外の全員を殺したのだ。この上なく惨く、何の躊躇も無しに。いくら人間のゴミとも呼ばれる海賊をやっていた彼でもそこまで酷くは出来ない。しかもそれを実行したのは一見只の子供である。しかも十一本ものヤルキマン・マンググロープをへし折るといっておまけ付きで。だから早く彼の身代わりが多くいる十二番グロープに逃げなくてはならない。早くしないと間違いなく殺される。

そして十二番グロープに着いた彼を出迎えたのは空中を闊歩してヤルキマン・マンググロープを引っこ抜いているイープだった。

その数分前、イープは見聞色の覇気で相手の居場所を特定してから『月歩』でそこまで行き、

「僕には分かるよ。君の能力の効果範囲は精々この 十二番グロープって事が」

イープはヤルキマン・マンググロープに近付き、

「幸いここには奴隷とかパンピーとか居ない無法地帯みただしさ」

それを引っこ抜き、

「この十二番グローブ丸ごと“消し飛ばせば”君を殺せるよね？」
持ち上げて、

「重い、重い、べび、べび、ローテーション…ゴホンゴホン、潰れちゃいなよ！」

思いつきり地面に叩き付ける。

ドツシヤアン！その圧倒的な“破壊”は地面を完全に砕き、人だった物も建物だった物も地面だった物も等しく海に吸い込まれていった。

同時刻、スモーカーたちは先程決めた集合場所に集まっていて、そこへ走ってきたドーから事情を聞いたところだった。確かにイーブは強い。だが、得物が無い状態で本当に大丈夫だろうか？…なんて考えてた時期もあった。

「またヤルキマン・マングローブが倒れたぞ」

「ふえ!?今度は四本です！でも本当であればイーブ少尉の仕業なのでしょうか!？」

「あんなことできる人間がイーブの他に居たら世界のバランスが崩れるわ、ヒナ断言」

それから三分程経って、

「なあ、あのヤルキマンマングローブ持ち上げてるやつはイーブじゃ

ねえか？」

「ふえ!? あんなことをいずれ私も出来るようにならないと少尉にはなれないですね…」

「あんな世界のバグみたいな強さの持ち主は一人で充分だわ、ヒナ切望」

あんなことが出来なくても少尉にはなれる。

第十九話 シャボンディー諸島で伝説は誤解の防衛を

前回元億超えの海賊二十人をきっちり殲滅した“帝”の無い“剣帝”スコウエルト・イーブ。その後沈めた十二番グロープの隣の十一番グロープに降り立ち一人白髪混じりのの老人に話しかける。

「スラムツパギー。ストーカーなんて趣味が悪いね。で、早速聞くなって三毛猫の女の子を知らないかな、人拐いさん？」

実力を隠しているが相当な手練れであることまでは伝わってきている。勿論一般人では有り得ない程の。つまり彼の職業は戦いに身を置く職業、海軍、賞金稼ぎか又は海賊である。しかしもし老人が海軍であるならば、先程の戦いで傍観する道理は無い。よってこの老人は海賊か又はそれに準じるような真つ黒な職業と言えるのだ。

「いや、知らないな。ストーカーをしたのは謝るが私はそういった者では無いから」嘘おっしやい「っっっ」

老人の言っていることをろくに聞かずイーブが攻撃を仕掛ける。しかしそれは軽かわされてしまう。

「一応言っておくけど今素直に吐いたら許してあげるけど？」

勿論嘔吐の意味でなく白状の意味での吐くだ。そして許すというのも苦しまずに一撃で死ぬことを許すという意味だ。

「ほっ、では嫌だと言ったら？」

と老人が茶目つ気たっぷりに返してくる。それにイーブは溜め息

をついて答える。

「死人が出る」

「成る程」

この短い間会話を経て今度は老人から仕掛ける。ブンツと振られた斬撃はミホークのそれと比べても遜色が無いほどだ。イープはそれをバク転でかわし、

「『嵐脚』」

カウンターに攻撃を放つ。しかしそれは老人の剣によって簡単に弾かれてしまう。ただその老人が剣で『嵐脚』を弾くのに使った一瞬はイープが次の攻撃を仕掛けるのに十分な時間だ。

「指銃『紅蓮』」

『剣』で一氣に間合いを縮めて連続で指銃を放つ。しかも両手でだ。ただし輻射波動は関係無い。ただイープの周りが被害者の血で真紅に染まるだけだ。これなら片手に剣を持っている老人には反応仕切れない。だからイープはこれで仕留められないにしても、老人にこれで重傷を負わせこの戦いの主導権は握ったと確信した。しかし老人はそれを分かっていたのか、何の迷いもなく剣を放棄。上に放り投げしてしまう。これによって空いた老人の両腕がイープの両腕を捕らえる。

しかし手が無いのなら足がある。

「らごきや...くしー」

自由な足を使って右足で『嵐脚』を放とうにも放つ瞬間に足を踏まれて『嵐脚』を放てない。

「でも左足…がっ!？」

そして今度は左足で『嵐脚』を放とうとするが腹に蹴りが決まりイーブは吹き飛ばされる。

その威力は凄まじく、ドンーとぶつかつた家を瓦礫にしてやっ止まる。そしてその瓦礫から出てきたイーブが呟く。

「駄目だね…」僕「じゃあ勝てないよ。どろし…があ!？」

とイーブが何かをしようとするがそれを見過ごすほど相手は優しくない。当然妨害する。イーブが行動を起こす前に老人はイーブをまた蹴り飛ばす。そして再び家を破壊して止まる。そしてまた同じように瓦礫から出てくるが、今回は雰囲気が違う。さっきには諦めの表情も浮かんでいたが今回はそうではない。寧ろ期待に満ち溢れた表情をしている。

「はあ、駄目だね。駄目だよ。うん、全く駄目駄目だね。勝てないからって能力に逃げるだなんてね」

自嘲しながらイーブは呟く。ただし今回は前回と違って何かするつもりもなく、隙もない。

「思い出そうか、僕にとって『六式』ってなんだったかな？」

歌うように、語りかけるようにイーブは呟く。

「『六式』は僕にとっては『デザート』を楽しむための『スプーン』

だよ」

イーブにとっての体術とは雑魚をより惨く殺すためのお遊び程度でしかない。

「じゃあ僕にとって“能力”ってなんだった？」

イーブは嘲るように、吐き捨てるようにイーブは呟く。

「僕にとって“能力”はソースが垂れないようにするためのナプキン。その程度だよ」

イーブにとっての能力とは万が一のための保険。雑魚相手に不覚を取らないための盾。その用途には強者と戦う矛なんてものは無い。

「じゃあ思い出そうか、僕にとって“メインディッシュ”を楽しむための“ナイフ”と“フォーク”はなんだったかな？」

まるで自分を優しくあやすかのように呟く。

「僕、“剣帝”スコウエルド・イーブにとっての“ナイフ”と“フォーク”は僕の愛刀の“帝”。ただそれだけだよ」

イーブは様々な武器を用いれるが本命は“帝”ただ一つ。スコウエルド・イーブが本気で戦える為の得物は“帝”だけであり、“帝”を最大限に活かせるのもこの世界にスコウエルド・イーブただ一人だ。何処で拾ったのか、置いてきたはずの“帝”を構えてイーブは呟く。

そして今度は老人に言う。

「最後に言っとくよ？ スチルドパッドはどうしたのかな？ 言えばまだ見られる死体にするけど？」

「ハハハ、出来ないことは言うもんじゃないな」

「そうだね。僕もそう思うよ」

とイーブは斬撃を放つ。同じ斬るでもやはり本命、『嵐脚』とはレベルが違う、格が違う、次元が違う。そんな一撃を老人が剣で受け止め、しかし老人の剣は弾かれる。こんな隙を逃してやるほどイーブは優しくない。

当然『剃』で近付き、

『嵐脚』裂』

左手で老人の肩を引き裂こうとする。しかし悲しくもイーブは子供。間合いが短すぎる。このままでは老人の蹴りがイーブの攻撃が届く前に決まってしまう。しかし“帝”を持っている今、“六式”はイーブにとつてのブラフ、囷でしかない。右手に持つ“帝”を逆手に持ち変え老人の足の甲に“帝”を突き刺す。

しかし老人もそこまで読んでいた。自分の足に刺さった“帝”を足の筋肉で堅め、抜けないようにする。それで足を引けば当然、

「っわっっ」

イーブはバランスを崩す。そしてちょうど良い位置にあったイーブの頭を刺されていない方の足で蹴る。上を向いて飛んでいるところを蹴った足でイーブの右手を踏みつけ、その腹に、落ちてきた剣の柄を叩き込む。ここまで見事に急所への連撃を食らったのだ。イーブ

の意識は闇に落ちた。

「知らない天井だ」

イーブが目を覚ますと知らない天井が映った。先ず起きた瞬間に状況の確認をする。それで今イーブがいるのは誰かの寝室だと分かる。

「どうしたのかな？手錠もなく放置していると折角の商品が逃げちゃうのね」

とイーブは扉の向こうにいるイーブを捕らえた老人に言う。

「ははっ、バレていたか。しかし私は本当に人拐いではないのだから」

幾分か冷静になって見聞色の覇気がまともに機能している今のイーブにはそれが真実と分かる。本当に思い込みとは恐ろしいものだ。

「あー、それはー、うん。悪いことをしちゃったね」

「何、私も少しやり過ぎた。だから君の探しているスチルドパッドという娘の事だが多分一番グロープの“人間屋”の所にいるだろう。運が良ければまだ無事かも知れないな。急ぐと良い」

老人の言った“人間屋”という単語でイーブはまたシャボンディー諸島編の一部を思い出す。原作ではここで主人公らが友達を助けようとオークションに参加したのだ。ただしイーブはそんなまどろっこしい事はしない。取り合えず職業安定所（笑）に出向き、関係者を全員抹殺してスチルドパッドを救出する。非常に簡単でスマートなやり方である。

「うん、本当にじゅめんね。で、オジサン名前は？」

「おじさんか…。まあいい、私の名前はシルバーズ・レイリー。レイリーと呼んでくれればいい。これもなにかの縁だ、何かあったらここに来るといい」

おじさんという単語にレイリーは傷付いた様だが白髪混じりの男をおじさんと呼ぶのは全く悪くない。寧ろ正当な評価だ。

「成る程、〃冥王〃が相手だったんだね…そりゃあ勝てないわけだよ。じゃあありがとうね、レイリー」

と窓から一番グロブまで『月歩』で飛び出していったイーブ。あの島でイーブに戦いのいろはを教えたラヴィサメはこの世界でも最強クラスと言えるだろうが、それでも最後には程遠い。彼女曰く『自分の世界ではない』からやはり〃金獅子〃や〃白ひげ〃そして〃海賊王〃には勝てないのだ。

『『どんなことをするにしても派手にしろ。派手な方が楽しいし、効果的だ』だったかな？』

とラヴィサメが以前教えた言葉を思いだし、

「じゃあまずは屋根、斬っちゃおうかな」

実行するイーブ。ブツツとイーブは無造作に〃帝〃を斜めに振る。そのあまりに見事な切り口は斬った角度が小さいにも関わらず、人間の屋根の屋根をずり落ちさせるのに抵抗を全く見せなかった。

「はあ…？何があった!？」

と男が飛び出して来る。当然だろう。自分の店をオープンカーならぬオープンシヨップにされたのだから黙っていられるはずがない。ただイーブはそれを待っていた。

「みーつけた」

一瞬で男を組伏せる。

「で、」に三毛猫の女の子が来たと思っけど知らないかな？」

と優しそうな笑みを浮かべてイーブが訊ねる。

「はあ？三毛猫だあ？知らねー」「ブチン」があ!？」

「で、三毛猫の女の子を知らないかな？」

イーブが求めているのは嘘じゃない。スチルドパッドの行方だ。イーブにはそれ以外の言葉を目の前の男に喋られるのが腹立たしくて仕方がない。故に黙らせるために指を千切った。

「その三毛猫の女の子っていうのはお前何なん」「ブチン」ぎゃあ!？」

「で、三毛猫の女の子を知らないかな？」

答えはイエス以外を求めない。イーブは交渉が得意だと自覚している。ただし会話術なんてものは全く身に付けていない。イーブが交渉に用いるのは所謂肉体言語である。それを用いた交渉を人は拷問と呼ぶが、本人が交渉と思っているのなら交渉なのだ。

「ああ、ああー知っているー!言うから、言うからもうやめてくれー!」

「で、三毛猫の女の子を知らないかな？」

「がああ！」

また指を千切りながらイーブは壊れた蓄音機みたいに同じ台詞を繰り返す。交渉には別にこだわったしゃべり方などする必要は無いのだから。

「ある人が買ったんだよ五百万ベリで！もうこれで良いだろ！客の情報は教えられない！」

「で、三毛猫の女の子を知らないかな？」

「あああ！」

まだである。まだ完全に情報を手に入れていない。誰がスチルドパッドを買ったのかが分かっていない。そこが肝心なのである。しかしあと少して情報が手に入るであろうときに邪魔が入る。

「おい、どっした？」

とぞろぞろと出てくる屈強な男たち。

「ははっ、俺の勝ちだ！おい、俺を今すぐ放せば命は助けてやる」

「で、三毛猫の女の子を知らないかな？」

「ぎがっ！やっ、やれ！」

しかしそんなのに動じないイーブ。当然皆殺しは確定しているの

だが今は皆殺しよりも情報の方が大切なのだ。しかし、情報を手に入るのを邪魔するのであれば仕方がない。

「ぞまーみるー…これでお前もお仕舞い…だあ？」

組伏せられた男が首を動かすとそこには首の無い男の死体が十体。死体しか残っていなかった。

「で、三毛猫の女の子を知らないかな？」

「言っ…言っぞー！全部言っ…商品」を買ったのは「天竜人」の聖アロガン様だ！もうマリージョアに戻っていらっしやるはずだ！しかし知らない！もう全部話した！だから助けて」

グチャ、という肉を押し潰したような聞くだけで吐き気を催すような音で男の命乞いは中断される。

「スチーはマリージョア…オツケー」

(にしても「天竜人」まで忘れるなんてね。これはもうラヴィサメの言っただ記憶の改竄かな？いや、彼女による記憶の封印の方が有り得そうだね……本人は肉体の再生に失敗したって言ってたけど)

ニヤリと笑って歩き出す。これからに備えて。

その後、スモーカーたちと合流したイーブ。しかしドーがいない。

「ドーはまた迷子なのかな？全く…あの娘は……馬鹿みたいだね」

「いせ…」

と何時もと違い歯切れの悪いスモーカー。

「え？どうしたのかな？」

「それがな……」

「私から言っわ。ドーは天竜人の側室になったわ。そして私たちは何も出来なかった、ヒナ回想」

「……ああ……」

スモーカーを遮ったヒナの告白に、フラリとよろけながらイーブの口から言葉が漏れる。

「……また」天竜人は僕から奪うんだね」

「またって言うことはお前……!？」

とスモーカーが驚愕の表情を浮かべる。

「うん、僕の最愛の妹シロン・スチルドパッドも天竜人に買われて連れていかれたよ」

苦虫を噛み潰したような、それで笑いを堪えるような表情をしてイーブが言った。

第二十話 聖都で解放者は幻想の大革命を

(ああ全く面倒なことをしてくれるね、ラヴィサメは。記憶の改竄のせいでマリージョア襲撃が遅れちゃったよ。いや、感謝した方がいあかな？今なら襲撃の準備とかも整えられるしね)

マリージョア襲撃を決めたイーブの行動は早かった。ついでにラヴィサメの行為も故意と決めつけるのも早かった。先ずはスモーカーらとは早々に無断で分かれ、襲撃に必要な物を色々買う。次にマリージョア襲撃は一人では出来ない。いや、原作ではフィッシャー・タイガーが一人でマリージョア襲撃を成功させていたから出来ない事はないだろう。しかしイーブの思っている完璧な襲撃が出来ない。だからイーブより実力のある大人に助けを求めに行く。

「まさかまたここに来るなんて…思ってたけどね」

「君は…」「スコウエルト・イーブだよ」そうかではイーブと呼ばせてもらおう。で、今回はどんな用かな、イーブ？」

イーブの知っている実力のある大人なんて「冥王」シルバーズ・レイリーしかない。立ち話もなんだから、とシャッキーズぼったくりバーの中にイーブをレイリーは招き入れ話を聞く。

「案の定スチーは天竜人を買われてたよ。ついでに友達が側室にされて連れていかれてたみたいだね」

「ほう、それで君は一体どうするつもりかね？」

と夕方である今から既にお酒の杯を傾けながらレイリーは言う。

お酒の度数はかなり高い。

「勿論襲撃するよ」

「ははは、流石は私の見込んだ男だ。そう来なくては！」

と嬉しそうに言うレイリー。少し酔いが回ってきてる様だ。

「うん、でも僕も思うし君もこの前言ったよね、『出来ない事は言うもんじゃないな』って」

「ああ、確かに言ったな」

「だから手伝って欲しいんだよ、マリージョア襲撃を」

ブー！飲んでたお酒を吹き出して咳き込むレイリー。無理もないだろう。何せ引退した身にもう一度海軍にケンカ吹っ掛けに行かないかと言われている様なものなのだから。いや、マリージョア襲撃はそれ以上の事かもしれない。

「それは私でも流石に無理だ！」

「いや、何も僕と一緒にマリージョアを襲撃してくれって言うわけじゃないんだよ。少し襲撃を手伝ってくれたらなーっていう保険って感じかな？」

「この子は何をいつているのだろうか。手伝うも何もマリージョアに海賊王の右腕が行くというだけで大問題なのだ。保険とかそういう物を色々とぶっ飛ばしている。」

「それに手伝ってくれると言うのならこれも上げるよ。まあ、気持ちみ

たいなものだから気構えないで受け取って欲しいな」

と大きな袋に入った札束約三億ベリ。これはイーブがレイリーを買収するというのでは無く、本当に気持ち程度だ。レイリーが手伝ってくれると言うのならイーブは何だっするだろう。因みにこの三億ベリ、賞金稼ぎと身分を偽ってここに来る途中に準備運動感覚で狩ってきた海賊たちである。イーブの目に付いたというのは不運かもしれないが、イーブの目に付いて生き残っている彼らはかなり幸運だろう。インペルダウン送りになってもまだそう言える状態かは分からないが。また数奇なことにこのときのイーブの偽名がイーブ・スパードであった。この意味は分かる人にしか分からないだろう。分からない人は流して欲しい。

「大将クラスは僕が出張るし、レイリーはいざって時にしか出なくてもいいよ。それも仕事は僕がどうしようもなくなったときのフォーだけでいいからさ。」の通り。」

と土下座をするイーブ。この誠実さが伝わったのか。

「ふむ…まあ、良いだろう」

「冥王」がマリージョア襲撃の参加を酔った勢いで決意する。しかしここで問題が発生する。

「襲撃の計画もそうなのだが、船はどうするのだ？」

そう原作ではフィッシャー・タイガーは赤い大陸までは泳いで来たし、レイリーとイーブもそこまでの移動は楽だろう。イーブは『月歩』を使うが。しかしドーヤスチルドパッドにはそういった足がない。加えて言うならフィッシャー・タイガーはただマリージョアで暴れるだけで襲撃を成功させていたが、計画を立てるに越したことはない。

「うん、海軍本部将校をなめちゃ駄目だよ。海軍の機密情報とか結構知ってるんだよね、僕。だから今回は海軍最新作の試作機に乗らせせてもらおうかな」

書類仕事を真面目にこなしていたイーブは実は結構ヤバイ情報を知っていたりするのだ。パシフィスタは知らないが。そしていくら最新の試作機を盗むというシチュエーションだからといって、二人乗りの人形巨大ロボットではないし空も飛ばない。ついでに言えばハドロン砲なんて出る訳がない。ベガパンクは次元を越える天才ではないのだ。

そして二人は海軍本部に着く。一人は泳いで、一人は空を駆けて。スモーカーとヒナはシャボンディー諸島で放置プレイである。イーブは彼らをこの件に関わらせる気は無い。

「さあ、刮目しなよ。これが海軍が誇るはずだった最新の軍艦。巨人部隊専用の軍艦“アトランティス号”だよ！」

そこにあるのは普通の軍艦と比べるのも馬鹿らしい程の巨大な軍艦。その中には海軍の最新兵器や、一般の軍艦が三隻収納されており『これ一隻でバスターコール』が企画段階でのキャッチコピーだった化け物軍艦。これならマリージョア中の奴隷たちを保護できるだろう。それに追っ手だって並み程度だったら無双出来る。ただ名前が一抹の不安を残すが。この名前を聞いたときイーブが『沈没フラグ!?!』なんて言ったのは悪くないだろう。

そして必要な物は積み込み、直ぐにマリージョアに向かう。もう少しで着く頃である。ちなみにこの“アトランティス号”、大きすぎ

る事と巨人族を多く乗せることを考慮して、帆の他に石炭での蒸気機関も付いてて、それで馬力を出しているのだ。そしてイーブの“ドロドロの実”は地面の中から採掘される物ならなんでも採掘できる。つまりその身一つで石炭を精製出来るのだ。意外な能力の使い道である。これさえあれば石油王だろうが石炭王だろうが金山王、銀山王、銅山王、鉄鉱王だって余裕でなれるだろう。何故なら無限に石油などの本来使いきってなくなるはずの資源が使い放題出し放題なのだから。今は他の企業が勝てたとしてもいずれは必ずイーブには勝てなくなるだろう。

そしてアトランティス号を持ち上げ、引っ張り上げ、蹴り上げて、マリージョアの上に繋がっているクレーンの近くの近くに停めておく。そしてイーブは見聞色の覇気で主な奴隷の居場所、海兵の配置を感じる。

「すー、はー。うんっ、休憩終了！行動開始っ！その海兵さん、今からマリージョアを襲撃しようと思うんだけど、君は僕の邪魔をするのかな？」

まず近くの海兵二人組に尋ねる。天竜人が正義を掲げる海軍の暗部だとしてもそんなことは認められない。だから当然答えは、

「ふざけるなー」

に決まっている。叫ぶと同時に襲ってきた海兵の首を切りつけ殺す。そして他の海兵にバレルように、陽動らしく堂々と声を張り上げる。

「スラムツパギー皆！僕の名前はスコウエルド・イーブ。海軍本部少尉で二つ名は“剣帝”。掲げる正義は“自分勝手な正義”だからマ

リージョアを襲撃しに来ましたー！ってゆー訳でー邪魔する海兵もぶっ殺すよ!？」

とだけ言い残してマリージョアの特に天竜人が多い すなわち奴隷が多い地域に向かって駆け出す。

そしてアトランティス号から最も近い所にいる天竜人の家、とあうかもはや城と呼べる建物に到着。

取り敢えずこの家だけは外部に通報される前に天竜 人やその護衛、また目撃した海兵等を殲滅したいと考えるイーブ。いくら奴隷たちの移動中にバレるといつてもやはり敵に伝わるのは遅いに越したことはないからだ。だから大規模破壊技の狙撃「大槍」、狙撃「壁」、『一刀両断』、『地平切り』、『斬撃攪拌』はこの場では封印である。つまりということの主には六式で挑むことになるのだ。

まずは海兵に声を上げられる前に首を切りつける。そして無駄にでっかい門をなるたけ音が鳴らないように開放。

海兵に見付かったら『剃』で接近してから『指銃』を脳天に放つか、そのまま『嵐脚』で切り殺すかして楽々とバレずに天竜人も含めて殲滅成功する。流石は世界政府の暗殺体術である「六式」だ。

そして奴隷たちがいる定番の地下牢に着く。案の定沢山奴隷がいる。いや、正しくはこれからは「元」奴隷である。それにしても多い。こんなに大所帯で逃げ切れないのではないかと思われそうだがそんなことはない。自分の身を守れそうな高額賞金首や凄腕賞金稼ぎが結構いるのだ。そして、

「こんな所で会うとはね、フィッシャー・タイガー」

“正史”での奴隷解放の英雄もここに居た。本来はこれから逃げ出し、そして再びマリージョアに戻って襲撃するはずだったのだがそんな原作をぶっ殺したイーブによって彼はまだ奴隷だったのだ。

「つつ!?お前はなんで俺の名前を知ってる!?!」

「えっ?そりゃあ魚人街のナンバーワンといたらそこそこの有名だからね」

といけしゃあしゃあと嘘をつく。彼はあくまで冒険者だ。いくら魚人街のナンバーワンと言えどそんなチンピラのナンバーワンが有名な筈がない。

「ふん、そんな訳がないだろう」

「時間がないから手短かに言っよ」

都合の悪い事はスルーする、これがこの世界の基本である。

「僕はマリージョア襲撃に来てね、そして船は『アトランティス号』。こっからあっちの方向にずっと行ったところ、といっても3km弱位だけどね、にアトランティス号はあるよ。すごく大きいから直ぐに分かるんじゃないかな。ついでに腕に覚えのある人は船に乗り込むクレーンの近くで、その警護もやってよね。最後に!海軍がもう少しで来るから急いだ方がいいよ!」

と一部の奴隷に付けられている海楼石の手錠を“帝”で斬る。本当に何でも切れる“帝”は便利である。異世界最高を嘗めちゃいけない。使いこなせるのはイーブのみだが。

「……後、戻る時に他の奴隷に会ったらアトランティス号に来るよう
に言っておいてくれないかな。奴隷解放が済んだ後で一箇所に固
まっていた方がもし海軍が来たときでも皆を守り易いしな」

「俺は人間に施しを受けるつもりは無いがそれくらいはしてやる」

「別に僕は魚人とか人魚が人間に劣ってるとは言う。つもりは無いか
ら君たちの地位向上には反対しないけどさ、これだけは覚えといてね
？『人間を虐げるつもりなら潰す』。将来君の仲間にちゃんと言っ
きなよ？勿論魚人を虐げるなら人間も潰すけどね」

特にアーロンにはね。とこれはイーブの心の中だけで呟く。一応
原作開始の八年ほど前になったらコノミ諸島に行くのが吉だろう。

「……分かった」

「うん、いい返事だね」

「これじゃあどっちが年上か分からんな」

「ははっ、それが僕クオリティー」

そして次の家へと走り去る。

それから一時間程経っただろうか。今はもうイーブ周囲の家の殆
どに火がついている。解放した元奴隷が暴徒となったのだ。これは
もう殆ど奴隷解放が終わっているということだ。しかし殆ど終わっ
たからと為って海軍も解散するはずがない。当然海軍はこの暴動の
火消しと建物に着いた火を消すのに躍起になっている。そんな海兵
から逃げる“元”奴隷。そして、

「奴隷的拘束及び苦役からの自由を守ろうか!？」

その海兵を切り捨て奴隷解放にいそしむイーブ。ただしこの言い回しは日本国憲法なんてないこの世界で分かる人間なんて居ないだろう。

第二十一話聖都で猛者は思い思いの戦闘を

「……貴様あ!!海兵の癖に何故このような事を!!!?」

と1人の短剣を2本持った老人が叫ぶ。偉そうな老人だ。態度もだが今回は服装の話である。さらにイーブは知らないが実際に偉い人でこの老人は昔は海軍大将としてぶいぶい言わせた現世界政府全軍総帥のハレルヤである。

「逆に聞くけどさあ、海軍の癖に何故奴隷とか認めてるのかなあ!?!」

と言って老人に斬りかかるも2本の短剣に防がれる。老人の癖に腕に覚えがあるようだ。中将クラスはある。駄菓子菓子らそれじではイーブには勝てない。

ガキーン!と力でそのまま押しきり老人を数m後退させる。

「今の時代は天竜人様は何をやっても許される時代なん……くっ!」

「清々しい位堂々とした言い訳をありがとうね!でも、今の時代がそんな時代だっていうなら僕はそんな時代を変えてみせるよ!」

と老人に近付き突きを繰り出そうとするも、

「甘い、『月歩』お!」

と『月歩』で後ろとられかけるが、

「そう来るって分かってたよ!」

と踏み込んで急に方向転換。 逆に相手の後ろをとって、

「もう少し若かったら僕の相手が出来たと思うよ？」

背中を斬る。 そして、

「敵も少しずつ強くなってきたね。僕は大丈夫だ。けど他の人たちはそうもいかないからね。急がない」と

と足早に次の火の手が上がってない家に向かった。次で最後の家って所でラスボスの登場だろうか。

「海軍本部中将ロンズかあ」

その圧倒的大きさは明らかに巨人族。そしてその身長に見合った巨大な斧が彼をロンズ中将と物語っている。

「良かったら退いてくれないかな？僕は奴隷解放で忙しいんだけどね」

「そうか俺は奴隷解放を止めるのに忙しいから捕まってくれないか？」

当たり前だが交渉決裂である。

「それは残念」

と逆袈裟でロンズ中将を斬るつもりで“帝”を振るうがその巨大な斧に止められる。

「ちゃんと『月歩』で踏み込んで、油断も奢りも怠慢もない一撃なのになあ…。止められちゃったよ。自信無くしちゃつよ〜」

流石は巨人族である。単純なパワーだったらガープ中将とタイマン張れるのではないだろうか。ただしパワー"だけ"だったらの話だが。戦いの勝敗を決める要因は力だけではない。

「子供に『月歩』で踏み込んだ程度で俺の一撃が止められたんだ。俺の方が自信無くす」

「そっか、じゃあこれは止められるかな？」

と『月歩』で瞬時にロンズも届かないような上空に移動。イーブは機動力においてロンズよりも圧倒的に有利なのだ。そして体を半身にし、右手で帝を頭上で構える。そしてその剣先を左手でつかみ、思いつきり引く。いつも通りの『一刀両断』の動作。いつもと違うところがあるとするれば、

「タメが要らなくなった事かな！『一刀両断』！」

そうこの数カ月でイーブは成長しているのだ。ただ"斬る"事だけに特化された一撃はロンズ中将の斧をまるで豆腐であるかのように斬り、さらに左腕すら切り落とす。

さらに落下するときロンズ中将の首とすれ違う時に その首も切り落とす。

「「「ちゅ、中将おおおおおおお!!」「」」

着地した瞬間に、

『地平切り』

中将の部下全員を腰から切り落とす。

「これでラストだよ、僕！気を引き締めないとね！」

と自分に言い聞かせて、残った最後の天竜人の家に 向かって駆け出した。

「全く…何が保険だ。私の力に頼りまくりではないか。」

巨大戦艦アトランティス号の近くにいるのは最高の海賊ロジャー海賊団の副船長、シルバース・レイリーである。

「まあ、比較的気を使っているようだかな」

と愛刀を振り回しご機嫌に海兵を吹き飛ばすレイリー。彼の言っている事は正しい。彼の回りにはイーブが解放してきた腕に覚えがある海賊や賞金稼ぎが何人も戦闘を繰り広げ、向かってくる海兵も弱くはないが恐ろしく強いわけでもない。そこら辺はイーブが大暴れし引き受けているようだ。しかしそんな事もこれまで今から悪魔的に強い海兵が三人ほどやって来る。

「大噴火！」

「アイス塊両棘矛」

「天戸岩」

未来の三大将サカズキ、クザン、ボルサリーノだ。この三者の一撃は近くにいる海賊ら数十人を吹き飛ばす。

「ああっ、「」のままじゃ全滅だ！」

と圧倒な実力差に絶望する海賊たち。

「彼らの相手は君たちには少し荷が重いな。私に任せなさい」

と言って前に出るレイリー。

(いくらイーブが暴れると言っても限界があるとは思ってたが大將有望株の三人が来るとは…。全くこれで貸し五だぞイーブ)

イーブにとってはこの協力は貸し五では収まらないだろう。今ではレイリーの言うことなら何でもするのではないだろうか。

「久し振りだな君たち。所で撤退をお勧めするが？」

とレイリー。これが強者の余裕なのだろう。それに加え彼ら三人とはレイリーも戦った事がある。多少再会の余韻に浸っても問題ないだろう。

「そうしたいのは山々なんだけど上からの命令だからな。逆らえないんだわ」

「そうか、それは残念だ」

交渉決裂。問答無用で斬撃を飛ばす。周りの海兵を斬らずに飛ぶように斬撃を放ったのはレイリーの優しさだろう。油断はしていなかったがその一撃をモロに食らったクザンはそのまま飛んでいきバラバラに碎ける。碎けたということはまだ能力が使える証だが、既にクザンは先頭不能。残りは二人である。そさて戦闘の主導権を握る

ためこの中で最速のボルサリーノが仕掛ける。

「ふむ、確かに速いがそれだけだな。呼び動作が長すぎる。そんなのでは“四皇”と渡り合えないぞ」

とボルサリーノの蹴りを左手で掴み取るレイリー。いくら速いと言えど見聞色の覇気で先読みしてしまえばいくらでも対応出来るのだ。もし出来なかつたら今頃ボルサリーノは“四皇”全員を軽く討ち取って海賊を殲滅しているだろう。

「犬神紅蓮！」

と人質何それ食えんのか？という勢いでボルサリーノごと攻撃するのはサカズキ中将。非常に彼らしい戦い方だ。そしてレイリーの選択肢は二つ。ボルサリーノごと焼かれるか、ボルサリーノとかわすか。当然レイリーは後者を取る。しかしサカズキの狙いはそれだ。彼のかわした先には、

「流星火山！」

溶岩の雨が降り注ぐのだから。しかしレイリーは灼熱の溶岩が降り注ぐなか涼しい顔をして立っている。

「ふむ、遠目から見たときは脅威に感じたが実際に相対してみるとそうでもないな。能力の火力に任せて覇気の制御を疎かにしていたな？」

と余裕の笑いを浮かべながら淡々と言うレイリー。そして出来の悪い弟子を諭すように言っつ。

「自分が最強だと勘違いしている自然系の寿命は短い」

一撃。たった一撃空に向かって剣を振るっただけで数百の溶岩の雨をレイリーは消し飛ばす。焦るサカズキ。当然である。この芸当は最近自分が完敗したイーブと同じく絶対的な実力の差を痛感させるものだったからだ。

「なっ、何故貴様のような引退したはずの海賊が今更こんなことをするんじゃない!?」

虚勢を張るように叫ぶサカズキ。もはや彼はこうしなくては自分を保てないのだ。

「…ははっ、少し将来有望な子を見つけてね。なに、その子が頼んできたことと自分がどのくらい鈍ったのか気になっただけのことだ」

言えない。半分酔った勢いで協力するなんて言ったただなんて決して言えない。天下に名を轟かせたあの「冥王」が酔った勢いで子供に連れられてマリージョアを襲撃したただなんて絶対に言えない。

ちゃんと自分の体裁がある程度保たれる動機を言ってサカズキを袈裟懸けに斬る。レイリーには能力に頼りきりと言われたが流石は海軍本部中將である。死にはしなかったようだ。もっとも、レイリーが手心を加えたというのが一番大きい。流石に海軍本部の上級將校を殺してしまうのはまずい。今後の晩年的に。無茶をするのは若いイーブだけで十分なのだ。しかしここに裏切り者がいた。

「彼らでは私の敵には力不足だな。彼らを連れて帰って、ガープでも連れて来るといい」

そうレイリーの口である。若き日を思い出したのか彼の口が脳の許可を得る前に訳の分からない事を抜かしているようだ。今回はそ

んなに頑張るつもりのないレイリーにとっては迷惑千万である。

「安心してくれていいよぉ。あっしからちゃんど連絡しとくからねえ。ガーブ中将を超越すようにって。しかも下手人が“冥王”だなんて知ったら、ガーブ中将は張り切っちゃって巨大鉄球携えてやって来るんじゃないかねえ。」

唯一意識の残っているボルサリーノの言葉に絶句し冷や汗を流すレイリー。ガーブと何度も殺しあってきたレイリーには彼の強さはよく分かっている。確かにただのタイムン勝負だったら、レイリーは激戦の末に辛勝出来るだろう。だが巨大鉄球があるのなら話は変わってくる。あのリーチ、質量、そして変則的な軌道は脅威だ。ガーブは二つ名を“拳骨”から“鉄球”に変えるべきだろう。あんな必殺の武器を使うくせに二つ名が“拳骨”だなんて名前詐欺だ。

「じゃあ邪魔になるだろうからあっしらはおいとまさせてもらおうかねえ。」

「少し待ちたま…行ってしまったか……」

流星は光速。いくらレイリーにその行動が読まれていたとしても流石に追い付くことは出来ないようだ。レイリーはそこまで人間を捨ててない。もっとも読めたからといって光速の蹴りを防げるレイリーは十分に人間を止めていると思うが。

「わっ…えっ…どうしたか」

とどのように話術で乗り切るかを思案するレイリー。簡単に言うとかガーブをイーブに押し付けるつもりなのだ。罪悪感など全く感じない。イーブが主に自分がやると豪語していたのだからいくら押し付けても問題ないだろう。

「元帥！コング元帥！」

海軍本部マリンフォードの元帥の部屋に報告に来る准将。コングは襲撃者の足を潰すために差し向けた三人の中将が命令を遂行したと報告しに来たのだと思っている。しかし彼の期待は予想外の報告と共に裏切られる。

「先ほど襲撃者の船の元へ向かったサカズキ、クザン、ボルサリーノ中将が撤退してきました！」

「なっ、撤退だと!?!」

そう撤退だ。つまり海軍大将有望株の三人が行って敗北してきたということだ。

「本当に撤退してきたのか!?!あの三人がか!?!」

バン！と机を叩いて准将に凄むコング。コングの殺気で准将の意識は今にも遙か彼方へぶっ飛びそうである。

「はっ、はいっ！ボルサリーノ中将の報告では船には“冥王”シルバース・レイリーが用心棒をして、“冥王”だと!?!」……」

今度こそ限界が越えてしまったのだろう。バタリと自分の精神を殺気から守るために意識を手放した准将。だが決して准将は悪くない。いくら海軍本部の将校と言えどやはり准将では中将や大将とは実力差が大きすぎるのだ。

「だそつだ。聞いていたか？」

と元帥の部屋にいる第三の人間にコングが問う。

「ああ、まさかあいつが出てくるとはのう。『海賊王』を処刑してから全く音沙汰が無かったというのに何で今更なんじゃろうか…」

「なんだっていい。問題は海賊王のクルーが活動をしているということだ」

「そんな事わかつとるわ。海賊王は儂の獲物じゃあ。そのクルーもな」

「ああ、何としても捕まえる…と言いたいところだが」

と溜め息をつくコング。

「ああ、それもわかつとる。天竜人が最優先、じゃろ？」

「話が早くて助かる。状況が状況だからな。ガープには悪いが…」

「適度に戦闘して痛み分けをし天竜人の保護に参加しろ、じゃろ？」

「『冥王』を捕まえるチャンスなんだが…すまん」

「何、気にするな。儂らは海兵じゃからの。それくらい覚悟しておったわい」

海軍では上層部であるこの二人も世界政府から見るとやはり一般兵の一人。強いて言うなら『英雄』ですら名前の売れた使える下っ端なのである。

第二十二話 聖都で土佐犬は保守的な正義を

最後の家に襲撃をかけたスコウエルト・イーブ。しかし奴隷の皆は既に勝手に出て行ってしまったようだ。だったらイーブはアトランティス号に戻らなくてはいけない。いくら「冥王」というこの上なく豪華な用心棒がいると言えど沈んでるかもしれない。

そんな時、イーブは元奴隷の四人の女の子を発見する。しかも海兵に連れていかれそうなのである。

「居合」一閃」

スツと瞬く間に海兵を斬ってその三人を救出。

「んなっ!?海兵が海兵を斬ったじゃと!?おぬしは何者じゃ!?!」

この口調でそして元奴隷。間違いだらう。未来の王下七部海「海賊女帝」ボア・ハンコックだ。そして彼女の妹のボア・サンダーソニアとボア・マリーゴールド。イーブは多分エンカウントするんじゃないかと予想していたのだが本当にするとは。そんな感動に浸る前に取り敢えず自己紹介をする。というかそんな事はぶっちゃけた話どうでもいい。何故ならば、

「スラムマップギー。僕はこのマリージョア襲撃の犯人、「元」海軍本部 少佐「剣帝」スコウエルト・イーブだよ。気軽にイーブって呼んでね。それとやっと会えたね、スチー！」

やっと妹と再会したからだ。最愛の妹との再会に比べたら原作キャラとの邂逅だなんてちっぴけなものだ。

「ふーじゃああああん！おにーちゃん!!」

と言ってイーブに抱きつくスチルドパッド。しかしそんな再会も長続きはしない。

「ちいつ、厄介なのが来たね……。伏せっ！」

「妾は犬ではないっ！」

何やらハンコックが叫んでいるようだがそれどころではない。何か“がここマリージョアに凄い速さで墜落し、辺りを破壊する。

『「斬撃攪拌(ミキサー)』い!!……これじゃ足りないねえ!……だつたら狙撃『大槍』い!!」

周囲を守るように張った『斬撃攪拌』が破られそうになったので『大槍』も付け加えてついでにその“何か”による攻撃迎え撃つ。

「なっ、何が起ったのじゃ!?!」

「……こんな事が出来る海兵なんてほんの一握りしかないよ。それで今回は海軍の中でも圧倒的な破壊力を誇った(上層部の中では)別名“歩くバスターコール”大将のキャオ・カイニスだね」

上半身裸で下半身には独特なまわしを着けているイーブの前世で“横綱”と呼ばれるような存在の風貌は間違い。ちなみにこの別名はイーブがクザンが酔っているときに偶然聞いたものである。

『カイニス大将、あなたはそんなだから“歩くバスターコール”なんて呼ばれるんですよ』

くある過去の日より抜粋

「俺の鉄塊」一隕石(メテオ)

『の1000m以内で無傷か…流石は…二代目歩くバスターコール』
だな」

イーブにそんな二つ名をまた増やしたのは誰だろうか。もはや二つ名と言いなからそれが二つ以上あるのは気にしてはいけないことだろう。

「良いのかな？マリージョアをこんなに滅茶苦茶にしてさ」

「許可は降りた。』スコウエルト・イーブを抹殺しろ』とな」

手段は問わん、とも言っていた。

と付け加えるカイニス。イーブにとっては全く嬉しくない情報である。

「ところで聞くが、何故お前はこんなことをしたのだ？」

「あー、恥ずかしい話、天竜人の事を(封印されてて)完全に知らなかったんだよねー。それで彼等の存在が僕の“自分勝手な正義”に反したんだよね。そっから先は言わずもがな…かな？」

「そうか」

「はあ…これは流石に何時もみたいにサクッといけそうにないね」

とため息をつくイーブに、

「海軍本部の大將がそう簡単にやられてたまるか」

と返すカイニス。

「じゃあハン……君、僕のコート預かってよ。少しは誤魔化せそうだからね。それで向こう側にいるシルバース・レイリーや魚人のフィッシャー・タイガーが多分守ってる僕のアトランティス号に乗っててね。僕も直ぐに追い付くから」

とコートを渡しながら言う。血染めでもはやオーダーメイドに等しい正義のコートだが大丈夫だろうか。さらにイーブは“ハンコック”と言いかけたのに彼女は気付いたのだろうか。一番の問題は見た目海兵なイーブを信じたかどうかである。

「うむ、わかったぞ」

と言って駆け出す三人。しかしここからが本題である。

「あとこの子僕の妹のスチーだけど命に換えてでも守りきってね？もし少しでも傷物にしたら君たちの四肢を挽き肉にして明日の朝の食卓にハンバーグが並ぶことになるよ？」

「わーい、ハンバーグにゃん」

そう妹の安全の確保である。ここまで脅しておけば未来の王下七武海のハンコックはスチルドパッドを守りきれだろう。それにロズ中將をはじめ実力のある海兵はイーブが既に始末してあるというもある。

「う……うむ、分かったぞ！」

と言って駆け出す四人。分かったようで何よりだ。ふう、と息をついて一番のは化け物に向き直る。そして仕掛ける。

「じゃあ…僕から行くよー」

何時も通り『剃』で近付き、帝で首を跳ね よつとするが、

キンッ

姿が変わったらカイニスの『鉄塊』に呆気なく弾かれる。

「動物系イヌイヌの実モデル土佐犬…だっけ？」

「そうだが…殺し合い中に喋る余裕があるのか？」

とがら空きのイープの左肩に迫るカイニスの右の拳。

「まだあるよ」

とイープはバックステップでかわそうとするも、カイニスの“飛ぶ拳撃”をかわしきることは出来ずあえなく弾き飛ばされる。

しかしただで飛ばされないのがイープクオリティー。その飛ばされた回転を生かして、

『一大型攪拌（ミキサー）……巻き上げなよ!!』

新技を開発。他の二次小説の主人公たちならこれで敵を飛ばせるかもしれない。しかしそんなに甘くないのが海軍本部の大将だ。

「じっしゃくなあぁあぁ!!」

と手を組んで地面に叩きつけ、それによって自分の四方に地面を隆起させて擬似的な盾を作ってしのぐ。流石は動物系の能力者。耐久性がおかしいことになっている。

「だったら次は一点突破だねえ！狙撃『大槍』い！」

「鉄塊『剛』！」

とイーブの最強の突きもカイニスの最強の『鉄塊』に防がれるが、

「この近距離で僕の斬撃が止められるかな？『一刀両断』！」

イーブは剣士である。そして刀の“帝”の特性は“斬る”ことである。つまりイーブは突きよりも斬撃の方が得意なのだ。イーブは『大槍』の真後ろに隠れてカイニスに近付き、近距離からの最強の斬撃を当てるも、

ガキイーン！

これも最強の『鉄塊』に弾かれる。

「はあああああ！」

と今度はイーブの鳩尾に拳が飛んで来る。それをイーブは『剃』のバックステップで距離を取りながらながら威力の軽減を計り、拳の着弾点に

「鉄塊『剛』！……があっ！」

『鉄塊』をかけて受け流そうとするも、喰らってしまっ。

スピードではイーブが圧倒的に勝っているかもしれない。しかし今度は決定力不足である。どうしてもカイニスの『鉄塊』が破れない。まさにカイニスは『スピード』は戦いにおいて重要な要素だが、それだけではどうにもならない奴』を体現したような男だ。

勝負はイーブの技をきっちり捌いて、なおかつカウンターを決めるカイニスが有利だろう。パワータイプの敵にはイーブの能力を使った"あれ"を使いたいところだが、流石に"あれ"を出すほどカイニスが待ってくれるはずがない。レイリーの時の二の舞になるのが関の山だろう。だから今回は"こっち"で我慢するしかない。

「じゃあ、もう一回行くよ!」鎌鼬「!」

と数百もの斬撃がカイニスを襲うも全て、

『鉄塊』

普通の『鉄塊』に防がれる。いくら数百に威力が分散されていると言えどもきっちり捌かれてはイーブも流石に傷付く。しかし落胆する暇なんて存在しない。今度はそこから『剃』を使って駆け回り、

『杓子』

完全に制御した超高速移動でカイニスの頭、首、胸、肩甲骨、背中、肩、肘、指、鳩尾、脇腹、太股、膝、脛、アキレス腱、足の甲、足の指、これら全てを数分間ずっとランダムにそして正確に斬っている筈なのに、

「鉄塊『剛』」

ずっとその間『鉄塊』をかけ続けてしのぐカイニス。流石は六式に最も向いている動物系の能力者。彼は『鉄塊』のキレと継続時かんが異常だ。そしてイーブが疲れでスピードを緩めた時に、

「もらったー！」

ゴツ！カイニスの拳がクリーンヒットする。イーブはそのまま飛んでいって建物に衝突。その建物の瓦礫がそれをかわそうともしないイーブに降り注ぐ。しかしさっきの鉄塊『隕石』で辺りの建物は全滅した筈なのだが、『隕石』の範囲外まで飛んでいくなんでどう考えても飛びすぎではないだろうか。いやそれが可能だからこそその海軍大将、「歩くバスターコール」なのだ。

「悪いな。今の世界は確かに間違ってるのかもしれない。それでも「最悪」ではない今日を守るために俺は拳を振るい続けると決めただ。この『保守的な正義』にかけて」

と見聞色の覇気で強化されたイーブの耳に入ってくるカイニスの言葉というか独白。その隙にイーブは『泥侵食』と呟く。すると周りの建物とその残骸を全て泥にゆっくりと姿を変え始める。「ゆっくり」だからイーブはこの能力を使いたくなかったのだ。つまり時間かかりすぎるのだ。「ドロドロの実」は自分から仕掛ける戦闘に全然向いていないのだ。そしてそれがイーブとラヴィサメが能力を保険程度と軽視する理由だった。しかもうそんなことは言ってもらえない。今自分がここで倒ればどうなるか。もうイーブの命は自分一人の物じゃなくなっていた。

だから今回「わざと」カイニスの拳で吹っ飛ばされて距離をとったのだ。時間は出来るものではなく作るものだから。ただしその代償として骨が何本も逝ったが。

そして周りを全て泥に変えてからカイニスの言葉に返答する。

「じゃあ僕も言わせてもらおうよ。僕は「少しでも悪い」今日を「少しでも良い」明日に変えるために「帝」を振るっているだよね。僕の「自分勝手な正義」にかけて」

と。

『巨兵の右腕』。さあ第二ラウンドの始まりだよ」

と泥を纏って禍々しく巨大化した、巨人族のよりも 巨大な、それを掲げながらイーブは高らかに宣言した。

イーブの能力は『泥侵食』を使わないと本当に発動が遅い。しかもその『泥侵食』すらも発動時間が遅い。故にこの能力は使い物にならないのだ。今まで能力が使えなくてどれだけ辛かったことか。いや、実際はイーブは全くと言っていいほど気にしてなかったが。それに加え、この『巨兵の右腕』を使うとイーブ自身のスピードは格段に落ちるといふ致命的な欠点がある。ただし完全パワータイプのカイニス相手にスピードは要らない。これでイーブとカイニスのパワーは互角：いやイーブが圧倒的に上となる。これからは「勝負」なんて言わせない。これからはイーブの「カイニスの討伐」の始まりだ。

所変わってアトランティス号付近。ここではレイリーがガープと交渉をしていた。

勿論始めから文明的な対話をしていた訳ではない。始めはガープの巨大鉄球を撃たせないように遠距離からの斬撃でレイリーは応

戦し、撃たれてもアトランティス号への被害をなるべく減らすように受け流している。こんな巨大鉄球を受け止めるなんて自殺行為はしない。折角話し合いで解決出来そうな海兵が来たのだ。交渉で乗り切れそうなのにこんなところで消耗する意味がなかった。

「それでこれからこのことについてなのだが」

とレイリーが切り出す。

「うむ。海軍としては天竜人にさえ手を出さなければこちらは見逃すというのが上層部の意向じゃな。納得いかんが」

「ほう、それは意外だな」

と驚いた表情をするレイリー。それが演技かどうかは誰も分からない。

「海軍も貴様の實力には一目置いとるといっことじゃろ」

「まあ、こちららも海軍の全力とは正面からは殺り合いたくないからな。ちよつと良かった」

とほつとしたように呟くレイリー。

「じゃが、今暴れておるスコウエルド・イープの身柄は渡してほしい」

「それは私じゃなくて彼が決めることだ」

彼が諦めたり実力が無い者であれば切り捨てるが、強者でなおかつ諦めなかったらレイリーは全力でイープをサポートするつもりなのだ。そしてレイリーの呟きにガープは、

「そうか」

と小さく呟いた。

イーブとカイニスが対峙している所に視点を戻す。海軍には援軍が来てる。つまりイーブからから仕掛けなくてはならない。

『正義の鉄拳G3』！

とイーブの凶腕から繰り出される鉄拳は、

「なっ、うおおおおおおお!!」

一瞬だけカイニスの拳と拮抗し、

「がああっ…」

いとも簡単にカイニスを吹き飛ばす。

「これでトドメだよ…『握食』！」

と飛ばされて空中にいるカイニスをイーブは握り潰そうとするも、

「鉄塊『剛』!!」

と今までイーブを苦しめた最強の『鉄塊』で最後の抵抗をしてくる。これが所謂火事場の馬鹿力というものだろうか。力だけならイーブは今までとは比べ物にならないほど大きくなっているはずなのに、イーブはカイニスを全然握り潰せないでいる。これはまずい。なん

と言っても海軍の援軍がもう少しで来るというのだ。確かにイーブの感知する海軍の援軍は一人かもしれない。しかしその援軍は一人と言ってもただの援軍とかではない。これは多分、

「大将が来る前に決めないとねえ！」

下手するとイーブでさえタイマンすら厳しいという海軍大将クラス。もし援軍が間に合ってしまったって二対一になってしまったら本当に死ぬる、イーブが。しかしそれにしても硬いのだ、この土佐犬。援軍はもうちょっとで来るだろう。

このままカイニスを投げて一瞬の隙を作った方が得策かな？ なんてことをイーブが考えた時にカイニスの『鉄塊』がほんの少しだけ緩まる。当然イーブはこんな千載一遇のチャンスわ逃す訳がない。

「これで……握り潰されなよおおおおおおお!!」

イーブも必死だ。ここでいける、と思った瞬間に何処からか力が溢れてくる。次の瞬間にはグチャリと明らかに不自然にくぐもった音がイーブの手の中で響く。

「やったね……」

と言ってイーブは『巨兵の右腕』を解いて脱力する。あえて技を解いたのはこの『巨兵の右腕』はスピードががくつと下がるが故にパワータイプ位にしか勝てないという弱点がある欠陥技なのだ。

そして『巨兵の右腕』を解いた時に当然カイニス大将だったものが現れる。全身を潰されて四肢はあり得ない方向に折れ曲がり、突きだして、所々に肉や内蔵が飛び出ている全身血塗れの死体。これを見て何も思わないことにイーブは自分にドン引きした。

第二十三話 聖都で最強は無敵の歪曲を

「ちっ、ったくよぉ〜。簡単にやられてんじゃねえ よ、カイニスう〜」
「？」

そこに現れた全身黄色のスーツでかためたスタミン・コルプラプス。見た目二十台のくせに実年齢は五十台後だというから驚きである。どんなアンチエイジングしているのか世界中の女性が気になっているだろう。

そしてコルプラプスの呟きが聞こえた瞬間に大気が歪み、次の瞬間にはイーブの目の前に出現する。そして独特な形をした、剣の真ん中がホー スみたいに巻かれている剣、で鋭い突きを放って来る。

「速っ!?!」

とイーブは咄嗟に後ろに下がってかわすが、真ん中の巻かれた部分がちっちやくなり、その分剣のリーチが伸びてイーブを襲うが、

『紙絵』

それを今度はヒラリと紙一重にかわす。

「かわしきれたと思ってるんじゃね〜よぉ〜?」

と今度は剣が横にかわしたイーブに対して巻きつくように動く。

「蛇みたいだね。気持ち悪いよ」

とジャンプしてからの『月歩』で距離をとる。

「てめ〜が」嗜虐博覧会」スコウエルト・イーブでいいんだよなあ〜」？

「わあ、あれだけのこととしておいて今更確認かな？まあいいや。そうだよ、僕が」剣帝」スコウエルト・イーブだよ。そう言う君はもしかして海軍本部大将スタミン・コルプラプスでいいよね？」

「このような非常に残念な二つ名考えついた人は誰なのだろうか。

「ああ、そうだ」

「ここで大将二連戦である。流石に化け物として定評のあるイーブでもかなりきつい。だが全くイーブに勝機が無いわけではない。イーブはコルプラプスの能力を少し理解しはじめているのだ。

「今のは空間を」歪めて」距離を縮めて剣のリーチや 形を」歪めて」変則的な攻撃をしていたっていうので合ってるのかな？」

多分これで合ってるはずだとイーブは自慢気に話す。

「ああ、正解だあ〜。俺様が食ったのは超人系の」グニャグニャの実」。それを食った俺様は万物 を歪められる」歪曲人間」だあ〜」

これはかなり 厄介な能力である。ちょこつと曲げるのが得意なだけだとか思っているとかかなり痛い目を見るだろう。戦いにおいて慢心なんて絶対にはいけないのだ。それにイーブが海軍本部に居たときに、見聞色の覇気によって『こいつはヤバイ』と察知したからである。

『一刀両断』、狙撃『大槍』！

そして案の定コルププラスはイーブが誇る連続の大規模破壊技は
いとも簡単に捌いた。攻撃の軌道を「歪める」といった形だ。当
然攻撃が無くなった訳ではないから、逸れた攻撃は瓦礫の山へと成り
下がっていたマリージョアをより破壊する。

「へえ、斬撃とか物体じゃないものも歪められるんだね。しかも触
らずに」

「だから俺様は海軍大将やってんだよぉ」

攻撃のベクトル弄れるとかそれ何て一方通行だろうか。そして海
軍最強っていうのは海軍最強の「破壊力」ではなくて海軍最強の「
防御力」ということがわかる。彼の絶対の盾は「白ひげ」の全力す
らいとも簡単に捌けるだろう。ただし周りにその皺寄せが来るが。

「でもその能力、生き物は駄目みたいだね」

とイーブかまをかけるように半ば直感的に言う。

「ああ、そうだが何でわかったあ？」

そしてイーブの直感は本当だった。やっぱりかまはかけてみるも
のである。

「だって出来たら僕は今頃口口雑巾…いやボロ雑巾になってるから
ね」

「ああ、でもお前は俺様に触れられないがどうするう？」

と余裕綽々なコルププラス。当然だ、どこぞの第一位も最弱に殴ら

れるまでは相手に先手を譲ってあげるほど余裕の態度をとっていたのだ。しかも彼はそれで今まで不敗だったのだ。似たような能力のコルプラプスだって驕っても不思議ではない。

「うんずる。『指銃』」

とイーブは『指銃』を繰り出すも、指ではなく『指銃』の軌道を歪められて“外される。軌道を歪められた今イーブの腕は折れたかのように有り得ない方向に曲がっている。

「いったああああ……くない？」

「安心しろお〜。『指銃』の軌道の“空間”を“歪めた”だけだあ〜」

空間を歪めただけでイーブの身体が歪められた訳じゃないのだ。

またもや剣を振ってくるコルプラプス。それをイーブは真上に跳んでかわすも、その先には何故か逆立ちしているコルプラプス。正しくはイーブが地面を下にしている状態である。

「今のは“逃走先の座標”を“歪めた”あ〜」

攻撃は効かない、避ける事すらもままならない。もはやチートである。

「「これでも喰らってよ!!」

と苦し紛れの蹴りを放つも当然“歪められて”外される。

『「剃刀」!」

ほんの一瞬だけでも長く生きながらえられるような時間稼ぎのような技を放つ。イーブは戦いを愛している。自分が死にかけるようなものとなると尚更だ。ただしそれは戦いと呼べるものでなくてはいけない。戦いと呼べるならば自分が一方的に潰されるものでもイーブは構わない。そこにイーブが1%でも一撃を与えられる可能性があるのなら。しかし全く手も足も出さず拳げ句の果てに逃げることもままならない虐殺はされたくない。そんなのは戦いじゃない。故に死ぬことへの恐怖は無いがこのような最期を迎えそうなのにイーブは不満なのだ。

しかしイーブの思いとは裏腹に案外距離を取ることに成功。コルプラプスはわざと苦痛を長引かせよつとイーブの『剃刀』で距離をあえてとらせたのだろうか？

「ちいゝ、ちょこまかと逃げ回りやがってえゝ」

いや、コルプラプスにそんな様子は無い。そしてイーブは「海軍本部大将」コルプラプスの弱点に気が付く。

つまり彼の弱点は「速さ」だ。イーブの極められた『剃刀』クラスの速さの攻撃なら当てられるし移動も妨害されないのだ。もしもあの能力が某一方通行な第一位のように自動展開じゃなければの話だが。

「居合い」「一閃」

とほほ『剃』の速さ近づきながらの居合いを放とうと接近するもあえなく『剃』の軌道「をずらされてコルプラプスの左側に移動してしまう。やはり『一閃』では「帝」を振るう分のロスがありどうしても速さが落ちるのだ。だからイーブは取り敢えず「帝」をしまい未完成ながらも自身の最速の技を使う。

「でも」からが本番だよ！居合い『新月』」

そしていきなりコルプラプスの左目から大量の出血。この場の誰にも目視出来ない速さでの斬撃がコルプ ラプスの左目を抉る。

「いやー、運がよかったよ。この『新月』速さを追及し過ぎて僕も見えないしついていけなくて何処を斬るかは運次第なんだよね。本当に相手の左目を抉れてよかったよ」

と言って『剃刀』で距離をとる。

相手の視野が半減したから反応速度も少しは遅くなっただろう。

「てめえ、ムカついたわ。『歪んだ空間』」

コルプラプスがそう唱えた瞬間、地面と瓦礫が数百本のネジのように「歪められながら」伸ばされて凶悪な槍となってイーブに襲いかかる。

「『紙…うわっ!?!』」

イーブはそれらを『紙絵』で綺麗にかわそうとするが地面がトランポリンのようにグニャグニャに「歪められて」足元がおぼつかない。これでは『紙絵』な出来ない。

「だったら…『斬撃攪拌』！」

これで周囲の攻撃全てを破壊しようとするも、

「はっ」

コルププラスの嘲笑と同時に“気流を歪める”事で作られた竜巻に相殺される。だが一瞬の隙は出来た。

そこから『剃刀』で建物ネジをかわしていくが、突然左の脇腹に激痛が走る。

「痛っ〜」

とそこを見てみると、ネジで抉られた様な傷跡のある左脇腹があった。しかし何故イーブがそのような不覚を取ったのだろうか。注意散漫だったのだろうか。いや、イーブに限ってそのような事はない。つまり、

「空気を“歪めて”ネジみたく飛ばしたのかな？」

ということだ。絶対的な防御力に、あり得ない程の応用性、極めつけに不可視の攻撃。流星は海軍大将、能力が鬼畜仕様である。

今イーブの目の前にいるコルププラス大将の弱点は“速さ”のようだ。イーブは自身の『剃』より速い攻撃技なんて何処を斬るかは運次第なんていう未完成技の『新月』しか無い。イーブの速さNo.2の技はイーブの『剃』よりは少し遅い位なのだ。つまりコルププラスに攻撃を与えようと思ったときは、相手が能力の発動する暇もない程速い一撃ではなく相手に能力の発動するタイミングのない不意をつく一撃を狙わなくてはならない。しかし海軍大将の不意を突こうなどとは馬鹿らしい賭けではあるが犬死によりはました。

「まあ、これでファイナーレだよ！僕の数百もの斬撃全てを歪めきれるかな？『鎌鼬』!!」

と数百もの斬撃が砂嵐を巻き起こしながら全てコルプラプスを切り刻もうと迫る。

「これら全てを”歪められる”から俺様は海軍大将や ってんだあ
」

しかしそんな数百の斬撃も海軍大将には通用しない。全ての斬撃の軌道を”歪める”コルプラプス。

だがその斬撃は全部囷だ。イーブが相手の不意を一番突きやすい背後に回る為の布石である。そして相手に「『鎌鼬』が本命だ」って思わせる為にあえて『鎌鼬』に覇気を纏わせ、そのせいで自分の『鎌鼬』に右脇腹と左目も切られたが仕方がない。イーブは全然能力に頼らないがそれでも一応自然系の能力者だ。傷は直ぐに回復するし、この戦いで無傷の勝利なんてあり得ない。首がどこかのCMのかのようにはばばば〜んしなかつただけましと思っべきだ。

「狙撃」『』

そしてコルプラプスの背後に回ったイーブは速さに特化した突きを放つ。コルプラプスは『鎌鼬』による無数の斬撃と格闘していて、一瞬不意を撃たれたってという表情を見せる。だが直ぐに『弓』の”軌道を歪めよう”とする。

「でも遅いよー」

しかしそこはNo.2と言えどかなりの速さを誇る技だ。コルプラプスによる妨害に遭う前に彼の心臓をイーブの突きが貫く。多分能力者になって初めて攻撃を喰らったのだろう。どこかの第一位も一撃もらったときにはたじろいでいた。しかしこれはチンピラの拳ではなく刀による突き。威力が違う。だからコルプラプスはこの致

命傷を食らったという現実が理解出来ないと言ったような呆けた顔になる。

「一発もらった位で呆けるなああああ!! 『斬衝』 おおおお!!」

とイーブが習得に最も時間をかけた「斬れない斬撃」を放つ。呼吸を把握してあえて「斬らない」のではなく、飛ぶ斬撃の刃の部分の面積をあえて分散させ広げることであえて対象を「斬れない」その斬撃は相手を押し潰す凶悪な鈍器としてコルプラプスを襲う。

「くう〜」

とコルプラプスは『斬衝』を四方に「歪めて」「飛び散らそうとする」がさっきの一撃に気を取られたのか軌道を歪めきれず、イーブの斬撃はコルプラプスの四肢を潰し千切る。それでもまだコルプラプスは攻撃しようとする姿勢を崩さない。

心臓を貫かれてもまだイーブの『斬衝』を歪める力があつたこと、そしてまだ闘志が無くなっていない事については流石は海軍大将と賞賛すべきだろう。だがコルプラプスも人の子。限界はあるのだ。そして相手が弱ってる今こそイーブにとって多分最初で最後の攻撃のチャンスとなる。

「撒き散らしなよ! 狙撃『大槍』い!!」

相手を確実に飲み込んでミンチにする筈の巨大な突きは今度は「収束するように歪められて」「腹部に大きな穴を開けるだけに留まる。というかどれだけ不死身キャラなのだろうか、コルプラプス大将は。もはや人外とかそういうったレベルを超越している。

「これで終わりだよ! 『獣敵』!」

と上向きに倒れているコルプラプスに『剃』でマウントポディションをとってだめ押しに顔面を殴り潰すグーパンを入れる。流石に今度はもう能力が使えず首を曲げてそれをかわそうとする。しかし結局かわしきれずに顔面の左半分をミンチになる。これだけすれば海軍最強のスタミン・コルプラプスだって流石に死ぬだろう。

その時イーブの所に来た海軍側の援軍其の二がやって来た。

第二十四話 偉大なる航路で逃走者は不穏な考察を

「今度は海軍本部元帥のコングかあ」

もう奴隷だった皆は逃げる為の時間は十分に稼いだ。だからイー
プに戦う理由はもう無い。

『斬撃攪拌』！」

だからイープは目眩ましに『斬撃攪拌』を使い、『剃』で一気に逃走
を図る。

「くっ、逃げるのかー！イープ・スパイダああー！」

と叫ぶコング元帥。

「こんな状態で大将クラスと戦える訳ないよ、バー カバーカ！」

メリットの戦いもイープは好きだが今は残念ながらそれどころ
ではない。先人は逃げるが勝ちと言ったが本当によく言ったもので
ある。

そしてイープが逃亡を図っていると遠くから不穏な叫び声が聞こ
えてくる。

「まだ息がある！救護班、早く来い！コルプラプス大将を死なせるな
！！」

これは流石にイープの幻聴だろう。あれだけの攻撃を食らってま

さかまだ息があるなんてことは、普通は有り得ないはずだ。

イーブはアトランティス号にたどり着く前、追っ手を撒くために『一刀両断』、『地平切り』、『斬撃攪拌』、『狙撃』、『大槍』、『狙撃』、『壁』で追っ手が来られないように『圧倒的な破壊』を出血大サービスとしてばらまいておく。これで海兵は追っ手は絶対に来られない。文字通り大出血しているはずだ。

そして『月歩』で既に出航しているアトランティス号に乗り込んだ。

「「「かつ、海兵だと!」」」

と盗んだものだが今はもう自分の船であるアトランティス号にイーブが帰艦したときに何も知らない周りからは手荒い歓迎を受けそうな雰囲気が出る。

「いや、いいんだ。彼はこのマリージョア襲撃の主犯である海軍本部少尉“剣帝”スコウエルト・イーブだ」

「スラムマップギー。海軍大将二連戦はかなりキツかったよ。追っ手も足止めしといたから少し休んでるね。話はそれからしようよ」

とレイリーのアローも軽く受け流して船の中に入っていくイーブ。海軍大将相手に勝ちに行く殺し合いに、どちらかという持久戦の得意なイーブはやはり堪えるようだ。

そして中の避難用の軍艦置き場で出会ったのがこの襲撃でもかなり活躍した正史での“奴隷解放の英雄”フィッシャー・タイガーだ。

「ありがとうね。フィッシャー・タイガー、君のお陰で今回の襲撃は成功したよ」

「本来は人間なんかに手を貸したくなかったが仕方なく貸したまでだ。礼には及ばん」

とやはり人間からの感謝も受け取らないタイガー。奴隷にされていた魚人なら当然抱くであろう人間への嫌悪感がタイガーは人一倍、いや魚人一倍強いのだ。

「うっん、それなら尚更だよ。ありがとだね、フィッシュャー・タイガー。でもさ、こっからはどうするつもりのかな？ 僕としてはこのまま一緒に皆を故郷に送り届ける手伝いをして欲しいんだけどね。君たちは結構強いし」

と懇願してみるが、

「流石に人間と一緒にの船に乗り続けるつもりは無い」

とバツサリとフラれる。これも当然だろう。どうして自分達を今まで奴隷として扱ってきた人間族に手を貸さなくてはいけないのだ。

「そっか。残念」

と笑いながら言う。しかしイーブは口では残念と言ったがむしろほっとしている所がある。やはり魚人の兄貴的な存在であるフィッシュャー・タイガーが人間であるイーブに尻尾を振って従っているってなるとまたそれが争いの種になりかねないからだ。タイガーにはシリビレは多分無いと思われるが。

「でも僕も応援してるよ。君の悲願である魚人、人魚が人間と同じ権利を獲得するのをね。例えそれがオトヒ。メさんの邪魔をしているとしても、それで争いが避けられないとしてもね」

勿論それには条件があるが。

「ふん、それも俺がお前の言い付けを守っていたら、だろ？」

イーブがタイガーとマリージョアで出会ったときに言った言葉「人間を虐げるつもりなら潰す」。勿論逆もあるがイーブは奴隷という人権を無視した存在を絶対に許さない。イーブは人権を無視した惨殺が大好きだが奴隷と決定的に違うのが惨殺は殺す前提で相手に苦痛を与え、奴隷は相手を生かす前提で相手を使役する点だ。イーブの考えでは奴隷は全然スマートではないのだ。もっとスマートに殺そうよ、とイーブはいいたいのだ。

「当然だね。でも言い付けて止めてくれないかな？ 言い方悪いよ。それとこの船の中になる軍艦とこゝれを餞別としてあげるよ」

と言って「タイヨウ」の柄の焼き印を渡す。原作にもあった模様だ。

「これは……!？」

嫌っていた人間からの予想外の贈り物に驚くタイガー。

「焼き印だよ。それで忌々しい“天駆ける竜の足跡”だっけ？ そんなふざけた物を消しときなよ。そうすればある程度は皆も自由に暮らせるよね？」

「お前には何もかも世話になった」

と頭を下げるタイガー。

「止めてよ。『タイヨウの海賊団』船長が軽々しく頭を下げちゃ駄目だよ。じゃあここで別れだね。これからも頑張ってるね」

と言ってイーブはタイガーと別れる。

「俺は人間は嫌いだ俺が思っているような人間が全てでないことが分かった」

と最後にイーブの後ろ姿に言ってくるタイガー。これで少しは、ほんの少しだけはタイガーの人間に対する偏見が無くなったかもしれない。その程度で人間を許すなんてことはまだ出来ないが。

「当然だね。でも僕みたいな人だけじゃないっていうのもまた事実だからね」

イーブのような差別をしないような人間もいれば差別をする人間もいるのもまた事実なのだ。そして天竜人が正義なんて言われるのご時世で魚人を差別しないことが正義、とは絶対には言い切れないのも事実なのだ。

イーブは最後にタイガーに警告だけして自分の安眠のために個室へ、タイガーは解放された魚人と人魚が待つ船内の軍艦に歩き出す。

タイガーと別れて数日、イーブは『元』奴隷の中で特に数人と仲良くなった。

まずはイーブより一つしたの女の子で黒、茶、白の三色の髪の毛がチャームポイントなイーブの最愛の妹、シロン・スチルドパット。

愛称はスチー。次はスチーと同じ年くらいと思われるの黒髪ツインテな女の子、ズビツク・カネル。愛称はネル。そして皆さんご存知のゴルゴン三姉妹、ボア・ハン コック、ボア・サンダーソニア、ボ

ア・マリーゴード。そして奴隷ではないが側室として勝手に連れていかれたクランカー・ドー。彼女らは天竜人の余興とかで、ネルは自然系オトオトの実を、そしてゴルゴン三姉妹は原作通りメロメロの実、ヘビヘビの実を食べさせられていた。

ここに来てもイーブはスチーに時々獣化してもらい肉球をふにふにさせてもらっている。やはり妹の肉球は格別なのだ。

そんな時、

「たっ、大変じゃ!!」

とニュース・クーを片手にハンコックがイーブの元々に走ってくる。

「どうしたの、ハンコック?もしかして僕のマリージョア襲撃以上の事件でも起こったのかな?」

「同じ位じゃー」

とハンコックはイーブにニュース・クーを手渡す。

「えつとなになに?」魚人の新人海賊のフィッシャー・タイガーが聖都マリージョアを襲撃!!その際多くの天竜人様がお亡くなりになられ...(中略)...なおこの事件で殉職した海兵は1000人を超え、その中でも有名な人物は世界政府全軍総帥ハレルヤ、大将キャオ・カイニス、同じくスタミン・コルプラプス、また海軍本部ロンス中将...(中略)...そして今海賊の中で最も恐れられていた海軍本部少尉"剣帝"イーブ・スパーダもフィッシャー・タイガーとの激しい戦闘の末、死亡が確認された模様。またフィッシャー・タイガーはその後逃走中にセンゴク大将と戦闘し殺害されたと海軍は正式に発表。また逮捕し

たタイガーの部下も全員自害などで死亡した』か……わお、よくここまでおつきな嘘を堂々と新聞社に流せるね、海軍」

イーブの原作介入、マリージョア襲撃がどのように世界を変えていくのかはまだ誰にも予測出来ない。

マリージョア襲撃当日の元帥の間では緊急会議が開かれていた。そのメンバーとはまずは海軍元帥のコング。次に海軍大将センゴク。そして「英雄」ガープ中将、未来の三大将、サカズキ、クザン、ボルサリーノをはじめとする九人の中将が揃っている。そして全員が揃ったとき、海軍本部元帥のコングが重々しくその口を開く、

「お前たちが集まってもらったのは他でもない。今日あった海軍本部少尉の「剣帝」スコウエルド・イーブによるマリージョア襲撃についてだ」

と周りがやはりな、と言ったような空気を流す。むしろこれ以外の議題など有り得ない。

「五老星からは『主犯が海兵であることをなんとしても隠し通せ』とのお達しが届いている」

これは当然のことである。正義の象徴である海軍に属す海兵、しかも将校が「世界貴族様」に手をかけたなんてことが何も知らない一般人に知られたらそれが今の世界政府の在り方に疑問を持たれるのは必須なのだから。

「へえ〜じゃあ一体どうするんですかあ〜？」

と間延びした今はもう亡きコルプラス大将と似た口調でボルサ

リーノが聞く。これは昔絶対的な力を誇っていたコルプラプスの口調をボルサリーノが真似たのだ。

「それも上から指示が出ている『フィッシャー・タイガーを犯人として仕立て上げ証拠、証人をどんな 手を使ってでも消し、でっち上げる』とのことだ。だからセンゴク、お前は中将五人をつれ軍艦10隻を率いてフィッシャー・タイガーの討伐に向かえ」

「なっ、バスターコールですら中将五人だけなんですぞ！それに大将が加わるなど前代未聞だ！」

とセンゴクがコング元帥の机を叩き割って抗議する。

「いや、そもそもこの状態すら前代未聞なのだ。それに生き残られた天竜人様からは『大将を出せ』とのご命令も下った」

とコングもすかさず反論。天竜人の名前が出たらセンゴクも引くしかない。

「じゃあイープの方はどうするんじゃ？」

と初めて口を開くガープ中将。しかしこれが本題と言っても過言ではないだろう。

「そっちの方はガープ、サカズキ、クザン、ボルサリーノとクロム中将がそれぞれ軍艦を率い、あと軍艦十隻に選りすぐりの海兵をそして動員できるだけ乗せる。海軍本部将校以上だ」

なっ、と元帥の間に数人の驚きの声が響く。それも当然だろう。何故なら海軍本部中将五人と軍艦十隻で島一つを地図から抹消出来る。それなのにそれ以上の戦力をたかが少尉につき込もうとしているの

だから。"冥王"も居るのだが彼は交渉次第で戦闘を避けられるだろう。しかし"剣帝"スコウエルド・イーブの全力の戦闘力を身をもって知っているサカズキだけは違った。

「それだけじゃあ足りんじゃないけえもう少し加えんかのお？」

「ああ、分かっている。その為の人間も直ぐに確保する。そしてお前からからの連絡が無ければ直ぐに戦力を投じる準備をしておくつもりだ」

とサカズキの反論が来ることを当然のように受け入れる。こうして海軍のマリージョア襲撃に対する対応が決まった。

そしてその数日後、"奴隷解放の英雄"フィッシャー・タイガー及びその同志たち全員がセンゴク大將たちによって殺されたとコング元帥に報告された。

フィッシャー・タイガーが死亡した翌日、アトラントイス号で今日の新ニュース・クーを読んでイーブは、

「これはヤバイね…」

と呟いた。勿論スチーの肉球を弄りながら。

「ふにゃああ…何がヤバイのかにゃん？」

と少し嬌声を上げてスチーが首をかしげる。

「そうだね、まず"奴隷解放の英雄"フィッシャー・タイガーが死ん

だって事だけど本当に奴隷解放したのはこの僕なんだよね。じゃあ何でこんな嘘をついたんだと思っつ？」「何故じゃ？」「」

降参が早いハンコック。そこに痺れも憧れもしない。彼女は少し考えることを覚えるべきだ。

「多分海兵が犯人であることを伏せるためじゃないか？そしてそこに身代わりの子羊として都合よく居たのがフィッシャー・タイガーと言ったところか」

と輪のなかに入ってきたレイリー。

「でもそんなことしても直ぐにはおぼれると思っつ」

とこつ腹話術で言ったのはオトオトの実の能力者で音人間のネル。彼女は身体中のどこからでも音を出せるのだ。

「だから僕たち証人を皆殺しにするために海軍はかなりの精鋭を送ってくるんじゃないかな？」

「何で精鋭ってわかるの？タイガーのほうに行ったんじゃない？だつて殲滅が早すぎる」

と再びネルが腹話術をする。タイヨウの海賊団のクルーは全員魚人か人魚だ。そんな彼らが全滅したというのなら海軍は確実に精鋭をタイガーに差し向けたはずだとカネルは推測する。二才児とは思えない思考力だ。

「だって“英雄だつて主張出来る僕”の方が“英雄じゃないつて主張出来るタイガー”より重要視される筈だからね。つまりタイガーよりも強い海兵が僕らの元に向かつてくるはずなんだよね」

それにカネルが思っているより海軍の質は高い。

「だったらどういことなのじゃ？」

と首をかしげるハンコック。しかし年齢が半分もない少年に教えを乞うのはどうかと思う画だ。彼女は本当に未来の王下七武海なのだろうか。

「つまり、魚人たちを殲滅した精鋭海兵よりもより強い海兵が僕らの元に来るといことだね」

「それって大丈夫なのかにゃん!？」

と慌てるスチー。

「うん、奢りも偏見もなくただ事実だけを述べるよ？僕は強いよ、海兵の誰よりも。大将にだって勝てるよ。だから大丈夫。どれだけの軍勢が来ても僕が行けば万事オッケー。君たちの出番は無いよ。ただアトランティス号の看板で座っていればいいだけだね」

「……自分勝手、私たちも戦う」

とイーブの決断を否定するネル。いやそれだけではない。元海兵のドー以外全員である。

「当然だね。だって僕の掲げる正義は『自分勝手な正義』だからね」

とイーブ笑う。しかしイーブの内心は穏やかではない。海軍が本気で来るならイーブはそれなりの準備、"あれ"の準備をしとかなくてはいけない。イーブは能力の使用を好まないが妹の為だ、そんな

事も言ってもらえない。

「うん、辛気くさい話はこれでおしまい！そうだ、近くの無人島で補給がてらバーベキューでもしようよ！」

と言つて行き先を無人島“カナリオツキイ島”に変更する。

第二十五話 無人島で悩み人は疑問だらけの正義を

カナリオツキイ島に来たイーブ御一行。まずは水と食料の確保が最優先課題だ。その為にイーブは皆に指示を出す。

「男衆は火を焚くのと肉を探してきて、あと肉を探すのも三丁四人一組で行動すること。女衆は四組程に別れて食べられそうな植物と水を探してね。やることがわかったら、すぐ行動！」

と手を叩いて行動を促す。

そうして直ぐに一時間が経った。

「ぞっとこんなもんかな？」

自分より大きな牛、豚、鳥、猪、熊、虎、ライオンのような生き物を大量に肉食、草食動物を問わず担いで火の焚いてある所に行くイーブ。

「……よくそんだけ担げるにゃん……」

今更だがスチルドパッドに人外宣言されるイーブ。そして他の面子も続々と食料を持って到着してくる。

「皆集まったね。それじゃあアルコールが無いのは残念だけど、一先ず僕たちの“マリージョア襲撃成功を祝って”そして“奴隷解放成功を祈って”かんぱーい！」

「「「「かんぱーい!!!」」」」

「肉焼こ、肉！」

「野菜も食べなきゃ駄目だよ、お兄ちゃん」

と相変わらず腹話術で話すカネル。しかし今の問題はそれどころではない。というかカネルの腹話術の上手さは今さらである。

「お兄ちゃんってどゆこと、ネル？」

問題はそれである。この世界の人間でないイーブに当然血縁者はいない。だから正しくはお義兄ちゃんなのである。いや、問題はそこではない。いつの間にカネルがイーブを兄認定したかだ。

「私はお兄ちゃんに一生かけても返せない恩が出来た。それに報いるためにお兄ちゃんと一緒に何処までも行ってくて決めた。だからお兄ちゃん」

と意味不明な理論を展開するカネル。しかし彼女はマリージョアから出た時点でイーブをお兄ちゃん認定していたようだ。後はそう言う勇気が無かっただけである。

「最後の方はよくわかんないんだけど…まあ、いいや。でも一応聞くけど僕に着いていくって言う人は他に何人くらい居るのかな？」

とこの質問に殆どの男どもが、あとハンコック、マリーゴールド、サンダーソニア、ドー、そしてスチルドパッドが手を挙げる。戦闘が出来る輩はやはり肉体労働で恩返しをしたいようだ。

「うーん、僕の船に『船員』として乗りたいんだったら四皇とは言わないけれど、少なくとも王下七武海クラスは無いとね。それくらいな

いと僕の隣で戦える船員には為れないよ」

イーブにとってはそれくらいの実力が無いと足手まといになりかねないのだ。だから彼らに乗せるとしたら船員ではなくゲスト、お客さんとしてである。

「じゃあそつなるまで修行するもん」

と拗ねたように言うカネル。

「別に自分がそれに相応しくなるまで頑張るのは勝手だけど、民間から海賊行為するんだったら許さないよ」

これは一応海兵ではないが、まだ“正義”を背負っている者として当然の考えである。

「」「……」「」

「まっ、今はそんなこと考えずに今は祝おうよ！」

「うんっ、おにーにゃんー！」

と後ろから抱き付いてくるスチルドパッド。カネルに自分のポーションが取られそうで不安なのだ。

「妹が出来たってのも悪くない…かな？」

誰にも聞かれないように呟くイーブ。やはり家族は多ければ多いほど楽しいものである。そして多くなったからって決してイーブの一人に注ぐ愛情の量は変わらない。

「お兄ちゃん」

「おにーじゃん」

誰にも聞かれないように言ったはずなのに音人間と三毛猫人間の耳は誤魔化せなかったようだ。悪魔の実恐るべし。

「……………／＼さあ、食べるぞ妹どもー!!」

と半分照れ隠しでスチルドパッドとカネルの肩を少しだけ強引に抱いて皆の元に向かう。

血は繋がっているだけの存在よりも血は繋がってはいないが家族のように暖かい関係を築いている存在の方が本当の家族と言えるだろう。そしてイーブと彼女らの関係はまさににそつだ。

そしてアルコールが無かったために適度に騒いだ後、夜の部としてアトランティス号から寝袋を持ち出してキャンプファイヤーをすることになった。

「ねえ、知ってる？ 蝋燭百本に火を付けて怖い話を一つする度に消していくと最後には幽霊が出るんだってね…」

とイーブが前世での百物語を紹介する。しかしここにいる殆どの人間は幽霊なんて信じていない。何故ならここにいる殆どの人間は真つ先に幽霊呪われそうな人間で、そして彼らは一度たりとも彼の岸の方々と遭遇したことが無いからだ。しかし一部女性は百物語には反対らしい。因みにハンコックは涙めになりながらも周りに煽られて『幽霊ごとき妾の美しさでどつにでもなるわー!』と豪語してしまい引くに引けない状態になっていて、彼女の妹たちはそんな姉を崇拜している。やはり見栄は張るべきでないものだ。

「でも蠟燭がないから木の枝に火を付けてやってみようよ」

とイーブが提案する。

最後まで女性陣は反対するものの、興味津々な男衆に押されて結局やることになった。男は冒険心に溢れる生き物なのだ。

そしてこの時本当に幽霊に出会うなんて誰も考えもしなかった。

一番最初に話始めたのは言い出しっぺのイーブである。

「じゃあ僕が一番バッターでいくよ！皆は魔の三角 地帯 フロリアン・トライアングル って知ってるよね？あの船が行方不明になることで 有名な。今では王下七武海のゲッコウ・モリアが船を襲ってるからなんだけど、それ以前からもそういう事件があそこらへんで多発してたんだよね。それで 昔から海軍で有名な話があつてね……」

とイーブは語り出す。とこんな感じで始まった百物語大会。

次の話とはある男が知り合いのワノ国の侍から聞いたらしい。それは髪が伸びて捨ててもいつの間にか自分の手元に戻ってくる呪いの人形の話であった。

イーブの前世でもその類いの話はよく聞いたものである。

ここでイーブな思ったのは「帝」も忘れてきてもいつの間にかイーブの手元に戻って来ているのだ。だからイーブは実は「帝」が妖刀ではないかと疑っているのだがその予測は正しい。ついでに言えばイーブら離れてても「帝」の位置大体特定出来る。所謂死ぬまですつと一緒なのだろう。

そんな感じで進んでいく百物語大会。ある女性の賞金の手配書を見ると一週間以内に同じ手配書のコピーを誰かに見せないと死ぬという話や、未来から自分の断末魔の叫びを受信するでん虫などイーブが前世で聞いたことあるような話と似た話もチラチラとあがる。

そして百物語が盛り上がってきたところにイーブは少し席を外して林の中に入る。イーブにだって一人で考えていたい時があるのだ。しかしそんな願いは叶えられない。

「お兄ちゃんどうしたの？」

「おにーちゃん発見にゃん」

と音もなく現れたカネルといきなり後ろから抱き付くスチルドパッド。家族と話すというのにイーブの表情は暗い。

「うん、少しだけ考え事をね」

と無理矢理笑って表情をつくらうイーブ。けどそんな不自然な笑いは数カ月でもずっと一緒にべったりとくっついていただたスチルドパッドに見破られる。

「違っにゃん」

「違わないよ」

「違っにゃん」

「違わないよ」

「そんなに私たちが信用できない？」

「っ……」

カネルの底冷えたような声に声をつまらせるイーブ。だけどカネルは止まらない。

「お兄ちゃんは私を助けてくれた。それについては感謝してもしきれない。それにクルーは認めてくれなかったけど私を家族として迎えてくれた。私はそれが私の今までの人生で一番嬉しかった。なのに……なのに！肝心なときは私たちに弱みすら見せない！そんなの、そんな仮初めの家族なんて私要らない！」

泣きながら、そして最後は自分の口で叫んだカネル。

「でも僕は皆のお兄ちゃんだからね。絶対に弱みは見せられないんだよ」

イーブの理想の“兄”は強くて優しくて家族で一番頼りに出来る存在なのだ。だから“兄”であるイーブは人に、特に家族には弱みは見せない、見せられないのだ。

「違うっ！家族はお互いに頼るものなの……」

「おにーちゃんはスチーが大好きだって分かるにゃん。いっぱい助けてもらってるにゃん。でもすちーはおにーにゃんに何もしてないにゃん。だからおにーにゃんはもっとすちーを困らせてにゃん」

だが彼女らにとっての“兄”はイーブにとってのとは違うものなのだ。彼女らにとっては“兄”は家族の一員。そして“家族”とは

自分お互いに頼るものなのだ。これ以上自分の理想の“兄”を追求しても妹を失うだけだと判断したイーブは自分の悩み、自分の深部を語りだす。

「…ふー。ごめんね、心配かけて。初めからぶっ飛んだこと言うけど僕、異世界から来た人なんだよね」

それからはイーブは止まらない。もう妹がこの話を信じるかどうかなんて関係無い。いや信じていると確信して話を続ける。この世界は自分の前世での漫画の世界であること。神と名乗る女から連れてこられて鍛え上げられたこと。そして自分がある程度の未来を知っているということ。

「でこのマリージョア襲撃は本来は来年に僕がいなくても起こるはずだったんだよね。主犯は“冒険者”フィッシャー・タイガー」

「!？」

イーブの言葉に驚くのも無理はない。何せイーブが解放した奴隷の中に未来の奴隷解放の英雄がいたのだから。

「まあ、彼はマリージョア襲撃から少し経って海兵に殺されちゃうんだけどね。でも、それでも魚人や人魚は何人が生き残ってたんだよ！ただ僕がその人たちを、罪の無い魚人たちを殺したんだよ！こんなことなら…こんなことなら…ばふっ!？」

殺しを是とする化け物イーブでもゼファアの意思を継ぐ海兵。一般人を守るといふ矜持を持っているのだ。そしてタイヨウの海賊団の構成員の多くは運悪く捕まった一般人、イーブが守るべき存在だったのだ。その本来は生きていた守るべき存在をイーブは死に追いやった事がイーブの心に重くのしかかっていた。しかしイーブの言

葉は最後まで言えなかった。それはカネルに殴られたからだ。しかもただの打撃ではない。白ひげのように音という振動を纏ったアツパーカットである。見聞色の覇気が乱れに乱れているイーブはそれをかわせずに頭を爆散させる。

「そんなこと無い！お兄ちゃんが一年早く襲撃したことで救われた人はいっぱいいる！魚人の皆だって一年早く救われた事は感謝してるに決まってる、例え一年後に助けられたら生きられたと分かっていたとしても！だってあそこは私たちを人として扱わないから！それは死ぬよりも辛いことなの！だから…だから、そんなこと言わないでよ！」

もう泣きながら、最後には言葉に詰まりながらも言い切ったカネル。そんなカネルをイーブは抱き締めて、そしてイーブも泣きながら言う。

「ごめんね、変な心配かけて。色々あってっ少しだけナイーブになってたみたいだね。すっかり忘れてたよ、僕の正義。"自分勝手な正義"は『自分が正しいと思っただ時に正しいと思っただ事を正しいと思っただよ』。故に独善的な正義。信念を持たなかったらただの犯罪者だね。だけどそんな正義でも確実に救われる人はいるんだよね。すっかり忘れてたよ」

と最後は笑って締めくくる。

第二十六話 無人島で逃走者は百物語の結果を

とりあえず感動の家族会議が終わり仲直りをしたイーブ兄妹。

「うーん、盗み聞きは良くないと思うよ」

と乱れていた見聞色の覇気が正常に戻った時にこの場に第四の間がいたことに気付く。

「やっとバレたか」

と言って木の影から姿を現したのはレイリーだ。彼はイーブに指摘され次第直ぐに姿を現そうと思ったのだがイーブの見聞色の覇気が乱れに乱れていて指摘されず、そして話がヘビーになりその場を離れることも姿を現すことも出来ずにいたのである。今のレイリーの心境は今かくれんぼで見つけられなかった子供のそれに近い。

「はあ……まあいいや。そろそろ戻るうよ」

と言ってイーブはカネルとスチルドパッドを連れて皆のいる海岸へ行く。

しかし、

「飽きたね」

「飽きたにゃん」

「退屈」

と三者三様に感想を言うイーブとカネルとスチルドパッド。当然だが百物語は怪談を百個言う遊びだ。そして参加者は軽く一万人を越える。つまりは怪談なんて一人一個言えればいい方なのだ。しかも一万人は伊達じゃなく、取るスペースもばかならない。全く話が聞けない人間が殆どなのだ。そして今回の主役のイーブと言えど態々この輪のなかを突っ切って話の聞こえる所に行こうとは思わない。よってやる事が無いのだ。

「暇だねー」

「ふにゃん」

「暇だねー」

「ふにゃん」

「なにやってるの？」

「暇潰し」

イーブは暇潰しにどこで拾ってきたのか手に持っている猫じゃらしをスチルドパッドの回りで魚を釣るようにヒラヒラと動かしてスチルドパッドとじゃれている。もっとも釣れるのは魚ではなく猫だが。

「それでも酒の肴にはなる」

とそれを近くで見守っていたレイリーは手に持っているウイスキーの瓶を傾けて言う。

「え…なんでお酒持ってるのかな？」

「私はこんなときに備えて常に酒を常備しているのだよ」

とお酒好きなイープの責めるような視線もどこ吹く風と受け流すレイリー。日常的にアルコール常備とかダメな大人の鏡である。そしてスチルドパッドから目を離して会話しても猫じゃらしには指一本触れさせないイープ。元海軍本部少尉の名は伊達ではないのだ。しかし、

「ふにゃん」

「！！！！」

パシッと軽い音がなりスチルドパッドが猫じゃらしをとらえる。それですら十分すごいことだが今の問題はそれではない。一瞬スチルドパッドが一般人には目視不能な速さを出したことなのだ。

「今のって…」

「ああ、間違いない。これは世界政府の特殊体術“六式”の『剃』だ」

『剃』とは一瞬で十歩以上のピッチで走ることで爆発的な瞬発力を発揮する技だ。その速さは普通は目視不能な程となる。

「成る程ね。身体能力の底上げがある唯一の動物系のネコネコの実モデル三毛猫のスチーなら“六式”の一つや二つくらい使えて当然」

そう身体能力の底上げがある動物系こそ体術である“六式”をもっとも生かせるもの。そしてその能力者であるスチルドパッドに“六式”がつかえても何ら不思議はない…

「…な訳がないよね?! いやいや、ただ不味い木の実食っただけで二才が“六式”の一つを体得して良いわけがないよね?! 僕なんて“六式”の一つを体得するために何回ラヴィサメの殺されたと思ってるのかな!? それをスチーは猫じゃらしの為に体得したって言うのかな? そんな理不尽認められないよね!」

訳がない。寧ろ不思議ばかりだ。それほどまでにスチルドパッドの猫じゃらしに対しての執念が強いものなのだ。

「マジですごいね、スチー。この年で一式使いだったら、将来は六式使っても夢じゃないんじゃないかな?」

と今度は『剃』を使われても取れないように猫じゃらしを上下に揺らす。

「そうだな『剃』が使えたら少なくとも…」

レイリーが話している途中にまたパシッという音が鳴る。ふう、とレイリーは苦笑いして、

『月歩』も直ぐに使えるようになるだろう。もっとも、既に修得してしまったみたいだな」

と続けた。それについて面白く思わない人物が一人。

「むー、私だってそる使えるもん! とりゃ!」

それはカネルだ。カネルも可愛い掛け声を出して高速で移動する。

「っ…とっつ」

しかし使いこなせてないのか急には止まれなかった。しかも、

「能力使ったの高速移動だよね、それ」

それは六式の『剃』ではなく、オトオトの実の能力を使った音速移動、つまるところのインチキである。

「ええっ!？」

と驚愕するカネル。彼女にとっては能力も『剃』も速いという意味では大差が無いのだ。

「まあ、結果的に事象に変わりは無いんだけどね。それでも六式と能力じゃ全然違うかな？」

やんわりとフォローを入れるイーブだが六式との差別化は忘れない。そこは六式使いとしてはつきりさせておかなくてはならないのだ。しかしカネルは子供だ。大好きな兄に一方の妹が褒められて自分が褒められなかつたら面白くない。

「ひっく…お兄ちゃんは…グスッ…私よりも…うっつ……ろくしき
が使える…スチーの方が好きなんだ…ひぐっ…のーりよくしかない私なんか大っ嫌いなんだー!!」

最後は自己嫌悪の一言になってしまったが、そう言って森の方へ駆け出そうとするカネル。しかしイーブはカネルを逃さない。逃げ出そうとするカネルをいち早く察知し後ろからガツチリとホールド、簡単に言うつと抱き締めてカネルの耳元で呟くように言う。

「六式が使えない位で僕は妹を差別しないよ。それに強さで言ったら

ネルの方が能力があるから強いしね」

甘い言葉を吐いているようだが、怒っているイーブは実際はカネルの事を強く抱いていてカネルからは人体からは聞こえてはいけなさそうな音が聞こえる。イーブにとってはスチルドパッドもカネルも最愛の妹、どちらも世界で同着一位で愛している存在なのだ。

「つぐぐぐ…でも、私は能力者だ…そろそろギブ…」

カクリと力を抜いてだらけるカネル。流石にイーブもホールドを緩める。勿論抱き付いたままだが。カネルは一応まだ気を失ってないようだからイーブはカネルに語りかける。

「そんなこと言ったら僕だって能力者だよ。まあ、あんまり戦闘向きじゃないけどね。それにそんなに六式が使いたいんだったら確かアトランティス号に六式の指南書があったはずだからね」

とイーブはカネルに笑いかけて言う。しかしイーブの言葉に反応したのはレイリーだった。

「成る程。私もろくしきを会得したいと前々から思ってたのだが教えてくれる人がいなくてな。私にもその本を見せてくれないか？」

「君はこれ以上強くななくていいんじゃないかな？どうしても見たいって言うならいいけどね。本は図書室の格闘術の項目の所にあつたはずだよ」

「そうか」

とだけ言ってレイリーは心なしかスキップをしながらアトランティス号に向かう。いい大人が何をしているんだ。

そんな感じで皆と談笑したり怪談したりしてついに明け方を迎える。

「ついに今ので百個目だ…」

と言って解放された人の一人がおもむろに最後ミニ松明の明かりを消す。

……………。

「……………何も起きねえじゃねえか」

と一人が呟くが、

「いや、ちゃんと来てるよ、残念ながらね」

とイーブが答える。

「はあ？どーにだ？」

「あっちの方向十kmくらいの所に海軍の軍艦十五隻も来てる」

イーブのこの一言に皆が慌てて色々片付けて船に乗り込む準備をする。もはや幽霊どころではない。

「軍艦十五隻って大丈夫？」

とイーブを心配するネル。

「うん、軍艦は大丈夫だよ。僕が余裕で相手出来るからね」

何時もなら大将クラスのガープが乗っている時点で余裕なんてあるはずもない。それに加えてクザン、サカズキ、ボルサリーノまでいるのだ、余裕なんて本来はあるはずがない。しかしイーブには秘策がある。今回は“神”すらも一方的に叩き潰せるイーブの必殺技が使えるからだ。本来能力を使うことを是としないイーブだって状況判断位は出来る。だからくだらないポリシーに周りの皆を巻き込むわけにはいかないのだ。

「でも問題は幽霊の方かな」

しかし本当の問題は軍艦ではなく、幽霊だろう。そう本当に出たのだ、幽霊が。

「幽霊ってどんな…?」

と恐る恐る聞くカネル。

「うん、僕がこの前に両手足と顔面の左半分を押し潰して心臓を突き刺してお腹に大穴の開けた人間」 ふえ!!このお肉美味し過ぎます!「……話の腰を折って来てありがとうね、お礼に腰の骨を折ってあげようか、ドー?」

「ふえ!!せめて指の骨にしてください!!」

「「「問題ぞ!?!」」」

とその瞬間に皆が突っ込む。しかしドーは空気が読めない女である。将来コミュニケーションにならなければいいのだが。

取り敢えずイーブはドーの溝尾を蹴り意識を刈り取って黙らせる。

彼女を放っておくと話が進まないのだ。

「……取り敢えず、僕がこの前殺した筈の超人系　パラミシア　グニャグニャの実の能力者で」故”海軍大将スタミン　・　コルプラブス。それが僕の言う幽霊の名前かな」

彼の体は”生きていない”。これがイーブがコルプラブスを幽霊と呼ぶ理由だ。潰し切られた両手足には義手義足が取りつけられそれを能力で動かし、顔、胸、腹の傷は健在。寧ろ問題はそこだ。致命的な傷が健在なのだ。どうしてそんな傷を残して生きれるのだろうか。頂上決戦で白ひげの顔面も半分ぶっ飛ぶなんていう即死級の致命傷を負った気がするが、それでも彼はその後死んだ。だが彼はそれ以上の傷を負いながらも数日生きている。いや正確には心臓の止まった死んだ体が行動しているといった方が正しい。

その正解はグニャグニャの実の能力で自分が死んだという現実を歪めたのだがそれをイーブは知ることには無いだろう。コルプラブスだって死んで初めてこの能力について知ったのだから。

「まあ、意味の分かんない妖怪はともかくとしてそれ以外の軍艦十五隻は僕が全力でいけばどうにかなるよ」

「しっ、しかし妾も戦えるぞー！」

とハンコックに続いてそうだ、そうだって言う人々。

「黙れ」

しかしそれをイーブは一言で切り捨てる。

「俺の掲げる正義は『自分勝手な正義』。故に俺の行動の十割が俺の自

分勝手なわがまま。お前らは俺のわがままに付き合っただけで黙って守られる」

イーブの迫力に皆押し黙る。しかしイーブは直ぐに顔を笑顔に作り替えて、

「前回もこれで生き残れたからげん担ぎとしてこれを預かってね、ハンコック」

と僕のコートハンコックに預ける。

「僕がいない間は君が船長だよ。例え何に代えてでも皆を皆の望む所に連れて行ってね」

ハンコックには「霸王色の覇気」があるから 多分船長は務まるだろう。それにイーブはどれだけでも長引かせるつもりはない。精々一週間で済ますつもりだ。慌てて無理に殲滅する必要は無いのだ。ゆっくり時間をかけて海軍に皆を追わせる力を削ぎ落とす。これがイーブのメインミッション。殺せるだけ殺すが今回は何時もと違い能動的に殺すのではなく受動的に來た敵を殺すのだ。

「そのためには先ず幽霊退治からだね」

と皆をアトランティス号に乗せ、早々と出航させてイーブ一人となった無人島で呟く。幽霊がこっちに害を及ぼせないならそれに越した事は無い。しかしそうもいかないだろう。

それから数分後。やっと海軍の軍艦が視界に入った瞬間、いきなり周りの空間が「歪む」。

「やっぱりそうはいかないよね……」

「こっちの攻撃は通用せず、さらにこっちへの攻撃は当たる。どうやって攻略すればいいのだろうか。」

「ほんと何その無理ゲー、だね……」

いや、イーブの本来の目的は殿だ。殲滅する必要はない。時間稼ぎさえできれば戦略的にはイーブの勝ちなのだ。

イーブにはまだ勝機はありそうだ。

第二十七話 無人島で幽霊は執念の復讐を

先日イーブがちゃんとしっかりこの上なく確実に潰した筈なのに生きてるコルプラプス。いや、コルプラプスの体は生きていないからこの表現は正確には間違っている。

そして空間を“歪ませる”ことによって軍艦と島の距離をショートカットしてきたコプラプス。

「何で一人で来たのかな？」

この人だった物には協調性が無いのだろうか。イーブはコルプラプスが出現した瞬間に牽制で蹴り飛ばす。コルプラプスの能力では必殺の一撃ですら意図も簡単に捌けるからイーブもダメージは期待していない。しかしイーブの蹴りは命中し、コルプラプスを蹴り飛ばす。

能力で生命を繋いでいる分能力制御が全盛期に比べおざなりになっっているようだ。つまりコルプラプスは先日の戦いで死んでなかったというだけで、かなり弱体化しているようだ。ただしその無駄な耐久性、又は不死性のあるコルプラプスを殺せるかどうかは甚だ疑問だったりするが。だが、

「まあ、相手は弱いに越した事は無いけどねえ！」

今は強者との戦いを望んでいる場合ではない。妹とその他大勢の命が懸かっているのだ。そうであれば相手は弱いに越したことはない。

そしてイーブは“帝”でコルプラプスを縦に真っ二つにしようと

斬りかかる。しかし今回は軌道を「歪められて」その斬撃はコルプ
ラプスの右側に逸らされる。やはり流石にそんなに物事は上手くは
いかないものである。イーブは仕方なく一旦『剃』でコプラフスカ
ら距離をとる。

ここでイーブは取り敢えず状況を把握する。

「何故か死んだ筈のコプラフスが活動して僕に危害を加えてくる。
これに関しては悪魔の実かもしれないけど彼が食べたのは「超人系
グニャグニャの実」。決して回復能力が高い動物系でも攻撃を受け
流したりできる自然系でもない。っていうか流石の動物系でもあの
怪我の中で生きてる訳がないし、そもそも怪我が治ってない時点であ
り得ないしね。ついでに言うと動物系にあんな事象が起こせる分け
ないし。自然系も攻撃を受け流せてない時点でダウト。まあ、ヤミ
ヤミの実だったら受け流せないけど根本的な解決になってないし
ね。ってことはやっぱり『コプラフス怨霊説』が有力っぽいね。こん
なことになるんだったらお被いについて勉強しとくべきだったよ」

イーブの推測はかなりずれているようだが仕方がないだろう。あ
れだけの傷を負いながらも全く回復せずに活動しているのだ。幽霊
とを考えてしまっても無理はない。イーブの考察はまだ続く。

「次に『剃』によって高速な訳でもない一撃を喰らったことについて。
これは明らかにコルプラプスの能力制御の精度が落ちてるとしか言
いようが無いね。つまりこの勝負、負けないのは余裕っていう訳だね
。まあ、勝てもしないけどね」

イーブは自身の戦闘能力には自信を持っている。だから全力を出
せないようなコルプラプスには負ける気がしない。ただしイーブの
攻撃が当たったとしても不死身のコルプラプスに通じるのかはイー
ブも自信がないのだ。

「本当にドゥワーしよつかないっ？」

いくら弱くなったからといってこのまま海軍本陣と合流するのは流石に不味い。弱体化したといってもコルプラプスは強敵には代わり無いのだ。

イーブがどうしようかと考えている内にコルプラプスが海の上にはやがんで海水に左手を触れさせて、

「歪めろお〜」

海の形を“歪めて”海から数十本の螺の様な槍をイーブに向けて四方八方から飛ばしてくる。

『斬撃攪拌』

そしてそれをイーブの『斬撃攪拌』がイーブを守るように全て巻き上げる。しかし、

「自分の作った檻に閉じ込められて死になよお〜」

とコルプラプスは『台風』の被害を受けることのない真上、台風の目から蒼い螺を一本イーブに向けて飛ばす。

「ははっ、僕が自分の技に閉じ込められる訳が無いよね〜！」

この前コルプラプスと戦ったときに自分の攻撃、『鎌鼬』で大怪我したがそれは怪我する前提でやっていたものだからノーカンである。イーブはそう叫んで自分の『斬撃攪拌』を斬って破壊する。そしてそのまま脱出。

しかし脱出した瞬間に目と鼻の先に先回りしていたコルプラプス。海軍大将として伊達に今まで戦ってきたわけではないのだ。これからのイーブの逃走経路を読むことなど造作もない。

「海の制御はやっぱり苦手だよ〜」

とイーブに向けて不可視の空気の槍を投げつける。

「鉄塊『剛』……あぎゃっ」

イーブの最強の『鉄塊』もいとも容易く貫通させてイーブの体を木っ端微塵に散らし飛ばす。海軍大将の一撃がクリーンヒットしたのだ、本来は大ピンチのはずなのだがイーブには一切のダメージは無い。

「へえ〜。能力者だったんだね、君い〜」

確かにイーブはコルプラプスに能力者であることを言っていない。それに加え、この前キャオ・カインスに公開した時はコルプラプスが来る直前に握り潰し、直ぐに能力を解除したのでコルプラプスはイーブの能力の使用した瞬間を見ていないのだ。

「言っただけ無かったっけ？ そうだよ、僕が食べたのは 自然系”ドロドロの実”。それを食べた僕は泥人間ってことだね」

しかしぶっちゃけたことを言つとこの世界では自然系の最大の恩恵である攻撃の受け流しはあんまり役に立たない。イーブクラスになるとイーブが攻撃を避けられない程の相手は大体覇気を使えるからだ。しかし雑魚相手には絶対に負けることはあり得なくなつたことに加え、能力を使った戦いも一応は出来ないことも無いのでこの悪

魔の実は全くのハズレ木の実というわけでは無い。

しかし今の一番の問題は、

「何で海軍大将が“覇気”を使わない…いや使えないのかな？」

そう、マリージョアでは確かに海軍屈指の圧倒的な覇気の熟練度を誇ってた筈のコルプラプスがイーブクラスの相手に覇気を纏っていない攻撃をするわけが無いのだ。

「君に言う義理はないねえ」

「まあ、そう返されるのは目に見えてたよ」

つまり覇気が使えないということである。

あのマリージョア襲撃での戦いでコルプラプスの体は死に、その結果身体の内にある技術である覇気が使えなくなったのだ。武装色の覇気が使えなくなっているというならば当然見聞色の覇気も使えなくなっている。身体能力が大幅に衰え覇気が使えない体のコルプラプス。相手が弱っているこれはチャンスだ。イーブにはこれにつけこまない手などあるはずも無い。

「だけど能力者の君には『海槍』なら効くだろお？」

「でも『海槍』しかないのに僕に勝てる訳が無いよ ね！」

確かにイーブは身体能力の向上という意味合いで極めた“六式”だ。しかし今はもしも“帝”が使えなくなった時の戦闘手段ですらある。確かに極めたと言っても総合的には“英雄”ガープに全然追い付けないし、破壊力で比べても“歩くバスターコール”キャオ・カ

イニスの足元にも及ばない。というかあくまで「六式」は対人用の暗殺拳であって用途に「大量破壊」は含まれていない筈なのだ。

話が逸れたがイーブでさえ「帝」だけでなく「六式」という手札を持っていて絶えず敵に「帝」か「六式」の選択を迫っているのだ。しかし今のコルププラスには「海槍」という手札しかない。これでは簡単に対策を立てられるだろう。

「『海槍』い〜」

「狙撃『大槍』い〜」

相手の『海槍』をイーブは自分の『大槍』で相殺しようとする。しかしイーブの『大槍』の軌道をコルププラスに「歪められて」「大槍」が外れる。そしてイーブの外れた『大槍』が海軍軍艦に命中。二隻の軍艦を軽く木っ端微塵に砕く。三隻目は中将五人が集まったらしく、覇気でギリギリ防ぎきったみたいだがそれでも半分は粉々になっている。

「君に「味方」っていう概念は無いのかな？」

イーブは『月歩』で、『大槍』で相殺出来なかった『海槍』をかわしながらコプラスに問い掛ける。

「俺様は「邪魔者」っていう言葉は知ってても「味方」っていう言葉は知らないねえ〜。あの程度で俺様の味方なんて名乗れるわけないだろお〜」

「うおっ、すごい天上天下唯我独尊だね」

イーブだって人のことは言えない。どの口が『僕の船に「船員」と

して乗りたいたんだつた。ら四皇とは言わないけれど、少なくとも王下七部海。クラスは無いとね。それくらいないと僕の隣で戦える船員には為れないよ』と言ったのだろつか。イーブがそんなことを言った瞬間にコプラフスは海の形を“歪めて”今度は『海槍』ではなく竜巻状にした、

『海竜巻』い〜」

『海竜巻』がイーブに襲いかかる。

「目には目を歯には歯を…竜巻には竜巻を！そんなの全部撒き散らしちやいなよ！『斬撃攪拌』！」

能力によって作り出された災害と剣によって作り出された災害はぶつかりあってお互いにお互いを飲み込もうと拮抗する。

だが…、

「能力制御が上手くいってない奴の攻撃に引けをとるほど僕の剣技は甘くないよ…」

その拮抗も一瞬で崩れ去りイーブの『斬撃攪拌』がコルプラプスの『海竜巻』を飲み込んでコルプラプスに襲いかかる。

「君には効かないけどこっちは効くよねえ〜？」

しかしそれもコプラフスによって作り出された三本の『空気の槍』によってかきけされる。

「そりゃあ効くだろっつね。でも君の相手は『斬撃攪拌』じゃなくて『スコウエルド・イーブ』だよっ」

と『斬撃攪拌』にコルプラスが気をとられている隙に相手が隻眼であるがゆえの死角について背後に移動する。

「はい、これで僕の勝ちー」とでも思ったかいいゝ？」「マジで!？」

そう縦に真っ二つにした筈なのに空間を"歪めて"距離をとるコプラスにイーブは驚きを隠せなかった。攻撃が通じないと分かっても普通ビツクリするものである。覇気込めてきっちりコルプラスにした筈なのに痛がる素振りすら見せずに左半身だけで生命活動を続けてるのだ。流石は悪魔の実である。だが、

「だったら成仏するまで殺し続けてあげるよ!」

と速攻で『剃』でコルプラスに急接近し、ドラゴンボールの五回程進化するフリーザ様のメカバージョンを滅多切りにするトランクス君の様に切り刻む。そして、

「いい加減消えてよ!狙撃『大槍』い!」

と『大槍』で粉々になったコプラスを深海の底にねじ込む。

能力の使えない海中に沈められたコルプラスは今度こそちゃんと殺されたのであった。

第二十八話 無人島で化け物は泥の巨兵を

一度死んだコブラプスをもう一度倒したイーブだがまだ敵艦が十五隻も残っている。寧ろこっからが本番と言っても過言じゃない。しかしイーブと敵艦の距離がこれだけあるのであればイーブの能力を用いた文字通り必ず殺す必殺技の『あれ』が使える。

『あれ』さえ使えば僕はどんな敵が何人来たと ところで負けることはあり得ないね」

だからまずは『あれ』の準備のために一旦島に戻る。既に島の土地はこんなこともあろうかと能力使用の時短の為の『泥浸食』を既に済ませている。そしてイーブは島の中心に降り立って、

『泥の巨兵』

自分身体を『泥浸食』し、島全体の土と同化させる。そしてその莫大な量の泥を使ってイーブは自身の身体をより大きく、より硬く、より強く作り変える。敢えてイーブの能力の限界を無視して、暴走させて、イーブの身体をより大きく、より硬く、より強く作り変える。今まで“自然系”という莫大なエネルギーを誇る能力の制御という枷外したのだ。これで心置き無く全力全壊容赦無くイーブは暴れらる事が出来る。

これはどこぞの蠟燭野郎のように体に能力で作った鎧を着る程度のようなちやちな技ではない。イーブの体そのものを自然作り変えているのだ。そして死ななければ勝ちの状態であるイーブにはもう敗北なんて有り得ない。これからイーブは冷静に、油断無く、時間をかけて、焦らずに、一兵残らず叩き潰す。

「ガアアアアアアア!! テメエら全員まとめて“俺様”がぶっ潰してやらアアアアアアアアアアアア!!」

そして“化け物”は吼えた。

とある軍艦の上でガープは驚いていた。その感情は恐怖に近いものであるがガープは怯まない。恐怖を全く感じない人間なんて一握り、その恐怖にどう立ち向かうかが大切なのだ。

ガープたちは“スコウエルト・イーブ及びマリージョア襲撃の“真実”を知る者の抹殺”の任務を受けてこの名も無き無人島にコルブラプスと他の中將を含めたバスターコール以上の戦力を投入した。そこまでの過剰戦力で敗北なんて本来はあり得ない。しかし今回は下手すると、いや下手をしなくとも全滅なんてこともあるかもしれない。今のイーブはそこまで異常なのだ。

「あれ…センゴク元帥よりデカインじゃないですか、ガープ中將?」

と聞いてくるクザン中將。戦死や責任などで空く大将の席に彼が就くことは確実だろう。ただしこの戦いで死ななかつたら話ではあるが。

そして巨兵が右手に何かを作る。それは巨大な刀。

「刀っていうことはもしかしなくても“剣帝”なんだろうっねえ」

と相変わらず呑気なボルサリーノ中將。彼も次の大将になるだろう。そして原作では赤犬だったサカズキ中將厳しいかもしれない。なぜならイーブに負けてから彼の部下からの人望がかなり薄くなってしまうからだ。その証拠に今回、サカズキのところの部下がかな

り逃げた。原因はサカズキの人望の無さではなくイーブに対するトラウマからだ。

そして巨兵がその巨大な刀を振るモーションを見せたとき、

「クザン！『鎌鼬』が来る！船壊されても良いように海凍らせんかい！」

といち早く叫ぶサカズキ。

これはイーブと闘ったことがあるサカズキだから出来るアドバイスだ。特に『鎌鼬』はサカズキのトラウマでもあるからより明確にサカズキの記憶に残っていたのだろう。

そうガープが考えるのと同時に残っている軍艦十二隻が全滅した。

時は少し遡ってイーブが『泥の巨兵』を完成させた直後。

準備は整ったのに相手を待っている必要はない。先手必勝である。化け物は右手にその巨体に相応しい刀を作り出す。なるべく早く、そして確実に敵を殲滅するために。

「『鎌鼬』 イイイイイイ!!」

乱雑に振るわれたこの刀は耐えられずに少しヒビが入り壊れるが能力が暴走してる化け物には全く関係ない。その程度なら一瞬で直る。

そして振るわれたその数千もの斬撃は当然軍艦をバラバラにする。しかし肝心の海兵は海にできた氷の床のおかげで助かったようだ。

やはり『泥の巨兵』状態となるとどうしてもパワーやスピードと引き替えに技の精度は甘くなってしまうようだ。これも化け物がこの技を使いこなせてない証拠、化け物がまだ完全な化け物になっていない証拠である。ただしそれを差し引いたとしてもこの状態の化け物の強化された力、覇気、六式のことを考えるとお釣りがくる。大量のお釣りで億万長者になれそうだ。

確かに船が全滅したのもう海軍に妹たちを追う手段は無いが、化け物はここで止まるつもりなんて更々無い。化け物はこの島まで届いている氷の床に近づいて左の拳でそれを叩き割る。

「(ちっ、上からなんか来やがる…)」

化け物は見聞色の覇気でほうそう感じる、いや正確には聞かや否や上に跳ぶ。その瞬間に化け物の頭があったところを通過する光速の蹴り。正しくは能力をまだ使いこなせてないから亜光速の蹴り。しかしどつちにしろ速いことには変わりはない。だが、

「テメエの蹴りのなんて先読み出来りゃあ余裕でかわせるんだよ！」

と大振りの蹴りを外して無防備のボルサリーノを殴り付ける。いくら速くても蹴る前に蹴るタイミングと位置が解ってたらかわすことは造作もない。そして海面に打ち付けられて、数回跳ねてやっと沈むボルサリーノ。化け物が二度と浮かんでこられないように追い討ちで『大槍』をぶちこんでやろうとしたところで、海中から迫る無数の大砲の砲弾。

こんな攻撃は攻撃はガープの『拳骨流星群』しか有り得ない。砲弾を投げ飛ばすのは彼の専売特許だ。そしてその砲弾は一発一発がボルサリーノの蹴りより威力がある。流石は無能力者にも関わらず海軍大将になることを何度も打診された男だ。

化け物は内心舌打ちをして後退する。時間をかけて叩き潰せばいいんだ、焦って無駄な手傷を負う必要なんか無い。

しかしやらねばなしいつのも化け物はなんか面白くない。だから化け物は剣でガープごと海を切り出す。イメージとしては金獅子の技みたいなものだろうか。人は水中だと陸上よりも動きが鈍る。例外は魚人や人魚位だ。そして当然“英雄”と謳われたモンキー・D・ガープだってこの常識には当てはまる。

つまり今、ガープは化け物の格好の的という訳だ。

『大槍』「イイイ！」

と化け物はその海の塊ごとガープを霧散させる。しかし肝心のガープはすんでのところで脱出される。やはり無能力者であるにも関わらず“英雄”と呼ばれるだけはある。泳ぎは大の得意だ。確かにガープの左腕には『大槍』の傷があるが、しかしそれでも仕留め損ねている。そして『月歩』でガープに距離を取られる。

化け物はここでガープを追っても良いの、やはり敢えて化け物の土俵であるこの島から出る必要もない。ガープ一人のために島から出る位だったら、氷の板にへばりついてる下っ端海兵どもを消した方が幾分か効率が良い。

しかし化け物がそんなことを思ってるうちに戦局は変わる。

空から突然雨が降ってきた。ただし、それは唯の雨ではなくマグマの雨である。

『流星火山』！

と叫ぶのは氷だと溶けるからだろうからか木片の上に両手を掲げ今もなお空に向かってマグマの拳を発射し続けるサカズキである。

一発の『大噴火』程度なら『泥の巨兵』でなくとも受けられる。だが普通の状態のイーブであれば最早四桁に達しようとしている1000以上の塊を直接食らうのはいささかきつい。しかしそれはあくまで『泥の巨兵』でなかったら』の話だが。今の化け物にとっては1000の雨程度は、

「ぬりィ、ぬるすぎんぞー！そんなんで俺様を本当に焼こうと思ってんのかああ!？」

普通の雨となんらかわりはない。

サカズキは化け物の『ぬりィ、ぬるすぎんぞー！そんなんで俺様を本当に焼こう』と思ってんのかああ!？」という台詞を聞いて悪夢でも見ているような気分になった。確かに前回サカズキがイーブとやり合ったときに放った『流星火山』はイーブにバカにされながら捌かれたお陰で、温度は倍、数は十倍にも達していたのだ。しかし化け物はそれを、

「ぬるこ...じゃと.....?」

と自分がバカにされていることを怒っているように言ったのだ。強者と自覚している自分の必殺技が相手にとってバカにされている勘違いされたのだ。もはやサカズキにとっては悪夢以外の何物でもないだろう。そして同時にサカズキは考えた、この化け物はどうやって止まるのだろうか。

サカズキが絶望していたとき化け物も絶望していた。化け物は今は全力ではなく時間稼ぎのつもりで戦っていたので敢えて海軍にレベル合わせていたのだ。しかし化け物は気付いた、自分が思っているより海軍が強くないことに。この調子だと殲滅することが余裕であることに気がついた化け物はサクサク仕留めて妹たちに合流することを決意する。

「うざってえんだよ！『斬撃攪拌』!!」

理不尽な災害が化け物に降りかかる火の粉も、これから降りかかる筈だったまだ上空にある火の粉も軽く打ち払う。

しかしそれら火の粉を打ち払った後にイーブは気づく。1000人近い海兵がもう既にこの島に上陸していることに。

「ああ、成る程な」

ボルサリーノの蹴りに始まってサカズキの『流星火山』まで続いた次期海軍大將たちの必殺とも言える大技の連続はそれらを囿にして他の海兵たちを上陸させるための作戦だったという訳である。確かにこれくらいの威力でないと化け物相手には囿にすらなれないが。

やはり海軍は世界最大の組織である。化け物相手には戦力は置いておいたとしても、組織力はあるみたいだ。そうであるならば、この戦いにおいての海軍の切り札であるガープ、サカズキ、クザン、ボルサリーノを先程殺せなかったのは痛かったか、と化け物は思案する。しかし化け物はその考えを直ぐに杞憂だと考え直す。たかが“英雄”一人に自然系三人程度、居ようが居まいが化け物には関係無い。どのみち化け物に敗北は有り得ないのだから。

化け物にとつてはどれだけ時間をかけようが、そして最後に自分自身が死んでいようが関係無い。今の化け物の目的は海兵たちを皆殺しにすることなのだ。それさえ出来れば他の全ては捨てる覚悟くらいはある。尤も、化け物はそんなピンチにすらなる気はしていないが。

現在海兵15000 1000人

第二十九話 無人島で増援は大規模な清算を

海兵たちがこの島に上陸してから一週間が経った。海兵の数は半分の五百人弱にまで減っている。しかし逆に言えば一週間で五百人しか倒せなかったという事だ。それは海軍が守りに入り、持久戦に持ち込んだからである。仕方がない。

化け物は一瞬でも気を抜いて隙を見せた海兵や、膠着状態に耐えられず死に急いだ海兵を潰して数を着実に減らし、海軍は化け物がそういった海兵を相手している隙に主砲を化け物にぶっぱなしている。そして勿論主砲というのは、

「くおらああああー！」

「大噴火ア！」

「天岩戸」

「英雄」ガープ中将、「溶岩」サカズキ中将、「閃光」ボルサリーノ中将の三人だ。だが化け物にとってはそんな海軍の主砲すらも、

「そんなちまちまちま削っていこうが全然痒くすらねえぞお！」

糠に釘、暖簾に腕押し、全く意味が無い。寧ろ化け物が一番気にかげなきやいけない人物は、

「アイスBALL」

搦め手でくる「氷結」クザンだ。もし凍らされてしまったら、そこ

でゲームオーバー。流石の化け物も海に投げ込まれたら試合終了である。しかしこのクザンの攻撃も、

「喰らわきゃただの氷の玉だろうが！」

化け物が剣で砕き無効化してしまえば驚異になんかなり得ない。

ここで化け物はさっきのクザンの『アイスBALL』で凍った右腕を他のところが凍ってしまう前に引きちぎって直ぐに放棄する。そして直ぐに新しい右腕を作り出す。能力を暴走させ、なおかつ『泥侵食』で化け物自身の支配下に入ってる土に繋がってる今となっては腕の一本や二本程度なら刹那もあれば余裕で作り直せるのだ。そして化け物はその作業を瞬時に終わらせて、

「さっさとバラバラに砕かれてその破片をぶちまけやがれ、給料泥棒がア！狙撃『大槍』！」

敵をバラバラに砕こうとする。しかしこれも間一髪でかわされてしまう。だが化け物の『大槍』は後ろに控えてる他の一般海兵たちを呑み込みはしたが。しかし化け物にとってはその程度の海兵程度は居ても居なくてもそんなに変わらない。確かに数の上では五百対一だろう。しかしギャラリーに毛が生えた程度の存在、外野クラスの敵程度、千人居ようが、一万居ようが、さらには一億人いたって自然系の能力者である化け物には傷一つ付けることなんて不可能なのだ。やはり敵の主力を倒さないと戦況は変わらないだろう。因みにイーブは能力になんか頼らなくとも一億程度が相手でも弄べる事が可能であるが。要はスライムを何匹もプチプチ潰そうが状況は変わらない。戦局を変えるんならガープ、サカズキ、クザン、ボルサリーノ中将クラスのキングスライムでなくてはいけないのだ。

「いい加減、くたばりやがれえええ、死に損ない共がああアアア!!」

轟ッ!!と何かが至近距離で爆発したような爆音を鳴り響かせながら巨大で凶悪な化け物の『斬撃攪拌』が海兵たちを容赦なく襲う。

そしてそれらに巻き上げられた土木、そして動物や人間だったものも当然落下してくる。そして最早断末魔の叫びすら上げることの出来ない死体が海に落ちていき、海にいる死神にその魂を絡めとられていくかのように紅い海に沈む。更には丁度運悪く大きな土木に当たってしまった海兵も倒れてゆく。

『冥狗』!」

と化け物に伸ばされたサカズキの高温の左の手の平を、

「効くかよ!んなチンケな一撃がよ!」

と体に覇気を纏わせるだけで防ぐ。

「まだじゃあ!大ッ噴ッ火ア!」

と今度は噴火した火山から出る火山弾の様に巨大な拳で化け物に襲い掛かるが、

「効かねえ、つってんだろっが!このザコ海兵があ!」

と左手でその拳を抑え込み、サカズキを地面に叩き付ける。そして、

「今回はきつちり殺してやるよ」

と化け物が持つてる刀を両手できつちり逆手に持ち、

「狙撃『杭』」

地面に剣先を埋めるかのように振るう。化け物の一撃はいくら自然系の海軍本部中將である人間一人の為には明らかにオーバーキルであろうクレーター、いやもはや底が見えない程の崖を作る。しかし、

「邪魔してんじゃねえぞ、ボルサリーノおおおお お!!」

その化け物の攻撃は外れた。いや外させられたと言った方が正しい。それはほぼ光速で移動できるボルサリーノの蹴りによってである。それはボルサリーノに直接攻撃されて標準がずれた訳ではない。ボルサリーノが化け物の『杭』がサカズキを挽き肉にする直前にボルサリーノがサカズキを地面にめり込む様に蹴り、そしてサカズキが『杭』が直撃しないところに地面を焼き進むことによって、すんでのところで化け物の攻撃をかわしたのだ。

本当ならここで弱ってるサカズキの息の根を化け物は止めたいところなのだが、主力が一時リタイアしたからって、やり易くはなかったが、急激に弱体化するわけではない。焼き付け刃ながらもサカズキのポジションを残った主力メンバー三人できっちりカバーしているのだ。だから化け物が狙うのは一時撤退してるやつではなく、

「ぶつつぶれろ、ボルサリーノおおおおお!!」

目の前に居る主力メンバーの中で最も疲労が溜まってて今現在隙がある者に決まっている。やはり戦況維持のために自慢の機動力を四六時中惜しみなく発揮して、光速移動し続けてたら疲労が溜まるに決まっている。

そして化け物の拳がボルサリーノの一瞬息を吸う瞬間に見せた隙を見逃すことなんてあるはずもなく、ボルサリーノを叩き潰してペースト状にするように殴り潰す。そして当然今の化け物の本気の拳が人間一人を潰すだけで終息する筈もなく、バキッバキッと明らかに島全体が自分の異常を声高らかに宣言するような音をたてて島が意図も簡単に真っ二つになる。しかし頑丈であることもボルサリーノが中将である一因である。まだしぶとく生き残っている。

そして化け物が今度こそ止めを刺そうともう一度左腕を振りかぶった瞬間世界が止まった。

突然化け物の最強の能力の技『泥の巨兵』が解けたのだ。

当事者の“イーブ”は勿論のこと、その場に生き残っているもう百人にすら満たないような海兵すらも一人残らず状況を飲み込めずに呆ける。そしてそれから一番最初に立ち直ったのは世界政府の敵“スコウエルド・イーブ”である。今回こんなことをした犯人は、

「全く役に立たないって思ってたのにね、ウオシユウオシユの実…」

海軍中将おつるである。原作では悪人の心を多少洗い流す程度の能力であったがこの能力の真価は相手の甲装を洗い流して無効にすることなのだ。おつるはその能力を今回は最大限に発揮してイーブ最強の技『泥の巨兵』を無効化したのだ。

一方イーブは最強の技を無効化された上にここにきてまた援軍、しかも中将である。状況は芳しくない。

「面倒臭いね……とりあえず死になよ」

とイーブ『泥の巨兵』の仕返しとして先ずおつるに襲い掛かる。

イーブが斬りかかる時に上官を守るために数人が壁となって『鉄塊』を使う。しかしその程度の硬度の『鉄塊』ではイーブの斬撃の壁としては力不足もいいところだ。イーブの斬撃は海兵たちの壁を意図も簡単に切り裂く。だが肝心のおつるは後方に回避して距離をとってからのからの『鉄塊』によって致命傷だけは避けられたようま。だがイーブが折角の海軍中將を追い詰めたのだ。そんなチャンスを見逃す訳などあるわけがない。イーブは『剃』でそのまま追撃する。そして振るった剣先がおつるの鼻に触れるか触れないかという時に『帝』が弾かれる。

「いい加減にしてくれないかな!? ボルサリーノ中將!」

今度はおつる中將を守ったボルサリーノ中將に標準を変えて蹴られた勢いを殺さずに、

『斬撃攪拌』!」

ボルサリーノとおつるを巻き込んだ巨大な斬撃の竜巻を放つ。この前みたく大振りをした直後で動けないボルサリーノとおつるとその他大勢の海兵は『斬撃攪拌』に巻き上げられる。そして戦闘不能ではあるが未だ絶命していないおつるとボルサリーノにまた追撃しようとするが、その数秒の間で海兵に囲まれてどっちにも追撃出来なくなる。

しかしあの怪我の状態ならちゃんと戦闘不能になって暫くは動くことも出来ない。だからここでイーブがおつるたちに止めを刺せなかったことは大して問題ではないのだ。寧ろ問題は『泥の巨兵』の代償だ。自然系の能力を暴走させる『泥の巨兵』。そんな技にリスクが無いわけがない。この前ラヴィサメと戦って自力で解除したときでさえ全身の筋肉痛と多少の臓器の損傷、さらに肋骨が二、三本ヒビが入るといった結果だったのだ。しかも今回はおつるの能力による強制

解除だ。前回よりも反動は酷く、代償は決して軽いものではない。具体的に挙げるとすると、左眼球の破裂に加え、左腕は上腕二頭筋と三頭筋の筋肉断裂に見事な五回転捻りを加えられた複雑骨折、マリージョアでコルプラプスと戦った時に負った腹の傷が開く、さらに両足にヒビ。

イーブがこれが原因で負ける、なんてことは絶対ない。ラヴィサメとの修行時代にはもつと酷い状態の中で戦闘をしたことがある。それにイーブは両足が折れていたとしても無理を押して走る事が出来る。その痛みは半端なものではないがその痛みにかまけて逃げることには手を抜くと両足の痛みが可愛く感じられる程の愉快な殺され方をしてしまっていたのだ。しかし、かといってこれは決して無視できる程軽いものでもない。やはり痛いものは痛いし、ほんの少し位は動きが鈍る。

おつるの部隊の援軍も加わって残りの相手は六百人。イーブは『泥の巨兵』の影響で暫く能力が使えない上に深手を負っている。これからはもつと慎重にいかないと簡単に仕留められてしまうだろう。ラヴィサメの修行のモットーである『正しく敵を殺すには正しい敵に殺されない手段を知ること』がここで生きてくる。やはり『泥の巨兵』をしてもしていなくても戦闘方針は変わらない。時間を掛けて正確に全員の息の根を止める。イーブは能力を使えないからといって、深手を負っているからといって焦る必要は全くないのだ。

そう意気込んでいるとストロベリー准将が前に出てきた。

第三十話 無人島で犯罪者はその罪を

イーブの周りを海兵たちが囲む中、一步前に出てきたのはストロベリー准将である。

「元海軍本部少尉」剣帝「スコウエルド・イーブ、貴様の罪状は分かるか？」

低い声で脅すように言うストロベリー。原作では罪状ストロベリーはフィッシャー・タイガーに、

「襲撃と逃走…かな？」

と言っていたが、現実には違った。実際は、

「いや、”生きている事”だ。貴様はもつこの世には生きていない人間だからな」

とのこと。生きていることが罪だなんてどぞのニ「ロビン」のようである。そしてこのストロベリーの台詞から分かったことは海軍は世界政府上層部の言いなりであるということだ。そんな死刑宣告にイーブは、

「あー、そう言うことか…許してヒヤシンス」

「ヒヤシンスってなんだよ!!!!!!?」

冗談で返す。イーブはテヘペロ と舌を軽く出して右の握り拳で軽く頭を叩いているがその程度で許されるはずがないだろう。イーブは周りを殺伐とした空気に変えて今度は実力行使の交渉、所謂棍棒

外交を行う。

「許してくれないならこっちにも考えがあるんだけどねえ……」

とイーブは背を低くして獰猛な笑みを浮かべる。しかしイーブのそれを虚勢であると判断して全く相手にしないストロベリー准将。

「こっちは二百の海兵がいる。手負いの貴様一人に何が「来るぞ！」?!」

と何かを察知して叫ぶガープ。流石は“英雄”と呼ばれ“海賊王”を何度も追い込んだ男である。しかしいくらガープが早い段階で警告していたとしてもその攻撃をかわす海兵の実力が伴っていないならば多くの犠牲が出ることには変わらない。

「遅いよー』『円卓』!」

と縦ではなく横に特化した回転斬りを繰り出す。その斬撃はかわせなかつた海兵や『鉄塊』で受け止めようとした海兵を易々と切り裂き、その時に出た鮮血がまるで円卓を描くかのように広がっていく。

余談ではあるがこれを縦に特化させると『斬撃攪拌』と呼ばれるようになる。

このイーブの『円卓』で生き残ったのは五十人弱である。イーブから見ると、思ったより残っていて、イーブの望むような芳しい結果は残せなかつたようだ。生き残った人間は全員が実力者であることからピンポイントで強者を撃ち取れないイーブの『円卓』が如何に未完成かが分かる。残った連中でイーブが知ってるのは、ガープ、サカズキ、クザン、ボルサリーノ、モモンガ、ストロベリー、そしてイー

プの『円卓』をかわしきることが出来ず足を一本犠牲にし、今は髪の毛で足の代用をしているオニグモぐらいである。イーブはあれ程やられていてまだ前線に立っているボルサリーノに多少、ほんの少しだけ感動する。同時に次はちゃんと仕留めようと胸に誓いながら。

「確かに僕は今満身創痍だよ。でもさ、それが“僕が君たちに勝てない理由”にはなるかもしれないけど、“君たちが僕に勝てる理由”にはならないからね。？そこんとこちゃんと理解しときなよ？」

とイーブは近くにいたストロベリー准将の背後に『剃』で移動して右足で准将の頭を挟む。

「んなっ!?!」

そして攻撃されるその瞬間になってやっと背後を取られた事に気が付くストロベリー准将。

「何回も言っけどさ…本当に遅いよ、君たち。嵐脚『独楽』」

とそれを合図にコマを回す糸のように右足を引く。その瞬間ストロベリー准将がコマのように回りながら巻き上げられ、さらに無数の『嵐脚』に切り刻まれてゆく。

「言っどくけど、君たちのほとんどが僕と戦う資格すらない位弱いつてことに気付いてるのかな？」

海軍本部准将ですら満身創痍、全力にはほど遠いイーブに手も足も出ないのだ。イーブのこの一言で海兵は自分たちではスコウエルド・イーブを“能力さえどうにかすれば勝てる相手”から“とりあえずガープ中将らの援護をすることだけを考えて自分たちは彼らの足を引っ張らないのが精一杯なレベルの強力な相手”と認識を変えて、

再び距離を取って消耗戦に切り替える。

さらにそれから三日三晩休みなく戦いは続いた。イーブはラヴィサメと一ヶ月不眠不休で殺し合った事なんてざらにあったから問題はないが、海兵たちはそろそろ限界が近いだろう。こんな死闘を経験したことのある海兵だなんて滅多にいない。だからイーブはここを山場と決めて、この決断が吉と出るか凶と出るかは誰にも分からないが、仕掛けることにする。そんなことをイーブはオニグモの髪の毛に冗絡めにされながら考える。そしてイーブがオニグモの髪の毛で身動きの取れないのを見計らって、

『大噴火』ア！」

と超火力でイーブを消し炭にしよつとするサカズキ。

「捕まったのは僕か、それとも君か…」

それに対してイーブは髪の毛を引っ張ってオニグモを盾にしてサカズキの『大噴火』にぶつけることによつてかわそうとする。しかしサカズキもオニグモに当たる直前に軌道を変えてイーブに拳が当たるよつにする。

「があああああああ!!!?」

イーブも慣れているとはいえど、多少溜まった疲労で十分な覇気を纏わせる事が出来なかったことと、攻撃がイーブの“泥”の弱点である“マグマ”であったことが原因で左腕に被弾。かなりの重症を負うことになる。だけどイーブの闘志はこんなことでは折れない。

「熱いんだよ!? かなりー」

と『大噴火』を使った際に伸びた腕をイーブは仕返しとばかりに切り落とす。今回はちゃんと十分に覇気を込めて。これでサカズキはリタイアである。

しかしイーブが多少頭に血が昇ってサカズキを始末することに集中した結果見せた初めての隙に当然皆反応する。

「お前はここで終わりだ『アイスタイ』大槍』！　ッ！」

真後ろに立ってイーブを氷づけにしようとするクザンの心臓をイーブは自分の腹ごと突き刺す。

自分も同時に刺した為、流石に覇気を上手く纏わせることが出来なかったから止めは刺せなかったがこれでクザンも戦闘不能は確定である。しかしイーブの痛みも尋常ではない。流石はイーブの『大槍』、生半可な威力じゃない。その痛みがイーブのテンションを上げて、

「ははっ、ははは…アハハハハハハ！キャハハハ　ハハハ！！！！」

イーブは壊れた。狂ったかのように思笑い転げるイーブ。"帝"による殺意の増加とイーブの願いの"自分が死ぬほどの過激な戦闘"この二つがこれ以上なく満たされたイーブは歓喜のあまりに狂気に身を委ねたのだ。押さえつけていた"帝"の特性である殺意増加は今まで押さえ付けられていた分を發揮するかのようにイーブの五感を刺激する全てを歓喜と殺意に変換する。

鼻腔をくすぐる血の臭い、網膜に映る死体、鼓膜を震わす海兵の悲鳴、自分の舌を潤す自らの血、そして確実に自分を蝕む激痛。これら全てはイーブに戦いを感じさせ、戦いを感じたイーブは歓喜し、より強い歓喜という名の戦いを求めて敵に殺意を抱く。

「痛いなあ、うん今のはサイッコーにイタカッタよ　おー？サイッコーにイタくてサイッコーにタノシイ　なあ。こんなにシヌかもしれなくてイタくてツラく　てタノシくてユカイでエキサイト出来るような事なんてそう無いと思わなかなあ!?ねえ、皆あ!?」

狂喜のあまり言葉が意味不明になっているイーブは数カ月前の自分の選択が正しかったことを実感する。こんなに楽しい経験が出来るのだからやはりりあの時クザンに付いて行き海軍に入ったことは正解だったと。

「ボルサリーノ、ワシが時間を稼ぐからでっかい一　撃を頼むぞ！」

完全な狂戦士と化したイーブを止めるためにガープを筆頭にボルサリーノ以外の海兵がイーブに向かって四方八方から迫る。

「アハハハハハハ！サイッコーだねえ！こんなにシヌかもしれない殺し合いが出来るなんてねえ!!」

イーブの笑い声と鮮血と人体の一部が躍り狂うこの戦場も必ず終わりが来る。例えば海兵が全滅するとか、逆にイーブが死ぬとか。だが今回は違う。

「準備万端だよオ」

上空で無数の光弾を携えているボルサリーノ。イーブが能力者ならば陸地をなくせばいい。例えば他の海兵が全員死ぬことになったとしてもだ。しかしいくら島を消せる攻撃の準備が出来たからといっても撃てなければ脅威ではない。

イーブは『月歩』でボルサリーノ中将攻撃を阻止するために攻撃を仕掛けようとするがすんでのところ邪魔が入る。

イーブの真横から迫る飛ぶ斬撃。下手人は地上にいるTポーンだ。Tポーンの斬撃は動かせない左腕に直進する。しかしカキツと軽い音を立ててその斬撃は呆気なく弾かれる。

「真っ直ぐな太刀筋は嫌いじゃないよ。だけどさあ、ただ真っ直ぐいだけで満足してるようなチープな剣士相手ほどツマラナイものはないね」

Tポーンは曲がったことが大嫌いだ。故に太刀筋は直進か直角しか有り得ない。イーブは小手先だけの三流剣士相手よりはそういつた剣士の方がましだと思っている。だがただ直進するだけじゃ芸がない。本人が曲がった太刀筋を嫌うなら、それを他の追隨を許さない程速く、そして最短距離を直進する斬撃や他の防御を許さない強大で愚直な斬撃を極める一芸にしなくてはならない。ただこだわって自己満足するなら子供にだって出来る。しかし海兵ならばそのこだわりを一芸にしなくてはならない。そうしなくては「新世界」では生き残れないのだ。

「出直してきなよ」

Tポーンの斬撃を覇気で弾いたイーブは“帝”でTポーンを斬る。イーブが放つのは愚直なまでに直進し全てをうち壊す斬撃。その斬撃をTポーンは自らの剣で弾き飛ばそうとするが一瞬の罅迫り合いも許されない。イーブの斬撃は剣を粉々に砕きTポーンの右腕、利き腕を切り落とす。

そしてあと一步の所でボルサリーノに届きそうになるがまたも邪魔が入る。

「邪魔だよ、モモンガ准将」

第三十一話 無人島で戦闘者は世紀末な結末を

「これで僕の勝ちだ…よっ！」

とイーブが勝鬨を挙げようとしたときにイーブを襲ったのは軍艦一隻よりも確実に大きい巨大な鉄球。そんなのを操れるのは、

「まだ生きてたんだ、ガープ中将？」

「英雄」モンキー・D・ガープ、彼しかない。イーブはあんな滅茶苦茶な攻撃を何発も打たせる訳がなく、直ぐに「帝」を拾ってガープが放り投げた鉄球を引き上げる前にガープを蹴り落とす。

ここでガープ中将は気を失ったのか上がって来る気配は全くない。

イーブは邪魔が入らないということとラヴィサメ戦で決着をつけたイーブの必殺技を使うことにする。

片足の『月歩』でとりあえず高くまで昇る。そして今回は時間がかかっても良いからゆっくり、ゆっくりと『巨兵の右腕』を行い、その後巨腕に相応しい巨大な剣を作る。

イーブが剣技で最も磨いた技は二つある。一つは斬らずに押し潰す斬撃の『斬衝』。もう一つは一振り数百を超える斬撃を放つ『鎌鼬』。この二つを組み合わせそして振るう腕力が巨人族すら軽く凌駕するものであれば、

「島一つを軽く沈められるね、」島殺し」

島を一つ消すことだって可能である。バキバキバキバキ…と今度

はその空間がイープの斬撃に耐えられずひび割れていく。そしてそのひび割れが島に届いた瞬間島が爆発した。勿論火薬を使った爆発ではなくイープの『島殺し』によって島が根こそぎ四方八方にぶっ飛んだからである。だがイープの中の『島殺し』の完成は島を押し潰すように消すことだから、まだ完成からはほど遠い。

そして残っている小島の中で一番大きいしまに着地して、

「やり過ぎたかな？まあ、二二で少し休んで早く妹たちに合流しなくちゃね」

とだけ呟いて僕は泥のように、または死んだように眠ろつとした。そう眠ろつとしたのである。

「じゃんなありやそ？」

イープが眠ろつと上向きになったときに目に映ったのが巨大な鉄球だったからだ。幸い直撃でないにしろ『島殺し』は食らったようだがイープの動きは遅い。これならば片足のないイープの『月歩』でも十分間に合う。イープは迷いなくガープまで直進しガープの腹に“帝”を突き刺す。しかしガープの反応は、

「きかんー」

イープの予想外のものだった。叫んだガープはイープを叩き落とし、自分の腹に刺さっている“帝”をイープの肩に投げて動けないように固定する。

「大人しく捕まれえええええ!!」

彼が逮捕の意味を正しく理解しているかどうかは疑問だが、ガープ

の必殺の一撃がイーブに迫る。そのとき『目の前の敵を殺したい』そんなイーブの強烈な願いがスコウエルド・イーブを次のレベルに引き上げる。何時もより鮮明に自分自身即ち『泥侵食』した土地を把握する。

「(今なら早い能力発動が出来る!?)」

いけると思ったイーブは賭けに出る。当然だイーブは1%でも相手を殺せる可能性があるのなら自分の命くらいノータイムで悪魔に売り出すような人間なのだから。

「『剣山見参』!」

イーブが叫んだ瞬間に地面から無数の針が生える。その針は地面にいる全て、イーブ自身すらも蜂の巣にして成長する。覇気を込める力なんてもうイーブに残っていないことが今回はイーブに幸いした。下手に覇気を込めると加減を誤った自分の『剣山見参』に蜂の巣死体にされるところだっただろう。

「『鉄塊』!」

ガーブは避けきれない無数の針を受け止めるため『鉄塊』をかけるが、完全な『鉄塊』をかけるほどの筋力が残っておらず四肢は串刺しとなる。ただし鉄球を投げた後で。ガーブはイーブの予想外の反撃に手元を狂わし自分の鉄球がイーブの下半身だけをぺちゃんこにしたことを確認して瞼を下ろした。

イーブの方も下半身をひき肉にされて潰し千切られたショックで一瞬意識が落ちる。そして主の居なくなつた針はその形を失いただの土に戻っていった。

イーブは直ぐに意識を覚醒させ固定された右腕を肩から引きちぎって体を自由にする。そして激遅の再生能力よりも義手義足の作成をする。さっきの能力制御は何処へ行ったのか義手義足の作成に少し時間をかけ、イーブが立ち上がった瞬間、イーブを衝撃波が襲つた。

「ガハアツ…ワアオここに来てセンゴク大将か…これが最後の晩餐になりそうだね」

襲つたのは金色に輝くセンゴク大将。センゴク大将が「剣帝」スコウエルト・イーブの為に確保しているおつる中將に続いて最後の人材である。イーブにはもうこの戦いで生き残れる自信は全くない。だがイーブには目の前の最後の敵であるセンゴク大将を殺せないビジョンが全く思い浮かばない。イーブは右腕が潰されれば左腕で、左腕が潰されれば右足で、右足が潰されれば左足で、四肢全てが潰されればその口でセンゴクを仕留めるつもりだ。イーブは決して心臓の音が止まるまで諦めない。いや、イーブなら自分の心臓が止まっても相手の心臓を止めるまで止まらないだろう。そんな決意を胸にしたイーブにセンゴクが事務的に語りかける。

「海軍本部少尉」剣帝「スコウエルド・イーブ、取引だ。少尉が逃がした奴隷たちの航海ルートを教える。そうすればお前は死刑を免れ、少しの間インペルダウンではなく普通の牢屋で過ごすだけの刑で済ませられる。牢屋での態度によっては海兵復帰だって可能だ」

とセンゴクは暗に断ればインペルダウン行きをほのめかす。

「嫌だね。僕の掲げる正義は“自分勝手な正義”。自分の正しいと思った時に正しいと思った事を正しいと思ったようにする“自分勝手な正義”。確かに僕の正義には芯なんてものはないよ。来年他の人間がマリージョアを襲撃したら僕はセンゴク大将の位置にいたかもしれないね。だけど！だけどそれが俺があいつらを見逃してい

い理由にはなんねーだろうが！」

ゴツと強烈な風を錯覚させるような何かがイーブから巻き起こる。それは「覇気」。イーブの思いに呼応して偶然出た物に過ぎない。だがそれはセンゴクを一瞬怯ませるのに十分すぎる要因で、一瞬はイーブがセンゴクを斬るのに十分すぎる時間だ。馴れない足で『剃』を使い、馴れない両腕で『帝』を振るいセンゴクの古傷、この前の対戦でイーブが木刀でセンゴクを斬ったところと全く同じ所を斬る。だが連戦、負傷その他諸々の要因でイーブの斬撃はセンゴクを仕留めるのにはすこし浅かった。イーブはセンゴクを斬った瞬間に肘打ちを位倒れ、その直後イーブに覆い被さるようにセンゴクが倒れた。

ここは創造主の部屋。だが皆が思っているような神々しい所でも真っ白な空間でもない。そこにいるのは白衣の研究者とラヴィサメの二人だ。

「ギャハハハハ！流石はスコウエルド・イーブ！アタシが見込んだだけはある」

そこでラヴィサメはイーブと感覚を共有してこの戦いの当事者をやっていたのだ。ラヴィサメはイーブの体と心をリンクさせイーブ本人になったことにより全力で戦い、そして始めて勝てなかった。これがラヴィサメがイーブを転生させた理由の一つである。創造主の中でもラヴィサメは「成功例」と呼ばれ他の創造主の人種とは一線を画す存在であったため、全力を出して負けることなど、いや苦戦することすらあり得なかったのだ。

「どうしたんですか、先輩？」

「ここで現れるワンピースの世界の持ち主である研究者。」

「ああ、アタシがイーブとして戦争してきた」

その言葉を聞いて確実に厄介事であると確信した研究者はダッシュで買ってきた胃薬を取りに行く。

「……で結果はどうだったんですか？」

聞きたくはないが聞かなくてはいけない。主に後の世界の調整の為に。前は現実逃避していたら三億人が死んでいた、なんて悪夢が発生していたのだ。今回はそれを避けたい。

「海兵を大体一万六千人殺した」

「ああ」

主要キャラ死んでたらどうすんだコンチキショウ、調整大変なんだぞとまた胃薬を飲む研究者。用法用量は守るべきである。

「見るか？」

「先輩はストレスで僕の胃を爆破したいのですか？」

「ちげーよ。面白いもんが見れるはずだ」

「はあ、面白いもんとは僕の胃袋爆散死体ですか……」

愚痴を言いながらもビーカーの中にあるワンピースの世界を特殊な機器、といっても彼らの間では普通の機器で覗く。

「すごい……帝」の呪いを食って自分を「帝」色に染め上げている……

これなら“帝”に飲み込まれずに“帝”の特性を発揮できる……つまり妖力を因果応報の定理に当てはめて……………」

見た光景が想像も絶するような光景であったため研究者魂に火が付いた研究者。

「やりましたよ、ラヴィサメ先輩！これで僕たちはもう一段階上の次元に行けます！」

「へえ、アタシがもつと強くなれんのか」

イーブに感化され再び力を求めるようになったラヴィサメが身を乗り出して聞く。

「いや、これは先輩の改造に使った方程式の安定化を図るものなので先輩の強化ではなく“成功例”の量産が可能になるかもしれないということですよ」

「ちえ。まっ、いつか。アタシはアタシの力でもつと強くなってやる」

「あっ、過去の映像にも興味深い物が……なるほど妖力をこう応用すると……………ふむふむ、久々に研究漬けの日々を送りますか！」

イーブの転生者生活は創造主のラヴィサメと白衣の研究者の男ジーンに大層気に入られたようだ。

イーブが目を覚ました時広がったのは闇。前も後ろも右も左も上も下も分からない程真っ暗な闇の中にイーブがいた。立ち上がるうとするが先日の戦いのダメージともう一つそれ以外の何かのせいでも力が上手く入らない。立つことを諦めたイーブは現状の把握をする。

四肢はちゃんと動く。左手は感覚がないがそれでも動く。ただし両手足それぞれに手錠がしてある。これに海楼石が仕込んであることは容易に予想できる。そしてこの建物に何千もの人が収容されている事を感じ、収容されている人が少なくともまともな人間でないと感じる。これらの情報から、

「地獄かと思ったたらインペルダウンレベル六”無限地獄”だね…ってここも一応地獄か」

自分の位置を特定する。ならばやるべきことは決まっている。

「(体力回復の後に脱獄だね)」

しかしただ体力回復をしている間待つだけでは能がない。動かなくても修行は出来る。例えばイメージトレーニングや見聞色の覇気の特訓、それに加え『生命帰還』の修得だ。

イメージトレーニングは楽だ。ただ強者との戦いで自分がもしこうしていたらのIFをイメージすればいいだけなのだから。見聞色の覇気だってこんな暗闇なら視覚に頼れないからなやり易い。最後の『生命帰還』はどうすればいいか初めはにっちもさっちもいかなかったが、よくよく考えてみるとイーブは自分の肌にも『鉄塊』をかける。本来筋肉の無い肌『鉄塊』がかけられるというのは『生命帰還』に他ならないのだ。だからその感覚を掴みつつ他の部位にも応用する。

それだけで一年と数カ月が経った。もう十分傷も癒えた。”金獅子”はこの脱獄の際、傷の”完治”に二年待ったのだ。だったらイーブは多少内臓がシェイクが内蔵されていてもあらかた動ければ

十分だ。そして一年と少しの修行の成果を出す。

『生命帰還』で手足を極限まで細くして手錠から抜ける。元々大人用の手錠だったのだ。子供のイーブが少し頑張れば簡単に抜けられる。そして一年かけて『泥侵食』で作り上げたトンネルから先ずは武器庫に移動する。

「泥の抜け穴」

皮肉なことに技の参考はこの署長の一人マゼランの技『毒の道』である。

イーブは自分の愛刀“帝”が何処にあるのかが手に取るように分かるのだ。流石は異世界最高の妖刀である。インペルダウンの武器庫に他の剣と変わりなく無造作に、しかし異様な威圧感を放つ一振り。は容易に見つかった。

そして再び『泥の抜け穴』を使い屋上に出て、

「月歩」

空を翔る。インペルダウンの職員がイーブの脱獄に気が付いたのはイーブがシャボンディ諸島に着いた後だった。

イーブが目指したのはシャボンディ諸島にあるシャッキーズぼったくりバー。そこで取り合えず情報収集するつもりだ。イーブはバリーン！と窓を破りハリウッドスター顔負けのスタントアクションでバーに突入する。

「スラムツパギー、シャッキー…とレイリー？」

「そつだ私はちゃんとシルバーズ・レイリーだ」

そこで会ったのはイーブと一時だけ仲間だった老人だった。

「へえー、じゃあアトランティス号はやっぱり沈んだけど皆は逃げられたってことだね」

とレイリーに自分が敗北し捕まった事を伝え、レイリーから皆の情報を見せてもらった。

なんでも軍艦の艦隊に囲まれそうになったアトランティス号にハンコックは火を放ち艦隊に近付けて火薬に引火させ爆破、その好きに非常用軍艦で皆はバラバラに逃走したらしい。他は分からないがハンコックらとカネルとスチルドパッドはアマゾンリリーに行ったらしい。

アトランティス号の沈没といい、完全にイーブの予想通りである。情報を手に入れたイーブはもうここに用はない。

「じゃあ僕はそろそろ行くよ」

「アマゾンリリーにか？」

レイリーは聞くが違つ。

「モー島」

「…正気かい？」

それにはレイリーも驚く。「モー島」、それは世界最高の海賊団の

ロジャー海賊団ですら手が出なかった島なのだ。今まで数多の冒険家、開拓者、海軍がその島へ向かったがその島から生きて出てきた者は一人しかいないと言われている。

「うん、正気だよ。僕はあのととき戦略的には勝ったかもしれないよ。一般的には戦術的にも引き分けだったかもしれないね。だけどそれじゃ足りないよ。弱すぎる。世界最強にはほど遠すぎるからね。たった一人で世界を動かせる武力が要るんだよ、僕にはね。何、死んだら死んだ、その程度ってことだよ」

と言ってイーブは今度は玄関から出ようとする。

「君はなんのために強さを求めるんだ？」

とレイリーの問いにイーブ、

「強者との楽しい死合い」

とだけ答えて出ていった。

第三十二話 東の海で旅行者はテンセイの旅行を

ここは東の海のとある島、この物語の主人公モンキー・D・ルフィの故郷だ。そしてそこはゴア王国でもなく、フーシャ村でもない、コルボ山のジャングルの一角にある木の上で、そこに少女が眠っていた。

「……んんー…」

背中をパキパキとならし少し体を伸ばして意識と体を覚醒させる。そして、

「わきゃ?!」

木から落ちた。

「……いたたた…また落ちちゃった。アイスーだから私は二段べつどの上は嫌なの…?」

落下して丁度上向きになったら少女は今視界に入っている光景に唖然とする。何故ならそこは何時も見慣れている真っ白な天井ではなくカンカンと照っている太陽とお生い茂るくさきだったからだ。

「……」

年相応の魔法少女のプリントの付いたピンクのパジャマに身を包んだ十才にも満たない少女が言った台詞は間違っではない。昨日は見たいドラマを我慢し、ちゃんと十時前に三つしたの弟と一緒に屋根の付いた家の自分たち姉弟部屋で眠ったはずなのだ。今自分が置かれている異常事態に疑問を持っても何一つ可笑しくない。

「私の名前は大麻 芥子(オオアサ カイコ)東京都の に住む十才の女の子で 小学校の小学四年生。家族はお父さんの大麻 葉安武(オオアサ ハアブ)でお母さんは大麻 木ノ子(オオアサ キノコ)。五つ下の弟が居て名前は大麻 アイス。……うん、一応全部覚えてる」

現状を理解するためにまず自分の分かることから挙げてゆく芥子。

「じゃあ昨日の夕方から思い出してここ。昨日は金曜日で紅葉くんとぼたんちゃんとはぎちゃんと一緒に私のお家に来て、皆でご飯を食べて、皆が帰った後にアイスとお風呂に入って、ドラマを録画して、アイスと一緒に寝て…ジャングル？」

最後は明らかに話が飛躍していると思われるが仕方がない。彼女は何も分からないのだ。眠っていて気がついたらジャングルにいた。本当にそうだったらなんとも笑えない冗談だろう。故に芥子は、

「夢か」

そう結論付ける。

「だけと不思議な夢だなー。ジャングルに来て何も起こらないなんて」

と自分が寢床にしていた木の幹をグルグルと回りながら芥子は呟く。夢とは人の深層心理に反映されると芥子は聞いたことがある。だったら芥子は自分のどんな深層心理を反映させたのだろうかと考ええる。

刺激を求めているのならジャンクで独りぼっちは中々刺激的では

あるだろうが刺激的のベクトルが違っだろう。普通はジェットコースターや怪物に追われるような夢を見るはずだ。しかし芥子が放置プレイを求めているとは考えづらい。十才にも満たない少女がそんな特殊プレイに目覚めているとは考えられない。いや、考えたくない。

そう思考しているとき、

「グルルルル……」

と何処からともなく獣のうなり声が聞こえてくる。バツ、と首がおかしくなるのではないかと思われる速さで首を捻って声の主を確認しようとする。

「いたっ……」

案の定首がイカれたが芥子はそれどころではない。芥子の目の前にいるのは体長2m程の虎。その虎の腹は空腹を主張するかのように鳴り、虎はその音に呼応してうなる。

そんな危険に立たされた芥子が取った行動は逃避。サツ、と木の幹に体を隠す。しかしその程度で誤魔化されるようでは虎はとっくに絶滅している。虎は木に隠れた芥子を襲おうと飛び掛かった瞬間に、

「おっしやー！ 晩メシゲットオオー！」

シルクハットの少年に打ち落とされた。

「……………え？」

と呆けた声を出す芥子。しかし彼女の驚きも無理はない。何故な

らばいくら男とはいえ自分よりも身長の低い子供が鉄パイプで巨大な猛獣を一撃で沈めたのだから。

芥子は状況が呑み込めずどうしようかと考えたが、相手は彼自身の夕御飯ためとはいえ、結果的には自分を助けてくれた存在。やはりここは礼を言うのがマナーだろうと少年に近づこうとしたところで、

「テメエ、ここぞ何してやがる」

別の少年に肩を掴まれて動けなくなった。ギチギチと人体からは鳴ってはいけない音が鳴る。

「ちよっ…痛いっ…!？」

芥子は自分の肩を掴んで離さない少年に文句を言おうとして、その少年の顔を見てそんな思考はぶっ飛ばされる。

(なんでONE PIECEのエースがここにいるのー!?)

芥子は目の前にいる少年に対して驚きのあまり意識を失った。

「……………んっ。」

「やっと目が覚めたか」

と目が覚めた芥子にそう声をかけたのは先程猛獣から自分を救ってくれたシルクハットの少年。状況から自分はこの少年の家にいるのだと推測する。そしてその少年から少し離れたところにいるのは自分が気絶する原因となった少年エースだ。エースは自分たちの隠れ家に他人を入れたことが不満で芥子を睨み付けている。

「で、俺はサボっていつんだがお前、誰だ？」

とシルクハットの少年、サボが芥子に問う。しかし芥子にはそんなサボの台詞など頭に入っておらず、

(うわー、エースと一緒にいたからもしかしてと思ったけど本当にサボだー！本物だー！と思ったけどこれは夢か。っていうことは私は ONE PIECE の夢を見てるんだ)

思考がトリップしていた。そしてサボの質問に答えない芥子が自分たちを嘗めていると勘違いしたエースが、

「おい teme 工、ナメテンじゃねえぞ！ teme 工は誰だ!? 答える！」

と凄む。いくら夢の中といえど折角自分の好きな漫画 ONE PIECE のキャラクターに会えたのだ。芥子はやはり彼らと仲良くなりたと思う。しかしそのためにはこの険悪な雰囲気はどうにかしなくてはいけない。しかし下手に喋るとボロを出しかねないと判断した芥子は、

「……………私は誰ですか？」

記憶喪失を装うことにした。

「……………」

二人は確実に自分たちが厄介事に巻き込まれたと後悔する。

ぶっちゃけた話、この辺の人間とは一線画すほど身なりのいい芥子を見て家出した貴族の子供と勘違いした二人は猛獣から芥子を助け出して恩を売ってお金を落として貰おうと打算的な行動をしてい

ただ。しかし二人の当ては外れ、二人の目の前にいるこの子供は記憶喪失者ときた。無知の子供をジャングルに放り出すのも目覚めが悪くどうしようかと二人は頭を悩ませているのだ。

「えーっと…掃除とか料理とか家事はするし邪魔にならないように参加するから、良ければここにいさせて欲しいなーなんて思ってるんだけど…」

と最後は尻すばみになりながらも芥子が言う。それに対してサボたちは、

「……まあ、居ても邪魔にならないからいいよ」

と快諾とはいかなかったが一応芥子が自分たちの隠れ家に住むことを許可をした。それを聞いて芥子は物心付いたときから花嫁修行と称して母親から家事を手伝わされていた事に人生で初めて感謝した。次いでに護身のためと空手を物心付いたときから習わされていた父親に感謝した。

お陰で芥子は料理のレパートリーは百を越え、気まぐれの絶品創作料理（芥子の家族談）も作れ、空手でも全国のジュニアチャンピオンとなるほどの使い手である。芥子は常識的な同年代には負けるつもりはない。勿論虎を一撃で沈めるようなのは例外だ。

「じゃあ、よろしくな。えーと…」

と言いよどむサボ。なにしろ記憶喪失ということにしている芥子には名前が無いのだ。エースは人見知りなのかさつきから黙ったまままだ。

「お前の名前が…」

と言うサボ。それに対して芥子は、

「じゃあ、私の名前は『サクラ』にしよう！」

と声高らかに宣言した。

芥子は自分の名前が嫌いだった。最早コンプレックスと言ってもいい。誰が自分の名前が違法薬物であることを喜ぶのだろうか。父親曰く、『芥子のように可愛くて、皆に求められる子供になってほしい』という願いが込められていたらしい。その時芥子はぎっけん！と叫んで父親の急所を空手仕込みの瓦を割る蹴りを叩き込んだのは悪くないだろう。求められる意味が暗黒だ。例え子供は三人ほしいと言っていた親から子供が二人しか出来なかったとしてもだ。だから芥子は友人に自分のことを綺麗で皆が大好きな桜の花から取って「サクラ」と呼ばせていたのだ。

「お、おっ…よろしくな、サクラ」

と芥子改めサクラの突然の叫びに少し引きながらも返事をするサボ。こうしてサボとエースとサクラの海賊貯金生活は始まった……
と思いきや、

「なあサボ、トイレってどこ？」

「ん？ああこの木を降りてあっちに少し行ったところに川があるからそこにするといいわ」

とサクラの質問に答えるサボ。しかしサクラは内心いくら子供とはいえ女性に外で用をたせと言うサボが信じられなかった。だがよく考えてみたらゴア王国の外にトイレなんて人のことを考えて

ある施設なんて無いだろうとサクラは考え直す。

「ぜっっったい見ないでー!」

とそれでもやはり恥ずかしいサクラはサボとエースに釘をさしてから川へと向かう。

川へと到着したサクラは周りに人がいないかを入念に確認してから用をたそうとして違和感に気が付く。

付いているのだ、今までの自分には無く今まで一緒に風呂に入っていた弟のアイスに付いていた物が。

「キヤアアアアアアア!」

とサクラは思わず悲鳴を挙げてしまう。そしてその悲鳴を聞きつけ何事かとサボとエースが走ってくる。その足音に気付いたサクラは慌ててズボンをはく。

「どっした、サクラ!」

と心配するサボ。

「JJJJを思いっきり蹴り飛ばして!」

と自分の下腹部よりも下を指差して叫ぶサクラ。

「……………は〜」

と呆けるサボ。しかし彼の反応は間違っていない。そこに衝撃が来たときの痛みは男であるサボには分かる。そこに攻撃を食らった

男は大体それで戦闘不能となるだろう。そしてそんな自殺にも等しい宣言をしたサクラに疑いの眼差しを向け、

「どうしたんだ？」

と聞くが、

「速く蹴って！」

とりつく島もない。サクラにしてみればいくら好きなキャラクターと有効関係を結べるといってもこんな目に遭うなら真っ平ごめん、早く覚めてほしいと思っているのだ。故に何か刺激があれば悪夢から目覚められると思ったサクラはこんな荒唐無稽な頼みごとをサボにしたのだ。それに対してサボは

「何があっても恨むなよ！」

と言ってサクラの股間を蹴り飛ばす。サクラを襲ったのは今までであじわったことのない激痛。いや、激痛で言い表すことすら生温い程の痛みというカテゴリーを越えた刺激。それを受けたサクラは、

（お父さん、股間蹴ってごめん）

と過去に行った過ちを詫びながら意識を失った。

第三十三話 東の海で少年は航海の決心を

「あははははははー！」

隠れ家の中で二人の少年の笑い声が響く。そんなことをしたら隠れ家の位置がばれるかもしれないとも考えずに。

「だからそんなに笑わないでよー…じゃなくて笑うなよー！」

と顔を真っ赤にして叫ぶ転生したときに転性してしまったサクラ。

彼はもうこの世界が自分の夢でないと確信している。先程の激痛が夢でないことがあろうか、いや、ない。それほどまでに男の股間は急所なのだ。弁慶の泣き所の比ではない。あんな冷酷無比、残虐非道な一撃を食らったら弁慶も泣いてしまっだろう。

そして男となってしまったからには言葉も女言葉から男言葉に変えなくてはいけない。変えなくては世間から「おネエ」の称号を頂いてしまうのだ。サクラはそれだけは避けたい。

「だってよぉ、記憶喪失で自分の性別忘れてるって…ぶははははははっ！ やっぱ無理だ、我慢できねえー！」

とエースは込み上げてくる笑に対してささやかな抵抗を見せようとするも全く意味がなかった。しかしエースが自分に心を開いてくれるならばこれくらいの痛みくらい全然平気だとサクラは思……えなかった。

「うっせバーカ、死ね！」

と今だ笑っているエースの股間に対して瓦二枚を軽く割る極悪の蹴りを入れるサクラ。

「っ!!？」

いくら町中で有名な悪童のエースと言えど男の子。急所への一撃はかなり堪える。もはや痛がる素振りを見せる余裕すらないエースを見て少し申し訳なく思うサクラ。これもこの痛みが理解できる体を手に入れてしまったからであろう。

そしてサクラはサボを睨み付ける。『次ぎはお前だ』と目で訴えかけながら。

「すみませんでした！」

と土下座を敢行するサボ。男性読者なら今のサボを情けないと言うことはないだろう。

こうしてサクラは無事とはほど遠いがサボとエースと共にコルボの悪童に仲間入りすることができた。

それから数カ月、サクラたち二人は窃盗食い逃げを繰り返し、そして互いに模擬戦を繰り返して貯金を増やす一方で実力もつけていった。

しかしそれとは別にサクラは二人に内緒で特訓をしていた。今サクラは九才、そしてサボとエースは五才。つまりサクラは三人の中で最年長なのだ。しかしそれと同時に最弱でもある。元女とはいえ現在は男の体を持っていて他の二人とは同じ条件なのに三人の中でサクラは圧倒的に弱いのだ。だからサクラは原作知識を使い二人には

内緒で“覇気”の特訓をすることにした。

と言いつつも知識で覇気がどういったものか知っているサクラだが、残念ながらサクラには師匠がいない。故にサクラが今やっている練習法が正しいのか分からない我流のものだ。しかしこれは多分後にサクラの戦闘で生きてくるだろう。生きてくると信じていなくてもサクラだってやってられない。

その練習法とは至って簡単だ。まずは瞑想。これで自分の中にある(と思われる)覇気を見つけるのだ。ついでに心を落ち着けることは見聞色の覇気の実現の近道…のはずだとサクラは信じている。今だに瞑想は昼寝の時間となっているが。昼頃はどうしても眠くなってしまう。続いて武装色の覇気は毎日欠かさずしている空手の練習の時に手足に何かを纏わせるイメージを持つことだけだ。こちらは成果があったのかサクラは岩を殴っても拳を痛めなくなった。ただしこれは覇気に関係なく、ただ単に鍛えた結果なのかもしれないが。

それはさておき今三人は隠れ家の中で団欒をしている。

「なー、サボ、エース。俺さ…没個性じゃねーか？」

「はあ？没個性？」

突然何を言い出すのかと眉をひそめるサボ。

「おー、没個性。ほら最近盗みの他に賞金稼ぎしてるだろ？でさー、そいつらってさー、愉快的服装とかしゃべり方とか笑い方すんだろー？俺ってそいつらに比べて没個性じゃね？」

そう、サクラが入って三人になった悪童三人組はゴア王国外れのご

み山に逃げてきた賞金首、それでも百万もいかにの小物、を捕まえて海賊貯金に加えているのだ。いくら三人の中で最弱のサクラでもそんな小物にはおくれを取ることはなく、立派に活躍している。そしてそういった奴等は決まって個性豊かだ。例えば全身にてんとう虫を付けていたり、おっさんだが語尾に『にゃんにゃん』を付けたら、笑い声が『ニョニョニョ』だったりだ。

それに加えサボだって賞金稼ぎや海賊に似つかわしくない貴族の格好だし、エースだって将来は半裸で生活するのだ。没個性にはほど遠い。

「でもサクラの髪は結構珍しいだろ」

とエースがフォローを入れる。そう、サクラは男になった他にも髪の色が薄いピンク、桜のような色になっていたのだ。こちらの変化はサクラ自身も気に入っている。しかし日本ならそのような髪の色は珍しいかもしれないが、この世界ではそれほど珍しくない。因みに顔つきの方は変わってはいないが、元から中性的な顔立ちだったこともあってそんなに違和感はない。

「いや、髪の色っていったらこの前の“変質者”の方が凄かっただろ？」

「あー確かに……」

とサクラの反駁に納得する二人。“変質者”というのはこの前三人で捕まえた五十万の賞金首で全裸に加え何故か髪を迷彩色に染めていた男である。勿論ボコボコにして布でグルグル巻きにして海軍に引き渡した。

「……じゃー語尾に何か付ければいいんじゃないか？」

「それだ！」

と数分の沈黙の後に出たエースの提案にビシッ、と指差して乗るサクラ。しかし問題もある。それは、

「じゃあどんな語尾にしよう……？」

ということだ。サクラのハードルは高い。没個性を脱却できるようなものでなおかつ変すぎないという絶妙な語尾をサクラはもめているのだ。

「……じゃあ『わスマッシュ』っていいのは『ダウトー！』駄目か……」

早速ネタに走ったサボを止めるサクラ。何故サボがこのネタを知っているのかは誰も知らない。

「じゃあ『わストロベリー』はどう」「お前も黙れ！」「ぶーぶー」

今度はエースがネタに走ったようだ。

「じゃあサクラにはなんか案があんのかよ？」

先ずかいより始めよ。言い出しっぺのサクラが何か案を出すのが筋というものだろう。サボが言う。

「……え、何も浮かんでない」

「ダメじゃん！」

サクラの台詞に対して待つてましたと言つかようなスピードで突っ込みを入れるサボ。

「それだ！」

「……は？」

頭が湧いたか、と言わんばかりのジト目でサクラを睨み付けるサボ。

「……じゃん”だよ”じゃん”！それにしよう……じゃん！”

サクラが前の世界で見っていたアニメのキャラでやたら語尾に”じゃん”と付ける先生がいた。サクラはそのシリアスをコミカルに変える先生の語尾をパクらせてもらっことにする。

”じゃん”だなんてありふれた語尾、誰だって使うように思われるが、考えてみてほしい。やたらめったら無理して語尾に”じゃん”を付けている人を。十中八九『個性的なしゃべり方だなあ』と思うはずだ。

そうしてサクラの語尾が、決定した。

そしてそれからまた数カ月、サクラの語尾である”じゃん”は最初の方はぎこちなかったが今ではすっかり定着して寧ろ”じゃん”を付けずに話す方が違和感を感じられるほどだ。

そんなある日またもやサクラが二人に話はどちらかと言っとしかける。

「なー、俺たちいつペン海に出てみないかじゃん？」

「はあ？海？突然どうしたんだ、サクラ？」

と聞き返すサボ。しつかりもののサボがこの悪童三人衆のまとめ役だ。最年長のサクラは実力でサボとエースに劣り、エースには皆の意見をまとめる能力なんて存在しない。

「うん、サボ、じゃあ聞くが俺たちの収入源は何じゃん？」

「えーっと、まずは倒した猛獣の毛皮と肉だろ。それからかつぱらってきたお宝と賞金稼ぎぐらいか？」

「正解じゃん。じゃあそのなかで一番高い割合を占めるのは何でしょうじゃん？はいつ、エース！」

「」で、エースに話を突然振るサクラ。

「うおい、俺か!?えーっと、じゃあ何時も狩ってるから猛獣の毛皮と肉か？」

「ぶぶーじゃん。正解は賞金稼ぎ稼業じゃん」

「おいおい、そんなわけ無エだろ。賞金首に出会うことなんざ大体月に一人ぐらいだぞ。それに比べて毛皮と肉は毎日売ってたんだ。こーゆーのを何て言っただったか…そうだ『風の前の塵に同じ』だ！」

「いや、サクラの言うことは正しいぞ、エース。あとそれを言うなら『塵も積もれば山となる』だ」

流石は貴族の息子、食い寝少年とは頭の出来が違う。

「毛皮と肉は毎回大体八千ベリー。そして賞金首は大体いつも五十万ベリー前後。つまりりだ、毛皮と肉では毎月二十四万ベリーしか稼げないんだ」

「おいおい、それはおかしくないか？だって毛皮と肉のときは紙切れ四枚で賞金首は紙切れ五十枚。つまり毛皮と肉の時は一月で紙切れ一、二、三、四……百三十三枚貰えるから毛皮と肉の方が稼げてるんじゃないエのか？」

「エース、取りあえずお前には後で掛け算と貨幣についてみっちり教えておくから黙っとくじやん」

自分から話を振っというて随分なものの言い様だが、これはサクラの予想を越えて馬鹿だったエースが悪い。

「つまり俺は賞金稼ぎ稼業の方が儲かるからもうそっちを専門にしないか、ってことじやん」

「うーん、でもいきなりここを離れようって言われても…」

と宝をここに隠したまま海に出ることに難色を示すサボ。こんな治安の悪い土地なのだ。サボの心配は持ったものである。

「でもじやん、サボ」

とサクラはここで畳み掛ける。

「お前たちが海賊貯金を始めて約一年じやん。貯まったお金は多く見積もっても一千万ベリー弱じやん。そして一東の海（イーストブルー）の平均懸賞金額は三百万ベリーじやん。つまり毎月一人賞金首

を捕まえれば、」

「4ヶ月あればそれを越えられるってことだな！」

エースが珍しく正答を言う。

「だがなーサクラ、つまり平均懸賞金額が三百万ってことは今までの六倍強いつてことだろ？大丈夫なのか？」

と相変わらず慎重なサボ。暴走少年エースの無茶をサクラが来る前は一人で止めてきたのだ。サボはやると決めたとときの行動力は目を見張るものがあるが基本は慎重にことを進めたい性質なのだ。

「今までの賞金首も俺たち一人で十分だったし、それに俺たち三人が揃えばどんなやつにだって負けないじゃん」

にやり、とサボを挑発するように笑うサクラ。

「あー、分かったよ！そこまで言うならやってやる！」

「そうこなくっちゃじゃん！」

と決意するサボに、それに満足そうな笑みを浮かべるサクラ。

「それにそろそろお前らの組み手と賞金首の相手には飽きてきた頃だしちよっどいいいなーじゃあ早速行くぞお前ら着いてこい！」

「待て！船長は俺だぞ、サボ！」

「あはははははははー！」

と言つや否や港に向かつて走り出すサボと文句を言いながらもそれを追うエースにその光景を見て笑うサクラ。

エースがこれから戻ってこないことによってダダン一家の肝が物凄く冷えることはこの中の誰も知らない。

第三十四話 東の海で賞金稼ぎは無謀な勇気を

「こちらが懸賞金の八百六十万ベリーとなります」

「受け取ったじゃん」

一東の海（イーストブルー）を航海しはじめて一ヶ月がたった。しかしその時間に反して海賊貯金は既にサクラたちがゴア王国付近に居たときに貯めた額を遥かに凌駕していた。その際エースとサボが若干凹んでいたがそれは些細なことである。

「まあ、今回も余裕だったな！」

とそこら辺にある鉄パイプから本格的な棍に武器を買い換え、それを肩に担いだエースが言う。

「おいおい、エースは背中刺されそうになってただろうが」

「アア？そーゆーサボこそ今回一番最初に一撃貫つてだろうが！」

「うっせー！あれはわざとだったんだよ！」

懸賞金は百万単位で貯金、そして残金の半分を一番活躍したMVPに、そして残る半分を折半としているからこういったいざこざがよく起こるのだ。今回の場合は八百万ベリーが海賊貯金、三十万ベリーがMVP、そして残る二人には十五万ベリーずつ貰えることになる。子供の頃からそんな大金持っているのと金銭感覚が狂いそうで怖い。

最近は懐の暖かさが異常なので食い逃げを止め、MVPがご飯を奢ることになっている。そうすれば皆機嫌を良くなりこの制度に対し

て文句を言う者はいなくなった。それに加え、この制度のお陰で互いに闘争心が湧き、切磋琢磨しあっているからいい刺激にもなっている。

「まあまあ、落ち着くじゃん」

とサクラが宥めるも、

「うっせー！全く活躍しなかったやつは黙ってる!!」

「おいこら、俺が一番戦闘に関わったじゃん！年上言めんじゃん！」

二人の暴言にあっさり振り切れて喧嘩に参入するサクラ。

「でも撃墜数一番少ねエだろうが！」

「黙れじゃん、エース！お前みたいな向こう見ずのフォロースてこっちは忙しいじゃん！」

「あんなへなちよこ攻撃なんか当たるかよ、バーカ！」

「前回気失った奴が何いってんだよ」

「うっせー！いつもいいとこばっか取っていきやがって、かのハイエナヤローが！」

「なんだと！この向こう見ずの猪ヤローが！」

「じゃあ今回も腕っぷしでMVP決めるじゃん！」

「望むと」

そう、このMVP制度は実際戦闘で誰が一番活躍したかではなく、戦闘後の喧嘩で勝った者がMVPとなっているのだ。既に初めに決めたルールなんて影も形も無い。

因みにこの喧嘩の勝率はサボとエースが五分五分となっていてサクラは未だ勝った事がない。

「な」

と顔を腫らしたサクラが二人に話しかける。今回のMVPであるサボの意向で今日の昼飯はラーメンだ。

「どうした？」

とそれに呼応するエース。

「次、こいつにしよっじゃん」

当然次の獲物についての話である。サクラが持っていた手配書とは、

『武人』 ロープ懸賞金一千二百万ベリ』

だ。

「はあ!? 一千二百万ベリ!? そんな無理に決まってるだろ！」

と反対するサボ。

「でも今回の奴だって八百六十万だった けど全然余裕だったじゃん」

そう彼ら三人は既に全員八百万以上の実力が備わっている。

「だけど」 一千万クラス」はまずい！レベルが違うんだよ！」

とサボが言う。 平均懸賞金額が三百万ベリーの平和の象徴であるここ、東の海では懸賞金が一千万を超える海賊なんて文字通りここでは指折りの実力者。たとえ懸賞金九百九十万の男でも足元に及ばない化け物たちなのだ。尤も、そんな海賊たちも魑魅魍魎が巢食う一偉大なる航路（グランドライン）では赤子にも等しいのだが。

「でもじゃん、サボ。俺たちが偉大なる航路に行ったら一千万を超える海賊なんてざらにいるじゃん。一千万ごときでうだうだ言ってるらいつまでたっても東の海止まりじゃん」

とサクラは諭すように言う。

「だがサクラ、そんなに急ぐ必要なんかあんのか？俺たちまだ子供だぜ」

しかし乗り気でないサボは反論する。

「じゃあじゃん、エース。お前はどつするじゃん？俺と一緒に」 武人」を狩りに行くか、サボとここでぐだぐだと待ってるかじゃん」

「なあサクラ」

「じゃあぜ」

サクラの問いにエースが問う。

「もし俺が『行かねエ』つつつたらどうする？」

「もちろん一人ででも行くじゃん！」

サクラは内心焦っていた。サボはともかくエースは未来の大海賊となることをサクラは知っている。そしてエースが後に殺される事も。

この数カ月でサクラはもうエースたちを好きな漫画のキャラではなく兄弟として見るようになっていた。そしてできることならその兄弟を助けたいとも。

しかしサクラには実力が圧倒的に足りない。そんなことは本人であるサクラが一番分かっていた。エースたち三人の中で最弱である今のままでは間違いなくエースを助けるだなんて不可能である。だからサクラは二人に無茶言って海に出て、今も無茶言って上手の一万クラスを相手取るうとしてしているのだ。

そんなサクラの心境を知ってか知らずかエースは、

「もちろん俺も行くに決まってるだろ！」

サクラに付いていくことに決めた。

「もうお前ら勝手にしろ！俺は行かないからな！」

「じゃあ賞金はエースと山分けしてやるじゃん」

「勝手にしろ！命知らずども！」

「また後でじゃん。エース」

「おう」

とサクラとエースはサボを残して店を出た。

「ところでサクラ」

「じゃん？」

エースがサクラと一緒にサボと別れて暫く歩いて、サクラに聞く。

「肝心のローブがどこにいるのかしってるんのか？」

「そんなこともちろん……」

それに対してサクラは満面の笑みで答える。

「知ってるに決まってるじゃん」

歩きながらサクラは続ける。

「今どこにいるのかも一応分かっているけど、海軍に手柄横取りされるのもしかたし船に隠れて襲ってやるじゃん」

とエースの腕を引っ張ってサクラは突然駆け出す。

それから数時間たって漸く武人海賊団の船が出航したとき、サクラ

とエースは船内の倉庫に隠れて息を潜めるついでに多少の保存食を食べていた。船には一応見張り番が居たのだが、居眠りをしていた彼はその役目を全く果たしておらず、サクラとエースはいとも簡単に船内に潜入することができたのだった。

それから一時間が経ちローブたちの陸への逃げ道を塞いでからサクラたちは戦闘を仕掛ける。

「お前が」 武人「ローブかじゃん？」

と船内の壁を突き破って看板に出たサクラとエースが船首の近くにいる大男に向かって聞く。

「おお、いいかにもおおいがローブだがあ、それがあどうしたあ？」

と海に目を向けていた大男が振り返って問う。

「俺は賞金稼ぎだ！覚悟しやがれ！」

とエースが吠える。

「おいおいガキどもこの人数相手にしてもそんなことが言えるのか？ ああ？ 筆頭！こんなガキ二人に筆頭が出るまでもありやせん！」

と看板にぞろぞろと現れたローブの配下たちの中で一番偉い男が叫ぶ。

「サクラ、何人いる？」

「じゃんじゃんじゃん…しめて三十二人じゃん」

「じゃあどっちが行くか？」

「一斉に出て先に三下一人につき一万、賞金首仕留めた方が三百万、もう一人が百万で残りが貯金するのはどうかじゃん？」

「乗った！」

「何ぶつぶつ言ってんだ餓鬼があ…びぶるちっ!!」

敵を目前として未だ余裕の表情の二人に腹を立てた海賊が突っ走って、サクラの棍の餌食となった。

「まず一人じゃん」

サクラがエースに挑戦的な笑みで言う。

「まだ戦いは始まったばかりだ！」

「あべし！」

「ひびぶ！」

エースは一撃で二人を落としてサクラの挑発に応える。

「くそつたれ！お前ら！人数で押し潰せ！」

「この合図に丁度半々に男たちが別れてサクラとエースに襲い掛かる。しかし、

「じゃあ」

「おっと」

身軽な二人はそんな攻撃を跳んで軽々とかわす。

「すばしっこいガキめ！」

「すばしっこくて何が悪いじゃん」

と愚痴を言う男を殴って沈める。いくら相手が賞金首でないと云えど大人である。しかしそんな年齢差をもとせずに相手を一撃で正確に沈めているサクラとエースはすばしっこいだけでなくパワーも兼ね備えているのだ。

そして海賊たちはサクラとエースに傷一つ付けられないままに沈められていき、残るはあと一人となった。しかし、その男はエースたちに襲い掛かるのではなく、

「筆頭…あいつら化け物です！助けてください！」

ローブにすがり付いたのだった。それに対してローブは、

「まあったくう、うちの船にはあそんな子供お相手にい弱腰になるうようなあ軟弱者はあああ…いらん！」

と弱く使えない男の頭を握り力を込めてもはや服の袖を破るほど筋肉を膨らませて、ポイッと打ち上げて後方、すなわち海に投げ捨てた。

「ピュー。流石。武人。じゃん。なかなかパワーはあるようじゃん」

「…いつ…仲間を捨てやがった…！」

サクラは台詞は余裕そうだがロープの力を目の当たりにし顔をひきつらせ、エースはロープの凶行に露骨に顔を歪ませた。流石は海賊王の息子、まだ旗揚げはしておらず実際は居ないが、船員に対しての思いやりは人一倍あるようだ。

「ああ？あんなあ弱っちくてえ、根性のお無い奴うなんかあいらん！」

とそんな二人の白い目線にもロープは臆さずにけるっとしている。そしてサクラとエースに向かって聞く。

「なああ、おめえら、うちのお船にい乗らねえかあ？」

ロープは続ける。

「二人ともお子供おなんに“一千万超え”のおいに向かってえきた勇氣いとこれだけの人数相手に傷一つつかん実力う！おめえらは充分にいおいのお船に乗るう資格がある！」

とロープは手を差し出す。しかし当然二人の返答は、

「生憎、まだ暫くは旗揚げの予定は無いじゃん」

「はっ、てめえみたいなの下にな誰だつくか！」

拒否一択に決まっている。

「そおかあ、ならばあ力付くで連れてえ行くぞ！」

と持ち前の巨大な円柱状のコンクリートの塊を掲げてロープは宣言布告する。それに対してサクラとエースも、

「相手は今までとは格が違うじゃん。気を付けるじゃん」

「お前こそあれにぶっ飛ばされんじゃねエぞ！」

先頭体制に入る。そして知名度急上昇中の一人欠けたが「三悪童」のサクラとエース、そして東の海指折りの怪物「武人」ローブの死闘が始まった。

第三十五話 東の海で無謀人は愛の覚醒を

ゴツと看板で大男が両手に持ったコンクリートの塊を振り回し相対する子供二人に襲い掛かる。

「うわっ！」

「じゃん！」

それを身軽にかわしながら正確に大男、" 武人" ロープの頭を二人の得物の棍が捉える。しかし、

「効かぁん！」

「じゃん！」

それすら弾き飛ばす。こんなやり取りがもう何度も続き、三人とも無傷ではあるがサクラとエースは体力を消耗し、一方ロープの方は息一つ乱れていない。

「どんだけかてェんだ」

と流石にエースも弱音を吐く。

「大丈夫じゃん。一見効いてないようにも見えるけどちゃんと諦めなければ何時かは効果が出るじゃん」

とサクラがそんなエースを励ます。

「おいはぁ、大砲だつてえ弾き返すう身体の持ち主いだぁ！」

とそんな二人を絶望させるようなことをロープは叫び、攻撃を繰り返す。

「じゃん、エース！一ヶ所を集中的に攻撃するじゃん！顎じゃん！顎を砕けば流石のこいつだって倒れるじゃん！」

とサクラはエースに叫んで指示を出す。そうすればロープにも作戦が伝わってしまうがそれでもしなよりましだ。それにもとよりサクラはロープを作戦や対策を立てて相手を倒すタイプではなく、相手の作戦や対策を正面から叩き潰すタイプと認識しているからあまり関係無いだろうとサクラは思っている。

縦横無尽に振り回される巨大な武器を交わし続ける事は難しい。さらに体力に大きな差があるのであればなおさらだ。紙一重でかわすだけでその威圧感から精神力がゴリゴリと削られるその一撃は、かするだけでもかなりのダメージを喰らってしまう。

そして先に一撃を貰ったのは、

「じゃんん！」

サクラの方だ。

「サクラ!？」

「敵から目離すじゃん！」

「くっ！」

かすっただけで数十メートル吹き飛ばされたサクラを心配する

エースをサクラは叱責する。戦場では敵から、ましてや格上と戦っているときに敵を視野から外すなんてもつてのほかだ。幸い、サクラの注意のお陰でエースは攻撃をかわすことができたが。

「流石は”一千万クラス”じゃん。そう一筋縄じゃあいかないじゃん」

と頭から血を一筋流したサクラが言う。

「ああ、あの塊がせめて一つだったらいけたんだがな」

とエースも苦虫を潰したかのように文句を言う。そのエースの呟きにサクラは、

「じゃん、丁度俺も同じことを考えてたじゃん」

と頬を伝う血を舐め取って笑う。

「はあ、どついつい」と、「俺に合わせるじゃん！エース！」ちっ、仕方ねえ奴だなあ！」

とエースは自棄になったように、しかし顔は笑いながら叫ぶ。彼らはアドレナリンが大量に分泌されていわゆるハイになっているのだ。

「じゃん…じゃん…」

サクラも笑い、叫びながらロープの猛攻をくぐり抜けて足下に潜り込む。

「踏っみ潰してえ、やるわ！」

とロープが足下のサクラを踏み潰そうとしたとき、サクラは笑い叫ぶ。

「かかったじゃん…」

とサクラは相棒の棍でロープの脛を思いっきり殴る。

「おおっ！」

弁慶の泣き所とも呼ばれるそこへの一撃は“武人”ロープですら痛みを感じさせた。そしてさらにロープの体勢はサクラを踏み潰そうと片足を上げた状態。そこにもう一方の足に痛恨の一撃を喰らい体勢が崩ればもちろん転ける。これがサクラが決死の覚悟で作りに上げた千載一遇のチャンス。

「エース！」

とサクラは叫ぶ。しかしサクラたちがロープに苦戦したのはロープの重い一撃もあるが、それよりもむしろロープの頑丈さにある。そんなロープに対してエースは何処に攻撃すればいいのかと悩む。

「肘じゃん…肘にぶちかますじゃん…」

と再度サクラが叫ぶ。サクラの一連の行動の目的はまずはロープの武器を一つにすることだ。そうすれば手数は半分、しかし相手の実力は半分以下に落ちる。例えば、双剣使いが一本の剣で戦ったならば実力の半分も出せないだろう。何故ならその双剣使いは剣を二本使う前提の戦い方を学んで磨いてきたのだから。

「へおおっ！」

そして右肘にエースの会心の一撃を喰らったロープは思わず持ち前の巨大な円柱を手放す。これは以前、サクラがこの世界に来る前に肘を机にぶつけたとき、異様に手が痺れたという経験からいけるのではないかと考えて実行した作戦である。

「やってやったじゃん」

と未だ痛がるロープから目を離さず、ゴロゴロとここから離れていくコンクリートの凶器を尻目にサクラはエースと軽く拳をぶつける。

手数が半分実力は半分以下ならば勝てると思ったサクラはこれからどう料理していこうかと思案したときに目の前に映ったのはロープの“右手”にある巨大な凶器が自分に向かって迫って来るところだった。

「じゃんっ」

ゴシャツと人からは普通は鳴り得ない音が鳴り吹き飛ぶサクラ。船内をいとも簡単に貫通しサクラは船首から反対側い一気に吹っ飛び漸く止まる。

一瞬意識が飛びそうになるがどうにか意識を保つ。この世界に来て数カ月間適当に暮らしてきたわけではないのだ。しかしサクラの状態は酷い。幸い、折れた骨が内臓に刺さってはいないが、間違いなくかなりの骨が折れている。しかもサクラは怖くて直視出来なかったが左腕はさらに酷く、有り得ない程捻れ、ダランとぶら下がっているそれからは一部骨が突き出している。

「どうしてこうじゃんっ」

とサクラは薄れかけた意識を保つ為に懸命に頭を働かせる。

サクラはこのとき知る由も無かったがロープは自分の背中と船首の間にもう一つ巨大なコンクリートの凶器を隠し持っていたのだ。しかしそれは単なるスピアではない。そのもう一つの武器の意味はサクラが再びロープに立ち向かうために看板の方に行ったときに分かった。

サクラが看板に出たとき、丁度ロープは自分の武器を振り回しながら転がって行った自分のもう一つの武器を取りに行き、それを掴み取ったところだった。

「おおい!? サクラ大丈夫か!」

とサクラが看板に出てきたのを見かけたエースがそのサクラの満身創痍さに驚き思わず声をかける。

「ゴフッ…一応」

ともやは語尾に『じゃん』を付けることを忘れてサクラは応える。

「んで…あいつは何やってんの…じゃん?」

語尾に『じゃん』を付け忘れていることに気がついたサクラが慌てて付けて聞く。

「わかんねエけどもつすぐ来るな」

とエースが答えた時にロープがのそりと振り返る。その手に持つのは“三本”の円柱状のコンクリート。そう、ロープは自分の三本の武器を組み合わせて三節棍にしたのだ。

「まあさかおいをここまで本気にさせるうとわ思わなかったあ。なあ、やつばあおいの船にい乗らねえかあ?」

とじゅんびうんどうがてらに二節棍を振り回して部下を船外に巻き上げながら聞く。

「却下じゃん」

「断る!」

「そうかあ、やあっぱり、だあつたら力付くでえ連れてえ行くわ!」

とブオンとロープは巨大な凶器を叩き付けて二人に襲い掛かる。三本を一本にまとめたことでリーチが伸びたそれは離れたところにいる二人に軽々と届く。さらにそれだけではない。関節が付いた三節棍は端を持てば強力な一撃必殺を与える、変則的な軌道を描く武器となり、真ん中を持てば両端を使った息もつけない近距離の猛攻が可能なる武器となる。確かに両手に持つよりも手数減ったかもしれないが、二人にとってみれば、軌道が読み辛くなりさらに攻撃のバリエーションも増え、こちらの方が明らかにやりづらくなっていた。

その猛攻に次第に押さえられていき、

「ぐふあ!」

ついに円柱がエースの腹部を捉える。しかし真ん中を持ったときは先程の威力は出ないらしく、ダメージは膝は震えるがエースはなんとか立てる程度に止まった。

「エース!...じゃん!」

とエースを心配しながらもサクラはローブの攻撃をかわし、何とか距離を取るも、

「ぐっ…じゃん…」

足で体を支えられず思わず膝をつく。

「まあずは、ひとおりめ…」

とローブは三節棍の端を持って攻撃しようとするが、

「これ以上サクラに手を出すな！」

エースの叫びによって思わずローブが怯む。それは紛れもない霸王色の覇気。エースが父親から譲り受けた王である才能だ。

「お前え、能力者あか？」

「お前の相手は俺だ！」

とローブの問いには答えずエースは震える体に鞭打って奮い立たせ、棍を構える。

「まああ、こいつの方があ危なあさそうだあ」

とローブは今度は三節棍の真ん中を持って接近する。ローブの猛攻を捌ききる体力なんてもう残っていないエースは一度下がって距離を置くが、ローブの狙いはそれだった。エースが距離を取る為に跳んだ瞬間にローブは三節棍の端に持ち変え、かわしよつのない空中にエースがいるときにリーチが伸びた凶悪な一撃を振るう。

しかしサクラだって少し辛いからといって兄弟を見捨てるわけがない。というよりローブは連れていく気満々だが実際にあれを喰らったサクラはあの一撃は下手すれば死ぬことくらい分かっている。だからどうにかするためにエースの元に走る。サクラは何か策を講じているわけではない。最悪この身を投げ出してでも止めるつもりだ。しかしそのときサクラは自分の体に違和感を感じる。それは悪い意味での違和感ではなく、寧ろ体から力が溢れてくるのだ。

「じゃああああん!!」

とエースに迫るローブの武器をサクラは片手で持った棍で打ち落とす。

「なあ!？」

「サクラ!?お前は下がってる!」

と自分を救った人物を見るなりエースは叫ぶ。

「じゃん、下がってるのはエースの方じゃん」

しかしサクラはエースの言葉を右手に持った完全に折れ曲がってしまった棍を捨てて言う。その事実によりエースは今のサクラならやつてくれるかもと期待して引き留めることを止め、寧ろサクラに全てを任せることにする。

「分かった。俺の棍を使い」

と言ってエースは自分の得物をサクラに差し出す。だが、

「じゃん、そんなんいらんじゃん」

とまたもやエースの申し出を拒否する。本来サクラが得意なのは杖術ではなく空手と柔道だ。本人も薄々感ずいているが、「覇気」にサクラは目覚めたが、それは熟練しているとはお世辞にも言えず、自分の得物に覇気を纏わせるまでではない。その証拠に先程の攻撃でサクラの棍が耐えきれずに変形してしまったのだ。

そんなサクラの自信を感じ取ったエースは、

「じゃああとは任せた」

とだけ言っつて緊張の糸が切れたのかそこに寝転んだ。

「はあなしは済んだあか!？」

とここで叫びながら棍で叩きつけてくるロープ。しかしそんなことはもう「見聞色の覇気」に目覚めたサクラはとっくに見切っている。

「はああああー」

さらに近付いてロープが猛攻を仕掛けるも、

「(右左上上下右右下上)」

いとも簡単に見切ってかわす。

「はあはあ…さあっきまでとおわまあるで別人だなあ」

と疲れが見え始めたロープ。これがロープが三節棍を多用しない理由である。一つ五百キロの巨大なコンクリートを二つまでなら振

り回せるロープも三つとなるとその負担は純粹に一・五倍さらに振り回したときの遠心力も効力するとその負担は指数関数的に増大する。しかし対するサクラだって満身創痍、いつ倒れても可笑しくない傷を負っている。だから二人とも短期決戦で決めに掛かる。

「はああああー！」

先に仕掛けたのはロープ。三節棍の真ん中を持ち巧みにそして今までより素早く巨大な武器を振り回しサクラに迫る。

「くっ…じゃんー！」

サクラはそれを“見聞色の覇氣”で正確に読むが、今度はサクラの体がサクラの思考に着いていけない。つまりサクラは自分が万全のときに相手が次にどう来てそして自分がどう相手を追い詰めるかのビジョンを組み立てたが、それは所詮自分が万全のときのものである。万全からほど遠い今ではかわし、距離を取ることと精一杯である。

そしてサクラが距離を取ったのを見計らって、ロープはエースを追い詰めたように三節棍を持ち変え、サクラを尻ぎ払うように振るう。

しかしそれは失策だ。サクラはロープの速さと手数の前に退かざるをおえなかったが、相手が一撃で仕留めに来るのならばサクラにとっては話は簡単になる。ただそれをかわして大振りをした直後を叩けば良いのだ。

「じゃん」

とサクラはふりまわされた円柱を足場にしてロープに向かって跳ぶ。そして拳を構えてロープの顎に向かって後はアッパーカットを

決めるだけというときにロープは笑う。そうまだロープの連撃は終わってないのだ。再びロープは三節棍を真ん中に持ち変え、一方でサクラを叩き潰そうとする。しかしサクラはそれに怯まない。やはりサクラは最後はかわすなんて小手先のことではなく真つ向から“武人”と呼ばれる男を力で叩き潰したいのだ。最後の最後で小手先に頼ってしまったては無理して海に出た意味がない。勝てば間違いなく格段に強くなる、死んだらそれまで、とサクラは頭の片隅でそんなことを考える。

そしてサクラの拳とロープの武器がぶつかり合う。

「じゃああああん!!喰らえじゃん!!」

とサクラの渾身の一撃は、

「があっ!!」

ロープのコンクリートの凶器を粉々に砕きそしてそのままロープの顎に突き刺さり、砕く。

ドシンと音をたててロープは倒れ、

「じゃん?体が動かないじゃん」

サクラも倒れる。両者とも身動き一つしない中、先に立ち上がったのは、

「はあああ」

ロープだ。

「なあかなかやる子供だったあ」

と三節棍の内残った二つを分解して呟くように言うローブ。この闘いの勝者はローブで敗者のサクラの命はローブの一存に委ねられている。少し前のサクラであればまたローブはサクラに船に乗るように勧めただろうがもうそんなことはしない。何故ならばサクラは船長である自分と同格、いやそれ以上の実力者だ。そしてそんな人間を船に乗せれば確実に内乱の元となるからだ。

「せえめて一息で仕留めてえやる」

とふらつく足取りながらローブは自分が「一千万超え」であるという意地、見栄、プライドで着実にサクラに近付いてゆく。そしてローブがサクラの真ん前にたどり着いたとき、

「だりゃああああ!!」

乱入者の棍がローブの顎に直撃した。

サクラの一撃によって碎かれた顎にさらに一撃をもらったローブは再び仰向きに倒れ二度と立ち上がることは無かった。

そして薄れゆく意識の中サクラが見たのは、

「サ…ボ……じゃん」

自分が店に置いていったもう一人の兄弟がローブを鎖で縛り上げている光景だった。

第三十六話 東の海で勝者は不可能な山分けを

「……知らない天井じゃん」

サクラが町の病院のある病室で目を覚まして言う。

「おっ、エース！サクラが目を覚ましたぞ！」

それに気がついたシルクハットの少年サボが隣でサクラのベッドで看病疲れだろうが、うつ伏せに寝てしまっているエースを揺すって起こす。

「……どうしたサボ……っておおサクラ！やっと起きたか、ネボスケめ」

とエースはサボに起こされて最初は不機嫌だったがサクラが目を覚ましたことに気がついてパアッと満面の笑みを見せる。

「おいおい＝おはよう＝ってのは太陽が出ているときに使う言葉じゃん。」

サクラは窓の外を見て、綺麗な満月がちゃっかり南の空に高らかと輝いていることに気がついて軽く笑いながら冗談を言う。

「エース、サボ、＝おはよう＝じゃん」

「……って言うのかよー！」

ビシッと綺麗に二人の突っ込みが決まる。

「(っ)たく、一ヶ月も寝続けやがって…心配したんだぞ…」

「『飯百五十回も逃したじゃん…』」

と多少暴走気味の見聞色の覇気でサボの心の中で思っていたことに反応してしまったサクラ。さりげなく一日五食計算だがこれは三人の中では常識だ。

「えっ?」

「じゃん?」

「えっ?」

上からサボ、サクラ、サボの順である。

「じゃん? サボ、今お前』たく、一ヶ月も寝続けやがって…心配したんだぞ…』って言わなかったかじゃん?」

「いや…俺はそう思ったけど口には出してないぞ」

サクラは内心『見聞色の覇気キター!』と狂喜乱舞しているのだが残念ながらサボたちにはそんなものを持ったなど言えるはずがない。そもそも『見聞色の覇気ってなに?』と聞かれてしまっただけは自分が転生者であることがばれてしまう。

だから、

「サボ…俺、エスパーになったのかもしれないじゃん」

とそれらしい適当なことを適当に言っておく。

「へええええ……えええええエ、エ、エ、エスパ―!?」

当然サボは驚く。

「じゃん、ローブと戦っていたときに死ぬかも、って思ったら突然ローブの次の攻撃が“聞こえてきて”じゃん…それが今も続いてるってことじゃん」

「へえー、そんなこともあんのか…俺も戦いに参加すればよかったな……」

と兄弟の思わぬレベルアップに軽いショックをサボは受ける。

「まあ、“可愛い子には死線をくぐらせる”とはよくいったものじゃん」

「言わねえよ……」

サボのキレた突っ込みが決まり、

「病院で騒ぐな……」

キレた医者ゴツンという綺麗な制裁という名の拳骨が決まった。

「……!?じゃあぁあぁん!!」

粉碎骨折した左の二腕に。当然ぶちギれるサクラ。

「オイコラヤブ医者―ぶっ殺してやるつかじゃん!?!」

今なら殺してしまってもサクラが正当防衛でギリギリ勝てるのではないかという気もするが、

「病院で医者逆らおうとは良い度胸だ。病院食に怪しげな薬混ぜるぞ」

「調子こいてましたじゃん。本当に生まれてきてすみませんでしたじゃん」

そんな怒りは二秒も持たなかった。海でコックに逆らったら死ぬように、病院で医者逆らったら軽く死ぬのだ。

「しっしっ、じゃん」

暴力的なヤクザ医師をサクラは追い払って、やっと三人きりになったところでサクラは多分状況を一番知っているであろうサボに問いかける。

「そつえばじゃん、サボ。なんで俺がここにいるじゃん？」

サボの懇切丁寧な説明がここで始まる。概要は、三人はレストランでケンカ別れをしたがなサボはんだかんだで心配だったので二人を尾行し、二人がロープの船の倉庫に隠れているときには一人でトイレに隠れていたとのこと。その後の戦闘ではピンチになったら助けようと思っていたがいざ二人がピンチになると恐怖で動けなくなり、恐怖で動けない自分の体に鞭打ってロープを殴ったところ意外と一発で仕留められて、そこから紆余曲折あり今に至るとのこと。

「それでよ、一旦俺達のお宝の隠し場所に戻らねえか？少し話したいこともある」

最後に神妙な雰囲気ですボが締め括る。

「まあ、そろそろ今まで稼いできたお金を隠し場所に置いておくことに異論は無いじゃん。でもその話するのは今じゃないと駄目かじゃん？」

とサクラは聞く。人目を憚らなくてはいけないほど重要な話とは何なのだろうか。

「ああ、ここじゃムズい。それに少し用心して急ぎたい。まだ怪我が治ってないサクラには心苦しいが」

「なに、気にすんなじゃん」

と謝るサボを全く咎めずにサクラは笑いながら言う。

「んじゃん、善は急げ」とも言っじゃん。だから今から戻るじゃん」

と勢いよくベッドからサクラは飛び降りて、

「つつつつじゃああああん……」

響いた左腕の激痛に絶望した。なんとか声を押さえて叫び声を小さく出来たのは奇跡である。

「ちて、やっとここに戻って来たじゃん」

と徐々に隠し場所に帰ってきたサクラは感慨深く呟く。

あの島からここに帰ってくる一週間でサクラの左腕を吊るしていた三角巾はとつくに取れていた。しかしまだエースとサボの二人はサクラに戦闘をさせる気は全くなく、帰路に出会った海賊は二人で蹴散らしていた。海軍支部に首を差し出すのは億劫な上、そんな時間も無かったので海賊たちは丁寧な海から突き落として、金品だけ拝借していった。勿論無利子無期限でだ。返すつもりは全く無い。

「今回の航海で俺たちの海賊貯金は今まで貯めてきた二倍以上になった」

隠れ家のツリーハウス中でサボが話し始める。堅苦しい言葉とは裏腹に、その表情は明るい。

「しかも力だって今までの倍以上だ」

「ああ、だが今それは問題じゃない」

とちやちやを入れるエースの話題をサボはぶち切る。

「本題に入るぞ。お前らが倒れた後、エースは直ぐに目を覚ましたから、一緒にお宝を出来るだけかき集めた後にローブを海軍に引き渡したんだけど、「えっ、ちょっと待つじゃん?」「……あ?」

「海軍からお宝をちよろまかして大丈夫だったのかじゃん?」

とサボを遮って、サクラは自分が懸念していることを聞く。本来は海賊のものは海軍のものとなるため賞金稼ぎが賞金首を捕らえてもお宝は手に入らない。手にはいるのは賞金のみである。しかしそんな規則はほぼ形骸化し、お宝を分けてくれる支部もあれば、全て譲ってくれる支部もある。しかし時々お宝をちよろまかして捕まる馬鹿もいるのはたしかである。

いつもは最年長のサクラが お宝をちよるまかした後に賞金首を海軍に引き渡している。ときより海軍からは怪しまれるが、そういうときはいつもサクラの巧みな話術で乗りきっていたのだ。

「あー、今回のやつは大丈夫だろ、お金にがめつそうだったけど。俺たちが抱えられる限界までお金を取っても全部のほんの一割程度にしかならなかったし。それにあいつ、頭悪そうだったし」

とサボが平然と言つてのける。二人が一杯に抱えても一割程度にしかならない程の宝の山とは、とそんなことには全く気付かず眠っていたサクラは少しだけ自分を呪つた。

「へえ、あいつつて誰じゃん？」

と頭が悪そうな男なら大丈夫か、と安心しておきながらサクラは一応聞いておく。

「たしか…海軍支部の少佐のネズミじゃなかったか？」さうだ！たしかそんなやつだった！」

「じゃあ…」

口ごもるサボをフォローするエース。大丈夫かと思いきや全然大丈夫じゃないやつの名前が出て驚くサクラ。たしかにあいつの頭は悪いだろうが、お金に関しては人一倍の嗅覚を発揮しそうでサクラは少し怖く思つ。

「つて、本来はそこじゃねーんだよー！」

と声を荒げるサボ。たしかに微妙に話が脱線している。

「じゃあさっさとその本題を言っじゃん」

どの口が言うんだ、とサボはサクラを睨み付けるが、サクラはどこ吹く風である。見聞色の覇気でサボの考えていることなんか手に取るように分かるがあえて無視する。これ以上話を拗らせる必要はない。

「ああ、海賊から奪ったお宝の中にこんなものがあつたんだ」

とサボは少し大きな箱を取り出す。この箱はそんなに価値の無い普通の箱だ。中には箱だけでウン百万するものもこの世界にはあるらしいがそういったことは全く無い、古びた傷だらけの箱だ。大切なのは中身である。

「おいおい」ねって…」

「ユウーじゃん」

「ああ、これは多分“悪魔の実”シリーズのなにかだ」

中身を知らないエースも箱を開けた瞬間に驚く。その中身はシルエットは葡萄のような果実だが、気味の悪い灰色をベースに所々渦を巻いた模様のあるそれは間違いなく悪魔の実シリーズのなにかである。

「当たりかハズレか分からないがどんなものでも売れば最低一億ベリ。どうするっ？」

—動物系（ゾオン）—超人系（パラミシア）—自然系（ロギア）のどの実を食べても普通は起こり得ないような現象を引き起こせるよ

うになる悪魔の実を食べて弱くなることはない。だが、斬撃にはめっぽう強くても、打撃が通ったり足が離れないという弱点があるバラバラの実よりも、その圧倒的火力で“頂上決戦”のときに悪夢のような雨を降らせた“マグマグの実”ではやはり百人中百人が後者を取るだろう。

悪魔の実シリーズ最強と言われる自然系は人気が高い。だが当然“自分が最強と勘違いした自然系の寿命は短い”。

「つーか、食うとしたら誰が食うんだ？」

と素朴な疑問を放つエース。一応止めを刺したのはサボだ。だがその一発しか打っていないサボに悪魔の実を渡して良いのかというところでもないだろう。逆にローブとの戦いで活躍したサクラはその後一ヶ月間眠ったままだったし、下っ端を一番倒したエースはローブとの戦いではあまり活躍していない。

今回自分が最も活躍したと思っている三人は悪魔の実を食べると泳げなくなるがそれでも悪魔の実を食べたいと思っている。この年は超人的な能力というものに憧れるものだ。

そこからサボが攻勢をかける。

「まあ、戦いの後ずっと寝てたサクラはまずあり得ないだろ」

「ああ？」

サクラはこれには怒る。サクラはローブを追い詰めて後もう少しまで追い詰めたと自信を持って言えるし、ハイエナのように手柄を取っ手だったサボがMVPだなんてサクラは認められない。

「……えええええー!!?」

三人の驚きの悲鳴はごみ山中に広がった。

サクラが後に図書館で悪魔の実図鑑を調べてわかったことだが、サクラが食べたのは超人系“ボロボロの実”で、それを食べた崩壊人間の体は非常に壊れやすくなりその結果、打撃や斬撃を無効化出来るということだ。

第三十七話 フーシャ村で四皇は当然の誤解を

「ダリやあああああー！」

とエースとサボが持ち前の棍で敵のサクラに襲い掛かる。対するサクラは徒手空拳。しかしそれはサクラがエースたちにはハンデを出した訳ではない。覇気をまだ武器に纏わせられないということもあるが、サクラは元空手全日本ジュニアチャンピオンであり三段、合気道と柔道は初段をたった十二才のときに取得してして、神童と呼ばれた才女なのだ。剣道も一級を持ってはいるが、本人としては無手の方がやりやすい。

「サボが正面から棍を降り下ろして、エースが右から薙ぐじゃん」

サクラがそういったその直後、サボが正面から棍を降り下ろして、エースが右から薙ぐ。それをサクラはサボのは一歩ずれるだけで回避して、そのままお辞儀をしてエースのをかわす。

「サボはそのまま突きでエースは棍を放棄して左フック」

そうサクラが言った瞬間にサボの突きがサクラに当たろうとするが、サクラは棍を軽く押し突きの軌道を変えてエースの拳にぶつける。

「いってえー！」

「叫ぶ暇は無いじゃん」

とサクラが踵落としを繰り返し、エースがそれをバックステップでかわす。しかしそれはサクラのブラフに過ぎない。降り下ろした左

足で確りと踏み込み、

「でりゃあじゃんー!」

飛び膝蹴り。knee him in the groin（日本語訳：彼の股間に膝蹴りを食らわす。出典、ジーニアス英和辞典）

エースはそれも間一髪だが、転がってかわす。格闘の技ではインファイトを越えるまさかの威力130だが外しても自分のHPの半分が削れるなんてことはない。

飛び膝蹴りを外したサクラはそのまま飛んでいき木を五本もへし折って綺麗に着地する。

「左右からの挟撃」

サクラがそう言った瞬間、エースが左、サボが右から襲い掛かる。

「はあああ……じゃんー!」

と少し溜めを作りタイミングを見計らって放たれたサクラの両拳は鉄製にもかかわらず、二人の棍をへし折って勢いを弱めることなくカウンターの要領で二人の顎も捉える。

「じゃん、これで今日俺も百戦百勝じゃん」

ここはゴア王国から少し離れた場所にあるジャングル。三人はあの後は海に出ることなく地力を上げていこうと四年間模擬戦などをやっていくことにした。当時のサクラはいくら覇気を使えると言っても身体能力が圧倒的に低かったせいで“ボロボロ”の能力による受け流しを使わなければ勝負にすらならなかったが、今では身体能力

も追い付きもはや能力を使わずに二人を相手取っても完勝できるほどだ。

だが折角手にした能力だ。そちらもサクラはちゃんと磨いていった。能力者だけが強者とは決して言えないが、能力もまた強者たる要因のひとつであることは決して不思議じゃない。寧ろ当然のことと言える。

そんな能力の披露はまた今度として、今は日課の一人百戦を終えて自主練を行っている。夕飯がてら猛獣と戦うもよし、棍の素振りをするもよし、極端な話、疲れを取るために寝ててもいい。

そしてサクラは体力を付けるついでに散策がてらにジャングルの中を駆け回っている。あわよくば『刺』なんかを体得出来ればいいなんて思っているが、六式はそんなに甘いものではなく一向に向上の兆しが見えないままだ。

そして、気が付くと町に出ていた。

町の雰囲気は一言で言えば平和そのものである。老若男女元気にあるものは商いを、あるものは漁で大量の魚を、あるものは畑を耕し、またあるものは花壇の花に水をやっている。まさに“平和の象徴”一東の海（イーストブルー）を体現しているような小さな村である。

そしてその中のあるお店から発せられる匂いに惹かれて今日の昼食をそこで食べることにサクラは決める。

「いんにちはー……じゃん？」

サクラが店の扉を開けるとそこはある意味“新世界”だった。ガ

ヤガヤと騒がしい店内。浴びるよつに酒瓶を傾ける屈強な男たち。トランプを取り出して賭け事を興じる男もいれば、殴り合いを興じる男もいる。そこは“平和の象徴”とは程遠い世界だった。

その中でサクラの目に留まったのはある一人の男。そのものである男の目立つ特徴と言えばなんとと言ってもその赤色の髪の毛だ。そう、その男とは“赤髪”のシャンクスである。

もうそんな時期か、なんてサクラには思っ余裕なんて全くなく、ただひたすら焦っていた。何故なら彼らは“海賊”でサクラはそういったらを狩る“賞金稼ぎ”なのだから。

シャンクスは賞金稼ぎだからといって問答無用で叩き斬るような人間ではないが、サクラは突然のことで少しパニックに陥り、疑心暗鬼になっていた。そんなときに、

「よお、お前。こっちに来て一緒に飲まねえか？」

突然そのシャンクスに話し掛けられれば、もう本格的にパニックに陥ってしまう。

『手鞠桜』――

別名ロケットパンチ。殴る瞬間に手首を壊して文字通り打撃を“飛ばす”。

「おっや」

厚さ五センチ鉄板すら紙のように貫通してしまうサクラの“飛ぶ拳”をシャンクスは驚くことなく、そしていとも簡単に酒瓶を持っていない左腕で防ぐ。しかしサクラの攻撃は止まらない。

『桜前線』！』

今度は身体全体を、左手と右足だけ残して“壊し”、シャンクスの元に飛んでいった右手に集まる。これがサクラの能力を使った移動手段だ。当然走るよりも速い。そして、

『蹴鞠桜』！』

今度は敢えて残しておいた右足を本体の元に“飛ばす”。そしてその勢いを殺さずにシャンクスの左腕を蹴る。

「おお、なかなかやるな」

今回は少しだけシャンクスは顔をしかめたがそれだけ、有効打であつたと言ひ難い。そして空いている右手で易々とサクラの右足を掴み、宙吊りにする。しかし簡単に捕まるサクラではない。

『桜前線』！』

身体全体を壊して残した右手に向かう形でシャンクスの手から脱出する。そしてサクラは自分の最高の手札を切る。

サクラは懐から中に何かが詰まった試験管を八本シャンクスの方に投げ、それを自分の銃で撃ち抜く。何十回もその動作をやっているサクラにとって試験管を撃ち抜くことは朝飯前だ。シャンクスの方サクラが銃を出したときは身構えたが、自分に銃口を向けられていないことが分かると、今度は何をやるのだろうかと目を輝かせて見ている。

サクラが撃ち抜いた試験管から出てきたのはピンク色の粉末、詳し

く言つと細かく”壊れた”サクラの髪の毛だ。

そして素早くサクラはマッチを取り出す。これからサクラがしようとしていることは自分も巻き添えを食らうが、サクラは今自爆覚悟の大技を出さなければシャンクスに殺されると勘違いしていて正常な判断が出来ていない。

そさてマッチを擦って、

「枯レ木ニ花ヲ咲カセマシヨウ、さくらまんか…」何子供襲ってんだよお頭」

何も出来なかった。シャンクスの右腕、ベン・ベックマンがサクラが自爆テロを行う前に、得物のライフルの台尻でこめかみを殴ったのだ。ガツンと鈍い音を立ててサクラは店の床に崩れ落ちた。

「うっ…」

暫くしてサクラが目を醒ますと、先ず目に入ってきたのは木張りの天井。そして起き上がると誰かのベッドに寝かせられていたことがわかる。しかも丁寧に布団もかけられている。そして周りを見回すと、

「やっと目を醒ましたか」

「この事態の元凶のシャンクスがいた。

「ひいっ、喰べるなじゃん…」

と叫び、怯えながらベッドから飛び起きるサクラ。そして、

「まあまあ、落ち着け」

「むべし」

と言いながらサクラの口に酒、それもかなり度数の高いやつ、をねじ込むシャンクス。流石は億越えの海賊、常識が通用しない。そこに痺れる憧れる。

「はひっ…じゃん？」

と生まれて初めての“酔った”感覚に戸惑うサクラ。

「落ち着いたか？」

とシャンクスが再度問うが、

「じゃんじゃん」

コクコクと頷きながらも酒瓶を一気に傾けて酒を飲み干すサクラ。シャンクスの話なんて当然耳に入っていない。

「じゃんじゃん…」

と飲み干すや否やまた眠りについてしまうサクラ。落ち着かせる為にサクラに酒を与えたものの落ち着き過ぎたと少し後悔するシャンクスだった。

「ひっ…ひっひっひっ」

そして再びサクラが目を醒ましたときに感じたのは激しくそして重い頭痛。所謂二日酔いだ。

「やっと起きたか」

と言ってサクラに水の入ったコップを出しながら言うシャンクス。

「うーありがとうじゃん」

二日酔いのお陰でずいぶん落ち着いたサクラは今度は叫ぶなんて真似はしない。

「あー、俺はどうしてここにいるじゃん? ……えーっと、修行で走ってたらいい匂いに惹かれて店に入ったらシャンクスがいてパニックた俺が暴れて……………どうしたのかじゃん?」

一度起きて泥酔した記憶が抜け落ちているが、取り合えず今に至るまでの自身の行動をサクラは振り返ってみる。

「済まないな、うちのモンがお前を殴って気絶させたんだ」

「いやいや、あの状況は暴れた俺の方が悪いじゃん」

と双方謝り合う。これで一応仲直りだ。

「ところでお前「サクラじゃん」「サクラって悪魔の実の能力者なのか?」

仲直りしたところでシャンクスがサクラに気になっていることを聞く。シャンクスは十中八九サクラが能力者だと思っているが念のため。十中八九の残り一、二の確率でサクラが唯のビックリ人間と

いうのも有り得るかもしれないのだ。

「ああ、勿論能力者じゃん。俺が食ったのは“ボロボロの実”じゃん。そんなもってそれを食った俺は身体を自由自在に壊せる”崩壊人間”じゃん」

「へえ、中々面白い奴だな、サクラ！」

とサクラと突然肩を組むシャンクス。この東の海では滅多にお目にかかれない悪魔の実の能力者、しかもなにかしら面白く、トリッキ―な一超人系（パラミシア）の能力者に出会えたシャンクスのテンションはうなぎ登りに上昇している。

「じゃあ、サクラの能力ってどんなことが出来るのか見せてくれよ！」

「おう、いいじゃん」

これが四皇と呼ばれる海賊の器の大きさなのだろうか、サクラは直ぐにシャンクスに打ち解けてしまった。

この日、サクラがシャンクスと遊び過ぎたせいで、エースとサボの元へ帰ったのは夜遅くとなり心配した二人に怒られたのはまた別の話。

第三十八話 フーシャ村で年長者は主人公との邂逅を

シャンクスと邂逅した後シャンクスは直ぐにまた出航してしまつたが、サクラはこのフーシャ村が気に入つた為度々ここに足を運んでいる。その時にサクラはルフィに会つたが、ルフィの方はシャンクスの仲間からサクラが初めはシャンクスに手を上げていたことと、賞金稼ぎであることを聞いていたため仲良くはなれなかつた。寧ろ突つ掛かつて来たのでポコして転がしておいた。当然唯の子供に能力を使うはずもない。

そして今回はサクラはエースとサボをここ、フーシャ村に連れてきた。目的はマキノの旨い飯を食わせるためだ。

「本当に旨いのかよ、サクラー？」

「ししっ、いいじゃねえか。サクラの奢りだって言うし」

サクラの奢りでだ。リスクがあるからあまりホイホイと人里に、しかもカモが殆んど居ない田舎に、降りたくない二人をここに連れてくる為にはサクラが自腹を切るしかなかったのだ。これで暫くサクラの財布が寒くなることは確定である。そう思いサクラは目から汗を流す。

「ああ、一応俺の奢りだが思わずお前たちが金を払いたくなるような飯を食わせてやるじゃんー」

とそれに、半分ヤケクソ気味にだが、叫んで言い返すサクラ。

「うわっ、めっちゃうめえ！」

口を開ければその口にチャーハンを掻き込むかチャーハンを絶賛するだけのサボに、ただなにも言わずにチャーハンを食べることに専念しているエース。どうやら二人ともマキノの料理が気に入ったようだ。しかしエースは直ぐに眠ってしまったが、食事中に眠るとは一体どんな神経をしているのだろうか。

「ふっふっーん。二人とも気に入ったようだなによりじゃん」

とその料理を初めて見つけた自分は大手柄だと言わんばかりにサクラはドヤ顔をきめる。

「流石はサクラ！最年長なだけはある！」

と今回ばかりはサボもサクラをべた褒めする。ただし、相変わらずエースは寝たままだ。

「「「」馳走さまでした！」「」」

三人で綺麗にハモって合掌をし、精算をする。

「言ったじゃん？スッゲー旨いって」

「「」だけど会計はサクラ、よろしく」「」

今回は二人だが綺麗にハモる。

「……………分かってるじゃん」

苦虫を奥歯で磨り潰したかのようなしかめっ面をしながらサクラは嫌々、本当に嫌々食事代を支払うことにする。マキノに渡すお金を手放さないように握りしめているのがその証拠だ。

サクラは三人の中で唯一銃を使う。当然ぶっつけ本番などではなく練習もする。そうなるかどうかしても弾代がかかってしまうのだ。そして運が悪いことに今丁度弾切れなのだ。

つまりどうしても出費が一番多いサクラは質素節約をなるべく徹底した生活を送りたいのだ。しかしそんなことが小さく感じられてしまうほど美味しかったのがマキノの料理だったのだが。

しかしここでお金を払わなくては食い逃げだ。確かにサクラたち三人はここら一帯どころか一東の海（イーストブルー）に名を轟かす悪ガキの“三悪童”であり昔は食い逃げなんて毎日のようにしていたのだが、それをしてしまったらもう二度とこの店には入れないだろう。当然だ。どこの世に食い逃げ犯を招き入れる飲食店があると言うのだ。それはもったいない。こんなたった一回食事代をけちって二度とマキノの料理を食べられなくなるのは非常にもったいない。だが、お金も惜しい。そんな葛藤にさい悩まされながら、サクラはマキノにお金を差し出しながらもそのお金を手放そうとはしない。

「ププツ…クククツ……………」

それを見てエースとサボは笑を堪えている。取り合えずこの二人は後でシめるとサクラは胸に誓い血涙を出しながらも貴重な、本当に貴重なお金を手放す決心をする。

しかしそこに天使が舞い降りた。

「えーっとサクラくん、そんなにお金があるならツケでもいいわよ？」

「……ツケ？」

「うん。今はお金を払わないでおいて今度来たときに今回とその時の食事代を払って」と

「……マジかじゃん？」

「うん、だってサクラくんには随分と鼻頂にしてもらってるから」

と血涙を袖で拭いながら聞くサクラに、それに天使のような笑顔で答えるマキノ。

二人の会話の意味が分からずキョトンと首を傾げるエースと、会話の意味が分かってサクラが自腹を切らなくてもいいという大変面白い展開になり舌打ちをするサボ。それをみてサクラはサボはさらに十割増でシめると心に刻み込む。それはもうサクラの手札を一枚切ってもシめると決心したほどだ。

久々にサクラはエースたちとの模擬戦で能力を全力全開で自身を全壊させ、二人を完膚なきまでに叩きのめした。特にサボには攻撃の“こ”どころか行動の“こ”すら与えずにぶちのめした。今回はサクラが二人に実力の差を明確に分からせる良い機会となっただろう。

その数カ月後、またシャンクスたちがフーシャ村にやって来た。今回もシャンクスたちはマキノの店を貸し切って宴会をしている。そしてこの日は、ルフィもサクラも一緒に来ていた。

「あー…お前はここの前の賞金稼ぎー」

「よおじゃん。」この前の雑魚ガキじゃん」

桜ラを見るなり威嚇を始めるルフィに年上だからかそれとも、実力が上だからか余裕の表情の桜ラ。

「シャンクスを倒しにきたのか!？」

「ちげーじゃん」

ルフィは友達の心配をするがそれはお門違いだろう。桜ラには桜ラの友人でもあるシャンクスに手を出すつもりは全くなければシャンクスをどうにかできる実力も全くない。

「うるせえー俺は騙されねえぞー」

とあくまで桜ラを信じないルフィ。寧ろルフィは桜ラを殴りたいだけなのかもしれない。

「俺のパンチはピストルみたいに強いんだ!」

と拳を構えるルフィ。ただしリーチが足りなかった。

「はいはいじゃん」

ルフィよりも腕が長い桜ラの方が攻撃は先に決まる。桜ラがルフィの拳を振る前に素早くルフィの額に拳を突きだしそのうちの中指だけを弾く。所謂デコピン。その一点に桜ラの込められうる全てのエネルギーを収束させ、ターゲットには最小面積で最大威力というとてもない圧力で解き放つという凶悪な技である。

というと言い過ぎではあるが、ちゃんとルフィはカウンター席から

反対側にある入り口まで吹き飛んだ。そのことから分かるようにサクラのデコピンには凶悪な威力が宿っているといえる。

「いってえー！」

「ふぶんじゃん」

なんとも大人気ないサクラである。

バン！と一発の銃声が鳴り、少し離れたリンゴが砕ける。後でスタッフが美味しくいただきました。

「おおー、スッゲー！」

「離れた蟻の眉間だつてぶち抜けるぜ」

とルフィが見事に狙撃を成功させたヤソップに目を輝かせる。

「あんな距離なら俺だつて出来るじゃん」

と不貞腐れたように言うのはサクラ。サクラはあの程度で目を輝かせて誉められるのが面白くないのだ。

「へえ〜じゃあやってみ」『バン…』

ヤソップが言い切る前にサクラはその隣にあつたリンゴを撃ち抜く。しかもリンゴには目を向けず、加えて地面の石に跳弾させてだ。

「…………やるな」

と素直に感嘆の声を漏らすヤソップ。彼ほどの狙撃の実力者ともなれば今のサクラの芸当が決してまぐれでないことが分かる。確かにこれ程度の距離なら百回に一回は当たる"かもしれない"。あくまで"かもしれない"なのだが一応起こりうる事象だ。だが石に当たてから跳弾で撃ち抜くとなると話は別だ。もしそれがまぐれならばサクラは向こう来世十回分の幸福を使い果たしている。それほどの奇跡だということだ。

結局その後ヤソップとサクラは狙撃対決をすることになるが、距離を五倍にしたところでサクラが外し、勝負はヤソップの勝ちとなった。

「この銃声が安モンだから外したんじゃない！」

しかしここは子供だからか素直に負けを認めたがらないサクラ。実際サクラの得物の銃は偶然ゴミ山で拾った中古の粗悪品だ。ただしもしサクラが良い銃を持ったとしてもヤソップはこの距離の十倍でも百発百中出来るからサクラには勝ち目がないことをサクラは知らない。

「おいおい、一流は道具のせいにはしないんだぜ？」

とおちよくなるように返すヤソップ。赤髪海賊団の連中はお調子者で人をいじるのが好きな人が多いようだ。実際シャンクスが気に入る人間はそんな人間なのだから当然だろう。

「じゃあヤソップはこれでやってみるといいじゃん」

とサクラは自分の銃を差し出すが、

「はあ!?こんな安モンで出来る訳ねーだろ！」

「出来ねーのかじゃん！」

一蹴され、サクラがそれに突っ込む。二人は中々仲が良いのかもしれない。

「それに俺が得意なのは狙撃じゃなくて連射じゃん」

とサクラが見栄を張る。

「へえ、じゃあやってみろ」

とヤソップが言うが、

「でもこの安モンには連射機能付いてねーから無理じゃん！」

「付いてねーのかよー！」

今度はサクラが一蹴し、それにヤソップが突っ込む。

本当に二人は仲が良い。

結局これを機会にサクラはルフィとも仲良くなった。以前は憧れの海賊の首を付け狙う、いけすかない年上だったのだが、今では割りとは何でもできて強くて優しくて頼りになるお兄さんといったところだ。以前の印象と比べると大きくクランクアップしている。それに比例してルフィはサクラに付きまとうようになり、サクラの方も“向こう”に居たときの弟と雰囲気は被るからか優しく接している。今ではとっても良い“お兄さん”というのがフーシャ村一同と赤髪海

賊団一同の印象だ。

時に遊んだり、時に稽古をつけてもらったりと騒がしくとも平和に数カ月が過ぎていった。今のこんな平和な状態では誰も海賊がこの村に定期的に停泊しているだなんて信じられないだろう。

しかし当然時が過ぎれば原作開始の時に必然的になる。しかしサクラはここを原作通りに進める気は全くない。サクラは黙って友人が隻腕になるのを見守るほど薄情ではない。そんな薄情であれば無茶をして格上の化け物" 武人" ロープには挑まない。懸賞金八百万" 山賊" のヒグマがどうした。サクラはそれとは比べ物にならない程の実力者" 武人" ロープを倒しているのだ。今のサクラなら朝飯前に鼻くそをほじりながらもヒグマを倒せる。

そしてサクラは百通りのヒグマを倒す手段の内どれを取ろうかと考えながらシャンクスと酒を飲みながら思案する。

第三十九話 フーシャ村で能力者は得意気な自慢を

「おれは遊び半分なんかじゃないっ!!もうあったまきた!!証拠を見せてやるっ!!!」

シャンクスがフーシャ村に訪ねてきたある日、ルフィが港に停泊しているレッド・フォース号の船首で高らかに宣言している。

そう、原作の始まりだ。

「だっはっは、おう!やってみる。何するか知らねエがな!」

「またルフィが面白エことやってるよ」

とシャンクスが囃し立てそれに赤髪海賊団の一人が呼応する。

何をするか分かっているがサクラもこの場にいるが、ルフィを止めるなんてことはしない。どうせ止めても何時かまたやるだろうし、後遺症が残るわけでもない。無鉄砲なルフィには丁度良いぐらいに思っているだろう。

「ふん!!」

そしてルフィが左手に持つナイフを左目に突き立ててブズリと刺した。

「!!!」
「!!!」
「!!!」

赤髪海賊団一同は驚愕し、

「ぶあっはっはー！」

サクラは爆笑した。

「いつってエ~~~~っ!!!」

「バ…バカ野郎、何やってんだア!!？」

「いて~~~~よ~~~~っ!!!」

「ぶあっはっはっはっは!!」

泣き叫ぶルフィに、パニックに陥る赤髪海賊団、そしてその光景に笑いを堪えるつもりもないサクラ。中々のカオスだ。

「野郎共乾杯だ!!ルフィの根性とおれ達の大いなる旅に!!」

マキノが経営する酒場、PARTYS BARでシャンクスの音頭で赤髪海賊団は宴会を始める。酒を飲む者、肉を食べる者もいれば、肉を取り合う者もいる。彼らに共通して言えることは、

「「「ぎやはははははは「「「」

皆が笑っていることだ。いかに海賊が自由に楽しいかを物語っているかのようである。

そんな中、カウンター席に座っているのは三人。ルフィとシャンクスとサクラだ。この前シャンクスに飲まされてすっかり酒の味を気に入ったサクラは子供ながらに安物のエールビールを煽るように飲

んでいる。サクラは高い酒だろうが安い酒だろうがアルコールさえ入っていればそれでいいという、ある意味では酒の良さが分かっていないような飲酒愛好家だ。

「あー、いたくなかった」

メニ涙を浮かべながらルフィが言う。当然やせ我慢である。

「…………お前マゾかじゃん？」

とルフィのやせ我慢に答えたのはサクラだ。

「マゾ？マゾってなんだ？」

しかしルフィには早すぎる単語だったのかもしれない。

「ああ、マゾってというのは自分が傷ついたり痛め付けられるのが気持ちいってという変態のことじゃん」

と軽くマゾについて解説する。

「おれはマゾじゃねえ！だってさっきの痛かったのも全然気持ちよくなかったし！」

と断言するルフィだったが、それはサクラのルフィに墓穴を掘らせる畏だった。

「ほら痛かったんじゃん」

「痛くねえ！」

決してサクラが指でつついたわけではないが、痛いところを突かれたルフィは直ぐに虚勢を張る。

「はいはいじゃん」

と少しそれに呆れ気味に答えてまた新しい酒瓶を傾けるサクラ。

「あつ、マキノさんこれおかわりじゃん」

とルフィとシャンクスに興味を失ったサクラは今度は料理に関心を向ける。

「はいはい」

と相変わらずにつこりと笑みを浮かべて直ぐにおかわりを出すマキノ。仕事が速い。

「ルフィ、あなたも何か食べてく？」

「ああ、じゃあ“宝払い”で食う」

とシャンクスから貰ったジュースだけじゃ可哀想だろうとマキノは聞き、ルフィがそれに答える。

「でたな、“宝払い”!お前、そりゃサギだぜ」

「違う!!ちゃんとおれは海賊になって宝を見つけたらカネを払いに来るんだ!!」

「ふふふ!期待して待ってるわ」

シャンクスは茶化すが、マキノは口では子供の夢を否定しない。ただし期待半分残りは期待していないといったところだ。この酒場はシャンクスたちが落としていく金で今相当儲かっているて子供一人の食事を奢ることくらいいわけないのだ。

「邪魔するぜエ」

バキ！と乱暴にドアを蹴り壊して大柄の男たちが店の中に入ったきたのは自称第一級のお尋ね者の八百万ベリーの賞金首、"山賊"ヒグマだ。

「ほほう…これが海賊って輩かい…初めて見たぜ。間抜けな顔してやがる」

ノソリと大物ぶって歩きながら独り言を呟くヒグマ。たしかに一東の海（イーストブルー）では第一級のお尋ね者かもしれないが、実力も懸賞金もシャンクスの足元にも及ばないことを知っているサクラからするとなんだか滑稽にすら感じられる。サクラだってかなり頑張っで負けようと努力してもヒグマに負けることは非常に難しい。

「おれ達は山賊だ。 が…別に店を荒らしに来た訳じゃねエ。酒を売ってくれ、樽十個ほど」

と自慢の顎髭を撫でながらヒグマはマキノに言う。サクラはどのタイミングで襲い掛かるうとヒグマを一発で沈めることが出来る。だが肝心なのはタイミングだ。どのタイミングでヒグマに襲い掛かれれば一番面白いが、それがサクラの問題だった。

「しめんなさい。お酒は今ちょうど切らしてるんです」

とマキノは謝る。

「んん？おかしな話だな海賊共が何か飲んでる様だがありゃ水か？」

「ですから、いま出ているお酒で全部なので」

と機嫌が悪そうに聞くヒグマにそれに少し怯えながらも答えるマキノ。陽気な海賊とは違い荒れていて血の臭いがする山賊を怒らせないようにとマキノも必死だ。

そこにシャンクスが油ならぬアルコールを注ぐ。

「これは悪いことをしたなア。おれ達が店の酒、飲み尽くしちゃったみたいですね。これでよかったですらやるよ、まだ栓もあけてない」

とって瓶を一つシャンクスは差し出すが、それがヒグマの気に障ったようだ。

バリインとヒグマは瓶を叩き割る。

「おい貴様、このおれを誰だと思っている。ナメたマネするんじゃないねエ……」

そしてヒグマがグダグタ言っている間サクラはただ震えていた。勿論怯えたからではない。怒りに震えているのだ。

「『ナメたマネするんじゃないねエ』……？それはこっちのセリフじゃん」

「ああ？」

シャンクスはサクラの友人だ。そしてサクラは友人がやられて

黙っているほどできた人間ではない。

「おーおー、ゆったりまったり機を窺おうと思ってた俺が馬鹿みたいじゃん。随分とナメたマネしてくれんじゃねえか、”シャンクス”!!」

「……えー……!?」

ドゴアとサクラはそう言うや否やシャンクスを蹴り飛ばす。その光景にサクラ意外の全員が驚く。驚いたシャンクスも想わず蹴り飛ばされる。そして吹き飛んだシャンクスが仰向けになった瞬間に、サクラはシャンクスに飛び乗りマウントポジションを取る。

「おい、俺が一番大切にしているのは”兄弟”と”酒”って何時もいつてんじゃん、ゴルア!!」

そしてゴスツ、ゴスツと何度も何度もシャンクスの額に頭突きしながらサクラはその胸の内を叫ぶ。

「おい、そんなこと初めて聞いたぞ!」

とシャンクスは反論するが、

「ああ!? 友達だろつがじゃん! それくらい察しろじゃん」

「おいおいそれは無茶だろ!」

狂戦士サクラには通用しない。

子供にいいようにやられているシャンクスを見て山賊たちは、

「酒がねェんじゃ話にならねェ。別の町に行くぜ。じゃあな、腰又ケ

共

と店を去っていった。

「なにしてんだよ、サクラー！」

と山賊が去った後もひたすら頭突きを続けたサクラーは結局またベックマンにライフルでぶん殴られて止められ、その後シャンクスが山賊に馬鹿にされた原因であるサクラーにルフィが文句を言い続けることになった。それに関してのサクラーの言い訳は、

「酒って怖いじゃん」

と非常にシンプルなものだった。念のために言っておくが、サクラーは酒に吞まれて酔った勢いであんなことをしたのではなく、逆に酒を飲めなくてあのようなことをしたのだ。

酒は飲むものであって吞まれてはいけない、と言つが飲めなくてもあのような凶行に走ってしまうものなのだ。皆も注意すべきである。特に未成年はアルコールの影響を受けやすいから絶対に飲んではない。

「裏切り者なんてもう知らん！」

俺は怒っている、と全身でアピールしながらルフィも店から去ろうとするが、

「おい、まてよルフィ……」

その腕をシャンクスが掴んで、

「しるかつ!!もう知らん、裏切り者がうつる!!」

「「「「
!!??
「「「「

止められなかった。

ビヨンとシャンクスに掴まれたルフィの左腕が伸びてルフィを引き留めるには至らなかったのだ。

「手のびた…!!こりゃあ…!!」

「まさかお前……」

「何だこれあゝゝっ!!!」

と赤髪海賊団一同とそして腕が伸びたルフィ本人もこれには驚く。

「ぶわっはっはっは!!」

そして何があったのかを知っていて、そして目撃していたサクラはまたもや爆笑する。

「ないっ!!敵船から奪ったゴムゴムの実が!!!!」

「何イ!?!」

「ルフィ、お前まさかこんな実食ったんじゃ……!!」

「……っん、デザートに……!!まずかったけど……」

ラッキー・ルウが紙に毒々しい木の実の絵を描いてルフィに聞くが案の定ルフィの答えはイエス。ルフィは原作通りに悪魔の実シリースの超人系（パラミシア）の「ゴムゴムの実」を食したのだった。

サクラからしてみれば原作で見た光景を実際で見て感動してはいが、頭の片隅では『もうちょっと明らかに攻撃的な実にならなかつたのかじゃん…』と原作通りになったのがつまらないなと思ったりしていた。

「ゴムゴムの実はな、悪魔の実とも呼ばれる海の秘宝なんだ!!! 食べば全身ゴム人間!!! そして一生泳げない体になっちまうんだ!!!」

「えーーーーっ!!! うそーーーー!!!」

「バカ野郎オーーーーっ!!!」

シャンクスがことの重大さを伝え、ルフィもことの重大さを思い知ったのか思いつきり口を開けて泣き叫ぶ。

「まーまールフィ、でも能力者も悪くないじゃん」

とこの中でルフィを除いて唯一の能力者のサクラがルフィを慰めにかかる。

「まず能力者になると他の奴には出来ないことが出来るじゃん。つまり他の奴よりも強いってことじゃん」

たしかに悪魔の实の能力者が絶対的強者でないことはたしかだ。非能力者で後の四皇シャンクスや泳いで海王類を仕留める海賊王の右腕“冥王”シルバーズ・レイリーが言い例だろう。だが悪魔の实を食べて弱くなることはあり得ない。必ず強くなれる。と自身も悪魔

の実際の能力者であるサクラはそう信じている。

「なんでそんなこと言えんだ……」

とさっきのことがショックだったのかしよげたルフィが下を向きながら聞く。

「顔をあげるじゃん、ルフィ」

「ん…!？」

論より証拠、とルフィが顔を上げた瞬間にその顔面をサクラは思いつき殴り飛ばす。

「なにすんだ、サクラ！」

とそれに対してルフィは当然怒るが、

「なあルフィ、今の痛かったかじゃん？」

「……あれ？全然痛くねえ」

覇気を込めなかったサクラの拳はゴム人間となったルフィには通用しない。

「じゃあルフィ、今度は俺を殴るじゃん」

「おりゃあああ………あれ？」

そして覇気の込められていないルフィの拳は崩壊人間のサクラには通用しない。

ボフンと音をたててサクラが壊れてルフィの打撃を軽く受け流す。

「まあ、こんな感じで悪魔の実は結構便利じゃん」

「おう！これでおれのピストルぐらい強いパンチをもっと強くしてやる！」

そして悪魔の実の能力の良さを肌で実感したルフィは早速機嫌を直し直ぐに自分の能力開発に取り掛かるのであった。

子供なんて単純だ。

第四十話 フーシャ村で崩壊者は初めての試運転を

前回の山賊たちとの絡みから数カ月が経った。今ではサクラとルフィの仲は中々良好になっている。

そしてサクラはエースとサボと一緒によくマキノの酒場に来るようになったが三人でいるときは何故か奇跡的にルフィと会うことはなかった。

「もう船長さん達が航海に出てながいわね。そろそろさみしくなってきたんじゃない？ルフィ」

とカウンター席に常連のサクラとルフィしかいない酒場でマキノがルフィに聞く。

「ぜんぜん！おれはさみしくねえぞ！」

「とか言いつつ夜な夜な枕を濡らしてんじゃないやねえかじゃん、ルフィ？」

ときつぱりとルフィは否定するも、サクラが茶々を入れる。

「枕をぬらす？おれはいつも肉の夢を見て枕をぬらしてるぞ？」

「……いやお前はもうそれでいいじゃん」

しかしこれはルフィには早すぎたのかもしれない。

「むっ、今馬鹿にされたきがするぞー！」

「違つわよ、ルフィ。サクラはルフィはありのままのあなたが良いって誉めてるのよ」

「おおーそうだったのか！なんかありがとうな、サクラー！」

「(ルフィ、マキノさんに言いくるめられてんじゃん…)」

流石は酒場の店主マキノである。相手を宥めるのなんかはお手の物だ。

そんなときにある団体が来客する。

「邪魔するぜ」

「!!」

「げ」

山賊たちの来客にあからさまに嫌な顔をしたのはルフィだ。サクラの方はやっと来た、とテンションが最高潮である。前回は不幸な事故があり八百万ベリーもの大金を逃してしまった。しかしサクラ今回は逃すつもりはない。それに能力の本気を人に試す良い機会だ、逃す訳がない。

「今日は海賊共はいねェんだな、静かでもいい…また通りかかったんで立ち寄ってやったぞ」

と言いながら山賊の棟梁のヒグマが席に座り机を叩きながらマキノを急かす。

「何ばーっとしてやがる、おれ達ア客だぜ!!酒だ!!!」

ここでサクラはタイミングを完全に間違ったことに気が付く。ここで山賊を一網打尽にすることはサクラにとっては朝飯前だ。だが確実に相手は抵抗し周りは巻き込まれる。ゴム人間のルフィは大丈夫かもしれないがたたの人間のマキノは万が一流れ弾を食らうなんてことになったら洒落にならない。もし流れ弾が当たらなかつたとしても確実に店は滅茶苦茶になるだろう。

だからサクラは山賊が店に入る前に、広い道で叩き潰すべきだつのだ。それに気が付いたサクラは自分の浅はかさを悔やむ。

「はっはっはっはっは!!」

「あの時の海賊共の顔見たかよ？」

「酒ぶっかけられても文句一つ言えねエで!!」

「情けねエ奴らだ!!はっはっはっはっはっは!!」

と店内に来て酒が回ると直ぐに酔い、山賊達はシャンクス達を好きだよつに言っ。

「おれアああいう腰ヌケ見るとムカムカしてくんだ。よっぼど殺してやるつかと思っただぜ」

実際にいざこざが起こればシャンクスが直々にでたならば山賊達は束になって掛かっても秒殺されるとわかってるサクラにとっては、今はいざこざを起こさない為に笑いを堪えるので必死だ。ここは無法地帯のごみ山ではなく平和なフーシャ村の酒場なのだ。TPOは弁えなくてはいけないのだ。

「海賊なんてあんなモンだ。カツコばっかで「やめろ!!!」「……ああ!?!」

しかしルフィは堪えきれなかった。好き放題言うヒグマをルフィは怒鳴り付ける。

「シャンクス達をバカにするなよ!!!腰又ケなんかじゃないぞ!!!」

「やめなさい、ルフィ!!」

マキノが止めに入るがルフィは止まらない。

「シャンクス達をバカにするなよ!!!!」

それに対して沸点の低いヒグマはぶちギレた。

「ナメたマネするんじゃないやねエ、ガキが」

ヒグマはガツチリとルフィの肩を掴み店の外に出て、他の山賊達もそれに付いていく。当然酒の代金は払っていかない。

「ルフィ!……村長に知らせなくちゃ!」

とマキノは急いで店を出ようとするが、サクラがそれを止める。

「その必要はないじゃん」

ぼすっ、と札束をカウンターに置いてサクラが振り返る。

「ここに五百万ベリーあるじゃん。これをこいつらの代金ともしもの時の村の復興費にしてくれじゃん」

「え？え？」

としかしマキノはいまいち合点がいかない様子だ。

「要は俺が山賊を止めてくるじゃん」

「え!?そんなの無理よ!だってあの人達は山賊なのよ!?子供がどうにか出来る相手じゃないのよ!」

漸くサクラのしようとしていることが分かり、それをマキノは止めようとする。しかしサクラは止まらない。そもそもサクラは止まる必要がないのだ。なぜなら、

「千二百万ベリ」

「え？」

「俺が倒した最高の賞金首じゃん」

カウンター席から宙返りで店の出口まで行きサクラは少しカッつけて、しかし嘘つきではないので括弧は付けずに言う。

「つまり凄腕賞金稼ぎ[＝]三悪童[＝]のサクラにとってはあんなやつらなんて朝飯前じゃん」

「本当におもしれエ体だな」

「本当だな。殴っても蹴っても効いてないらしい」

サクラが外に出ると山賊がルフィを囲んで好き放題していた。

その光景にサクラはぶちギレル。前は不幸な事故によりそうはいかなかったが、サクラは友人がやられていて相手を許すほど優しくはない。"向こう"にサクラがいたときも友達を守るためなら複数人の男子に喧嘩を売ったほどだ。しかも忘れがちだがサクラは"向こう"では女であるのにも関わらずだ。

「山猿が…調子乗んなじゃん！」

ぶちギレたサクラはダッシュで山賊達に近付き、近くにいた山賊の顎を殴る。顎にサクラの覇気を纏った必殺の右ストレートを食らった男はその一撃で意識を刈り取られ倒れた。

「てめエはあの時のガキか！」

突然仲間を倒されたヒグマはその下手人の幼い容姿に驚く。

「"自称"第一級の犯罪者で懸賞金"たった"八百万ベリーのヒグマ、その首は俺がもらつじゃん」

とカッコつけてポケットに両手を突っ込み余裕の表情でサクラは言う。

「賞金稼ぎか…まあ怪我せんうちに逃げ出いな。それ以上近づくと撃ち殺すぜ、ガキが」

とルフィを痛め付けることに夢中なヒグマはサクラの相手は面倒だと逃げ出すように言う。

しかしサクラは従わない。どんどんヒグマに近付いていく。

「てめエ聞こえなかつたのか!? それ以上近づくな。頭吹き飛ばすぞ。ハハハハ!!」

とそんなサクラのこめかみに山賊の一人が銃を突き付ける。

それにサクラはニイト、悪人のような笑みを浮かべてバンと、迷わず銃の引き金を引いた。

「なっ…!?!」

自分のこめかみに標準が合わせられている銃の。しかしサクラは倒れない。一超人系(パラミシア)“ポロポロの実”を食したサクラに覇気を纏っていない一撃なんて攻撃していないことと同義だ。

「ほっじゃあ」

と自分の銃の弾丸を頭に食らった筈なのに倒れない目の前の子供に驚いている山賊をサクラはともえ投げの要領で上に投げ飛ばす。そして両手をその上向きになっている山賊に向かって“壊し”投げ、右手と左足を掴む。そして壊した両手を山賊を掴んだまま引き寄せ。そして落ちてくる山賊の背骨をサクラは、

『垂れ桜』

回し蹴りでへし折る。

「人数をかける! 剣持ってる奴で囲んで切り刻め!」

銃が通じないと分かると直ぐに剣に切り換えるようにとヒグマは部下に指示する。そして棟梁の言うことを忠実に部下はこなすがしかし残念ながらサクラの能力はそんなことでは破れない。

ポフツと乾いた音が軽く鳴り、サクラが散り散りに“壊れる”。

「「「「!?」」」」

「消えた!？」

それに山賊達は驚き、ヒグマは逃げたと勘違いする。当然それは勘違いで、サクラは逃げてなどいない。

唇だけを直してサクラの唇はサクラの最高の手札の内の一つの名前を紡ぐ。

「酔ヒ倒レルホド飲メ花見酒『桜吹雪』！」

ゴツと散り散りに“壊れて”いたサクラの全身が一気に唇に流れ込みサクラを作り上げる。延長線上にいた山賊の体を貫通して。

数万もあり拳銃以上の速さが出るサクラの破片は最早散弾だ。凶悪な威力のそれは一瞬で山賊達を血の池に沈める。

「いやーこの能力、中々使い勝手が良いじゃん」

そんな惨劇を起こしたにも関わらずサクラは一人ヘラヘラと笑っている。

それから一分もかからずにヒグマ以外の全ての山賊が地面に倒れ伏した。しかも今回は能力を全く使わずにだ。伊達に数年間覇気使いをやっているわけではない。確かに覇気使いが絶対的強者とは限らないが平和ボケした一東の海（イーストブルー）のさらにと田舎で

いきがっている半分チンピラのような犯罪者には十分である。

「港に誰も迎えがないんで何事かと思えば…いつかの山賊じゃないか」

「ここでシャンクスが来るが遅すぎた。もうこの山賊達はサクラの獲物だ。誰が何と言おうともサクラの獲物だとサクラは決めている。

「ルフィ！お前のパンチは銃のように強いんじゃないか？サクラに任せっきりじゃないか」

「………!!つるせエ!!」

とシャンクスが茶化すが、踏みつけられているルフィは怒鳴る。

「じゃんシャンクス、こいつらは全員俺の獲物じゃん。手出しは無用って言うか絶対出すなじゃん」

「わかってる」

とサクラとシャンクスはヒグマを無視して会話するがヒグマは怒らない。何故ならこの会話の終わりが自分の寿命と分かっているからだ。寧ろ自分を無視してじゃんじゃん話込んでほしいくらいだ。

「その代わりに面白いものを見せてやるじゃん」

と会話と自分の寿命が終わったとヒグマは顔面を真っ青にしながら悟る。だが最後に少しだけ自分の運に賭けてみる。

「来いガキ!!」

「うわっ!!くそ!!はなせ、はなせエ!!!」

ボウンと煙幕を張ってルフィと共に消え去るヒグマ。

「ルフィ!!し!し!しまった!!油断してた!!ルフィが!!どうしよう、みんな!!」

「うるたえんじゃねエ!!お頭この野郎っ!!みんなで探しゃあすぐ見つかる!!」

「……ったくこの人は……」

それに狼狽えるシャンクスにそれをしかりつけるラッキー・ルウ。そしてそんな光景に呆れるベン・ベックマン。そしてサクラは、

「あっはっは!」

笑っていた。

「あいつのミスは人質を連れていったことじゃん」

そうサクラはさっきのルフィの飲み物に自分の“壊れた”髪の毛一欠片仕込んでおいたのだ。もしもヒグマがルフィを連れずに逃げていたら運が良ければ逃げ切れたかもしれないが、ルフィを連れてきてしまったら百パーセント逃げることは出来ない。何故ならサクラは自分の“壊れた”部分に体を集めることが出来るからだ。つまりヒグマは発信器を持って逃げ出していたことになる。

『『桜前線』』

そしてサクラはルフィの元へ体を“壊して”向かっていった。

第四十一話 フーシャ村で蛙は冷静な自己解析を

「連れてきたじゃん、シャンクス」

それから約三分でサクラはルフィとヒグマをシャンクスの前に連れてきた。

「んじゃん、改めて俺の新必殺技を見せてやるじゃん」

とそう言い腰を抜かしているヒグマをまずは自分の足で“壊し”飛ばし蹴る。

『蹴鞠桜』

そして直ぐに肉薄する。

『桜前線』

ここまではサクラの鉄板コースだがここからが違つ。

そのままサクラはヒグマに体当たりをして自分の全身を“壊す”。

「ひいつ、あの技かー！」

とさっきの自分の部下十人近くを一撃で葬つた『桜吹雪』が来るとヒグマは思ったが、それは勘違いだ。今からやろうとしているサクラの必殺技はもっとタイマン向きでもっとエグい。

「望ム八幾千モノ桜並木『御花見宴』！」

何処からか聞こえてきたその言葉を合図に突然現れたサクラの右腕がヒグマを殴り飛ばす。そして殴り飛ばした先に突然左足が現れ、ヒグマを蹴り飛ばす。そして蹴り飛ばした先にはサクラの頭があり……とそれをひたすら繰り返す。サクラはヒグマを結構派手に飛ばしているがヒグマの衣服にサクラの一欠片がくっついている時点でヒグマはもうサクラからは逃げられない。そしてヒグマは抵抗など全く出来ず、暴力の嵐に耐えることしか出来ない。

そんな中赤髪海賊団の一人があることに気が付く。

「なあ、あの山賊少しずつ上がってないか？」

そう上に少しずつ、本当に少しずつなのだが徐々に上に上がっているのだ。

そさてそのままひたすら殴打されながらヒグマは徐々に高度を上げ大体二十メートルくらいまで上がったところで、

『「垂れ桜」』

一気に落とす。この年で上げて落とすなんてことを覚えているなんてサクラ、なんて恐ろしい子。上げて落とすの意味は違うが、恐ろしい子には変わらない。それほどこの『御花見宴』はエグい技だ。何せ回避不能、反撃不能、抵抗不能な攻撃がサクラが諦めるまで続くのだ。下手をすれば一偉大なる航路(グランドライン)の海賊だって倒せるかもしれない。一人の敵を打ち取るだけならばサクラはもう世界で通用すると言っても過言ではないほどだ。

そんなシャンクスたちの驚きをよそにサクラは、

「やったじゃん。これで暫く弾代には困らないじゃん」

能力ではなく銃のことを考えていた。

今時の子供の考えていることはよくわからないとはよく言ったものだ。

「この船出でもうこの町へは帰ってこないって本当!？」

「もうお別れなのかじゃん」

「ああ、随分長い拠点だった。ついにお別れだな悲しいだろ」

ヒグマを海軍支部に引き渡して数日後、フーシャ村の港でサクラとルフィがシャンクスと別れの挨拶をしていた。

「うん、まあ悲しいけどね。もう連れてけなんて言わねえよ！自分である事にしたんだ、海賊には」

「どうせ連れてってやんねーよー」

シャンクスはベーと舌を出して最後までルフィを茶化す。

「ははっ、一生の別れじゃあるまいしそんなに悲しくないじゃん」

「それはそれで悲しいんだが…」

しかし酒瓶を傾けるサクラは案外ドライだった。

「しかしお前らなんかが海賊になれるか!!!」

「なる!!!」

「なってやるっじゃん!!」

とルフィとサクラはここで決意する。

「おれはいつかこの一味にも負けない仲間をサクラと集めて!!世界一の財宝みつけて!!!海賊王になってやる!!!」

「俺はこの腕つぶしでいつかは世界最強を名乗る力を身に付けて世界を変えてやるじゃん!!」

一人は海賊王にもう一人は世界を変えることを誓う。

ルフィの中ではサクラはもうすでに船員らしいのだが、サクラはまだどうするか決めていない。寧ろ今はソロの賞金稼ぎを目指している、のだがそれを敢えて口には出さない。ここは空気を読むべきだ。否定は後でも出来る。

「ほづ…!!おれ達を越えるのか……………じゃあ…」

とどこか嬉しそうにシャンクスは自分の麦わら帽子をルフィの頭の上に被せる。

「この帽子をお前に預ける」

「!」

「おれの大切な帽子だ」

「……………!!」

「いつかきつと返しに來い、立派な海賊になつてな」

とシャンクスは去り際に言う。非常に感動的な光景ではあるのだが、ルフィだけずると少しジェラシーを感じているところがサクラはまだ子供なのだろう。そんな感情が顔に出たのかベックマンが微笑みながら近づいてきて、

「お前らは大きくなるぜ」

と二人に言い、サクラに自分の物とお揃いの銃身の長い銃を渡す。

「なに、これは恩の先行投資だ。お前の力ならこの銃を使いこなせるだろ。出世払いだ。お前が世界の高みに来たときにこの借りは返せよ」

とそれだけ言ってベックマンも船に乗った。

赤髪海賊団の船、レッド・フォース号が出港しもう見えなくなって港にサクラとルフィを除いて誰もいなくなったときにサクラが口を開く。

「じゃんルフィ」

「ん？どうしたんだよサクラ？」

とルフィはサクラの方を向いて聞き返す。

「なんかお前の中では俺はお前の船員らしいけど、俺はお前の船には乗らないじゃん」

「サクラおれの船に乗れよー」

「俺はソコの賞金稼ぎになるつもりじゃん。だからお前の船員になるのを断るじゃん」

「じゃあおれは断るのを断るー！」

と将来も持ち合わせるであろうルフィの“決めた奴は絶対に船に乗せるスキル”を発動する。

「まあ、どうしても俺を船に乗せたいんなら俺を惚れさせるじゃん」

とだけサクラは言って、フーシャ村を去ってごみ山の隠れ家に行っていた。念のために言っておくがこの小説に薔薇要素は無い。作者はBLには全くと言っていいほど興味がない。寧ろ苦手だ。サクラの惚れさせる宣言はあくまで『ルフィと海賊やつたら楽しそうじゃん。よしルフィの船に乗ろうじゃん』みたいなものであって、決して『ルフィ愛してるじゃん。性別なんて関係ないじゃん。結婚してくれじゃん！』みたいな意味ではない。元はサクラは女かもしれないが、もう本人の努力で身も心も男である。

「おっ、サクラじゃねェか」

とサクラが隠れ家に帰ってきたときに丁度いたサボが迎える。

「あれっ、エースはどうしたじゃん？」

「エースならもう帰ったぞ」

「少し早くないかじゃん？」

「今日は結構儲かったからな、サクラのいない間に」

「……悪かったじゃん」

と自分の都合で自分一人だけ別行動していたことは事実だからサクラは素直に謝っておく。

「ところでサクラ、おまえが背負っているのはなんだ？」

とやっとサボがサクラが帰ってきてからずっと気になっていたことを聞く。

「ああ、これかじゃん。これはこの前言ってた赤髪海賊団の副船長から貰ったじゃん」

「本物の海賊の副船長からか?! いいな」

とサボは憧れの海賊からプレゼントを貰ったサクラに羨望の眼差しを向ける。

「貸しーって言われたじゃん」

サクラは子供に貸しを作るような意外と大人気ない奴だと言いたかったのだが、

「しかもその海賊に期待されてるサクラってすげー！」

サボはそのようには取らなかった。

「……まあ、いいかじゃん」

サボの海賊に対する憧れに少し引くが、それは本人の問題だから口を出す必要は無いだろうとサクラはフツ、と少し溜め息を洩らして会話を切り上げた。

「よっエース、おはようじゃん」

翌朝何時もと同じ時間帯にエースが三人の隠れ家に走ってくる。エース曰く、これは山道修業らしい。サクラも暇なときによくやっているそれは中々足腰が鍛えられて良い修業だとサクラは思っているが、六式の内の『剃』を修得したいサクラにとってはやはり物足りない。

『剃』は一瞬で十回以上足踏みすれば出来るらしいが、そもそも十回足踏みすることからサクラは躓いている。他の五つの『月歩』『嵐脚』『紙絵』『鉄塊』『指銃』に関してはどうすれば修得出来るのかさえも分からない。分かることは少なくとも気合いでどうにか出来る技ではないということだ。コツというか、六式の技術みたいな事が分からないと永遠に修得出来ないだろう。

「おお、エース」

「ああ、おはよう。サクラとサボ」

「よしっ、三人揃ったところで今日も海賊貯金始めますかじゃん！」

「今日も結構儲けたな」

「でも、海にいた頃に比べるとやっぱり全然じゃん」

「はあ、でもあれ以上やってると悪目立ちするだろ。ローブ倒したときだってかなりヤバかったと思うぞ。エースはあんまり目立つちゃいけないエ立場なんだからな」

とエースに文句を垂れるサクラをサボが諫める。

「分かってるじゃん。失言だったじゃん」

とエースが肩身を狭い思いをさせないためにサクラは笑いながら軽い雰囲気で言う。

「すまねエ……」

だがやはり身内に迷惑をかけていると自覚するエースは謝らずにはいられない。

「何、気にすんなじゃん。それに何時も言ってるじゃん。なんかあつても俺が助けてやるじゃん」

とエースの肩を抱きながらサクラが慰める。

「安心しろじゃん。『崩壊人間』の俺に勝つことが出来る奴なんていないじゃん」

サクラは偉大なる航路の後半『新世界』では自分はまだまだ通用しないということも分かっている。けどそんなこと分からないエースの心の拠り所として『絶対に負けないくて必ず守ってくれる最強の兄』であるうとして何が悪い。嘘も方便、人を救う嘘もあるのだ。

「……でも最近おれの攻撃が当たるようになったよな」

そう最近エースはやはり海賊王の血筋ゆえか“武装色の覇気”をサクラほどではないが修得してきているのだ。

「でもその一撃もあたらなければ意味ないじゃん」

しかし“見聞色の覇気”も使えるサクラには攻撃がまず当たらない。時々、気を抜いたときに当たるときも希にあるが“武装色の覇気”も使えるサクラは覇気の纏った攻撃も多少は受け流せるため、エースには殴った感触はあるかもしれないが、サクラに実質ダメージは無い。

「安心しろじゃん。俺なら世界政府が来てもお前を守りきってやるじゃん」

「ありがとう……!!」

とエースは自分を海賊王の息子、“鬼の子”と知りながらも、それでもなお世界を敵に回してでも自分の味方であるというサクラの決意に感謝する。

「気にすんなじゃん」

それから一ヶ月がたった頃。

「よおエース、随分と今日は遅かったじゃん」

と最近遅刻が目立つエースを軽くたしなめながらサクラはエースに挨拶をする。

「ああ、今日はルフィって奴がやけにしつこかったからな」

「おいおい、そんなことで大丈夫なのか!? 山道修業をやっぱ止めた方が良いんじゃないかねエのか!?!」

と日に日に来る時間帯が遅くなっていくエースにサボはここに住むよつに言っ。

「問題ねエよ。人が通れる様な道は通ってねエ」

とそれに大丈夫と答えるエース。

「まっ、くれぐれも無茶はすんなじゃん」

とエースの肩をポンと叩きながらサクラは言う。ルフィのことをサクラはかなり知っているのだが二人には言っていない。サクラの友人と言えば二人はルフィを受け入れるだろう。サクラはもう二人にとって大黒柱のようなものになっている。だが問題はそうじゃない。サクラが受け入れたルフィを二人が受け入れるのではなく、エースとサボが自分達でルフィという人間を知り、受け入れる事が大切なのだ。

ルフィがサクラたちの隠れ家に行き着くのはこの会話の二ヶ月後である。

第四十二話　ゴア王国で悪童は過ぎた活動を

「今日はエースの奴遅いじゃん」

ハアと溜め息をつきながらサクラは言う。それにサボも同調して、

「今日はエースがいないし、各自で仕事してこよう」

と提案する。

「そうしよっじゃん。じゃあ昼時に一旦戻ってくるじゃん」

と言ってサクラは木の上の隠れ家から飛び降りて着地するとそのままごみ山の方に走っていった。

「よし、じゃあおれも一仕事してくっか！」

と自分を鼓舞してサボもサクラと同じように飛び降りて同じ方向に走っていった。もはやサクラを含めて、三人とも既に身体能力が人の領域に足を踏み入れることに誰も気がついていない。

「あのチンピラ共…結構持ってそうじゃん」

とサクラは隠れ家から反対側の地点にある木の上からターゲット、金の持ってそうな悪人に目星を付ける。

「じゃあ」

そしてその木からジャンプして三回転して着地。チンピラたち十

人の進路を塞いで仁王立ちを決める。

「ゴクッゴクッ…ぷハアッ！じゃんお前ら、その金置いてけじゃん」

とサクラは空にした酒瓶を放り投げ、人差し指で一人が大事そうに抱えている袋を指差して言う。

「おいおい、ガキがいきがってんじゃねえぞ？」

とサクラの悪名を知らなかったチンピラ九人は金を持った一人を守る為にサクラを囲みそれぞれの武器、ナイフや棍棒を構える。

それを見たサクラは新しく開けた少し小さな蒸留酒を一気に飲み干して拳を構える。

子供が飲酒等言語道断なのだが一気飲みは大人でも危険だ。絶対にしてはいけない行為である。

「お前らをちまちま相手してたら折角の酔いが醒めちまうじゃん。早く掛かってくるじゃん」

と頭を数回回してチンピラ達をさらに挑発する。

「オラアア！」

「くたばれえ！」

挑発に乗って両脇から二人の男がサクラに迫る。それに対してサクラはナイフを持った男を反転してかわし、その背中に中段蹴りを入れる。

「オワアッ!？」

男は背中を折られたが、そのまま慣性に従って前進し、

「グアッ！」

前の味方を突き刺した。

一撃二殺。それが今回サクラが酔いを楽しむために考案した時間短縮法だ。

「おいこのガキメチャクチャつええぞ！」

「ガキこんなに強いなんて…もしかしてこいつ…三悪童…なんじゃ!？」

「じゃんそうじゃん。俺は『三悪童』のサクラじゃん」

とやっとなサクラの正体に気が付いたチンピラに自己紹介をし、

「これは挨拶じゃん」

チンピラ二人を蹴り飛ばした。

「おれ達じゃ無理だ！一旦逃げよう！」

「馬鹿何言ってやがる！殺されるぞ！」

「この前へマしたウチのヤツが船長に頭の皮引き剥がされたのを忘れたのか!？」

「そつだ！うちのブルージャム船長は残忍なんだ！」

とサクラの強さの諦めかけたチンピラ改めブルージャムの一味はサクラと船長のどちらが危険かを天秤にかけサクラの方が安全と判断する。それも当然のことだろう。何せ目の前で仲間を惨殺したところのある船長と、噂では何人も殺し"かけた"だけの凄腕の少年。どちらの方が命の危険が大きいかと言えば当然船長の方が危険だ。

「ハイハイ、掛かってくるじゃん」

と頬をピンク色に上気させて、手のひらをクイツ、クイツと誘うように動かす。

「オルア！」

「ダアア！」

「トオウッー！」

と今度は三人の男がサクラに襲い掛かる。しかし当然サクラには対策が、チンピラの料理レシピが完成している。

今度は一步下がってから木の棍棒の男の攻撃をかわし、その男の一撃が味方の脳天をかち割るように仕向ける。それから棍棒の男の横に回り込んで側筋に正拳突きを入れてまたも後方の男とまとめてぶっ飛ばす。

呆気にとられている残る二人は頭にアイアンクローを決めながら地面に後頭部を叩きつけて沈めた。

「よーし、完璧…じゃないじゃん！」

確かに用心棒九人はちゃんと倒したが、肝心の金を持った男に逃げられてしまっていた。彼を逃がしてしまっただら何のために今まで闘ってきたのか分からなくなる。

「何処じゃん、俺達の金！」

少なくともサクラの金ではない。いやポルシェーミの金でもなく、正しくは金を恫喝された一般人のものだ。サクラ達三人の“悪人から金を取るのセーフ”理論でもやはり泣く人はいる。悪人から物を盗りそしてコテンパンに打ち倒したとしてもやはり盗みは盗み、許されることではないのだ。

それに気がついていないサクラはあくまで自分の金を探す。そして、

「見つけたじゃん」

偶然見つける。ここごみ山では人間のクズのような人間が多数居るため似た人間が多く、サクラの“見聞色の覇気”ではまだ悪人の居場所の特定は難しいのだ。

チンピラは仲間を見捨てて金の入った袋を大事に抱えてもう五百メートルほど離れたところを走っている。

「逃がさないじゃん」

とサクラは怒りを顔面に全面に押し出して両手の手のひら一杯に十五ほどの石を拾い、覇気を込めてチンピラに向かって投げる。そしてベックマンから貰ったライフルを半身で片手で持って構え、新しい酒瓶を傾けて流し目で見ながら風等の要素から弾の軌道を計算する。

そして引き金を引いた。ベックマンが脅しのつもりで言ったのかそれともサクラの身体能力がベックマンの想像以上だったのか反動はあまり無く、打ち出された弾はぶれずにサクラの投げた石に当たった。しかし石には覇気が込められていて弾には込められていない。

だからキンと石が弾をはじく。そして方向転換した弾はまた違う石に当たり、とキン石が弾をはじく。

そして石がはじく、はじく、はじく。

またはじかれた石が違う石に当たり、石が石をはじく、はじく、はじく。

計算しつくされた四つの石の弾道はチンピラの両足の付け根と両肘を貫通する。これがサクラの得意技の『トリックショット』だ。

倒れ伏して抵抗の出来ない男から、たとえ彼の後ろには彼が死ぬほど恐れている男がいるとしても、金を剥ぎ取るのは簡単だ。そのへんから刃こぼれしまくって物を切れそうにないのではないかと思うようなナイフを拾い、切れないナイフがいかに安全かを優しく授業をしてあげればいいだけだ。授業の途中に『一気には決められない』、『実際は潰し千切る』、『骨とか何度も何度も叩いて折る』等少々不穏なワードが飛び出でしまっているのはご愛嬌だろう。

最後にはチンピラが青い顔をしていたのでサクラが親切そうな顔で『顔色悪いじゃん。少しオペしてくかじゃん?』と聞いたら直ぐにチンピラはサクラ先生に授業料を渡した。

「あれ?サボ達がないじゃん」

サクラが隠れ家に戻ってきた時に隠れ家には誰もいなかった。

「しかも貯金が減ってるじゃん」

と隠れ家内の隠し場所を見ると、今まで貯めてきた莫大な海賊貯金が半分くらい無くなっていた。

「何かあったかじゃん？」

しかし隠れ家には争った形跡は全くない。もしサクラが不在の時に誰かが強盗に入ったとすると必ずエースかサボがキツチリ撃退することになっている。しかしたとえ強盗に入られてもサクラの割りとは自信作な隠し戸は見つけられないだろう。

だがこの部屋に整っていて決して強盗に入られたようには見えな
い。これから、

「二人が場所を換えたかじゃん？」

とサクラは推測する。

「……………」

とサクラは二人が何処に貯金を隠したのかを勘で決めつけてその方向へ走り出す。サクラの“見聞色の覇気”はまだ未熟で二人がどこにいるのかを正確に感じ取ることはできない。だがそこはやはりサクラは腐っても覇気使いだ。サクラの『エースとサボがこの方角にいるような気がする』程度の直感がよく当たる。

「さっばり」

そして今までの隠れ家から一時間ほど歩く距離にある、森の巨木の根元に穴を開けてせっせと自分の持てる限り持ってきた宝を詰めている。

「だれだ!? …… ってさくらか…」

サクラの呟きにいち早く反応したエースは直ぐに振り向いて持ち前の鉄棍を構えるも呟きの主が判ると直ぐにその警戒を解いた。

「じゃんエース、どうして隠し場所を変えてんじゃない？」

と一応原作知識により知ってはいるのだがエースに聞いておく。そもそもここまで大それたことをすれば原作知識が無くても隠し場所がバレた、またはそれに準ずる何かが起こったと考えるのが普通だろう。

「ああそれが…」

とエースが話すのをサクラは黙って聞いていた。

「終わったじゃん…」

「気がつきゃもう昼飯の時間じゃねエか」

サクラのとおっておき便利能力のお陰で本来は夕方までかかるような仕事も昼頃に終わってしまった。

「ハアハア…サクラ!! エース!!」

とここでサボが慌ててかけてくる。

「サボ！どうだった？あいつらもっ〃向こう〃に金探しに来てたか！？」

とエースがここには来ないと分かっているから余裕の表情でサボに聞く。

「ハア…ハア…………いや来てねエ!!探しになんか来るわけねエんだ!!…あのルフィって奴…………!!…………!!!ハア…!!」

とここで一回息をついてサボが声の限り叫ぶ。

「まだ口を割ってねエんだよ!!!」

その意外なサボの返事に、

「…………え!？」

エースは困惑し、

「ゴホー、凄いじゃん」

とサクラは詠嘆の声を洩らした。サクラは原作のような拷問に遭っても傷一つ負わない。だから吐かない自信はある。しかしルフィは違う。ルフィの食べた〃ゴムゴムの実〃の能力ではサクラの〃ポロポロの実の能力〃と違って刺さるし切れる。ダメージを食らうのだ。もし覇氣使いに拷問にかけられたら直ぐに吐く自信がサクラにはある。

「おい、おれはルフィを助けに行くぞ」

サボは唐突に言う。ルフィはサボたちの為に宝の在りかを言わなかったのだ。だったら今度はサボがルフィの為に助けに行くのが筋だろう。

「おれも行く……」

次に言うのはエース。エースはルフィを谷に突き落とした、ジャングルに放置した。なのにどうしてまだルフィはエースを裏切らないのか。それを知らなくてはいけない、と葛藤する自分の心に無理矢理理由をつける。

「お前らが行くなら俺も当然行くじゃん」

と最後に言ったのはサクラだ。やはりこうなったかと笑い、そして兄弟が人情を大切にする男で良かったと内心喜びながら何時ものように軽快に話す。

第四十三話 不確かな物の終着駅で悪童は矜持の行動を

「じゃあ三、二、一で突入するじゃん」

—不確かな物の終着駅（グレイ・ターミナル）のごみ山のとある小屋にサクラたち三人がいた。

「三」

サクラが左手の指を二本立てる。

「二」

薬指を折り畳んで言う。

「い「じゃあもういい!!……死ねよ」ちっ、突入じゃん！」

数えている最中に急遽予定を変更して三人で小屋の壁を突き破って攻め入る。

「やめるオ~~~~~!!!」

「……コイツだア~~~~!!ポルシェーミさん!!」

「金奪ったのコイツです~~~~!!!畜生オ!!!」

「エ……エース~~~~~!!!」

突然の襲撃者に混乱する海賊達と救世主の登場に泣きながら歓喜

するルフィ。しかし唯一ポルシェーミだけは一人冷静だった。いや、寧ろ突然の襲撃者に歓喜したほどだ。何故なら、

「自分から来てくれるなら話は早エ!!!口が堅くて困ってたんだよ、てめエのダチが!!!」

これでやっと船の金が見つかる、これで船長に殺されずに済むからだ。

「く!!!」

ポルシェーミに首根っこを掴まれたエースは思わず呻き声を漏らすが、いつも弟を想っているサクラは持ち前の愛銃“花火”で雑魚を無力化してエースのフォローには動かない。いや、動く必要がない。

「サボ!!!」

「ん?」

エースの合図にサボが後ろから迫る。ポルシェーミが気づいて後ろを振り返るがもう遅い。

「ウォリヤアア!!!」

ガン!!と鈍い音を立ててサボの黒い鉄棍がポルシェーミの頭に吸い寄せられて、ポルシェーミが床に沈む。

「ポルシェーミさん!!!」

「黙れじゃん」

自分等の最高戦力が沈められて悲痛の叫びを上げる海賊だが、その声はサクラのうずまき管を無駄に刺激してサクラをよりイライラさせる。

バンバンバンバンと花火で海賊の四肢を正確に撃ち抜き、弾が切れたら即補充する。その補充の早さと絶妙な間合いから誰もサクラには手を出せずにいた。

「逃げるぞサクラ、エース!!!」

倒れている海賊の一人からサボはナイフをかつぱらいルフィを救出。そのまま逃げることを提案するが、

「先に行け!!!」

「!? バカお前…!!」

「一度向き合ったらおれは逃げない……!!!」

エースは当然逃げない。いや、目の前の敵達が仲間を追わない様に敵を逃がさない。これがエースの不本意ながらの父親だった男との共通点だ。

「加勢する、秒殺じゃん。だからサボはルフィの治療でもしてるじゃん」

とサクラがエースの横に立つ。敵はもうポルシェーミー一人ならサクラの仕掛けで充分だ。

「……………任せたぞ!!」

とだけ残してサボは走って新しい隠れ家へと走る。サボのやっているこれは決して逃走などではない。自分達“三悪童”の最強でリーダー的存在、そしてなによりも自分達の長兄が戦いに参加すると言い、そして問題無いと言っているのだ。そうであればサボにはもう参戦する余地は無い。というかエースにすら参戦の余地があるのか怪しいほどだ。

そもそも、

「オイ…少し魔が「黙るじゃん」「手鞠桜」「ガフッ」

サクラの“ボロボロの実”はサボの中では人がどうにか出来るものではないと思っている。サボはサクラから“ボロボロの実”の弱点を聞かせられているがそれでもサボは勝てる気がしない。エースは最近サクラに触れる様になっただけらしいが本気のサクラの前では二人がかりで一分持てば奇跡なほどだ。

「はい、帰るじゃん」

原作とは違いポルシェーミをサボが逃げる間も無く秒殺したサクラは振り返って笑いながらポカンとしている三人に言った。

「熊じゃん熊じゃん熊飯じゃん 今日の夕食熊飯じゃん」

作詞作曲サクラの即興で考えついた熊の歌を歌いながらサクラは新しい隠れ家の掃除とかをしている予定となっている三人に合流する。

「なーとっさだよ、おれに一つ問題ができた」

「？」

しかしルフィとエースはサクラが予想していた通り喧嘩していたが。そんな二人を遮ってサボが口を開く。

「おれは今までこのごみ山に住んでたけど…今日をもっておれ達四人、完全に海賊達に命を狙われる事になりそうだな…」

「ふふん、そんなの俺が居れば問題無いじゃん」

とサボの懸念をサクラは否定する。サクラにはまだ試したことは無いが理論上では覇気使いの攻撃すら捌く手段を持っている。それなのに一東の海（イーストブルー）の一海賊に不覚を取ることなんてあり得ない。しかしそれでも問題はある。

「でもサクラが居ない間におれ達が襲われたら…」

とサボが本当の不安を口にする。確かにサクラは自他共に認める東の海最強だし、サボは当然そこにケチをつける気は更々無い。だが、サクラがいくら東の海で最強無敵の存在だったとしても限界は確かに存在する。例えばサクラが町で仕事をしている最中にブルージャムがサボ達を襲ったら間違いなく皆殺しに遭うだろう。

「じゃあ効率は落ちるけどこれからは四人一緒に仕事をするじゃん」

「ああ、そうだな」

とサクラはそれに対して即座に答えを出す。確かにリターンは減るがその分りすくも減るサクラの作戦にサボも同調する。ルフィとエースは未だ口喧嘩をされていて話し合いには参加していない。

「だけどまだ一つ問題がある」

「エースのことだろ？分かってるじゃん」

とサボは頭の中にあるもう一つの問題を言おうとするがサクラもそれはわかっているようで解決策は話すまでもなかった。

「どづいづったこりゃあ~~~~~!!」

サクラたちがルフィを救出した翌朝、と言っても日は完全に昇りきっているため早朝ではない、とある大きな一軒家に怒号が響く。これ程までの大声であれば普通は近所迷惑なのであるがこの家の周りには民家一つ無いからその必要もない。

「エース!!ルフィ!!そいつらは誰だ!!?何でガキがもう二匹増えてんだよ!!!」

「お前がダダンかじゃん?俺はサクラじゃん」

何故なら誰も態々山賊の隣に住みたくは無いからだ。

「サクラ!!?知ってるよその名前」

サクラが自己紹介するとダダンはエースから話を聞いたことがあるのかその名前に聞き覚えがあるという。

「おめエもよっぽどのクソガキだと聞いてるよ!!」

サクラは多分その話の出所であるエースは後で一回シメとくこと

を心に決め、今はダダンと挨拶をかわすことにしておく。

「そうかじゃん。俺はダダンがどうしようもないアバズレだって聞いているじゃんー」

「余計な情報持ってんじゃねエよ!!」

「おれはサボ。おれもダダンはクソババアだと聞いてるよ!!」

「もうやだこのクソガキども!!」

サクラと違い純粹な笑顔で毒を吐くサボにダダンは早々匙を投げる。やめて、ダダンのライフはもうゼロよー

「じゃん、挨拶も済んだことだし早速仕事に行くじゃん」

「おめエらア!!シヨバ提供してんだから働きやがれエ!!!」

「ルフィ!!ついて来なくても置いてくからな!!」

「ついでく!!」

挨拶も早々に終わらせてサクラは三人を引き連れて森の方へダッシュで逃げエースとサボもそれに続く。ルフィの心配をしているところを見るとエースもルフィに対して仲間意識ができてきたようだ。

「ゴムゴムの~~~~~」銃（ピストル）

「ぶー!!!」

「はあ、何やってんじゃん」

いつもやっている一日百戦の修行でこれが最後の一戦、サクラ対ルフィのカードでルフィがいつも通り自爆する。因みに今のところルフィはサクラに0勝三十四敗、エースとサボに0勝三十三敗。エースがサクラに0勝三十三敗、ルフィに三十三勝0敗、サボに十七勝十七敗。そしてサボはサクラに0勝三十三敗、ルフィに三十三勝0敗、エースには十七勝十七敗である。

サクラは能力の有無に関わらず四人の中で最強無敵を誇っている。

「お前その能力意味あんのか？」

呆れたエースが溜め息と共にルフィにこぼす。

「くっそーうまくいかねエ。俺の考える通りになればお前らなんかチヨン×二ヶチヨン×二だからな」

「はいはい、でも能力をルフィが使いこなせたところで俺には絶対勝てないじゃん」手鞠桜

サクラは駄々をこねるルフィをパパッと沈めて今日の分の試合を消化する。実際サクラはルフィが「ゴムゴムの実」の能力を使いこなして「ギアー2（セカンド）」や「ギアー3（サード）」を使えるようになったとしても負ける気はしない。

「覇気」というものが存在する限り能力だけで戦闘の優劣をつけるのは間違っではいるのだが、サクラの「ボロボロの実」は謂わば一超人系（パラミシア）「バラバラの実」の上位能力で斬撃のみならずルフィと同じく打撃すらも無効化できる。更に言えば能力の熟練度だってサクラとルフィには雲泥の差があるし、サクラは未だ見せてはいないし使ったことも無いが戦術級の技をまだ隠し持っている。

加えて言うなら、サクラは「覇気」すら無効化できる手段すら持ち合わせている。

ついでに言うとサクラは「覇気」や身体能力においても外の三人とは一線を画すレベルである。

「ルフィは今日もサクラとおれとエースに全敗。サクラは今日も全勝。おれとエースは十七対十七か」

サボがルフィの傷口に然り気無く塩を塗り込む。これが無自覚でやっているのだから怖い。

「お前らおれが十歳になったらブツ倒してやるからな!!」

「そんな時やおれ達十三だ」

「そんな時や俺は十七じゃん。早く夕飯の調達に行くじゃん」

捨て台詞をエースに捌かれているルフィにサクラは追い打ちをかけてサボと一緒に夕飯のワニを狩りに森の川の方へ歩いていく。

後ろの方で、

「じゃあおれが十七歳になったらブツ倒してやるからな!!」

と根本的に何も解決していないということに気がつかず叫んでいるルフィがいたが、いつものことなのでそこに突っ込む人間は誰もいなかった。

「よっワニごっくやん」

「待て、サクラが行ったら修行になんないからここで待機な。今日はおれ達の番だ」

殺る気満々“花火”を構えるサクラにサボが待ったをかける。サクラの銃の腕前ならば早射ち百発百中でワニの屍の山を築けるだろう。だがそれではいつまでたってもエースたち三人の力にはならない。だからサクラと三人で狩りのローテーションを組むことにしたのだ。

この日はワニ皮も高値で売れて良い酒も仕入れられたのでサクラもご満悦だった。

第四十四話　ゴア王国で子供は大きな未来を

ここはゴア王国の端町。そこにいるのは数人のチンピラと一人の高身長のローブを羽織った男。

「オイ!!お前、ゴミ山から来たろ」

「その荷物何だ!?見せてみる!!」

どじやらのチンピラ達は男の荷物を奪おうとしているようだ。対する男のほうはブルツと身体を震わすと、

「しるせヘチンピラ!!」

男の中から四人の子供が出てきた。

「金目の物を寄越すじゃん!!」

これではどっちが追い剥ぎか分からない。

そして端町を進むと小綺麗な中心街がある。中心街はちゃんと法
治組織も機能していてさらに美しい町であり海外の人で賑わってい
る。

「ぶはーっうまかった」

「言ったら、だから!!」

「でもマキノのには劣るじゃん」

「そうか？おれにはどっちもウマいけどなー」

エースの紹介で来たラーメン屋、中々の当たりだったようでサボも「ご満悦だ。」

「あつ、これが「代金」じゃん」

そう言っつてサクラはついさつき狩ってきたチンピラの金を出した。賞金稼ぎ業で稼ぎに稼いだサクラたちは節約のための万引きはせずつに普通に代金を支払っている。鼻屑にしている店の中にはサクラたちをVIP扱いする店もあるほどだ。

「また来たいなー」

「じゃあ明日また来るかじゃん？」

サボのぼやきにサクラが笑って答えると、

「サボ!!!サボじゃないか!!待ちなさい!!!お前生きてたのか!!!」

「い……!!おいお前ら逃げろぞ!!」

「家へ帰るんだ!!!」

シルクハットの男がサボに尋常じゃない様子で話しかけてきた。それを見たサボはサクラ達と逃げよつとする。

「……………!!おいサボ!!お前の事呼んでるぞ!!」

「誰だ!?!あれ……………!!」

「……!!人違いだろ、行くぞ!!!」

エースの呼び掛けにもルフィの問いにも答えずサボはただ逃げる。

「逃げるんなら俺に任せるじゃん」

「ここで困ったときのサクラお兄さんの登場。」

まず自分の足を遙か遠方に蹴り飛ばして、

「お前ら掴まるじゃん!」『桜前線』!」

自分達もその足に向かって飛んでいった。

「何だよ、何も隠してねエよ!!」

「あ…そうなのか?」

「そんなわけねエだろ!!!話せサボ!!」

「ルフィは馬鹿かじゃん…ゴア王国にサボに似たサボって名前のサボやない奴なんて居るわけねえじゃん」

隠れ家にサクラ達が戻って早々尋問を開始する。被告人サボは容疑を否定するが、サボは黒だ。証拠がそれを示している。

「おれ達の間には秘密があっただいいいのか?」

「話せ」「話すじゃん」

自分は実は異世界人という秘密を抱えるサクラが言えた事ではないが、そしてサボの事情も知ってはいるがこの話し合いに参加しておく。

「……」

しかしそれでも黙秘を続けるサボ。

「話せよためエ!!! ブツ飛ばすぞ!!!」

「うわぁ」

それにぶちぎれたエースとルフィがサボに襲いかかる。サクラはただただドン引きである。なんか聞かれたら直ぐに答えようと決心したサクラだった。

「……ぐ!!……ア!!は!!話す、話すよ!!」

サボの事情はサクラの知る原作通り自分は貴族であり、サボを今日呼び止めたのはサボの父親であったということ。そして自分が家族がいながらに一人だったとサボは語った。

「……そうだったのか……」

事情を知ったエースも怒りを鎮めた。そしてサクラは、

「俺は絶対にお前を裏切らない、一人にはしないじゃん」

「うわっ」

涙を流してサボに抱きついた。

トリップという形で一度家族を失ったサクラ。その寂しさからサクラはこの世界で出会った新しい家族、エース、ルフィ、そしてサボにある意味で依存していた。故に事情を知っていたはずなのに思わず涙し、そさで感情が昂って思わずサボに抱きついてしまった。

「……サクラ、涙と鼻水でおれの服が……」

「……悪がっだじゃん……」

サボに指摘されてサクラは漸く離れた。

そしてサボは高らかに宣言する。

「サクラ、エース、ルフィ……!!おれ達は必ず海へ出よう!!今度は東の海だけじゃなくて偉大なる航路に出よう!!この国を飛び出して…自由になろう!!!」

サボの話は続く。

「広い世界を見ておれはそれを伝える本を書きたい!!航海の勉強なら何の苦でもないんだ!!……もっと強くなって海賊になろう!!!」

「ひひ」

サボの夢にエースは笑って答えた。

「そんなもんお前に言われなくてもなるさ!!おれは海賊になって勝って勝って勝ちまくって最高の“名声”を手に入れる!!それだけがお

れの生きた証になる!!!世界中の奴らがおれの存在を認めなくても、どれ程嫌われても!!!大海賊”になって見返してやんのさ!!!おれは誰からも逃げねエ!!!誰にも負けねエ!!!恐怖でも何でもいい!!俺の名を世界に知らしめてやるんだ!!!」

「ししし...!!そうか、よし」

今度はルフィが誓う。

「おれはなア!!!.....海賊王におれはなる!!!」

「は??」

「アハハハハハ!!ルフィ!お前最高に面白いじゃん!」

それに、そのルフィの信念の強さにサクラは思わず動かされた。

「じゃあ俺は...俺はルフィを海賊王にしてやるじゃん!!」

「なっはっはっはっはっはっ」

「.....お前は...何を言い出すかと思えば...」

「あははは、面白エな、ルフィとサクラは!!おれ、お前らの未来が楽しみだ!!」

ルフィとサクラの宣言に呆れるエースと笑うサボ。だが目下の問題はそこじゃない。

「.....でも二人が船長になりてエってのはマズくねエか?」

それに頭のいいサボが気づく。

「思わぬ落とし穴だ。サボ、お前はてっきりウチの航海士かと」

「お前らおれの船に乗れよー」

「まつ、将来の事は将来に決めようじゃん」

「もしかしたら三人はバラバラの船出になるかもな!!」

サボがサクラの発言に付け加える。

「ああ、だが今はそれよりも」

「あーダダンの酒、盗んできたな!」

エースが切り株の上に四杯のの盃と一本の酒瓶を置く。そして、

「そんな安酒より飲むならこっちじゃん」

それをサクラが投げ飛ばして自分の酒を置いた。

「……まあいいか。盃を交わすと『兄弟』になれるんだ」

「兄弟!? ホントかよー!!」

「ルフィ、黙つとくじゃん」

「海賊になる時、同じ船の仲間にはなれねエかも知れねエけどおれ達四人の絆は『兄弟』としてつなぐ!!どこで何をやろうとこの絆は切れねエ……!!これでおれ達は今日から兄弟だ!!」

「おっ!!!」

「乾杯じゃん!!」

それからの数日間はサクラにとって平和な数日間だった。"奴"が来るまでは。

平和な数日間のとある日、サクラたちは海岸に来ていた。何故ならば珍しくこのゴア王国に海賊が来ていたからだ。しかし海賊といっても大して強くない、懸賞金が百万弱の弱小海賊だ。

「久々の海賊だな」

エースが隣のサクラに話しかけるが、

「ああ、久々の海賊"だった"じゃん」

サクラはお得意の『トリックショット』で海賊を片付けてたようだ。

「……ああ、久々の海賊"だった"な」

「やっぱり賞金稼ぎ業は中々金になるじゃん」

ちょちょいと近くの海軍の駐屯所に海賊を引き渡し、賞金を貰って来たサクラは少しいい酒をグビグビと飲みながら船を降りてフーシャ村に着いた。

「今日の晩飯はどつする？」

「買つか捕るか、とエースがサボに聞く。サクラは基本どっちでもいいと答えるから「どついったことは聞かれない。」

「そつだなア…今日は虎にすつか!!」

「おつ、いいねエ」

「うめエんだよなー虎メシ」

「お前は何でも旨いって言つだろつじゃん」

「そつか? にししし」

「あつ、今日はおれ達だからな! サクラは木の上でも見ててくれよな!」

「分かつてるじゃん、サボ。俺は木の上でこいつを飲んでるじゃん。……あと、虎ならそこにいるじゃん」

談笑しながら森の深くに来ていたサクラ達は不意にサクラが指差した後ろを見て驚く。その虎は体長10m近くあった。

「」「出たああああ!?!」

一斉に駆け出す三人と、

「じやこ」

一瞬で狩られるサクラ。しかしポロポロの実の能力者であるサクラにはダメージはなく、粉々になって散るだけだった。

「全くお前ら…勝って兜の緒を締めよって言葉を覚えておけじゃん」

「すみませんでした」

あの後何とか三人がかりで虎を倒したが、まさか後ろにもう一頭いるだなんて三人は全く予想していなかった。虎に襲われたルフィは動けなかったが、そこはサクラが『手鞠桜』でカバー。大事には至らなかったが、緩んで居たことは事実なので甘んじて説教を受ける三人だった。

「……でも勝って兜の緒を締めよってどついう意味だ？」

「」で言葉の意味が分からなかったルフィがサクラに聞く。

「ああ、勝ったからって喜ばず、逆に勝ったからこそ気を付けろ、って意味じゃん」

「なるほどーじゃあ、おれは今から気を付け…あああああああ」

「ルフィ!？」

「これ持ってるじゃん！」

気を付けると言った側から吊り橋の板を踏み抜いて落下するルフィ。そんなルフィを見てサクラは自分の左腕を千切り、エースに託して自分もルフィの後を追う。

「ルフィイイイイ!!」

「うわーん！サクラー!!」

ルフィに追いついたサクラはルフィを抱き締めて、

『桜前線』

安定の能力を使った移動。サクラの能力はとても汎用性が高い。

「ふいー、極楽極楽じゃん……ブクブグブク……」

大虎を二頭も持ってきたサクラ達四人であったが、食事という名の戦争ではダダン一家には肉片一つ渡さず四人で食いつくし、現在は四人で風呂に入っている。

「おいー!?サクラ!!沈んでんぞ!?!」

「ういー……ブクブグブク……」

「ルフィー!!」

余りの気持ちよさと能力者の欠点でどうしても風呂に沈んでしまふサクラとルフィはエースとサボの介護無しではもう風呂に入ることではできなかった。

「おいっ、ルフィー!早く水を吐き出せ!!」

「プュープュー」

エースの懸命の心臓マッサージで漫画のように水を吐き出すル
フィ。…いや、これは漫画の世界なのだから不思議はないのだが…。

「はっ、何やら対岸に綺麗な花畑が見える川で溺れてた気が……！」

「……ハア、とりあえずその川はダメだぞ、サクラ」

サボの優しさと突っ込みが痛かった。

第四十五話 森林で英雄は招かれざる襲撃を

サクラはその日の朝からおかしいと感じていた。動物達が、植物が、そして風すらも気配を消しているかのように静かな朝だったからだ。まるで嵐の前の静けさとも言うように。まるで何かから怯えるように。

「はいこれで俺の百五十勝負じゃん」

いくら朝に違和感を感じたからといって試合をさぼるわけにはいかないからサクラは嫌々ではあるものの弟たちの相手をする。

そして今日の分の試合が消化された時、奴がやって来た。

「ぶわっはっはっ、元気にしとったか、エース！ルフィー！」

「げっ、じいちゃん!」「げっ、じいじい!」

やって来たのはモンキー・D・ルフィの祖父モンキー・D・ガープであった。

「ルフィー！じいちゃんに会って『げっ』とは何事じゃあ!!」

日頃の行いを省みれば直ぐに分かる事なのだがガープはそんなこと省みる事なく先ずエースとルフィを殴った。

「エースとルフィに何しやがったあああ!!」

そしてそれを見たサボが激怒。ガープに相棒の棍で仕掛ける。

「うわぁ」

サクラは乗り気ではない。ガープも悪気は無いし、手加減もできて
る。そして何よりサクラは“拳骨”のガープに殴られたくない。

「おりゃあぁあぁあぁ!!」

そしてこれで五年ほどの付き合いとなるエースとサボのコンビ
ネーションも、

「甘んぢゃー」

海軍本部中将の前では稚児の遊戯に等しい。だが、そんな稚児の遊
戯の目的はガープを倒すことじゃない。

「行ッけエ！サクラア！」

サクラの為の隙を作ることだ。そんなことされたらいくら乗り気
ではないサクラでも、

『手鞠桜』ア！」

やるしかないではないか。

「………中々やるのお」

「………化け物かじゃん………」

手応えはあったし、ちゃんと殴った感触はあった。勿論覇気を纏わ
せているその拳の一撃は、海賊船を大破させ、大の大人の海賊を纏め

て蹴散らす程だったはずだ。 勿論蹴散らすといっても拳の一撃だ。それなのに、それなのにこの「英雄」ときたら、

「覇気も何も使っていないのかじゃん…!？」

正確には覇気も『鉄塊』も使わずに素の肉体でサクラの一撃を何事も無かったかのように受け止めたのだ。 正直サクラは自信喪失中だ。

「こんな子供が覇気を使えるとはのお!! しかも能力者か!!」

ガープの目が獲物を捕らえようとする肉食動物のようにギラリと光る。

「殴られるじゃん! 正面から顔面に! しかも速すぎてかわせないじゃん!」

だからサクラは対覇気使い用のとっておきを使う。

本来覇気とは対能力者用の技術であり、一応誰でも習得可能で、これを使えば相手の能力に関係無く能力者に攻撃ができる。しかしそれは海楼石とは違って能力を封じるものではない。故に稀有ではあるが中には対能力者用の技術を能力でかわす者もいる。サクラがそれだ。

『散り』

ガープの拳が当たる直前にサクラは自分の顔面をポロポロに壊す。そうすることでガープの拳は空を切る。流石のガープもポロポロをポロポロにはできない。

更にこれにはまだ利点がある。相手は攻撃を空振って体勢を崩し、

サクラは相手にまとわりついて自分の粉の何処にでも自分の望む体勢で移動できるのだ。

「もらったじゃん!!」

出現先はガープの真後ろで、狙うは後頭部。下手すれば相手を殺しかねない急所だがサクラはそこまで考えずにガープに最高威力の攻撃、回し後ろ蹴りを喰らわす。というか子供の攻撃で死ぬほど海軍本部中將は甘くない。イーブは例外だ。

ドゴオン！ど轟音が響き、ガープは顔面から地面にめり込む。でも、ガープにはまだ足りない。いまだガープは“六式”の一つも、そして覇気も使っていない。

「(回し後ろ蹴り!?)」

もう見聞色の覇気で聞いてちゃ間に合わない。そう感じるや否やガープの右足が飛んできて、

「(ギリギリ間に合っガア!?)」

身体を壊したサクラにダメージを与えた。

「中々やるが、その程度の技をワシ相手に二度試すとは片腹痛いわい」

『聖闘士に二度同じ手は通じない』。ガープは聖闘士ではないがこの世界ではそれクラスの“英雄”。そして東の海の辺境では無敵の井の中の蛙と最近になって自分の遙か上の世界をこの身で体験し更に向上した世界トップクラスの戦士。まず場数が違う。

ガープのやったことは簡単なことだ。というよりガープの頭では

簡単なことしか思い付かない。ガープはサクラを殴ったのではなく、空気を殴って、その時発生した衝撃波がサクラの破片にダメージを与え、その時発生した突風がサクラの破片にダメージを与えた。

「ペッ……いいじゃん…」

「ん？」

「やってやるっじゃん!!」
「ゴルァ!!!」

吹き飛ばされた身体を集めると口に溜まった血を吐き出してサクラは叫んだ。

「エース！サボ！ルフィ！お前らは逃げるじゃん！」

「おれは逃げねエ」

「ちげーじゃん、エース。ガープから逃げろっていつてんじゃねーじゃん。俺は俺から逃げろっていつてんじゃん！」

「逃げるぞ、エース！サクラはあれをやる気だ」

「はあ？あれってなんだよ!？」

「逃げれば分かる！早くしろ！巻き込まれる!!」

エースたちが逃げた後にサクラが懐から取り出したのは中にたっぷりと自分の壊れた髪の毛の入った試験管。それをガープに向かって投げて撃つ。パリンとわれたその中から広がるサクラの髪の毛の粉。

「枯レ木ニ花ヲ咲カセマシヨウ『桜満開』」

そしてそこに擦ったマッチを投げ入れる。

可燃性粉はその密度が高くなれば高くなるほど引火しやすくなり、高密度の粉は最早可燃ガスに等しい。故に小麦粉工場ではそういった大爆発が起こりやすいのだ。

「やれるッ！やれるじゃないか!!」

「誰をやれると言った…?」

「なっ!!?」

先の大爆発は一瞬で辺りを飲み込み、空にキノコ雲を形成するほどだった。しかも自分の髪の毛に覇気を込めていたから威力も見た目以上のはずだ。はずなのにいまだガープは健在。服は焼け焦げ、肌には火傷の跡が少し見えるがそれだけだ。流石は覇気を使って防御しただけの事はある。まだまだガープは十二分に戦える。

「『』」

「(速すぎじゃん!?)」

身体を壊して攻撃を流そうとする暇もないガープの一撃。殴られた後に身体が壊れるが遅い。

「無闇に身体をバラしても的を増やすだけじゃあー!」

しかもそれは強者相手には下策だ

「本当にそうかじゃん？」

と思われた。サクラにだって身体を壊したまま相手を攻撃する手段は持ち合わせている。

「酔ヒ倒レル程飲メ花見酒『桜吹雪』！」

「『鉄塊』！」

しかしその壊しバラした自分の欠片を敵を貫くように集めるという手段もガープの『鉄塊』に阻まれる。ならば『鉄塊』をかけ続けられない程長時間攻撃をし続けなければならない。

「望ム八幾千モノ桜並木『御花見宴』！」

改良を加えられた『御花見宴』は最早サクラの拳と蹴りの『手鞠桜』と『蹴鞠桜』とは既に一線を画す威力になっている。これならば流石のガープも『鉄塊』をかけざるをえない。あるいは、

「やるのお…鉄塊『剛』!!」

最強の『鉄塊』を引き出すことすら可能だ。

「じゃんじゃんじゃんじゃんじゃん」

「ウオオオオオオオオオ!!!」

叫ぶサクラに獣のようなうなり声で対抗するガープ。その勝者は、

「鉄塊拳法『剛拳』!!」

“拳骨”のガープであった。疲労で注意力が散漫になり拳の切れが緩んだ隙に強力な拳を叩き込んだ。

「ガア…これが、これからお前にぶちこむ一撃が俺の全力全壊じゃん」

吹き飛ばされて満身創痍、早く倒れてしまいたい、サクラはそこまですべてボロボロなのにまだ立ち上がる。全ては弟たちの為、自分の夢の為、自分の力を付ける為、そして自分の力を自分自身に証明するため。サクラの行く道は常に海軍が立ちはだかる茨の道だ。そんな道を突き進むには力が要る。そしてサクラはここ数年の努力を証明して自分は夢に一歩一歩近づいているんだと自分自身に言い聞かせたい。だからサクラは勝つ。自分の為に今は負けていい戦いじゃない。

「来いッ！鉄塊『剛』」

「闇夜ヲ照ラシ闇ヲモ壊セ『六尺玉』！」

腕を組んで構えるガープに愛銃“花火”を向けるサクラ。サクラの覇気で銃身が真っ黒に染まってしまったそれには散弾が装填されている。一撃で張れる弾幕。そしてその覇気で強化された弾幕は衝撃波をばらまき、その弾幕の広さはまさに花火の六尺玉そのものだ。当然威力もバカならない。余りの威力から銃の負担が大きく、一日一発が限度のそれは素手の格闘家が銃を最強の必殺技とするのに相応しい威力であり、ガープを吹き飛ばすだけでは止まることはなく、木を、地面を、川を、湖を、岩を、森を、山すらも打ち砕いて数kmも進む。

「…!!?」

義兄の恐ろしいを遥かに越す凶悪な一撃にエースを始めとする三人も開いた口が塞がらない。

「はあ…はあはあ…これで決まってなきゃあれはマジもんの化け物、俺じゃ勝てねえじゃん」

ガチャリと右手に持つ花火を落としてサクラはやりきったという達成感と疲労感でフワフワとした意識の中で眩いたが、それはフラグだ。

「ぶわっはっはっ!!今のは中々効いたわい!海軍中将でも受けれる奴はそつはおらん!!!」

この数kmを僅か二分弱で走り切ったガーブはそのままサクラの胸ぐらを掴み、

「ではワシの全力!『愛に燃える拳』も受けてみい!!」

「(死んだじゃん)」

燃え盛る右腕でサクラの鳩尾を殴り、サクラを吹き飛ばした。

ほのおのパンチ威力75こうかはばつぐんだ!

サクラの能力は斬撃、打撃を無効にはするが完全無欠ではなく弱点は幾つかある。例えば先程露呈した衝撃波と風だ。この二つにサクラは大ダメージを受けた。しかしそれ以上の弱点がサクラにはある。それは火だ。サクラの能力はポロポロに自分を壊すというよりも、自分の身体を粉末にするという性格の方が強い。故に燃えやすく、逆にその弱点を利用したのが大爆発の『桜満開』である。

サクラはガーブの事を拳と覇気が取り柄のじじいとしか考えていなかったが、それ故原作では無かったガーブの必殺技を知らなかった

サクラは運が悪かったと言える。もしガープがサクラと同じく火が弱点の能力者でガープよりも強いイーブがここに来ていなければ、また話は変わっていたかもしれない。本当にサクラは運が悪かった。

ザブーン

「あの糞爺今度絶対泣かすじゃん」

「ピューピュー」

しかし運良く川に落ちたサクラは体の火が消え、しかし今度は溺死の危険の真っ只中にいたサクラは弟たち達に、自分を助けようとして自分も沈んだルフィと共に、救出されて復讐を堅く決意したのだった。

第四十六話 ゴア王国で破壊者は原作の破壊を

悪魔の皮を被ったような英雄の衝撃の襲撃から数日後、サクラの火傷が完治したそのお祝いに、パーツと皆でゴア王国の中心街でサクラの奢りで旨い物を食べた日のことだった。

「サボを返せよ!!!ブルージャム!!!」

「フッフ……」

サボの父親が海賊のブルージャムを使ってサボを取り返しに来たのだ。

『返せ』とは意味のわからない事を…サボはウチの子だ!!!子供が生んで貰った親の言いなりに生きるのは当然の義務!!!よくも貴様らサボをそそのかし、家出させたな!!ゴミクス共め、ウチの財産でも狙ってるのか!?!」

「何だと!!!?」

ルフィの叫びに逆ギレしたサボの父親の無礼極まりない発言に今度はエースが激怒する。しかし所詮は子供。大人の海賊にその行動は読まれている。だからエースがサボの父親に飛びかかる前に殴り付けられ、

「…………え?」

無かった。相手は海賊とはいえ所詮東の海の雑魚。サクラには海賊が今から何をしようとしていたのかなんて筒抜けだ。

「どつして…おれを庇って……………!？」

そしてエースを庇って海賊に殴られたサクラの耳は一撃で千切れサクラの顔は左右非対称な愉快な顔になっていた。

「ゴラ海賊!!子供を殴るにも気をつけたまえ!!ゴミ山の子供の血がついてしまった、汚らわしい……………消毒せねば」

しかしサクラの大怪我なんかゴア王国の貴族が気にするはずもなく、むしろサボの父親は自分が汚れた事に気を使っている。

「やめてくれよ!!……………おれはそそのかされてなんかいねエ!!自分の意思で家をでたんだ!!!」

「お前は黙っている!!!……………後は頼んだぞ海賊共」

「勿論だダンナ。もう代金は貰ってるんでね。この二人が二度と坊っちゃんに近づけねエ様に」始末」しときます」

サクラの大怪我に我慢ならないと叫ぶサボにもその父親は耳を傾けずブルージャムに指示を淡々と出す。

「!!……………ちょっと待て!!ブルージャム、お父さん、もういいよ、わかった」

サボは子供だが温室でぬくぬくと育ったガキじゃない。だからブルージャムの言う「始末」の意味が直ぐに分かった。

「何がわかったんだ、サボ」

「やめろよサボ!!!」

何を分かったか分かったかのだがそれを敢えてサボの口から言わせようとする父親。しかしそれは絶対に言ってはいけない言葉、サボが自分から自由を捨てて、何十年先まで決められた人生を送る事を決定付ける言葉だ。だからエースは反対する。自分達は兄弟、一蓮托生なのだ。一人が連れ拐われようとしている時に命を賭けずに何時賭けるというのだ。

それはサクラも一緒だ。

「俺は絶対にお前を裏切らない、一人にはしないじゃん。そのためならこんなちっぽけな国でも、東の海の連中が束になって来ても、偉大なる航路の海軍本部がこぞって来ても、新世界の四皇がお前に牙を剥こうとも俺は最強無敵で居続けるじゃん。俺がサボ、お前を守ってやるじゃん………で、どうするのかじゃん？」

耳を押さえてた右手に付いた血をべつとりとサボの顔をのじりつけるように、サクラは右手でサボの顔をなめ回しながら聞く。その言葉にハツとした顔でサボが言った、

「お父さん、何でも言つ通りにするよ……!!言つ通りに生きるから!!!この三人を傷つけるのだけは……やめてくれ!!お願いします……大切な……兄弟なんだ!!!」

自分の自由を捨てる言葉を。サボはサクラの實力は一応は信じてはいる。たった一人でこの国を潰すことは余裕だろう。東の海の秘境を探してもサクラの膝を地につける者は誰もいないはずだ。あの悪名高き偉大なる航路でも十分に通用する實力を持っているとは思う。

「ただどそれまでだ。先日、サクラは海軍本部“中将”ガープに手も足も出ずに殺されかけた。だったらその上の大将を相手取ったらど

うなる？そんな世界政府が認めたと、ある意味で屈服した王下七武海を相手取ったらどうなる？そんな二大勢力と三つ巴でいられる四皇を相手取ったらどうなる？

確かに王下七武海や四皇と直ぐに敵対することはないだろう。だがサボの家は貴族だ。特異で強力な能力者がとある国の貴族の御曹子を誘拐したと騒がれたらどうなるだろうか。海軍がやって来るのが妥当だろう。そしてサクラを一向に捕まえない世界政府はいずれサクラも敵わないような強敵をぶつけてくることも当然と言える。故にサボは自らの道を閉ざした。大切な兄弟のために。

しかしサクラもこのくらいのことは予測できた。だが今は、

「じゃあ俺はお前の事をみ…み守ってるじゃん」

この程度のことしかできない。全ては未来を知るサクラの考える最高の未来の為に。

「…おい…!!?行くなよ!!!振り切れ!!!おれ達なら大丈夫だ!!!一緒に自由になるんだろ!!!これでどうにか終わる気か!!!サボーーー!!!」

だから今は兄弟と泣くことしかできなかった。

「お前らとはポルシェーミの一件での因縁があるが…あれはもういい。……むしろ強エ奴は好きだ。歳は関係ねエ。今…人手が欲しいんだが、おめエらおれの仕事を手伝わねエか？」

サボと別れたサクラ達はブルージャムに連れられてゴア王国の不確かな物の終着駅の海岸に停めてあるブルージャムの海賊船の中にいた。

「……これがごと「ゴミ山」グレイ・ターミナルの地図だ」

「サボがいねエとイヤだ、おれ」

「我慢しろ!!おれだってそうさ……!!………だけど本当のサボの幸せが何なのかおれにはわからねエ。様子をみよう。あいつは強い!!本当に嫌ならまた必ず戻ってくるぞ」

しょうがなくブルージヤムの仕事に参加することにしたエースとルフィ。しかし

「なあ、サクラどこだ？」

「……え？」

「逃げやがったな!!あいつ!!」

そこにサクラの姿はない。

「あいつらにはあれもいい社会見学じゃん」

一人森の奥の木の上でくつろぐ片耳のサクラ。中タイイ性格をした兄貴である。

『あのゴミ山の二人の友人の命は今海賊の手の中、私の采配一つだ。二人がそんなに大事なら……今どうすべきかよく考える』

『……全く、こんな頭の悪い息子をもってしまう不幸……わかってく

れるかね?...キミ」

『「養子」だよ...!!当然貴族の家系で優秀な子だ』

『お前がもし人生を失敗しても.....』

『おめエバカなんだって?...ふふふ、お父様とお母様が散々言ってたよ、陰で...』

「あー、まさに見ると聞くとは大違いじゃん。実にム力つくじゃん」

サボを「耳守ってる」、言い方を変えると盗聴なう、なサクラはエース達を放置してサボに万が一の事態が起こらないか必死に、先程海賊に潰されてサボのポケットに忍ばせておいた右耳をそばだてて今すぐにゴア王国にケンカを吹っ掛けていきそうな勢いで激怒していた。文字通り今にも飛んでいきそうな勢いだ。

「今は落ち着くじゃん。これ」が完成したんじゃん。俺の計画に狂いなんてもう有り得ないじゃん」

怒りを何とか収めたサクラが見下ろすのは、必死に逃げる一匹の鹿と、胴体が爆発してしまっただかのような鹿のものと思われる足四本だった。

「いやー、中々はっちゃんけて燃え盛ってるじゃん」

サボが連れ去られた翌日の深夜、サクラが原作で見た通り、そして昼間にサボから盗聴した情報通りに、ゴア王国の側にあるゴミ山は不自然な大火に見舞われていた。

「さて、そろそろ俺も動くかじゃん。『破壊的にぶっ壊す為に』」

「熱イ!!熱イよオ!!」

「はあ、お前ら、あんな大人に着いていくからこんなことになるんじゃない」

ちやんとエース達の居場所を前もって把握してあったサクラは、ブルージャムに炎の中縛られていたエース達の拘束を解く。

「じゃん、本日の天気は快晴じゃん。湿度が低く、雲一つ無く満天の星空が望める遠足、放火日和じゃん」

「くそっ!!とんでもねエモンに巻き込まれた!!」

「もう逃げらんねエ!!」

とんちんかんでアップパーはサクラと悪態をつくエースと泣き叫ぶルフィ、大火事の中反応は三者三様だ。

「泣き言言つ奴は置いてくぞ!!!」

「ウ!!あつくねエ!!」

「じゃん、ルフィ、エース!家に帰るまでが遠足じゃん」

ルフィをエースが諫めるがサクラは相変わらずゴイーイングマイロード、言動が我が道を行くお方である。

「あの夕日に向かって走るじゃん!!」

「いや、今夜だから！」

現在十一時。太陽は店じまいをし、満天の星空が輝いている。

第四十七話 秘境で敗者は懺悔の修業を

「うーん、悪くはないねー」

イーブは毛むくじやらで狂暴な猿を容易に仕留めて漏らす。容易に仕留めたといってもこの猿はただの野生の猿ではない。少なくとも海軍本部中將が二人がかりで行かなくては到底相手にならないレベルの強さだ。そしてそんな猛獣を意図も簡単に、そして一撃で仕留めてしまったイーブがこの五年間でどれほど強くなったかが分かる。

イーブは五年前、レイリーと別れてから一人で航海をしてここ新世界にあるムー島に来ていた。目的は勿論修行だ。何故ここなのか、何故イーブはレイリーに教えを乞わなかったのか、それはイーブの目的は修行であり努力することだからだ。レイリーに頼めばイーブの稽古をつけてくれるだろう。それは当然辛いもので止めたくもなるかもしれない。だがその程度だ。いくら辛いと言えど、いくら生傷の絶えないものと言えど生命の安全が保証されているそれはイーブにとっては努力とは言わない。ただ頑張っているだけだ。努力とはもっと辛くてもっと凄惨でもっと残虐でただ愚直に体を苛めて虐めてイジメ抜くことだ。身体の調子が悪いとか熱があるとか、怪我が治っていないとか、腕が折れたままだとか、血を吐いた血尿が出たとか全く関係無く体をただただ壊し尽くすことだ。その死に急ぐ行為の果てに自分の成長があると信じて。

故にイーブにとってこのムー島、別名「毒蟲の呪いの島」は修行にうってつけだった。

この島はまず気候からシビアだ。一日に春夏秋冬の四季が巡り、一日の最高気温は50 最低気温は 50 まで下がる。普通にこの時点で辛い。しかしそれだけではない。この島はとてつもなく酸

素が薄い。それは下手すれば空島よりも薄いかもしれない。この理由は後述とする。そしてさらに何らかの災害が一日に少なくとも朝昼晩の三回以上は起こることだ。しかもただの災害じゃない。新世界でも他の島ならば間違いないその地域の歴史に名を残すような大災害だ。

最後に言つと、ここは全ての生物が強い。動物だけではない、植物すらも中には海軍本部大將を凌駕する力を秘めたものがあるほどだ。ゆえに植物は光合成よりも呼吸の方が盛んに行われ、必然的に酸素濃度が下がり、二酸化炭素濃度が上がる。動植物全ての生物は雑食で互いに喰らい合い、その血肉を自らの糧にする。そんな狂暴な生き物が集まった島がここムー島である。

次はイーブがこの五年間何をしたのかを紹介しよう。

イーブはまず自分が何故敗北したかを考えた。答えは簡単だった。能力に依存しすぎたことだ。一丁前に能力はおまけだとのたまわっておきながらピンチになると直ぐに『泥の巨兵』に頼る。相手が強敵になるほどそれが顕著に現れていた。しかしイーブは考えた、『本当にそれだけか?』と。答えはまた直ぐに出た。

「イーブは自分の剣技に頼りすぎだった」

イーブの切り札は言うまでもなく「帝」の剣技だ。それに頼ることがはたして悪いのだろうか?イーブの考えはこうだ。

自分の武器は「帝」だと散々うそぶいていながらも、弱い「デザート」を味わうときには「六式」ばかり使っていた。別にそれを悪というつもりはない。ただ中途半端と言うことだ。つまりイーブは「帝」という武器を持ちながら「六式」という武器に浮気し、その上「六式」は本命でないからと適当な扱い。そんな浮気相手の事につつ

つを抜かしながらいざとなったら本命に泣きつく。これではただの甲斐性の無いダメ男である。マダオだ。

だからイーブは思った。全て本命にすべきなんだと。"帝"も"六式"も"ドロドロの実"すらも本命として、そのどれか一つとつても自分が世界最強を名乗れるように極めるべきなんだと。その三つの内敵との相性で戦う事が出来るように成れば無駄な消耗は減るだろうし、その恩恵はイーブ自身を更なる次元に引き上げるだろうとイーブは確信する。

「さて、やっぱりー山頂に行けば行くほど敵が強くなるねー。この上に何かー居るのかなー?」

先程のを囿にイーブに襲い掛かる十匹の猿を一撃で引き裂いたイーブはまだ先の見えない山を登り続ける。

この五年間でイーブの口調にも変化があった。この無駄に間延びされた口調がそうだ。こんな口調になった理由は簡単だ。五年間起床就寝時間問わず休むことの出来なかったイーブ。ゆえに口調だけでもせめて休みたいと思った結果がこのだらけきった口調なのである。案外海兵時代の上司の影響もあるのかもしれない。

「君がこのダンジョンのーラスボスだねー?」

山頂まで来たイーブを迎えたのは一匹の黒猫だった。なんの変てつもない黒猫。外に出れば簡単に見つかりそうなほどどこにでもいるような風貌、雰囲気をしている。イーブもこの猫がムー島の山頂という名の玉座に居座っていて、そしてこの島から帰ってきた唯一の男の手記を見ていなければこの黒猫がこの島の王だとは気付かなかっただろう。

『私たち新地探索隊は、いや海軍本部少佐の自分と大将の二人はこの島に残された最後の未確認地帯の山頂にてこの島の王のただの黒猫に出会った』

これを記した男が海軍史上最強と言われる大将になるのはまた別の話。

その手記によると、島にきて来る前とは比較できない程強くなった大将が一方的に、ろくに歯が立たずに殺されたとのことだ。

イーブの目標はこの名も無き黒猫だ。こいつよりも強くなれば、こいつよりも強くなっていったならば、自分は『自分勝手な正義』を貫けるだろう。この世界を『自分勝手な正義』の元に改革出来るだろうと信じている。

「やあー、始めましてだねー。僕の名前はスコウエルド・イーブだよー……ちよつと死合わないかなー？」

この猫は知能が高く、イーブの言っていることがわかっている。わかってるから、応えた。

「……………鉄塊『牛車』」

ブワアといきなり尻尾を八本に増やしたかと思うと体当たりを喰らわす。『剃』を足四本でやれば速度は二倍、しかもイーブの不意を完全についたその一撃は一瞬でイーブを粉碎した。

「ごやー、すいごねー」

そしてその瞬間に再生した。イーブはこの“ドロドロの実”の欠

点である。遅効性をとくに克服している。いや、寧ろこれを克服せずして能力を極めたなんて言えるはずがない。

「ところで、君―誰かなー？」

再生したイーブが振り返るとそこにいたのは黒い猫耳を付けてついでに尻尾アクセサリーという一昔前のグッズを着けた黒髪のホスト風の男だった。いや、イーブはちゃんと彼が誰なのか分かっている。

「君―、人型にも成れるんだねー」

「……………」

「まー、いいんだけどねー」

答えない黒猫にイーブは笑って返すと右人差し指を彼に向ける。

別にイーブは今からボルサリーノの真似事をするつもりはない。というか、あれは真似しようと思ってできるものじゃない。

イーブがしたいのはいわゆる力比べだ。強いて言うなら『指銃』ってこと』と言うものだろう。別名ET』ってこと。

イーブの意図を汲み取った黒猫は彼に近付いていき、互いの射程に入ったところで、

『指銃』

「……………」『指銃』

殺すための武器を放った。

結果はイープの勝ちだった。

「いやー、すごいねー。さっきからそれしか言っていない気もするけどー、それ抜きでもやっぱり大将クラスはあるよねー、これ」

大将を超すとは言わない。流石にこんな手抜き状態のイープに吹き飛ばされるような奴は大将より強いわけがない。加えて言うならこの黒猫だってまだまだ全力とは言いがたい。

「……………」

直ぐに立ち上がる黒猫。そして構える右人差し指。

「ふーん、尻尾が増えたら強くなるのかなー？」

九尾猫又の挑発にイープは乗った。

そしてまた勝利した。これも当然のながれ。本気じゃない黒猫がイープに勝てるわけがない。イープは知っているこの黒猫があと一回の変身を残していることを。だからこの程度で苦戦するわけにはいかないのだ。

黒猫はパワータイプだ。それは彼自身が一番分かっている。スピード、技術を置き去りにしてただひたすらに突き抜けたパワー、それが黒猫のストロングポイントだ。故にこの力比べは負けられない。この力比べの敗北はすなわちこの戦いの敗北を表すからだ。

「……………」

故に黒猫は何度も立ち上がる。この力比べに勝てるまで。今度は本気だ。九本の尻尾と一対二本の大きな黒に映える純白の羽根。昔来た海軍大将を一方的に叩きのめした黒猫最強の姿。

「へー、尻尾一本増えたときもーかなり強くなってたけどー、羽根が二本も増えちゃったらーどうなるのかなー？」

黒猫の挑発にイーブは海軍大将を潰したその力を見せると言わんばかりに堂々と挑発に乗った。

「ガア!？」

そして吹き飛ばされた。その吹き飛ばされる速さはイーブが飛ばされているということに気が付かず、景色が勝手に遠ざかっていると一瞬勘違いしてしまったほどだ。

「いやー、すごいねー。でもー、力じゃなくて技で来られるとどうかなー?」嵐脚」

イーブがどれだけ六式を熟練させようとも、どれだけ能力を極めようとも、イーブはどこまでいっても剣士。やはりお気に入りには「帝」に他ならないし、故に「斬る」という行為に特化するのも必然の流れ。故にこの『嵐脚』は「六式」の他の全てとは一線を画す。

その『嵐脚』を黒猫は

「鉄塊『白』」

その羽根に身を包んで防いだ。ところで『剃』と『指銃』に『鉄塊』は紛れもなく世界政府の専売技術だ。なのに何故黒猫がここまで使いこなせるのか。それは過去に来た海軍大将が六式使いだったから

の一点に尽きる。六式を使いこなす好敵手。彼はもう居ないが、彼の技術は黒猫には目新しいものだった。瞬足の『剃』も天翔る『月歩』も切り裂く『嵐脚』も鉄壁の『鉄塊』も不可触の『紙絵』も、そして最高の一撃『指銃』も当時まだただの九尾猫又だった彼を苦戦させるに十分な奇術だった。故に盗んだ。幸い黒猫は身体能力には恵まれている。後は好敵手を思い浮かべコツを掴むだけだった。

「鉄塊『牛車』」

黒猫はだから知っていた。『嵐脚』を使った直後は片足立ちとなるので少し動きが鈍ることを。故の突撃。故の特攻。故の突貫。

それをイープは、

「『紙粘土』」

能力を使って回避した。

黒猫は驚いた。『紙粘土』があまりに自分の使う『紙絵』に酷似し、あまりにかけ離れていたのだから。何だその妖術は、と心の中だけでそのモヤモヤを処理する。黒猫は目の前の男がパワーで自分に負けた時点で、もう自分には勝てないと確信していた。だからその感情を心の中にしまうことができた。しかしそれが間違いだったことを知るはこの直後。

「『第三の右腕』」

第四十八話 孤島で王は巨大な渴望を

『『紙粘土』』

黒猫の『牛車』をかわした『紙粘土』。それはイーブが考えついていた能力を使った『紙絵』であった。実態の無い自然系ドロドロの実だからこそできる攻撃の回避手段。それは自分の身体に穴を開けることだった。自分が最強と勘違いした寿命の短い自然系の能力者は攻撃をかわす、なんてことはしない。何故なら自分の実態の無い身体には攻撃が当たらないからだ。覇気を使いこなすイーブならなおさら攻撃は当たらないだろう。

だがそれじゃあ弱い、慢心だ、驕りだ、停滞だ、退化だ。そんなことではいざ自分に攻撃できる相手にあったら即降参になってしまう。そんなことでいいはずがない。

だからイーブは能力を使った受動的な回避なんか何処かに捨て置き、能力を使った能動的な回避をする方法を考えた。

その結果が身体に穴を開けることだった。

実体がないということは、自身を自由に変化させられるということだ。それを生かさない方法なんてあり得ないだろう。

そしてイーブがやったことは能力の新しい分野の開発だけではない。既存の技の欠点改善も勿論やっている。

『『第三の右腕』』

『第三の右腕』がそのもつともな例だろう。右手を巨大化させること

で機動性、小回りを犠牲に圧倒的なパワーを手に入れる『巨兵の右腕』。その欠点は巨大化した右腕が邪魔であることだ。故にこの技では馬鹿みたいなパワータイプしか相手にすることができなかった。しかしこの『第三の右腕』は違う。右腕が邪魔ならばと右肩からその巨腕を生やすことにしたのだ。こうすれば走るときに邪魔にならず、『巨兵の右腕』の欠点も克服できたと言える。勿論展開速度も実戦で使えるほど早くなっている、しかも『泥侵食』を使わずにだ。

五年前は前身の『巨兵の右腕』を使って大将と互角だった。では、五年間の試行錯誤と厳しい修行で洗練された『第三の右腕』ならどうなるか。

「やー、行ってみよー!!」

その答えは「島が割れる」であった。

イーブの巨腕と黒猫の右腕が衝突したとき、まず大気が震え上がった。そして次に空を引き裂いた。それでも二人は踏ん張る、飛ばされないように。意地と意地を張り合って、この状態を維持する。止まろうとする足、動かそうとする右腕。その衝突に作用反作用の働きで島が離れ離れになったのだ。

イーブは思う。流石はこの悪名高き魔境の王だと。現に単純な力比べでは僅かに黒猫の方が上回っている。

だがそれだけだ。この力が彼の底だ、全力だ、限界だ。故にイーブは確信する、『勝った』と。ゼファーは言った、『何時もいつてるだろオが速さは力より大事な要因だが速さだけじゃどうにもなら無いやつもいる』と。かつてのイーブであればそのような敵をそれ以上の力で圧倒することしか考えなかっただろう。だがそれでは芸がない。何よりスピードタイプのイーブがパワーを極めた者をそれを上回るパ

ワーで圧倒しようなど傲慢にも程がある。

だったらどうすべきか。スピードがダメ、パワーもダメならば、

「それじゃー、僕のテクニックで君を圧倒しよー」

技巧しか残っていないだろう。

両手の十指を黒猫に向け、

「泥銃『射斉』」

指先から十発の弾丸を発射した。

イーブの能力の出力はイーブの体術を遥かに凌駕する。例え小さな小手先のちっぽけな弾丸ですらそれに秘められたエネルギーを考慮するともはや必殺、奥義に形容されても何ら不思議はない。

その小さな爆弾の威力を感じ取った黒猫も最強の防御を使わざるをえない。

「……鉄塊『霸剛』」

熟達した覇気でもう無色であることはなかったと言わんばかりの黒は、武装色の覇気の“硬化”でなる示威行為半分な形で付いた黒色とは全く違うものだった。気配、オーラが違うのだ。例えるなら無駄に装飾して自分を格好良く見せようとする若者と、ただそこにいるだけで周りが魅力的だと感じてしまうようなダンディーな初老の男だろうか。その二つは心構えが違う。似非強者と本物の強者、先ず器の違いが明白である。

そんなことを一瞬で感じさせるような見事な覇気による防御。いや、黒猫には覇気で防いだという自覚はない。黒猫からするとただ全力で防ごうと思ったなら覇気が出てしまったというところだ。しかし何にせよこれが黒猫最強の『鉄塊』であることには変わり無い。そしてイーブの目的はこれだった。

「さー、最強の『鉄塊』を出しちゃったらー、もう動けないよねー」第三の右腕『ー！』

黒猫は機動力を完全に無視したパワータイプだ。故に素早い動きができず、攻撃を耐えて倍返し狙うのが黒猫の戦闘スタイルとなる。だから黒猫は全力を出した後の硬直が他に比べると長い。それでも持ち前の耐久力で生半可な攻撃はダメージにすらならないのだが、イーブの『第三の右腕』は無理だ。自分の全力に匹敵する一撃を無防備に受けて無事でいられるわけがない。

「はーどーん」

そうして黒猫は海に沈んだ。

悪魔の実際の能力者はその力と引き換えにカナヅチとなった。つまり海に落とされた能力者は例外なく死ぬ。いや、能力者だけじゃない。体力を使いきった陸生の生き物は基本的に沈むしかない。それは数百年という悠久の時を過ごしてきたこの黒猫も例外ではない。いや、例外ではなかった。

黒猫が思い出すのは自分がまだただの黒猫で、この島も比較的穏やかな生物で満ちていた頃だ。今では想像もつかないかもしれないが、当時の黒猫は食物連鎖の最底辺にいた。ただ食われるだけの存在、ただ狩られるだけの存在だった。仲間は数を減らし、死に絶え自分一人になり、そして自分も重傷を負い今と同じく“死”を強く意識したと

き、黒猫に変化が起こった。

『死にたくない』たったそれだけの感情、だが遺伝子に組み込まれた生存本能とはかけ離れた強い願いは黒猫を化け物にした。

今と同じように。

その時はただ尻尾が二本になった。その時も新たな力は黒猫に桁違いの力を与え、その場を切り抜けることができた。そして今回は一対の二枚の羽根が三対六枚に増えた。

十数年前に九尾の自分を追い詰めた六式使い。しかし彼は一對羽根九尾猫又となった化け物には手も足も出なかった。だが今回は溢れる力がその比じゃない。黒猫は確信した。自分が“化け物”というカテゴリーからその上のナニカ、強いて言うなら“神”と呼ばれる領域に片足を踏み入れたのだと。

もう黒猫は負ける気がしなかった。海底に足を着けた黒猫は思った。『もう海底か、世界は小さいな』と。

その上空。イーブは黒猫を叩き落とした海をじっと見つめていた。それは別に感傷に浸っていた訳じゃない。ただ待っていたのだ、自分が落とした黒猫が、自分が呼び起こしてしまった獅子が這い上がって来るのを。そしてその期待は直ぐに応えられた。

「いやー、すごいねー、ほんとーに。言葉にすることが憚られるほど君ー、キテるよー」

ドンツと水飛沫が上がったかと思うと、六本の自在に動く立派な純白の羽根と九本の漆黒の尻尾を持つ男が現れた。

そして世界は荒れる。

割れた二つの島が突然持ち上がり、海底で鳴りを潜めていた十匹の1000m超級の海王類もフワリと浮いてまるで作家が失敗した原稿を扱うかのようにまるった。

下手人は勿論この黒猫。イーブはこれを見たことがある。それはもう六年位も前に見たものだ。自分をここに連れてきた"神"と呼ばれる女性の『神通力』と呼ばれるものに間違いなかった。

「本当に素晴らしいの一言に尽きますね。それ以上の言葉は蛇足でしよう。」

今イーブの中にあるのは敬意。イーブは自分自身を強者と知り、決め付け、そして世界最強を傲慢にも騙っている。そんな自分を殺しうる存在の黒猫、そんな彼にイーブは尊敬の念を禁じえなかった。この島に来てイーブは変わった。イーブはこの島に来て自分が世界最強であることを確信し、世界には自分を殺しうる存在が数多に居ることを実感した。だからイーブは自分自身を殺しうる体格種族武器得物戦法人数関係なく全ての存在を尊敬し、潰し、自分を高めてきた。

そんな尊敬する彼にイーブは最後の武器"帝"を抜く。この五年間の成果は、"六式"はギリギリ赤点回避、"能力"は及第点、あと残るは"帝"だけだ。

「では…行きますよ。」

そう言うが否や直進。空に浮かぶガラクタには興味ない。だって幾ら斬った所で意味が無いのだ、ならば大怪我覚悟で本体、黒猫に向かった方がよっぽど建設的だろう。それにイーブだってただ斬られることを手こ招いている訳じゃない。

『斬流し』

イーブがこの五年間で伸ばした“柔の剣”。どんな固いものでもその怪力で叩き斬るのが“剛の剣”ならば“柔の剣”はその逆だ。どんな固いものにも存在する綻び、つまり“物の呼吸”を読みきり斬る、それが“柔の剣”。それを極めれば敢えて斬らずに反らすということも可能だ。

イーブの『斬流し』はまさに“柔の剣”の極みとも言える。来る攻撃の呼吸を読みきり、攻撃が当たる直前に素早くそれを“帝”で受け流す。あまりの速度で振られた“帝”はまともに目視なんてできず、速すぎて一見イーブが銀の着流しを着ているように錯覚してしまう程だ。

「良いですね。“柔の剣”は八十点です…では“剛の剣”はどうでしょう」

そう言っただけ黒猫に斬りかかる。受けてちゃ勝てない、黒猫は今までの戦いぶりから強気で挑まないと、こちらから擦り伏せるような気概を見せなくてはどうにもなら無いとわかっていた。

「ふむ…互角ですか」

イーブの心情は『意外』。イーブは黒猫の身体スペックならば自分の“剛の剣”を押し返せると踏んでいた。そう予測した上での次の手も考えてあった。しかし結果は罅迫り合い。黒猫の拳とイーブの“帝”は押しつ押しされつの関係を保っていた。

その原因は黒猫が自分の力に、身体に自分の技術がついていないのだ。故に砲撃となるはずの拳が爆弾となってしまっている。

力が全然前に行っておらず、ぶれている。それでも二対羽根九尾の時よりも随分と厄介な相手にはなっているのだが。

だが黒猫の方が力が上だろうと、互角だろうと次やることは変わらない。

「砲撃は一発だけですけれど機関銃は弾が一杯ありますよ」

一撃が駄目なら直ぐにまた一撃を加える。イーブの剣術はテレフォンパンチと違って一発じゃ終わらない。相手を斬り殺すまで繰り出し続ける。

二撃目…決まる。三撃目も決まる。四五六撃目も決まる。七八九十も決まる。もうサンドバックだ。百回毎秒の斬撃を五秒、計五百回斬られ、原型を保っていない黒猫が、

「非常識（その常識は通用しねえ）」

イーブを殴った。突っ込みどころ満載だが六枚羽の彼には常識が通用しないのだ、仕方がない。

「全く……刻まれても死ななくて、その上非能力者ですか…チートも甚だしいですね」

しかし殴られたイーブも大概だ。殴られた衝撃で服は破れ、左半身の紫の火傷痕を筆頭に全身くまなくある古傷の数々がさらけ出される。その中で最も新しい物は胸と胸の間、その中心にデカデカとある、先程の黒猫の一撃でできたほとんど黒色に近い青アザだ。

そんな見てるのも痛々しい内出血をしながらも、現におびただし量の血を吐きながらもイーブは一瞬で黒猫の上を取った。やはり空

中戦は上と後ろを取った者が有利なのだ。

黒猫は悟った。目の前の男イーブが自分より格上であると、そしてこのまま持久戦に持ち込むのはじり貧であると。

故にくまなくはここで勝負を決めにゆく。未だ慣れぬ身体、理解できぬ能力を駆使してできる最強の一撃を目の前の男にぶつける。

『白虎世界』

繰り出すは鬼火。ただしあまりに巨大であまりの熱量を誇るそれは最早鬼火ではなく、白い太陽といった方がしっくりくる。

「おお、戦局判断も流石、その上その一撃とは…本当にどうなっているのですか」

黒猫のそれは自分が勝てないと確信した者の一撃とは思えない程重々しく、神々しかった。

「……未知数（異物の混じった空間。ここはテメエの知る場所じゃねえんだよ）」

そしてそれからのその一言。お前本当に誰だよ。

「ですが、火を扱う相手は昔倒したことがあります。それにシミュレーションも何度もしてきました」

そう言ってイーブは右手で左肩を叩く。この痛みは決して忘れない。だから、

「それでは私は倒せません」

イーブにとって弱点は既に弱点じゃなかった。

『落火世』

一撃には一撃を。対炎に何度も試行錯誤されたそれは意図も簡単に火の玉を斬り、散らし、黒猫をも真つ一二つにした。彼も彼で直ぐにくつついたが、既に格付けは終了していた。

「……服従（負けました）」

人型と言えどやはり動物、服従の際は腹を見せるらしい。

第四十九話 新世界で功労者は繋がりのお会いを

「良し……」

黒猫が降服したところでイーブは“帝”を納める。格付けが終了し、黒猫自信には恨みがないイーブにとって黒猫は必ず殺さなければいけない相手ではないのだ。

「……………追従（貴方に着いていきます）」

語彙はあるのに文章を作れないので、とてもつたない日本語になってしまっている黒猫だが言いたいことを漢字二文字で的確に表しているためなんとかイーブに伝わったようだ。

「ふーん、僕と来たいんだ。別にいいけどね。でも君の名前は？」

戦闘モードが解けてダラシナイ日本語に戻ってしまったイーブ、彼は堅い日本語が好きじゃないのだ。

「……………無名（吾輩は猫である。名前はまだない）」

彼の言いたいことは一応は伝わっているだろう。

「じゃー僕が、名前を付けようか……………猫又とかどうかな？」

「……………普通（そのままじゃないですか）」

「じゃー、徳川家康とか？」

「……………異常（仰々し過ぎます）」

「えー、じゃー、奇をてらってポチとかどうかなー？」

「……………猫（もうちよっと猫っぽいやつで）」

「むー、わがままだねー」

「……………謝意（……………すみません）」

イーブが適当なだけだ。黒猫は悪くない。

「えー、じゃー、黒猫だしー、ヤマトにしようかー？」

これまた適当なものを選んだイーブ。黒猫は一体何を運ぶと言っただ。

「……………自己決定（これ以上の物は望めそうにないですし、そうしましょっ）」

「……………誠意」

名前が決まった黒猫、ヤマトがイーブのその胸に触れ、その瞬間にイーブのこの戦いの傷が一瞬にして治った。

「わぁーおー、すごいねー」

「……………得意分野（伊達に妖怪やってるわけじゃないんで。死んでなけりゃどんな怪我也病気も一瞬で治せます）」

流石にその四文字では意図は伝わらないだろうがヤマトは一応

える。

「ちぁーてー、もうこの島には用は無いらしい、とりあえずレイリーにでも会いに行こうかなー」

「……………御意（御心のままに）」

イーブとヤマトが今立っているのは島だった土塊の上、そんなところにはいたって意味はない。

「じゃー足がないしー、造ろつかない泥船をー」

「……………却下（駄目です、それはフラグです。絶対に沈みます。我々は狸ではありませんが沈みます）」

「ぶーぶー、さっきから』却下』、』却下』ってさー、じゃー君もー意見を出しなよー」

「……………闊歩（月歩）を使いましょう。我々の脚力ならば近くの島まではずっと走っていられるはずですよ」

「おー、なるほどー！じゃあそれでいこうかー、題してー』ピクニック大作戦ー』」

この作戦の大きな失敗に気がつくのは直ぐ後の事だった。

イーブとヤマトが空中歩行を始めて数時間。問題は直ぐに分かった。それは自分等が何処を向いているのか、何処に向かっているのかが全く分かっていないことだった。いや、それだけならまだまだ、と

りあえず真っ直ぐ往けば良いのだから。しかし最大の問題は何処に向かえばいいのかすら分からないということだった。これでは流石に手も足も出ない。

「困ったねー」

というイープの口ぶりはしかし、軽い。ハイキングを始めてまだ数時間しか経っていないのだ。せめて困るのは数カ月歩いて何もなかった時だ、と無尽蔵の体力の持ち主イープとヤマトは思う。

しかしそれも二日で終わる。

「あー、船だねー」

それはお世辞にも立派な船とは言えない、海軍の軍艦を前にすれば吹けば飛ぶようなちっぽけな船だが、それでも十数人は乗れそうな船であった。

「スラムツパギー、誰かいないかなー？」

日本語とは不思議なものだ。誰か居ることが分かっているのに、その人を訪ねる時には『誰かいないか?』と聞かなくてはならないのだから。

「あー、そんなに叫ばなくてもいるタイ…ってスコウエルド・イープ」
「!？」

二日酔いなのだろう、頭を押さえながら出てきた、浅黒く横広でえらばった俗に言う“ヒラメ顔”の男は、訪問客の顔を見て驚く。

「あれねー、僕はーそんなに有名かなー？」

イーブは少なくとも世界政府に抹殺されるような闇に浸かった表の人間には知られないような人間だったはずだ。そんなイーブを知っているのは、

「わっしや元CP9のチェン・タイトリ、タ
イ
イ」

「あー、CP9かー、だったら僕のこと知っててもー、可笑しくない
ねー」

クイツと片目を吊り上げるイーブ。言外に『詳しく話せや、ゴルア』
というわけだ。いくら“元”とはいえ、政府組織の一員だったのだ、
さらにその男の実力が大将とタイマンが張れるほどとなれば、イーブ
は負けないにしろ警戒は必要だろう。

「ああ、わっしにゃおん主と争う気や無いタイ」

それから始まった男の話はこうだ。

タイトリがCP9史上最強と言われていた頃、とある一人の女に
恋をした。一目惚れだった。しかし彼女は自分の暗殺対象であり、見
逃すことはできない。だから彼は彼女と逃げた。女も彼に一目惚れ
だったらしい。

それから二人の生活は 幸せで、不幸せだった。彼は元CP職員、
暗殺失敗で逃亡だなんて許される筈がない。故に二人は追っ手から
逃れ、世界を転々とする日々が続いた。それでも二人がいれば幸せ
だった。

しかしその生活は突然終わりを告げた。タイトリーが負けた訳ではない。彼は追って来た海軍本部中将の部隊も一人で潰したことがある程だ、そんな彼が負ける筈がない。では何故か？男が何時ものように追っ手相手に出張っている時に女が誘拐されたのだ。下手人はその辺りでは名前を聞く海賊だった。

タイトリーが女のビブルカードを追ってシャボンデュー諸島に着いたときには既に天竜人に妻を買い取られた後だった。

その後の味気ない数年を過ごした後にタイトリーに“聖都襲撃”の一報が入った。タイトリーは昔のツテ、人脈を駆使してできるだけ情報を集めた。そしてたどり着いた真実と当時の“アトランティス号”の位置情報。

前は自分の命惜しさに動けなかった。しかし今回はこの命に賭けて妻を守ると誓った。

結局タイトリーは感動の再会を果たすも女は弱りきっており、直ぐに別れることとなった。

これがこの男の話だ。

「ってなわけで、わっしゃおん主にゃ感謝しとるタイ」

例え再会が一瞬であろうとも、自分と彼女を救ってくれたイーブへの恩は忘れない。

「どついたしましてー、まー、正義の味方としては当然だけどねー」

「どつらで、おん主ゃ今までどつしとったんタイ？」

裏社会でもイーブは「楽園」で死んだと持ちきりだったのに、そんな人間が生きていて、しかも「新世界」にいるなんて誰も思ってもみなかっただろう。

「なるほど、状況はわかったタイ！わっしに任せんタイ！」

この男、航海術に天気予想と船のコーティングとこの海に航海士として必要なことは全て身に付けているらしい。流石は元世界政府直属暗殺機関職員。漢字が長いな。メタい。

それから近くの島に停泊して三日、タイトリーが船のコーティングを完成させていよいよ魚人島へと向かうこととなった。

「んでー、そのゴム手袋は何かなー？」

海に潜り始めた頃にタイトリーが手術で使われるような真っ白のゴム手袋を右手にはめる。

「んあ？ああ、わっしや「能力者」でタイ。海水に触れたら力が出んタイ」

「でもー、右手だけにはめても意味無いんじゃないかなー？」

「いんや、それがわっしの食った悪魔の実、「ジャラジャラの実」にかかりゃそんでも無いタイ」

バチンとゴムを一度伸ばして気合いを込めて覇気を纏わせる。一瞬で真っ黒に変色したそれはゴムの弾力を持ちながらも鋼鉄の強度

を誇る十二かである。

「ジャララ…指銃『連鎖』！」

そして人差し指だけ伸びたかと思うとそのまま船を襲おうとする海王類や巨大魚類を片っ端から貫いてゆく。ゴム手袋はタイトリーの指が海水に触れるのをちゃんと防ぎ、なおかつ覇気で強化されたそれは破ける事もない。

この深海においてタイトリーの船を脅かす脅威は何一つ無かった。

そしてやって来た数多の死線を潜り抜けてきた猛者たちが集まり、そしてその連中が飼い犬の如く大人しくさせる最強“白ひげ”が治める海底の島、魚人島。

今、この土地は国がとても盛り上がっていた。“表向きは”だが国民が一致して自分達、魚人と人魚の地位向上に沸いているのだ。その先導者はこの国の王妃のオトヒメ王妃だ。

「すみませーん！署名にサインしてくださいーい!!」

「いや無理タイ、オトヒメ王妃」

「どうしてですか!? 想像してみてください！今まで私達が憧れてきた太陽！今それを私達が手に取れる大きな機会なのです！私達が、未来の子供たちが、人間と共に歩むという私達にとっても素晴らしい事がもう少しでもできるのですよ!?!」

「でも、わっしやこんななりでも人間タイ」

「…………えっ」

「…………えっ」

「…………えっ」

「……………銀鱗躍動（勢いは凄いが焦りすぎじゃないか？）」

いくらヒラメ顔だと言えど、そのままヒラメの魚人と勘違いされるだなんて、どんだけなんだよ、タイトリー。

因みにヤマトが銀鱗躍動という四字熟語の鱗が人魚の鱗と縁語的な表現だ、上手いこと言った、とドヤ顔を決めたのは全くの別の話。その時猫形態だったから誰もドヤ顔に気がつかなかったのも完全な余談だ。

「あっ、えっと……………ごめんなさい…」

誰が謝ったのかは言うまでもないだろう。

「…………ふーん、君が“あの”オトヒメ王妃だねー。うんうん、タイガーとは全然似てないのにほんの少しだけ面影があるねー」

勿論見た目の話ではない。あのいかつい魚人と魚人島一の美人が似ててたまるか。イーブが言っているのは目、それも目の奥に宿した意志の光だ。

武力による恐怖で自分達を認めさせようとしたタイガーと、徹底した歩みよりで自分達を認めさせようとするオトヒメ王妃。その手段は真逆なれど、向かう先は魚人と人魚の明るい未来。

武力を行使するタイガーだってイーブは嫌いじゃなかった、むしろ応援していた。だがだからといってイーブはオトヒメ王妃のやり方を嫌う訳じゃない、否定する訳じゃない。イーブだって正義の味方、魚人と人魚の未来を応援している。

だから口出しをする。

「だから忠告はしておくよー、オトヒメ王妃ー。急な大改革が成功しないのはー、歴史が物語っているよー。だからもつと国民と対話してー、徐々に信頼を勝ち得てから進むべきだと思うなー。いーいー?」
全ての魚人”と話し合っただよー」

「……………そう…ですな…」

良薬口に苦し。至言ほど耳に痛いものだ。オトヒメだって分かっている、魚人街のチンピラ達が人間に対して悪い感情しか持っていないことくらい、そして人間との歩み寄りを叫ぶ自分が面白くない事くらい。

しかし分かっているにもかかわらずにもなら無いことだってあるとオトヒメは言いたい。今更どうやって彼等に人間との歩み寄りを説けば良いのか分かるはずもない。

だがイーブは手伝いはしない。あくまで応援しかする気がない。なんてそんな”自分勝手な正義”を掲げるのがスコウエルド・イーブなのだから。

第五十話 魚人島で正義は自分勝手な手助けを

イープ一行はオトヒメに忠告した後に直ぐに別れた。イープも時間は惜しい、暇人ではあるが早く行動するに越したことはない。

「……………中途半端（未来を知っているのに良いのですか？）」

ヤマトはイープの存在を、そのルーツを知っている。だから聞く、正義が善人を、一般人を見捨てて良いのかと。

「えー、一応忠告はしたしー、それで死んだら死んだかなー。だってー、ここまで言ったんだからさー、忠告無視する方が悪くないー？」

「……………御意（御心のままに）」

“自分勝手な正義”の持ち主であるイープは目の前に困った人がいれば助ける、目の前に困りそうな人がいても助ける。だがそのやり方はイープのその時の気分一つで大きく変わる。イープはそんな男だ。今回は敢えて手を出して助けるほどじゃなかった、それだけのことだ。

一行はオトヒメと別れてから中心街へと向かった。別に三人とも追い剥ぎに負けることはないが、それでもやはりいるなら治安の良い所の方が良い。それに街の中心に観光地や土産屋、百貨店が揃っているのだ。三人の足が自然とそこへ向かうのも無理はない。

ここで少し本筋から離れたら話をしよう。この『伝説の転生者の物語』の原作『ONE PIECE』の主人公は勿論モンキー・D・ルフィだ。しかしこの話はその二次創作、『伝説の転生者の物語』であ

る。そしてその主人公はスコウエルド・イーブだ。

つまり何が言いたいのかというと、物語は当然スコウエルド・イーブの周りで起こるし、原作の事件もスコウエルド・イーブがことごとく絡むこととなる。

だから、

「かつ、火事だー！」

「ギヨンコルド広場で火事があったー！」

「そんな!? 署名はどうなる!!？」

イーブが偶然この魚人島に来たときにオトヒメ王妃暗殺事件が起こることはある意味必至であった。因みにこの物語の準主人公は勿論サクラである。

「うえーい、ヤマトー、どうやら僕の“自分勝手な正義”の名において手を出さなきゃ駄目みたいだー」

「…………… 激励（頑張ってください）」

イーブはため息をついて広場中心で燃える炎の中に、もっと詳しく言うと、炎の中で必死に署名を守るオトヒメ王妃の元へ駆けて行った。

“泥”の弱点属性である筈の火なんて怖くない。少なくともそこから辺の覇気使いの放つ炎ですら、弱点（笑）とイーブはあしらえる。

「スラマッパギー、やっきぶりー」

「貴方は先程の方！手伝いに来てくれたのですか!？」

「まーねーでもー、手伝つのは署名を守ることじゃなくてー、君の暗殺を阻止することだけどねー」

「…っーやはり、知っておいでなのですね、この島の、国の闇を」

「タイガーとかーその他魚人達を見てればー、一目瞭然だねー。あいつらに共存の“き”の字も無い事くらいー」

それだけ言うといープはオトヒメとは視線を外し、丘の上を指差して、

「三、二、一…来たねー!」

バン！と銃声が鳴った瞬間に丘の上を指差す指を弾く。

弾いたのは勿論オトヒメ王妃を狙う凶弾。“丘の下”からオトヒメ王妃を狙うホーディーの銃弾を人差し指で弾いて、“丘の上”にいるスケープゴート、名前を知る価値もない三流の犯罪者に命中させる。

ただただでは済まさない。なぜならこのままホーディーを吊し上げるつもりは無いが、このままホーディーに手柄を与えるのも癪だろつ。

だから吹き飛ばした、下手人の五体を。いープの指に弾かれた弾丸の速度、その持つエネルギーは、鉄の筒と火薬を用いた道具から出されたそれより遙かに速く、遙かに大きかった。つまりトリックは簡単、人体に超高速の超高エネルギーの物体を叩き付けた。それだけの

ことだ。

流石に五体をぶっ飛ばした死骸を掲げて『オトヒメ王妃暗殺未遂犯はこいつだ！』なんて声高に叫ぶことは無いだろう。せめて内々にその事を上司に報告するだけだ。もしホーディーが勝鬨を挙げたならば流石に民衆からやり過ぎ、と批難の嵐が吹き荒れるだろう。

「母上！！」

母が大事にしている署名の束が燃えていると聞いてじっとしている母親大好きな三王子ではない。むしろ国民に積極的に指示を出して事態の鎮圧を図っていた。本当は自分達は母親の元へと向かい炎の中から引つ張り出したかったのだが、母の事を想うとそれはできなかった。しかし銃声を聞いてからはそんな考えは吹っ飛ぶ。どうして母親の危機で他の事をしていられようか。賢い三人は誰しも最悪の事を考えていて、

「まあ、フカボシ・リュウボシ・マンボシ！来てくれて早々悪いのですが、この国民皆さんの署名を竜宮城へ避難させてください！！」

「はっ、はぁ……」

元気で遅しく、遅しすぎる母を見て裏切られた驚き半面、嬉しさ半面で固まってしまった。

それからはあれよあれよと三人ともお礼にと竜宮城へと連れていかれそのままネプチューンの計らいでイーブ達は国賓級の扱いでもてなされていた。助けた者が亀でなく金魚でも竜宮城へと行けるらしい。

とりあえずイーブは玉手箱だけは開けないと誓う。中に入ってい

るのは年を取る煙ではなく、エネルギー・ステロイドという劇薬なのだが。

「スコウエルド・イーブ、お前さんのお陰でワシの妻、オトヒメ王妃は助かったんじゃないもん。礼を言っんじゃないもん」

「気にしなくて良いんじゃないもん。全部ホーディーがやったことだしねー」

この国最強で国王のネプチューンの礼を流すイーブにオトヒメ王妃の顔はしかめっ面である。

この事件が「全てホーディーがやったこと」と知っているのはイーブら三人とオトヒメ王妃の娘のペットのメガロと娘のしらほし、そして被害者のオトヒメ王妃である。意外と真相を知る者は多いが問題はそこではない。真相を知る者は全て今回の事を見逃す事にしたのだ。

オトヒメ王妃はこの事件は自分の責任であるとし、この事件を反省して国民と向かい合う為に黙っている事にし、他の面子は当事者のオトヒメ王妃が良いならば別に良いかと事実を黙認することにした。イーブら三人はともかく、しらほし姫は無意識の内に母と同じく会得していた「見聞色の覇気」で母の真意を見抜いていた。流石は古代兵器「ポセイドン」、将来有望だ。

ネプチューンのお礼から始まった宴は、この島でしか味わえないような絶品の料理に始まり、皆を満足させるような音楽と、絶世の美女たちによる踊りととても絢爛豪華なものだった。ただしイーブは色気より食い気、後者二つには全く目もくれず、舌鼓をずっとうっていたが、本人はそれで満足しているのだ、問題は無いだろう。

しかしこの宴に納得のいかないものが一名いた。

「ふざけるなっ！こんな茶番!!」

「表向きの」この事件の解決者にしてこの事件の黒幕なホーデーだ。

「犯人を潰したのは俺だぞ！それにこの人間だって『全部ホーデーがやった』と現に言っている！なのにどうしてこんな虫ケラをまつりあげる必要がある!!」

ホーデーは納得がいかない。どうしてこんな下等生物に頭を下げなくてはならないのか、しかもその原因が自分等魚人の面汚しを助けたからである。自分達からすると、それはなぶり殺しの理由になるにしろ、決して感謝する理由にはならない。

「まー、全部やったにしろー、ホーデーはやり過ぎだったと思うよー」
「？」

下手人の五体をぶっ飛ばしたという功績がホーデーにあるにしろ、オトヒメ王妃暗殺の企てを実行したにしろ、どのみちホーデーは「やり過ぎ」であった。表向きの功績を帳消ししてしまう程に。

「そうじゃ、ホーデー、お前は下がっておれ」

このめでたい席の興を冷めさせるわけにはいかないと、この島での兄貴分、つい最近王下七武海入りした「海侠」ジンベエがホーデーをたしなめる。

「そーだよー、やり過ぎたんだから少し頭を冷やさないとねー。下手人の五体をぶっ飛ばしたとか」その他諸々」を知られるとホー

ディーだって困るよねー？」

その他諸々、便利な言葉である。他の人が聞けば大したことの無い事に聞こえるが、当事者同士にはその五文字が何を意味するのか、どれだけ重要な意味があるのかがはっきりと分かるのだから。

「てめエ……」

イーブの忠告を挑発と捉えたホーディーがイーブに槍を突き出す。残念、税金は2・5%には下がらないがイーブは槍を向けられて『はいそうですか』としていられるタイプじゃない。むしろ積極的に喧嘩を買うタイプだ。

『紙絵』

槍をひらりとかわすと、イーブは右手をホーディーの腹部に添え、右足に気を込めて踏み込み、その踏み込みでせり上がる気を操り、右手まで移動させそのまま右手を介してホーディーの内部に打ち出す。

『発勁』！

「!!？」

イーブの『発勁』に驚いたのはジンベエとネプチューンの二人のみ。驚いた理由は、

「（何故人間が"魚人空手"を……!?）」

体の水分を微量に操り、その水分だけを殴るという特別な衝撃を発する『発勁』が、本来魚人と人魚しか使えない筈の"魚人空手"だったからだ。いや、しかし考えてみればふしぎなことではない。"魚人

空手”が門外不出なのはそれが身体的に魚人らししか使えないからではない。魚人らが人間に教えないからだ。つまりイーブは独学で魚人空手にたどり着いたという訳だった。

ホーデューはイーブに吹き飛ばされてそのまま退場である。

「お見事じゃもん」

ハチパチと手を叩く国王に倣って兵士も歓声を上げる。ホーデューは魚人島の兵士の中でも過激派であり、疎まれていた。実力がある分誰も立ち向かえなかったのだが、そこをイーブが一泡吹かせたのだ、興は冷めるどころか、より盛り上がった。

「ところでお前、先程の『発勁』というやつ、あれは何処で覚えたんじゃ？」

ホーデューを吹き飛ばしてしばらくした頃、ジンベエとネプチューンがこの宴の主演、イーブに尋ねた。

「うーん？あれー？あれは独学だよ。こー、足に貯めた力をバーンってー、右手から打ち出すー、的なー？でもー、どうしてそんなこと聞くのー？」

「ああ、独学であそこまでか…おお、勝手に盛り上がってすまんかった。イーブ、お前の『発勁』は紛れもなく“魚人空手”の派生技じゃ」

「なー、ナンダッテー!？」

あれほど合理的な“魚人空手”の使い手とは思えない程稚拙な説明に驚くジンベエ、そして自分がいつの間にか“魚人空手”使いになつてた事に驚くイーブ。

「うむ、あれほど見事な水の支配はジンベエ以来で久々に見たんじゃない」

「ワシの“魚人空手”も国王に褒められるほどではない」

「謙遜することはないんじゃない、ジンベエ。“王下七武海”の一角のおぬしを褒めんで誰を褒めるんじゃない」

「……え？ジンベエが“王下七武海”……？」

「イーブは二人の会話からの不穏なワードに思わず立ち上がる。“ジンベエ”と“王下七武海”の二つから思い出されることは、

「あ—————!!」

「アローンのベルメール殺害である。イーブはなんとしてもこれを止めたい。何故ならば、イーブはこの事件が何時、何処で、誰の手によって起こるのかわっているからだ。分かっているとして止めるれる不幸は止めたい、そう考えるのは“自分勝手な正義”を掲げるイーブとしては当然だった。

第五十一話 スリラーバークで魔術師は最強の証明を

旅にアクシデントは付き物と言うが、アクシデントから旅が始まるのは中々珍しい。

ジンベエの“王下七武海”入りを聞いたイーブは竜宮城の宴も程ほどに、深海からシャボンディー諸島へと向かった。タイトリーとはそこで別れて、二人はシャッキー・Sぼっくりバーに向かい、あわよくばかつての戦友、イーブが一方的に巻き込んだ男、シルバーズ・レイリーに会えたら良いなというちょっとした願いが込められている。

「スラマツパギー！」

どこのアクション映画よろしくといった勢いでその店の窓を突き破り一回転して華麗に侵入を決めるイーブ。肩にはちゃんとヤマトが乗っている。

「……やあ、イーブ君じゃないか……」

昼から酒を飲んでいた老人は突然の二人の訪問にただただ驚くばかりであった。

それからイーブは五年間をどのように過ごしたかを答え、ついでにヤマトとも顔合わせを済ませてからレイリーから記録指針と地図を貰ってから店をあとにし、海岸に出た。目指すはコノミ諸島ココヤシ村だ。

「僕達にはー、時間が無いー」

「……………」

「だからー、船を使っている時間はなかったからー」

「……………」

「故にー、再び海上を走らざるを得ないー」

「……………」

「しかしー、僕達はー、あの過ちを繰り返さないー」

「……………」

海岸線でイープ一人で叫ぶ光景は中々シユールだ。イープもそれを理解しているのか体が少し角張っている。ピカソも驚きだ。

ヤマトのテンションが低い中イープが打ち出した海難対策はこれだ。

「よっー」

すぱーん、といった効果音が付きそうなほど軽い雰囲気でも繰り返された斬撃は海を割り、道となる。モーセもヤハウエもビックリな海割りである。

後はこのコノミ諸島に向かって引かれた真っ直ぐの斬撃を辿れば良いだけである。ヤマトは肩に乗せて、斬った海が戻りそうになればまた斬撃を放てばいい、それだけの話である。

「行くところブレイメンへ!!」

「……………否定(コノミ諸島へ)」

第一無骨な猫と剣士じゃ音楽隊は作れない。

イーブが走り続けて丸一日、音を置き去りにする速度で走った為、距離は相当稼げた。しかしここで問題が起こる。濃霧に遭ったのだ。これでは斬撃を辿ることができない。困ったイーブは仕方がないので、一度最寄りの島に寄ることにする。

便りの記録指針は魚人島ではない方向を指しているため、レイリーはこの記録指針を持っているときは正規の航路を使っていなかったのだろう。

「まー、でもー、ちょっと疲れたしここで休もうかなー」

しかし濃霧のせいで目の前に突然島が見えた為、一旦二人はそこで休息を取ることにした。

その島が千人の死体とそれを統べる王、"王下七武海"に名を馳せるゲッコウ・モリアが住み着く"スリラーバーク"という巨大な船であるということは別の話ではない。むしろ今回のメインの話である。

「いやー、この島にー食料とか水とかあるしー、貰っていいこうかー」

イーブの向かいに聳え立つ城からはむじんとは思えないただならぬ気配がひしひしと感じられて、それがこの島が無人島でない事を証

明している。

「……………御意」

ヤマトを肩に乗せてイーブは城を目指して歩き始めた時、彼らはそれに出会った。第一村人発見。いや、この場合村人と言うには語弊がある。なにしろ、

「しよっぱなからー、ケルベロスかー」

人形ですらないのだから。つぎはぎの目立つ三つ首に巨体、少なくとも初めて見る人に恐怖感を与えるには十分な風貌だ。

「おすわりー」

ただし実力が伴っていなかった、圧倒的に。そんな見かけ倒しの張りぼてではイーブを引かせることなど不可能である。

イーブが軽く頭を押さえ付けただけで、怪物は地中深くに埋まってしまった。もう穴を見下ろしてもケルベロスを見ることもできない。いくらモリアの能力によって得た不死の体と言えど万能ではない。身動きが取れなくなれば、死なずとももうイーブに立ち向かうことはできない。いや、死ねない分むしろ凶悪だ。

「あー、なるほどねー。うんうん、ここはゲッコー・モリアのスリラーバークだったのかー。どうして中々面白くなってきたー」

「……………胸熱（相手は王下七武海…腕がなる）」

この日はスリラーバーク始まって以来の厄日となること間違いないだ。

そして城に続く道を行く二人は墓場に差し掛かった。恐怖の悪夢を冠する島だ、墓場で何も起こらない、なんてことはない。そしてそこでイーブにダメージが与えられることもない。

ボコツ、ボコツ…ズルズル…と不気味な音を立てて墓のある地中から手が延びて死体が這いずり出す。手足を縛って埋める屈葬ならこんなことにはならなかったのに…くっそう！

「あははははー、たかがサンドバックが何個来ようともー、僕らにはー傷一つ付けられないなー！」

イーブはこの為ではなかったが、手札を増やす為にとある弱点を克服していた。それは“炎”。イーブは五年前から既に“火”や“熱”の攻撃をその持ち前の覇気によって無効化することが可能だったが、当時はまだ自ら“炎”を扱うことはできなかった。しかしこの五年間、火を恐れる動物は沢山居たし、食人植物に対して大きな効果が有るのは火だった。こうかはばつぐんだ！ダメージは二倍となっていた。

故に“炎”を極めたイーブは自分自身に敬意を表してこう名乗る。

「Fortiss931（我が名が最強であることを証明する）！」

イーブは知っている、このゾンビの弱点が塩と炎であることを。だから使う、炎を。だから名乗る、炎のスペシャリストである若冠十四歳の天才魔術師の名前を。

イーブの前にわらわらと現れるゾンビ達。それをイーブは、

「我が手には炎、その形は剣、その役は断罪、飛ぶ指銃『炎剣』！」

人差し指から伸びる一筋の炎で全て焼き払った。

「モリア様ッ！モリア様ーッ！」

ここはスリラーバークの城の最上階、ゲッコー・モリアの個室だ。そこに駆け込むのはモリアの数少ない生きた部下で幹部のDr・ホグバックだ。

「アア!?どうした、ホグバック！うるせエぞ!？」

自室に飛び込んできた雑音に思わず声を荒げる、巨大らっきょう、ゲッコー・モリア。

「大変な事になった！この島に現れた侵入者が……」

「侵入者くらい、お前がやれ！そして俺様を海賊王にしろ！」

「それがその侵入者が墓のゾンビ百体を全て浄化しました!!」

「何!？」

「しかもいまだに大量のゾンビを向かわせているのにまだ堪えた様子はありません!!」

「……………キシシシシ!!」

「……………も、モリア様?」

「欲しい!!そいつの影が欲しい!!アブロサムに伝える!!ジェネラルゾンビ」を総動員して侵入者を捕まえると!!」

「かつ、かしこまりましたー!」

原作では残念な王下七武海だったゲッコウ・モリアだが、それでもやはり腐っても王下七武海、彼の発する雰囲気は「本物」だ。それに当てられた哀れな医者は飛ぶように同僚の元へ駆けていった。

屋内への侵入を果たしたイーブ。ここがただの島ならば交渉して物品を色々譲り受けるつもりだったが、これは政府公認と言えどやはり海賊船。もう既に彼はここから様々な必需品を盗む気満々だった。そしてここに盗んできた物品が二つ。

「キキキキキー!コイツ、人間だー!捕まえるー!!」

少し広い客間に出たところで、シャンデリアが、絵画が、絨毯が、暖炉が、銀食器がイーブに襲い掛かる。

それに対するイーブは至って冷静。先ず盗ってきたマッチを擦る。これは当然ゾンビの弱点の炎を突くためだ。そしてその火をこれまた盗ってきた煙草に火を着ける。

「炎よ(Kennaz)」

そして覇気で煙草の火を強化し投げる。

「巨人に苦痛の贈り物」 PurisazNapizGebol!」

マッチ一本火事の元。煙草の不始末火事の元。気を付けなくては

ならない。

ホグバツクの屋敷、全焼。

「アーーーー！ワタシの屋敷がー!!」

その時、何処かで医者が叫んでたとか叫んでなかったとか。

その後とある下準備を終えたイーブは意気揚々と技を繰り出そうと、声高らかに呪文を唱える。

「世界を構成する五大元素の一つ（M T O W O T F F T O I I G O I I O F）……」

しかしそこに入る妨害。百体ものジェネラルゾンビを率いたアブリサムだ。全く、こういつときは邪魔をしてはいけないと習わなかったのか、空気嫁。

しかしイーブにとっては逆に好都合だった。イーブが今繰り出そうとする呪文の詠唱が成功すれば、この城の住人を“必ず殺す”ことが可能だ。しかしイーブにはまだ使っていない技が一つあった。それをやらずに決めてしまつのはいささか面白くない。

「飛んで火に入る夏の虫…いや、ゾンビだねー」

百体のジェネラルゾンビ、せめてネタと散れ。

「灰は灰に（A s h T o A s h）」

「塵は塵に (DusttDust)」

「吸血殺しの紅十字 (SqueamishBloody Road)」
「！」

左右の腕をクロスさせて両手から放つ『炎剣』を剣で切り裂く様に振る。

摂氏三千度の炎は人体を燃やすのではなく「溶かす」。当然それが火である以上燃えるが、その鉄はゾンビも当然のように溶かし切り、たった一撃でその全てを浄化してしまった。ちなみに鉄の沸点は摂氏二千八百六十二度。即ちイープの炎に晒された鎧は溶けるを通り越して蒸発する。

こう書いていると、ステイル「マグヌスがいかに捨て犬ではなく強キャラであるかがわかるだろう。さらに加えると溶岩の温度は普通は約摂氏九百〜千百度。つまり『溶岩は火の上位互換』とイキっている溶岩を焼くことができるのだ。

さてさてこれで邪魔者は全て燃やし尽くした。後はネタに走るのみ。

「世界を構成する五大元素の一つ、偉大なる始まりの炎よ それは生命を育む恵みの光にして、邪悪を罰する裁きの光なり。(M T O W O T F F T O I I G O I I I O F)」

「それは穏やかな幸福を満たすと同時、冷たき闇を滅する凍える不幸なり。(I I B O L A I I A O E I I M H A I I B O D)」

「その名は炎、その役は剣。 具現せよ、我が身を喰いて力と為せ (I I N F I I M S I C R M M B G P)」

「『魔女狩りの王』イノケンティウス!!」

その意味は『必ず殺す』。

第五十二話 スリラーバークで従者は思慕の無双を

『魔女狩りの王』イノケンティウス！』

イープの叫び声とともに放たれた指銃『火撥』はイープお得意の覇気によって強化されより燃え上がり、それを完全に御するイープの手腕によって炎が大きくて赤黒い魔神を型どる。

その余りの熱量に大気は歪み、周りに圧倒的熱風を撒き散らす。

イープが城に小一時間かけて四千三百枚のルーン文字の書かれた紙を貼り付けた甲斐があったというものだ。ただしこのルーン文字に今回は意味は無い。完全にネタである。ネタのためなら小一時間も無駄な労力を発揮できるイープは暇人であろう。

そんな苦労もあってかモリアのスリラーバークの帆よりも巨大な魔神はそのまま城を跡形もなく焼き尽くそうと倒れかかる。

「なっ、何なんだよ！あの化け物は!!」

しかしそれをただ見てるだけの幹部ではない。四怪人ではない。王下七武海、ゲッコウ・モリアの部下であるとはいえ、いやモリアの部下であるからこそ修羅場は人並み以上に体験している。不可視のバズーカを乱れ打ちしながらアブロサムは叫ぶもイノケンティウスには効果はない。穴が開いたそばから再生している。

『ゴオオオオオオ!!!』

開いた穴から流れる突風が轟音を鳴らす、まるでイノケンティウス

が悶えているかのよう」。

「私の『魔女狩りの王』は射たれると、くるいもだえるのだ、よろこびでな!!」

教皇「ローマ法皇とはいえここでさらに違うネタをぶちこんでくるとは、流石イーブである。

ハイパーイノケンティウスデッキ(デッキレシピ: ルーンカード四千三百枚)の切り札ハイパーイノケンティウスはアブロサムのパズーカなんかでは止まらない。イノケンティウスがモリアの城を焼き尽くそうとしたとき。

「……あー、鬱だあー」

炎の魔神は突然とろ火程度に成り下がった。イーブのやる気が突然失われたのだ。こんなことをするのはただ一人、

「ホロホロホロホロ! ずいぶん調子乗ってんじゃねえーか、不法侵入者!」

アブロサムと同じく四怪人の一人、ホロホロの実を食べたゴースト人間のペローナしかない。

ペローナのゴーストは触れた人間を鬱にする。それはあの年中頭の中に花畑が咲いているルフィも例外ではない位だ。そしてそれはイーブの例外ではなかった。

ある意味では。

「あー、鬱だあー、駄目だあー、そつだあー、皆殺して僕も死のおー」

間延びして、その上口元でボソボソと言う仕草はなんとも不気味だ。さらにその状態でモリアの城を帝で真つ二つに両断しているならなおさらだ。

ペローナのゴーストはプラスの人間にしか効かない。だから年中ネガティブ思考なウソップには効果が無かった。では年中マイナス思考のイーブにゴーストを当ててやるとどうなるのか。

それは本質が出る、というものだった。デフォ設定で誰かを切り刻みたい、と思考するイーブならではの反応だった。

「なっ、なんでお前は絶望しないんだ!!アタシのゴーストにやられて立っていられる奴なんて今まで居なかったのに!」

「あー、鬱になって気付いたんだあー。僕はあー、どうしようもない快樂殺人者だってえー。でえー、絶望して気付いたんだあー。こんな駄目な僕はあー、もっと駄目になってもしょうがないってえー」

とんでもないマイナス思考、ありえないネガティブ思考、本来正義を背負うイーブにしてはありえない思考。そこまでやらせる悪魔の実の能力はやはり絶大だ。ただ今回はそれが悪い方に転んでしまった、途方もなく。

「……………危険（これはヤバイ…主に世界が）」

イーブの本質が皆殺しだ。それは一度手合わせしたヤマトなら分かる。だが、本質と本懐は違う。イーブの本懐は“正義”、本質と真逆である。故に今本懐より本質が出ているイーブをヤマトは止めなくてはならない。理性を無視して撒き散らされる、本懐とは真逆の本質は後に本人を傷付けるだけなのだから。

イーブがゾンビを狩りにまた森の方へかけて行くなか、ヤマトはこの場所に留まる。なんとしてでもイーブを止めるために。策ならある。鬱にした張本人がそこに入るのだ、彼女に聞かない手はない。

「……………修復（さっさと主を元に戻せ殺すぞ、主が）」

「猫が喋った!?可愛いじゃねえーか！よし決めた！お前はこれからアタシのペットだ！」

「……………交渉決裂（ナメてやがるな。よほど愉快的な死体になりてえと見える）」

こうでさらにネタをぶちこんでくるとは、流石イーブのペットだ。ペットは飼い主に似るとは良く言ったものである。

バサアと広がる三対六枚の純白な羽と八本増えて九本となった尻尾、そして人形となり、戦闘準備は十分である。

「なっ、オマエ悪魔の実の能力者だったのかよ!!だったら仕方ねえ！オマエも鬱にしてやる!!」

「……………笑止（たかがその程度の幽霊で俺をどうこうしようと言うのか？馬鹿が）」

ヤマトは自身に襲い掛かる幽霊三匹を気にも止めない。何故ならば格が違うからだ。大した魂からなるわけでもない低級な霊と、あやかしとせずば抜けて神の領域に片足をを踏み込ませた大妖怪。どちらの格が上かなんて語るまでもない。

低級なそれはヤマトに降れるや否や、自壊して消滅する。肉体を持

たない低級なそれにはヤマトの神威は毒過ぎた。

「なっ!？」

「……………修復(さっさと主を元に戻せや、ゴルア)」

「さっきから何言ってるやがんだオマエ!!」

ヤマトの再三の呼び掛けも残念かな、漢字二文字じゃ通じない。ヤマトとしても仕方がない、言葉で通じないなら言語を変えるしかない、肉体言語に。

「……………最終手段(言ってる駄目なら殴るまで)」

羽の内の一本を伸ばしてそれでペローナを乱暴に薙ぎ飛ばす。随分と便利な羽だがヤマトはこれを九つの尻尾でもできる。つまりヤマトには手足尻尾と羽の計十九の武器が有るのだ。

「ガァ……………」

飛ばされたペローナを追いかけようとしたヤマトが、

ドンドンドーン！

バズーカを三発ぶちこまれる。

「……………浅知恵(透明な身体と、そのチンケな玩具二つで俺に勝てるとか、あれか？俺はナメられてんのか?)」

だがヤマトには効かない。超甲装愚鈍重量級パワーアタッカーヤマトの戦闘スタイルは“百の攻撃をくらいながらも、至高の一撃で相

手を潰す”である。そんなヤマトが覇気も使えないような男の一撃では倒れない。加えて言うなら例えどんな攻撃をくらい、どんな致命傷を負おうともヤマトは再生し続ける。ヤマトが先日イーブに試してもらったところ、軽く百万回連続で致命傷を負い続けても再生した。

ポケモンで例えるならばハピナスのHPにラムパルドの攻撃とシャンデラの特攻、そしてツボツボの防御と特防を兼ね備え、そして特性はさいせいりょくといったかんじだ。ミューツー涙目。

「……………」『覇拳』

透明になったところで見聞色の覇気を使いこなすヤマトにとっては頭隠して尻隠さずと大差無い。直ぐにアブロサムをうねる九本の尻尾を捕まえ、そして放たれるヤマトの至高の拳。人に向かって水平に放たれたはずなのにその衝撃の余波でスリラーバークの三分の一が消し飛ぶという悪夢がそこにあった。

スリラーが悪夢を見るのは笑えない。

所変わって森の中目指せ皆殺しと言わんばかりのハイペースでゾンビを斬り、浄化していくイーブ。いくら覇気が使えとはいえ、普通はゾンビを斬り殺すことなんてできない。では何故イーブにはそれが可能なのか。

「あー、生き物発見ー。殺さなきゃあー」

「うわあー!!コッチ来やがった!」

ゾンビを見つけたら直ぐに『剣』で近づき、

「鎌鼬」

バラバラに斬り消す。そう、斬り“消す”のだ。

先程イーブは試した。まず頭を斬る、まだ生きてる。さらに両腕を斬る、まだ生きてる。さらに両足を斬る、まだ生きてる。さらに両肘を斬る、まだ生きてる。さらに両膝を斬る、まだ生きてる。さらに頭を斬る、まだ生きてる。さらに心臓を斬る、まだ生きてる…さらに、さらに、さらに……

結局ゾンビを五百分割し、もう既に人としての形を大きく逸脱し、人間の影が入れないようにすればゾンビを殺せることがわかったのだ。

ゾンビに似た不死身の吸血鬼の上位個体、柱の人も一立方センチメートルに切り刻めば殺せるのだゾンビも刻めば殺せるという理論が通じないはずがない。

柱の人を刻んだドイツの技術力は世界一イー！

そんな強引な力押しで三桁に上るゾンビを駆逐したイーブの忍び寄る影、いや比喩表現なく影が忍び寄る。そう、モリアのカゲカゲの実の能力『影法師』だ。イーブに悟られないように森の木々の影から影を移動し、やっとイーブの影の中に潜り込むと、ずずいと飛び出してイーブの影を掴み取る。

それでもイーブはゾンビに向かって『鎌鼬』を放つことを止めない。何故なら目の前の『影法師』をいくら切り刻んだ所で、それは元から命の無い影、つまり死ぬことはない。故にイーブの殺害対象には入らない。ならばそんなものは気に止めずに、一応命あるゾンビを殺すべ

きなのだ、イーブにとっては。

しかしそれは間違いだ。重大な、大きな、決定的な間違いだ。

「キシキシシ、お前の影、貰ったア!!」

どこから取り出したのか分からない、『影法師』と同じくらいの大きさを誇る巨大な鍔で、影を掴まれて宙ぶらりんになっていながらもゾンビ退治に精を出すイーブを嘲り笑いながら、その影を切った。

影を切られたショックで気を失うイーブ。人を斬り殺したいという強すぎる欲にやられた、強欲は身を滅ぼすの典型である。

こうして奇しくも世界に名を轟かす大悪党、“王下七武海”の一角、ゲッコウ・モリアの手によって世界は救われた。

「……………無問題（ふむ、紆余曲折あったが一応は主の計画通りか）」

新たに出来た海岸線にいるヤマトは自分の主の影が奪われたことをリアルタイムで察知していた。しかし主のピンチにもヤマトは駆けつけなかった。それは何故か。そう、イーブがモリアに影を奪われる事がイーブの計画だったからだ。

イーブは自他共に認める傲慢だ。故に自分を世界最強と思っている。しかしそれに反論できるものは少ない、いや殆ど居ない。そしてイーブはそんな人間にまだ会っていない。故に思った、『自分より強いのは自分だけである』と。

つまり肉体はともかくとして、思考、技術、癖が全く同じな自分。それはもしかして自分が勝てない人間ではないのか、とイーブは思っ

た。

そう思っただら言わずもがな、死合いをこよなく愛するイーブならば
どうするかは自明の白である。

語りはさておき、

「……………起床）ではとりあえず主を起しに行こう」

計画を遂行させなければならぬ。

第五十三話 スリラーバークで偽物は異常の進化を

「……………起床（起きてください）」

イーブが影を奪われた後、船に乗せられて出港していたところをヤマトがイーブを拾い、そのまま人気もゾンビ気も無い森の中で主を起すヤマト。字面だけを見れば主思いの優しい仲間だが実はそうではない。ヤマトは今現在、イーブを起こそうと躍起になっている。グーパンでだ。それも今現在物凄い轟音が大気を揺らすほどの拳でイーブを起こそうとしている。下手すればイーブが永遠の眠りに付くのではないだろうか。

「ふわあー、よく寝たー。うんヤマトーもついいからー」

しかしそんなことなく目を覚ますイーブ。さてこれからが楽しみだ。イーブは先程モリアの目の前で自らの剣技を大いにアピールしたから多分剣士の死体にイーブの影が入ることになるだろう。さらにはあれだけの騒ぎを起こしたのだ、確実にジェネラルゾンビになっているはずだ。そうでなくては困る。そうでなくてはなんの張り合いも無く、なんのためにここまででの苦労をしたのか分からなくなってしまう。

「まー、行ったら分かるよねー」

ただ、ここで色々言ってもとらぬ狸の皮算用、まずは行動あるのみである。

そしてやって来たスリラーバークの真ん中、本来そこには大きなマ

ストがあるはずなのに、イーブがぶったぎってしまったため無い。ついでに言つと、そこにはもう瓦礫しか無かった。

「いやー、やり過ぎたねー。まー、いくら壊したとしてもモリアはここに
いるんだけどねー」

城の一階から上は瓦礫の山に成り果てたが、まだ地下が残っている。建物は斬られたとしても、地下が残っている為モリアはそこで新しくゾンビを作っているのだった。

「ヤマトー」

「……………御意」

イーブの呼び掛けにヤマトは拳一振りて瓦礫にカモフラージュされた階段ごと周りの瓦礫を吹き飛ばす。

「まー、落ちればいいんだけどねー」

この不死身の二人組にとってはは階段を降りるのもフリーフォー
ルするのも大差無かった。

「スラマッパギー、モリアー。僕のゾンビ作ってるー？」

友人の家に訪ねる感覚でモリアに話しかけるイーブ。モリアの方も今しがた準備が整った所だ。

「キシキシシ！また来やがったか!! ああ、丁度お前の影を使ったゾン
ビが完成したところだ!!」

迎え撃つモリアは笑う。新しく出来たこのゾンビに絶対の自信を持っているからだ。

「かつて伝説の生物“竜”を斬ったと言われるワノ国の侍、“リユーマ”とお前自身にお前は勝てるか!?”

それは自身がもつ死体の中でも知名度の高い猛者の死体。その中に絶技と言えるほどの技術を持った影を入れた。この作品は今まで作ってきたゾンビの中で間違いなく最強の名を冠するジェネラルゾンビだ。しかしその実はジェネラルどころではない、まさにスペシャル級のゾンビ。死体の質はスペシャルのオーズに劣りながらも、その影の質が異常すら生温いレベルに達したがために生まれたバグ。故に負けない、故に笑う、故に奢る。

「ふーん…君が僕か。似てないね」

目の前にいる男は白髪でちょんまげ、着物を来ていて、さらに下駄。見た目の上ではイーブと似たところはない。

「君が僕か。うーん、流石だね」

しかし内面は似ていた。口調は間延びし、相手の第一印象は強いが弱いか、ディナーかデザートか。願いは戦いで本懐は戦死。戦いをこよなく愛する戦闘狂で快樂殺人鬼。肉体スペックはともかくとして、潜在能力と技術は本人イーブと全く同じ。それも当然だ、彼はイーブの半身なのだから。

故に影は分かっていた、自分が本物より劣っていることを。例えるならば、最新のジェット機とそのジェット機のエンジンを搭載した五十年代のアンティークカーで勝負するようなものだ。地力が違いすぎる。

だがそれがなんだ。それは影が負ける理由になろうとも影が勝てない理由にはならない。

力が足りないのなら補えばいい。しかしもしこの肉体の筋肉がこれ以上成長しないというのならば、技術を伸ばせばいい、覇気を極めればいい。

少なくともイーブの影には、本人同様敗北の二文字は存在しない。戦いにおいて存在するのは、渴望と成長と勝利の三つだけだ。

「なるほどー、僕たちは存外ー」

「似てないかと思いきやー」

「似た者同士だねー」

感じるシンパシー、共鳴する狂喜。少なくとも二人にこれ以上の言葉は必要ない。いやそれは少々語弊があった。空気の振動による“音”を媒介とする言語は必要ない。

今二人がとりたいたいコミュニケーションは肉体言語。互いに殴り合い、斬り合い、傷つけ合い、殺し合う。そんなコミュニケーションを互いに求めているのだ。

「『一刀両断』」

流星は同一人物、攻撃のタイミングも技も一緒、寸分の狂いもない。となれば当然狙いも一緒、本来“線”では斬撃を重ねて相殺するなど並々の技量ではない。

「流石ですね、その劣化した肉体で『一刀両断』を防ぎますか」

「素晴らしいですね、この劣化した肉体でもあの『一刀両断』を防げますか」

互いに賛辞するそれはある意味で自画自賛。しかしその相殺で得たものは影の方が大きい。影はに本人の劣化にならぬように肉体で叶わぬなら“技”で挑もうとする。そしてこの相殺。本来は力負けするはずなのに起こったまぐれ、奇跡。

まぐれだから何だ、奇跡だから何だ。例えそれでも影は“力をいなす技”を使うことができたのだ。そう、本物が使えないような技を。

男子三日会わざれば刮目せよと言うが、イーブ達にはそれは当てはまらない。三秒だ。三秒で彼らは違う次元に進む。

『鎌一刀両断』！』

故に開けた新たな世界。故に開発された新技。

下から上に“秋水”を振ることで発生する『鎌鼬』で牽制、体勢を崩してからの『一刀両断』。

流れるような技の連発は流水の様に自然でそれは剛の剣を行うイーブ本人のものではない。そう、この数秒でイーブと共に十年間過ごしてきた影は本人とは全く別の人間に進化したのだ。しかしそれもある意味イーブらしい。

『鎌鼬』…なっ、鉄塊『霸剛』!!』

初撃の『鎌鼬』は相殺するも次波の『一刀両断』はいなせない。い

なせないから仕方なく受け止める、その肉体にものをいわせた最強の『鉄塊』で。

「ふむ、しかしその『鉄塊』、いつまで続くのでしょうか『鎖鎌一刀両断』！」

やることは先程と同じ、な訳がない。『一刀両断』を繰り出した後、愛刀“秋水”をクイツと引き寄せる。すると弾かれたはずの数百の『鎌鼬』が全てイーブに再び襲い掛かる。まるで鎖に操られているかの様に。

「ガアアア、『ミキサー』！」

ガリガリと削れてゆく体にたまらずイーブは迎撃に出る。そのせいで何カ所か斬られてしまったが仕方がない。何せあのままではじり貧だったのだ背に腹は代えられない。

本家のイーブだって慢心はしない。彼は傲慢だが奢らない。最強を名乗りながら無敵は名乗らない。故に止まらない。故に強くなる。“技”において影が二歩も三歩もリードしているならば仕方がない、それは認めよう、それは譲ろう。だが勝ちまでは譲らない、認めない。イーブは影にはない肉体で、“剛の剣”で影の“柔の剣”を捻り潰す。

何時もより十割増しの『ミキサー』が全てを吹き飛ばす。イーブだってこの戦いで大きく成長していた。

さらに剛の『ミキサー』は全てを蹂躪するに止まらず、辺り一帯を巻き込んで影を攻め立てる。

「狙撃『蛇速』」

それに対抗して影は突き、『狙撃』を放つ。しかしそれはただの狙撃『大槍』ではない。その威力はそのままに、自由自在に蛇行し、相手を囲い、締め上げる。

『ミキサー』は『蛇速』によって回転の反対の向きに締め上げられて、苦しんでいるかのようにもがきながら霧散する。

「ふむ、相手が蛇ならば細切れにしてしましましょう『鎌鼬』！」

蛇が斬られてしまおうと影は気にしない。もう次の一撃の準備はできている。

「ではこれらは細切れにできますか？狙撃『八岐大蛇』!!」

それは先程の『蛇速』の完全な上位技。八匹の蛇がうねり、『鎌鼬』を蹂躪しながらイーブに迫る。

その余裕の表情で蛇を操る姿はまさに蛇使いである。

しかしイーブもこれくらいでやられるわけではない。

確かに『八岐大蛇』は凄い。それは認めざるを得ない。『大槍』の威力を殺さずに自由に操れるようになっただけでなく、さらに威力を削らずにその数を八に増やしたのだ、本家イーブだからこそ分かる、これは異常だと。

だがそれは『大槍』と同じ威力が八つ繰り出せるほど影が成長したに過ぎない。つまり影が技を伸ばしている分、イーブはこの戦いで力を伸ばしている。

何回でも言う。『八岐大蛇』は素晴らしい。

「ですがそれでも今の私には有象無象です『都喰らい』!!!」

まさかここでネタに走るとは。しかし『鎌鼬』と『斬衝』の組み合わせたそれは、能力を使っていないが故に威力は劣るが、原理は間違いないあの『島殺し』。イーブがこの五年で上げた技量を考慮すると、やはり狙撃『大槍』が八つにあると、イーブの前ではやはり有象無象となってしまう。

『八岐大蛇』が今の影の限界。それが通じない今、まさに影は絶体絶命、まさに苦境。

しかしだからそれがなんだ。苦境こそチャンス。それは苦境こそ一発逆転のチャンスという意味ではない。それは死にかけるほどのピンチは自分を更なる世界に引き上げるチャンスということ。イーブが死を渴望するのはそのためでもある。死にかければ死にかけるほど強くなる、それをイーブは知っているからだ。彼の師匠の言葉にこんなものがある。

『死にかけるのはいい。だって殺す方法と殺されない方法をイッペンにその身に刻めるんだからな』

下手すれば死んでた、つまりその手段は殺すのに有効。そしてそれで死ななかつた、つまりその手段で死なない方法を知った。一度で二度美味しい、一石二鳥。だから死闘はいい。だから死闘は強くなれる。だから死闘はやめられない。

そう、だから苦境に立たされた影は笑う、自分が次の段階に進化したことを知ったのだから。

「読めました」

第五十四話 スリラーバークで最強は一方通行な戦いを

「読めました」

技を使わず、ただ秋水を一振り、それだけでイーブの悪魔的『都喰らい』が霧散した。一撃で十分他は蛇足。

何故ならば影には見えていたからだ、『都喰らい』の全てが。イーブのどの筋肉繊維が何センチ伸縮したか、腕の角度は腕振りの速度は、そして『都喰らい』の規模や力の流れ、そしてどこに綻びがあるか。

それらの全てを合わせて“呼吸”と言い、“斬る”とはその綻びを断つことだ。これが“柔の剣”の境地であり真の“斬る”ということとだ。そこには力も手数も必要ない。その境地に達した影から言わせてもらつたら、それらは“綺麗に干切っている”に過ぎない。

「……」

影が自分を越えた事に言葉がでないイーブ。だがそこに落胆の気持ちはない。称賛、賛美、奨励に嫉妬、渴望、憎悪。プラスとマイナスの入り交じったそれは言葉という媒介を使うだけで安くなってしまう。良いな、素晴らしい、グッド、ナイス、ワンダフル、エクセレントや羨ましい、欲しい、憎い妬ましい、ジェラシー、クレイブ、ヘイト。そんなんじゃない。そんなに気安く感じられる感情じゃないんだ。

誰にも推し測れない、深く強い感情は剣に磨きをかける。本来は剣においては感情は邪魔だ。そんなもの無くただひたすらに探求すること。それが上への近道だ。

だがその感情が度を越せば話は別だ。身を焦がしてがんじがらめにしてしまうそれは純粹よりも価値のある不純物だ。

だからイーブはこの感情を表さない、ある種の畏敬をもって。

「次、ですかね」

「でしようね」

二人は直感した。次で決めるのが最高だと。このまま続けても今以上に心踊る戦いはできないと。それならば魅せつけるべきだ、叩きつけるべきだ。最高の一撃を最高の感情を。

「初めてですね。殺すには惜しく、殺さないにも惜しい男に出会ったのは」

「私もです。貴方の帝による“剛の剣”。ここで消すには非常に惜しい」

「そうですね。貴方の秋水による“柔の剣”。これが見られなくなるのは世界の損失です」

「それでも貴方をここで殺さないのは不可能です」

ある意味で悲劇。『生かしたい』と『殺したい』の感情の交差。この二人は止められない、止まらない。

「もし私が負ければ“帝”は任せます」

「わかりました。しかし私には“秋水”がありますのでそれは使いま

せんよ？」

十年間イーブンの影をしていたならばわかるはずだ、その「帝」の性能を。しかし影はそれを承知の上で言う。イーブは自分を剣士と言っよりも「帝使い」と思っている。使うそれは剣術であるものの、それを繰り出すのは「帝」。そして帝の性能、性質、願い通りに剣術を繰り出すのがイーブだ。つまり互いが互いを知る関係。それは剣と剣士の関係では決してなかった。

そしてそれは影にも言える。十年間影は帝を使ってきた。だが今使っているのは「秋水」。この肉体が共に歩んできたのも「秋水」。そして自らが剣術を極めた時に手に持っていた刀は「秋水」。そう影はもはや剣士ではなく、「秋水使い」となっていた。

だが先程言ったように、この「帝使い」をそして「帝」を使った剣技を絶すのは惜しい。故に帝を引き取るのだ。この剣の極みに達した男が「帝使い」足るに相応しい者に帝を渡すために。

「では……」

「分かっていますよ。私が勝てば秋水は預かります。貴方の秋水を持つに相応しい者に託すために」

「宜しくお願いします。しかしああ、なんと心地よく感動的な戦いなのでしょう。例え負けても、この気高き侍の体に負けを刻み込んでしまったとしても、それを誇りに思えそうです。多分この体の持ち主もそう思っでしょう。』「の敗けは竜に勝ったことよりも嬉しい』と」

「そうですね。やはり相手が自分だからでしょうか、私にも負けてもいいと思っってしまう自分がいます」

互いに遺言は言った。少々感傷的にもなりすぎた。だからさあ悲劇を始めよう。友人が、親友が、半身が、ライバルが、理解者が殺し合う、そんな悲劇を。

「『斬衝波』」

「『大黒柱一刀両断』」

イーブの進化した『斬衝』は世界を割らないものの、波打たせる程の不合理な威力。

対する影は覇気で伸びた秋水による一振り。それは本家とは反対の合理の極み。立ち位置から細胞の一つ一つの移動までその斬撃に上乘せされる。極みに達したと言えどまだ片足を踏み込んだ程度、本来はこな『斬衝波』を技でいなしたかったが、大きすぎる力故にそれが叶わず、合理の技で叩き潰す方針を取らざるを得なかった。それを影は恥ずかしく思い、誇りに思う。

しかしいくら叩き潰すと言えどそれは合理の塊。世界の呼吸すら読みきった一撃は、空間を斬り、そこから本来存在しない空間が顔を見せる。強いて言うならば三次元×yz空間において、虚数単位iを用いて座標を表示するようなものだ。

全てを読みきった黒い柱は波を用意に切り裂いたが、

「ギリギリでした」

チート妖刀“帝”に止められた。ただそれはギリギリで。そう黒い刃は帝を半分まで斬っていたのだ。絶対に傷つかないが売りの最強の妖刀“帝”に傷を付けた影には言葉にならない称賛を送らざる

を得ない。

一方の影は駄目だった。影の『大黒柱一刀両断』はイーブの『斬衝波』を斬った。影はやったと思った。しかしそれが甘かった、作戦ミスだった。押し潰すかつてのイーブの『斬衝』ならば斬れば問題なかった。しかし今のイーブはこの戦いで更なる高み、『斬衝波』を作り上げた。それは単に押し潰す圧ではなく押し潰す“波”。故に斬るうとも最後には挟まれる。

半身の成長に気づけなかった。影の失態であった。

『斬衝波』に押し潰され、蹂躪された体は潰され、砕かれ、千切られてもはや原型を留めていない。

しかし唯一残った部位があった。右手だ。手首から上は無いが、手のひらと指は残っている。他の部位は細胞すらもメチャメチャにされている中、これが残ったのはある種の奇跡。もう体もへったくれもないと右手以外は影が実体化して補強している。

敗北した影が本人に引つ張られながらも、最後の抵抗を示す。それはイーブならではの欲望、『死んでもこいつは殺す』ただその願いのためだけに。

しかし勝負はほぼ決していた。

今の一撃で死にかける経験をした二人。そしてそれを防げたイーブと防げなかった影。この二人の経験の違いが実力差を付けた。

『大黒柱』『斬衝波』！

影が攻撃を放つ前に、最高の一撃で消し飛ばす。

「ううしてイープの影は解き放たれた。」

というにはそうは問屋が卸さない。

「この影を返すわけねェだろうが!!」

その無粋な介入者は影を奪った張本人、ゲツコー・モリア。せつかく手に入れた中で間違いなく最高の影。それをみすみす返してしまつては海賊の名が廢る。

イープに向かって漂っていた影を掴み取ると、そのまま奥へとモリアは逃げる。

イープはそれをあえて見過ごす。自分の影なんてどうでもいい、いつでも取り返せる。むしろ今重大なのは強敵、友への敬意。

「約束通り」秋水「はー、僕がー責任を持ってー、僕がー預かっておくよー」

それをただ持つというのはあまりにも忍びなく、秋水を腰に差してイープはやっと影を取り返しに向かう。

「じゃー僕の影を返そうかー」

目の前にいる自分のゾンビに目もくれずに、モリアに影を返せと言うイープ。イープのその様子にモリアは半分呆れたように言う。

「アア、いいぞー」いつを倒せたらなー」

そのイーブの影を使ったゾンビとは、巨人の中の巨人、かつて島を引き動かしたとされる太古の怪物、「魔人」オーズ。

「ふーん」

しかしイーブの反応は軽い。イーブは分かっているのだ、このゾンビには決定的なものが欠けていると。

「ちっとばっかし無理して出てきたっていつのによあ、なんだあ、このバカみたいな三下は」

だからネタに走る。これに全力で挑むのも馬鹿らしい。

「お前…まさか「剣帝」イーブ!?あの三大将も敵わないっていう世界政府最強!?無理だ、そんなのに相対できるはずがない!!」

モリアは相手の余裕と茶髪茶目、そして思い出した「帝」という獲物から目の前の敵が誰たるかを知る。モリアも王下七武海、世界政府の裏事情には詳しい方だ。だから知っている、世界政府が秘匿したくなるほどの汚点を、その原因を、そしてその武勇伝を。だからモリアは絶望する。今の自分とイーブでは生身の人間とジェット機を比べるようなものだから。

「いやー俺は知っているぞ!十五年前お前は大怪我を負った。今のお前にあの体術は使えない!あの時の強さなんてどこにもねえんだ!!」

それは虚勢。しかもイーブに向けたものではなく、自身に向けられた虚しき嘘。それでも言っていなければモリアはもう自分を保てないほど追い詰められていた。

「哀れだなア、お前。本気で言ってるんなら抱きしめたくなくなるくらい

「哀れだわア」

イーブはクツクツと口の中で笑いながら返す。相手方もお膳立てしてくれたことだ、目一杯ネタに走ろう。

「確かにあの日俺は体にダメージを負った。今じゃ戦闘も能力に任せてる。」

実際先程バンバン帝で影を斬っていた奴が何をいつかと思うかもしれないが、ネタを言っているのだ。

「だがなア、俺が弱くなったところで、別にお前が強くなったわけじゃア、ねエだろオがよオ、あア!!?」

その瞬間に衝突する魔人の拳とイーブの『斬衝波』。単純な力はオーズが上かもしれないが、その影は“帝使い”スコウエルド・イーブの物。剣ならともかく、無手では自身の力を十二分に発揮できない。

イーブの理不尽と魔人の不自然、勝つのは当然理不尽だった。

「くっ、『影法師』!」

余波に巻き込ませそうになったモリアは慌てて上空に逃がしておいた『影法師』と自分の位置を入れ替える。しかしそれもネタだ、フラグだ。

「ギャハハハハハ！悪イがこっから先は一方通行だ！尻尾巻いて元の場所に戻りな!!」

一発目は辛うじて取り出した鉄で防ぐもそれも粉碎され、二度目は

防ぐことはできず、右ストレートがモリアに刺さる。

勝負は決していた。

「じゃー、色々持ったしー、一回近くの島に寄ろうかー」

あの後、使えそうなものはかさばらない程度に奪い、やることはやったイープはこの島を発とうとする。この島の住民のことは知らん、勝手に生きているだろう。

「ヤマトも僕に乗っておきなよー。今のー、僕はー、色々見えてるからー、君とその他諸々を乗せてもー、今まで以上の速度は出るよー」

「……………失礼（では、御言葉に甘えて）」

オーズを挽き肉にし、影を取り返したイープはその瞬間、世界が変わったかのような錯覚を受けた。

長年連れ添ってきた影はこの数十分で完全にイープとは別人になり、別のベクトルでの達人となった。そんな影が自分の元に戻ってきたのだ。つまりイープは“剛の剣”と“柔の剣”の二つの達人となってしまったのだ。

そさてその進歩は剣技だけではなかった。影が進んだ柔の剣の極み、呼吸の理解は何も斬ることだけではない。世界そのものの理、合理解を理解したということだ。

つまりどのようになればより速い『剃』が、どのように踏み込めばよりスマートな『月歩』が、どのように振り抜けばより鋭い『嵐脚』が、どのように動けばより無駄の無い『紙絵』が、どのように力を込めれ

ばより堅い『鉄塊』が、そしてどのようにに撃ち抜けばより殺傷能力の高い『指銃』を使えるようになるのかを把握したのだ。

まさにイーブは人ならざる領域に着々と足を踏み入れてきている。

第五十五話　コノミ諸島で喜劇俳優は超次元な サツカーを

スリラーバークを出てからは特に大した事もなく偉大なる航路を抜け、東の海にたどり着き、そして目的地コノミ諸島にたどり着いたらイーブとヤマト。

描写が少ない、手抜きだこれが世に言う“キングクリムゾン”略して“キンクリ”かと思うかもしれないがこれがイーブの中の普通、これが常識。本来予測不能な偉大なる航路の台風を予知して、さらに蹴り飛ばすような輩に足止めなど基本的に存在しない。寧ろモリアたのように描写するに足る障害の方が稀有な存在だ。

強いて言うなら途中通り掛かったウォーターセブンで思い出したかの様にバトルフランキーを粉砕しただけである。

イーブの思惑通り、ちゃんとトムが無罪となったのは別の話。

しかし偉大なる航路から船の数倍の速度でここまで来た一人と一匹もアロンよりも来るのが遅く、もう彼らはベルメールの家までたどり着いていた。

まず彼らとイーブではスタートした時すら違ったのだ、寧ろここまです差を縮められた事を称賛すべきである。しかし真っ直ぐここに来ていれば、イーブは彼らを追い抜くことができていた。では何故今ギリギリここに到着しているのか。

「うわー、ヤバイよー、ギリギリだよー」

「……………自業自得（それは主が血糊袋なんて物を面白半分で購入か

らでしょう。キリキリ走れば良かったものを……)」

一重にそれはイーブの子供心をくすぐる面白いです。一品を見つけただからだ。緊張感が足りなすぎる。

「じゃー、僕はー行ってくるからー、ヤマトはーステイー」

犬じゃねえんだぞ。

「……………御意」

「よしー、じゃー、任せたー」

しかしそれも本人が良しとするのならば問題は無い。

ヤマトを着地した港に留まっているように言うと、イーブは丘の上の煙突から煙の上がっている家へと初速にして最速で最短を『剃』と『月歩』駆ける、翔る。

「ナミィ…ノジコ…大好き」

大怪我を負った女が娘達に最期の言葉を贈る感動的な場面。しかしそれを感動的な場面で終わらせてはいけない。そんなことをすればイーブが本当に何をしに来たのか分からなくなってしまう。そしてこの島の人達に顔向けできない。

そして何よりコミカル&スプラッタを信条とするイーブはシリアス展開が大っ嫌いだ。しかしそんな信条で良いのか、海兵。

バンバンバン、アーロンのそれを嘲笑つかのような弾丸を、

「飛ぶ指銃」撥」

ビシビシビシとイーブは弾く。しかし弾くだけではつまらない。せつかくギリギリな思いまでして買った血糊袋、使わなくてはネタ好きの名が廢る。

「打ち水」っぽい」

名前が適当なことこの上無い。なんだ「っぽい」って、「矢武鯨」とかもつとかっこいい名前があったらうに。確かに打ち水と見せかけてただ水の入った袋を投げるそれはまさしく「打ち水っぽい」が、確かにその適当なネーミングはイーブらしいかもしれないが。

そさて見事「っぽい」は漢らしい母親、ベルメールに全て命中。手加減はしたものの、あまりの威力にベルメールは気絶。まさにイーブの計画通り。

「おかあさあん!!」

母の死に泣きじゃくる義娘二人。しかしまだだ、まだイーブは出ない。最悪の悲劇を最高の喜劇に、終わり良ければ全て良し。まだインパクトが足りない。

「放して、放してー!!」

蛸がナミの海図を発見し、それに才能を見いだしたアロンがナミを連れていくと言う。弱者に拒否権など無い。蛸に捕まえられた女の子に抵抗する力などあるはずも無く、声をあげて無くしかない。しかし当然それで腕を放すわけもない。放すわけもない、だから、

「手を放さないなら手を離そー……分かりづらいなー」

手を鞘から千切り離した。聞いている側からすると大差ない。放す
”と”離す”。しかし現実とは全く違う。

「ニッ、ニユ~~~~!!」

「どっした、ハチ……ってどっした!？」

部下の叫び声に振り向いたアーン。てっきりナミに噛まれた位
かと思いきや、知らない男に腕を千切られているではないか、本当に
どっした。

「手を放さないから手を離してみたー的なー？」

「何言ってるかわかんねェよ!!」

余裕のイーブと余裕の無いアーン、そこにユーモアの差が出てい
た。

そして余裕の無いアーンに更なる追い打ちがかかる。

「うーん、胸が……痛い……？」

「……………!？」

自身が撃ち殺したはずのベルメールの復活。これにはアーンの開いた口が塞がらない。だって確かに自身の弾はベルメールに当たったはずなのだ、ちゃんと血も出た。その箇所は確実に致命傷となるはずの所だ。これならば例え悪魔の実の能力者といえど死ぬは

ずだった。

しかし死んでいない。当然だ、アーロンは知らないものの、銃弾なんて一発も当たっていないのだから。それでもベルメールは何故痛がるのかというと、純粹にイープの『つばい』の威力が強すぎて、肋骨を数本折ってしまったからだ。これにはイープも頭が上がらない。

「アッハッハッハー。間一抜けー」

「おかさあん!!?」

母子の感動の再会のはずなのに、それを邪魔するイープの高笑い。アーロンを指差して大笑いしているそれは完全に相手を馬鹿にしている。

「良いだろう…ぶっ殺してやる、下等生物が！」

遂に堪忍袋の緒が切れたアーロン。目が鮫の目となり、それが本当にアーロンがぶちギレたことを表す。

イープを軽々と持ち上げるとベルメールの側に叩きつけて、何度も何度も踏みつける。

しかしそんなものイープには効かない。たかが人間の十倍強い肉体を持ったからといって驕り高ぶる奴の蹴りなんてたかがしれている。

「やー」

「……あっ、はい」

しかしそれはイーブの中での話であって、一般的には魚人の蹴りなんて、一発で致命的だ。

そんなものを喰らいながらも平然とベルメールに話し掛けるイーブに呆然としながらも返事ができたベルメールは凄い。

「今からー、これら皆殺しにするからー、その娘らを家に戻した方が良
いよー。そしてー、彼女らの耳を塞ぎながらー、子守唄を歌ってやる
のがベストー」

親指でクイツクイツと家の方を指差して軽い調子で言うイーブは
現在アローンの蹴られている人のそれじゃない。

しかし何とか脳内でイーブの言葉を処理することができたベル
メールはナミとノジコを家へと連れていった。

さて、やっと邪魔者が消えた。まあ、邪魔者と言ってもこれからや
ることはあまりに凄惨であるが為に若い娘二人に見せるには忍びな
いという、イーブのなけなしの良心が働いたからであるのだが。

しかしここまでイーブを蹴ったアローンには相応のお返しをせね
ばなるまい。

「サッカーしようぜー!」

目には目を、歯には歯を、蹴りにはサッカーを。ただし、超次元で。

一気にとびあがったイーブはヒールリフトの要領でアロンを上
げ、自身も『月歩』でかけ上がる。

イーブの前世は御劔、御劔の劔は剣の旧漢字。よって今回走るネタ

は剣城で統一だ。

『デストロップ』

地面に頭を向けた状態でオーバーヘッドのような蹴りをアーロンの腹部に放つ。

「ガアッ！」

『デスソード』

イーブはアーロンがぶっ飛ばされた先に回り込んで、その飛ばされた勢いを殺さぬよう、カウンターが決まったかのように今度は背中にヤクザキック、『デスソード』をぶちこむ。

『ロストエンジェル』

そして更にぶっ飛ばされた先に回り込んで、帝で一閃、『ロストエンジェル』。今度は吹き飛ばさずに真っ二つだ。

流れるようなシュート三連発でアーロンも完全にゴールしてしまっている。

「さあー、僕はー今とても機嫌がいいからー、選ばせてあげよー」

イーブはどちらも好きだから、どのみち殲滅は確定なのだから、

「魚のたたきとー、魚の刺身ー、どちらが好きかー？」

死に方くらいは選ばせてやるじ。

「魚人空手『百枚瓦正拳』！」

しかし勿論魚人達も海賊、ただ一方的にやられる訳がない。

トップは殺られ、剣士も腕をもがれて戦闘不能。蛸だから生えてはくるものの、ナメック星人のようにニョキッと生えてくる訳がない。

ならばアローン一味の幹部の自分が先陣を切るしかない、と魚人空手四十段のクロオビがイーブに挑む。

「注文入りましたー！エイのたたき一丁ー!!」

しかし効かない。並みの海兵程度ならば十人纏めてノックアウトな自分の必殺技がこけにされる。

「パンチっつーのはー…ユーユーのを言うんだぜー！」

その場にいる誰も見えなかった。イーブが拳を振りかぶる所までは見た。クロオビはここでイーブのテレフォンパンチを止めにかからず距離を取ることにした。

その判断は半分だけ合っていた。超タンクファイターヤマトを意識したイーブの拳を止めることは不可能。その判断は間違っではない。ただ距離を取るとというのが間違いだ。イーブのはただ距離を取ればどうにかなるレベルのパンチじゃない。

だったらどうすれば良いのか、と言われるとどうしようもないと答えるしかない。強いて言うなら、彼らがここを襲った事がそもそもの間違いであった。

のものだ、逃げ切れる。

と、思ってた時期が彼等にもあった。

第五十六話 コノミ諸島で使者は不相応の外交を

聞いてない、そんな話聞いてない。

頭の話では、先ずは最弱の海、東の海を支配し、そこで勢力を拡大し、そして自分達魚人を人間の支配者となる予定だった。

そう、自分等是最弱の東の海に来たはずなのだ。

それなのにその計画は一日足らずで既に頓挫してしまっている。他でもない、自分達がやろうとした圧倒的武力による蹂躪によって。

そのせいで頭を筆頭に幹部は一人の相手にろくにダメージを与えられずに全滅。自分等は生きるために逃走を余儀なくされている。

しかもそれはただの逃走じゃない。固まって仮に来たとしても、追っ手を迎撃するというある意味での一時撤退の様なものではなく、各自が散らばり、もし追っ手が来たとしても誰かが犠牲になっている間に一人でも多く逃げ切ろうという完全な敗走、潰走、壊走。味方を、自分を餌とする完全な敗北。

しかし追っ手は来なかった。自分等に興味を失ったのか、それ以上の出来事があったのかは知らないが好都合。海まで来れば自分等の領域、逃げ切れる。

そして逃げ惑う魚人達は海の中に飛び込んだ。

火の海の中に。

「いやー、僕ばかり悪いかなーと思うからさー…ヤマトー」任せ
たー」

チュウを殺した途端即時撤退を決め込んだ魚人達の背中を見送っ
てイーブが言う。

イーブならば背中を向けた奴等の殲滅なんて朝飯前だ。たとえ海
に逃げ込まれたとしても問題ない、イーブなら海ごと消し飛ばせる。

しかしイーブは追わない。何故か。強いて言うならば幸せのお裾
分けと言ったところだろうか。イーブばかり運動をしてペットには
ステイとは中々酷いじゃないか、少しくらいならば分けてあげても良
いのではないか、そんな親切心からくる行動。悪く言えばただの気ま
ぐれであった。

『蒼火世界』

三尾の状態で使われるそれは完全に六対羽九尾の『白虎世界』の劣
化品。それでも海を焼き、魚を焼くには強すぎる業火。それは皮膚を
焼き、肉を焼き、内蔵を焼き、骨まで焼いて、灰をも焼き尽くす。

「いやー、自分で言うててあれだけどー、たたきと刺身ともう一つー、
焼き魚があつたとはねー」

ただし、過程は違えど結果は全て消滅しかない。

『人間を虐げるつもりなら潰す』……はー、ちゃんとタイガーに言っ
ておいたのにねー」

「……………自業自得(それでもこれは自分等で撒いた種、主が憂う道理
はありません)」

「まっ、タイガーは伝える前に死んだんだけどー」

「……………尚更（そうであればなおさら主が憂う必要はありません）」
溜め息をつくイーブをそっとフォローするヤマト。さすが、ペットの鏡。

コノミ諸島有数の危機を救ったイーブ。そんな彼等を讃えようとその日は盛大な祭りが起こったのは至極当然の流れであった。

そんな祭りも終盤になったところで主役イーブに近づいてくる影が一つ。

「んー？」

「あの…」

それはイーブに母親を助けてもらったナミ。そして彼女に続いて母親のベルメールと姉のノジコ。家族に後押しされて意を決したナミが口を開く。

「助けてくれてありがとう。おじさん!!」

パアツと花開くような笑みとは裏腹な衝撃の一言。

「僕はまだ九つなんだけどねー!」

「ええっ、私と同じ年…!?!」

しかしナミの間違いも仕方がないのかもしれない。

「そんなに大きいのに……」

この五年間でまさに植物の成長と形容できるような成長っぷりをみせたイーブは現在まさかの二メートルである。延び幅驚異の一米ートル十センチ。

「アツハツハッー、だから僕のーことは親しみを込めてお兄さんと呼んでくれー」

しかしそれとこれとは別問題。イーブがそれで納得できるはずもなく、中年が子供に言う台詞ベストスリーを言う。これを言う人は大体オジサンだ。

「じゅめんなさい、あと本当にありがとう」お兄さん!!」

過ちは繰り返さないと言わんばかりに「お兄さん」を強調して礼を言うナミ。

「まー、海兵として当然だねー……クビになったけど」

今は海軍とは真逆の立場である。

「あーそーそー、一応忠告しておこー。血が繋がってなくとも、血が繋がってないからこそ家族は大切にしろ」

たかが遺伝子を半分受け継いだという「偶然」出会っただけの家族より、「必然」的に出会った血の繋がっていない家族。イーブは二度の人生でその二つを知った。故にイーブは忠告する、後者を大切にしろ。前者の様にたかが血が繋がっているからいて当然と勘違い

している輩より、血が繋がってないからこそ愛情を注ぐ集団の方が本当の“家族”であるよ。」

「良い親って言うのには中々巡り会えないからねー」

妹には出会えても今でも親には出会えていないイーブはそれに出会えたナミラに僅かに嫉妬しながらも優しく頭を撫でる。

「ふうん、そう……じゃあアンタも今からわたしの子供になりなさい」

どこぞの世界最強に似た様子でベルメールはイーブを誘う。

「おー、よろしくー、おかーさん」

イーブはそれを即快諾した。理由はただ勘としか言いようがない。それでもただコネコネと理屈をこねて母親と認めるよりも、随分それらしい。

結局家族に理由なんて要らないのだ。家族だから家族、それで十分なのだ。

空が白けて、村人がぞろぞろと家に帰ろうとするなか、

「じゃー、僕はー鼠駆除でもしてこようかなー」

イーブだけ違う方向に向かう。

イーブが魚人等を殲滅した後、村人は一応海軍へと連絡したのだ。そこで派遣されてきたのが支部中佐のネズミという男。本来彼の仕

事はもう殆ど無い。強いて言うならば被害状況の把握と報告書の作成程度のはずだった。

しかし彼は相当なことをやらかしていった。

『今から証拠を押収する！拒むならば海軍としてお前らを海賊擁護の罪で纏めて吊るし首だ!!』

相手は銃を持った兵士ばかり、非戦闘民しかいないこの島の住民に戦う事はできず、海軍と正面から“正式”にケンカを売ることはまだしたくないイーブもその時は手を出さないでいた。

その結果、海軍は証拠品と称して、多くの島の財産を奪っていったのだ。

「なーに、ちょーっと支部を消してー、色々取り返してくるだけさー」

今日のイーブは少々ビックリマウスなのだ。

そんなこんなで海へ飛び出してから数十分、もう例の海軍支部に来ていた、この支部は平原の島の上にデンと支部だけがある住民がいないところであった。

それはイーブにとって好都合、ド派手にかましても誰も傷つかないのだ、当事者以外。

イーブは支部襲撃のために、両手を揃えて腰の横に持っていく。これからやるのはかめはめ波ではない。

能力を使った技の一つだ。

「ビックマウス」

両手が泥となり、纏まり、膨れ上がり形作られていく、大きな大きな鼠の形に、鼠の口の形に。

Big mouse of big mouth。イーブらしい寒い洒落の効いた技である。

口は当然餌である支部をむしゃむしゃと食らい、中にいる人間も当然食い殺す。

数分でそこにはイーブが捨てた大量の土しか残っていなかった。

翌日の東の海の新聞の一面は“謎の災害”であった。

そんなニュースは当然海軍本部にも伝わった、ただし事情を察知した上層部の元にもみであるが。

「ガープ、クザン、ボルサリーノ、お前達を呼んだ理由は分かってるな」？

そんな海軍のトップの個室、元帥の間にいるのは海軍本部元帥のゼンゴク、大将のクザンとボルサリーノ、そして中将のガープの四人である。

彼等の共通点は、

「おそく彼でしょひな、」のやう口は〜」

五年前にイーブとやりあった現行海軍最強戦力である。

「ワシも五年前にやられたこの傷が疼いておるわい」

「ってことはあれですか？この中の誰かが東の海の彼の元に行かないやなんねェと……」

「ああ、だからサカズキをこの場には呼んでいない」

目的はあくまで牽制、交渉、確認。戦闘じゃない。だから海軍きつての過激派の赤犬にはこの事件すら知られないように慎重に情報操作している。サカズキとイーブの不仲は上層部なら誰でも知っている常識である。

加えて言うなら、十人ほどしかいない五年前の“戦争”の生き残りは少なからず原因は赤犬にあるとして彼を多少口には出さないが、よく思っていない。

海軍としては五年前のあれはこれ以上無い無益な損失であったからだ。

「んじゃあ、オレが行きますわ、アイツとは友達ですし」

そんな中立候補したのはイーブのかつての上司クザンだ。確かにこの中では最もイーブと関わりのある人物である。

そんな会談があったことなんて露知らず、イーブがこのオレンジ村に住み始めて一月が経った。

「指銃』っほい』…」

「紙絵『つばい』！」

ベルメールの指銃“つばい”ただの拳をイーブは紙絵“つばい”
反復横飛びでかわす。今コノミ諸島オレンジ村のベルメールの家族
で空前の『つばい』ブームが巻き起こっている。

オレンジ畑の手入れを終わらせてからはベルメールの訓練の時間
だ。一月前はイーブが来たからなんとかなったものの、もうあんなこ
とは繰り返さない。だからベルメールは息子のイーブに師事を請い
た。当然イーブは快諾、その日から稽古が始まった。

結果的に言うならばベルメールは才能の塊だった。流石は現役時
代は金獅子が脱獄したとき、『東の海』に来たら私がブチのめして
やるわ』と公言していただけはある。一月で覇気を使えるようにな
り、更に六式までも使えるようになった。流石にシキを倒せるレベル
では無いが、東の海最強は間違いないだろう。

「じゃー、今日はここまでにしてー、僕は一夜ご飯でも取ってこようか
なー」

「んじゃっ、今日はエレファントホンマグロの刺身ね！」

「りょーかーい」

イーブが漁に出ているときに、男は来た。別に見計らっていた訳
じゃない、ただの偶然である。

目指すは村の外れの民家、そこにいる家族に目的は今厄介になって
いると情報にある。なにせよ、そこに行くしかない。

「コンコン」

「失礼しまーす」

返事も聞かずに長身の男は家に入り込む。

「はっ……!!?」

「ええっと、ねーちゃんスコウエルド・イープって子供、知らね?」

「なんで海軍大将“青キジ”がこんなところに!?”

その男は海軍最強の一角海軍本部大将“青キジ”のクザン。

「あーあ、その反応見るとクロだな。んで、今イープは何処に居んのよ?」

普段はだらけてはいるが、だらけると愚鈍なのは違う。クザンだってしっかり人を見る目はある。

「打ち水っばい『っばい』!!」

手元にあったフォークを投げるというもはや打ち水ですらない『っばい』がクザンの脳天に刺さるがそれは頭を砕くのみ。

「自然系!?”

“自然系ヒエヒエの実”の能力者には通用しない。

「ガッ………」

「素直に吐いてくれりゃーうつせずにすむんだけどなあ」

そのまま『剃』も使わずただの身体能力で目にも止まらぬ瞬速を叩き出すとベルメールの首を掴み、壁に打ち付ける。

「何処に息子の事を売る母親が居んのよ。指銃『っばい』!!」

ベルメールは全力でクザンを殴る今度はちゃんと覇気を込めて。

「覇気使いか、厄介だな……死んどくか?」

しかしそれでも海軍最強には届かない。

パキパキと冷気がベルメールの身体を侵食してゆく中、クザンは完全に失念していた。

イープの狂気と形容される家族愛を。

「母さんに手え出してんじゃねえよ!!」『鎖鎌』!」

海にいるはずなのに届くイープの咆哮。クザンは直感に従って手を引くが斬り落とされた右腕。壁と壁にある斬撃が通った跡の間に腕はなかったはずなのにバツサリと斬り落とされた。

「あれ、アイツまた腕上げてる?」

かつての部下の腕が上がった、これは喜ばしいことのはずなのにクザンは冷や汗が止まらない。

「僕の家族に手を出すなんてナメてるよねー、クザン?」

速い、速すぎる。まだクザンの腕が斬り落とされてから十秒も経っていない。それなのに既に海にいたはずのイーブがもうここにいる。すかさず放たれたイーブの横一閃をクザンはなんとかかわすが、それはイーブも予測済み。帝を地面に突き刺してその勢いを殺さずに帝を軸に身体を旋回させる。

「『大車輪』」

役満、一万六千オール。ではなく、それからのキック。だがただの蹴りではない。イーブの怒りがイーブに更なる力をもたらす。何処のサイヤ人だお前は。

蹴りのインパクトの瞬間に今までの旋回で圧縮された空気が解き放たれる。その圧縮された量は膨大で、解放の瞬間に衝撃波へと姿を変える。

更に偶然か否か、イーブは魚人空手すら使っていた。『発勁』でその土台は完成していた。そして先日実際にそれに見て、触れた。今のイーブにとってはそれで十分だった。

失敗しても技を極めし影がちゃんと調整してくれる。

「(元帥の衝撃波に海侠の魚人空手って……)」

死ねる、普通に死ねる。

しかし幸いなことにクザンは自然系、死ななければどんな怪我すら回復する。故に、脳味噌と心臓、そして肺がやられなければギリギリで助かる。

故にありつたけの覇気を込めてその三つを強化する。ついでに他の臓器たちがシェイクされてもショック死しないように気を確かに持つ。

生まれて始めての対能力者拳法のダブルパンチ、しかも覇気付き。それは確かに体内からクザンを破壊した。

「いやー、さっきのは流石に死んだと思ったわ」

あの後、結局回復したクザンが戦う意思はないと言い、ベルメールに謝罪したことで今回のことは水に流すことにしたイーブ。イーブだって同じ正義として、クザンは進んで殺したくない人物なのである。

「じゃー、結局クザンはー、何しに来たのー？」

「おお、すっかり忘れてた……その、あれだ、えーっと……忘れた」

それで良いのか、いや良くない。

「まっ、忘れてたってことは大したことじゃないんだろ。一応任務はこれで終了だし、センゴクさんに連絡入れとくか」

「そう、俺はお前に伝えなくちゃならないことがあつてきた」

先程とは百八十度違うことを言っているクザン。センゴクにでんでん虫で連絡すると、怒られたのだ。それは当然の事である。

「スコウエルド・イープとは敵対したくない、これは海軍の総意だ。だからある程度は黙認するが、やり過ぎるなっ」ことだな」

「おケー」

「だから平野の海軍支部を消すときは土砂崩れではなく、津波にしてくれとのことだ」

「アッハッハー、ばれてーらー」

まあ、バレてもいいと思ってやったことだ問題はない。

女ヶ島で女帝は不純な異物を

海軍に自分の居場所がばれてしまった。もちろんイープの実力をもってすれば海軍本部が攻めて来ようとも、家族を守りながら戦う事は可能だ。加えてヤマトもいるのだからなおさらだ。

だがイープの目的は幸せな生活じゃない。そうではなく世界を幸せにすることだ。いずれは出ていかなくてはならなかったのだ、これが所謂その切っ掛け、ターニングポイントだったのだろう。ただし、時々家には帰ってくるが、というか家族を紹介しなくてはならないし。

「とーゆーわけさー」

「イープが居なくなると寂しいねエ…」

「「やだー！」「」

ガジガジと頭を撫でる母親に抱き着いてぐずる義姉妹。ノジコは何気に年上なので姉らしい、イープも異論はない。

「アッハッハー、金輪際の別れじゃないからねー」

姉妹の頭を撫でながらイープは快活に笑う。

「イープ！わたしも連れてってよー！」

「嫌だー、雑魚がー」

引き留められないと見るや否や今度は連れてってと駄々を捏ねる

ナミとそれを一蹴するイーブ。もっと良い言い方はなかったのか。

「なんて言い方すんのよー！」

だから母親に殴られんだ。

「まー、どっち道ー、王下七武海位はないと僕の船員にはなれないなー」

現在のイーブの船員はイーブとヤマト、どちらも世界で十指に入る猛者である。

だが残念ながら彼らは船を持っていない。得意の月歩走行である。

名残惜しくもオレンジ村を去ったイーブとヤマト。行き先は男子禁制の“女ヶ島”。そこにいる女王に貸した物を返してもらいに行かなくてはならない。

というわけで早速女ヶ島の城に潜入。

「やー、ハンコックー、僕のコートを返してー」

イーブはそのまま闘技場へ誘導されていった。イーブならば抵抗して海賊揃いの女ヶ島を沈めることもできたのだが、今のイーブは機嫌が良く、そんなことはしなかった。主が出なければヤマトも出るわけには行かない、そのまま一人と一匹は闘技場へと連れていかれるのだった。

策が無さすぎるだろ、馬鹿かお前ら。

そして連れてかれた闘技場。宣告は当然死刑。処刑人として放たれるのは黒い大虎のヴァキュラ。

「グルルルル」

近づいてくるヴァキュラをイープがあしらおうとしたその時、

「……………主（ニジ）は私が」

ヤマトが名乗り出る。始めてヤマトがイープに意見を申し出た瞬間だった。

「任せたー」

ヤマトの実力は本物だ、信用できる。それに始めての仲間の我が儘だ、故に丸投げする。

ピョンとイープの肩から飛び降りたヤマトはそのまま人型となり、ヴァキュラの前に立ちほだかる。

「……………」

「……………」

互いに睨み合う二匹のネコ科。

「グウ」

そしてヴァキュラが屈して腹を見せる。同じネコとして自分の従うべき主、群れで言うならばボス、簡単に言うならば格上に戦う前に

野生の感が悟り、何一つ爪を交えることなく処刑人は屈したのだ。

「……………賢明（良い子だ）」

「そんな、ヴァキュラが服従した!？」

「ちっ、使えん猫だ。サンダーソニア、マリーゴールド!あの無礼な男を殺せ!」

「「きゃー!サンダーソニア様ー!マリーゴールド様ー!」」

女ヶ島の憧れ、九蛇海賊団の中でも“四強”の二人が出るとなれば会場のボルテージが最高に上がるのも無理はない。

「これからアナタは処刑されるの」

「だけど名前だけは聞いといてあげるわ」

イーブの前に立ちほだかるサンダーソニアとマリーゴールド。

「スコウエルド・イーブ」

やっとできた自己紹介、これでイーブもなんとかお咎め無しにできるだろうなんといっても命の恩人だ。

しかし現実そうはいかない。

「証拠は」

突然イーブの前に現れた金髪の少女。五年間で全く姿の変わっていないイーブの妹、カネルである。

「これ、帝……」

とイーブは自分の相棒を見せる。

「フツ……ソニア、マリー、代わって」

「えっ、でも……」

「代われつつってんだろおがこの蜥蜴モドキ共があ」

笑ったかと思うといきなり癩癩を起こしたかのように二人の髪の毛を掴み、会場の客席の場外まで投げ飛ばす。口調の語尾の『か』は掴みとれないだろうが、カネルの口調、といっても腹話術のもので実際は口を開いていないが、はとも荒い。ただ発言するたびに『』がカネルの体から出ているのだ。流石は自然系オトオトの実の能力者、身体が謎仕様である。

「テメーはこれが“帝”つつたかあ でもよお、帝はそんなに長くはねえんだよお」

そう、“帝”は本来形を持たず、主が人を殺すのに最適の形をとるといふ妖刀。故にイーブが小さい時は短く、そしてイーブが成長した今は長くなっている。ただその事実を知らないカネルにとってはそれは兄を馬鹿にする戯れ言に他ならない。

因みにもしいーブが銃士になれば帝はライフルになり、拳士になれば帝は籠手の形となる。もはや帝は剣と言えるのかどうかは微妙な所だ。

「吹き飛び笑え」

『紙絵』

鳩尾に向けられたカネルの掌底を簡単にかわす。こんな稚拙な掌底は当たらずがない。

しかしそれがカネルの狙い。

『爆掌』

笑えない威力の震動、"音"がカネルの腕から拡散してイーブに襲い掛かる。そう、カネルの拳は、ヤマトの絶対に受け止めてはいけない拳とは真逆、絶対にかわしてはいけない拳なのだ。

爆掌の"シヨウ"が"笑"じゃないから笑えない。

飛ばされながらもなんとか踏ん張れたイーブ。

「アッハッハー、いーねー」

笑えない威力だが、カネルの注文通り笑い、彼女の五年間の努力を賞賛する。そう、カネルは努力した。イーブとは質は違うが、やってきた量は同じくらい、それを五年も続けていれば王下七武海の"蛇姫"ボア・ハンコックともタイマンを張れるほどだ、いや、むしろ能力の都合上カネルの方が上をゆくかもしれない。

『青剃』

確かにあいつは青いがそのネーミングはいかがなものか、漢字からは読めないがソニックって……。

それはさておき能力は、道具は、その持ち主の長所であってはならない。そうなってしまうえばそれを越える能力の持ち主の完全な劣化となってしまうからだ。特に道具は進歩しないからなおさらである。

ではどうあるべきか。道具は、能力はその人にとっての付加価値であるべきである。ただでさえ動体視力の良い人間、その人に銃を持たせれば鬼に金棒。例えば空手の達人、彼に籠手を着けさせればより強くなれる。

そして例えばカネル、彼女は速さを磨いた、そして磨きあげて他の追隨を許さない域に達した上で更にオトオトの実の能力、音速の秒速三百三十三メートルが加わる。

素でマツハニを誇るカネルに更に音速が加わりその速度じつにマツハニ。飛ばされて五十メートル離れたイーブとの距離をじつに0.05秒で詰める。普通の人が見てから脳で知覚するのに必要な時間は0.2秒。イーブはもっと早いがそれでも0.05秒は速すぎる。

更にその速度で振るわれる拳も凶器。誰かが言った、『速さとは質量』と。

『響』

そこに付与される音こそが凶悪。

“音”とは空気の震動、つまり空気限定でカネルはかの“白ひげ”と同じスペックを持ち合わせているのだ。

『響』の震動、エネルギー、威力に耐えきれなくなった空間がひび割れる。

「鉄塊『剛』」

しかし無理にかわそうとするから受け止められない。ならばはじめから受け止める気で相対すれば受けきることは逆に可能。

音速は越えられるイーブだがマツハ三を誇るカネルのには敵わず攻撃に転じ切れない。いや、かつての剛一辺倒といっても過言ではなかったイーブならばともかく、影の柔の技を習得したイーブでは自身の三倍弱の速さでも対応はできる。

だがそんなイーブが苦戦している。しかしそれはカネルが“速い”からではない。ただの“速さ”で苦戦するなら音を上回る“光”ピカピカの実の能力者ボルサリーノにすら勝てるはずが無い。では何故か。それはカネルの速さよりも“早さ”にある。ただスピードが速いのではなく、攻撃すると考えてから攻撃に移るまでが早いのだ。

故に見聞色の覇気で読んでいる頃には殴られる。『考えるな、感じる』では遅すぎる。強いて言うなら『感じるな、予知しろ』だろうか。

糸口は掴んだ後は試してものにしていくだけ、と思ったところにまさかの邪魔が入る。

「……………」『覇拳』

「つえいー」紙絵『!?!』

まさかのヤマトの裏切り。

「……………仇」

そう言うヤマトの視線の先にはこの戦いのとばっちりで飛ばされ、
気絶したヴァキュラ。奇しくも外したイーブの拳が飛んできたの
だった。南無三。

「なにおやっておる、カネル！」

そして自分と同格以上のカネルの苦戦に苛立ちを隠せないハン
コックも参戦する。

まさかのここでイーブ対ヤマト、カネル、ハンコックの即席チーム
の対三の戦いが巻き起こった。

先手を打ったのはボア・ハンコック。イーブの前に立ち、両手を構
えて、

『メロメロ甘風』！

自らの必殺技を放つ。同性ですら魅了し、虜にし、石化させるこの
技。ましてイーブは男、ハンコックはこの時点で勝利を確信した。

だがそれは当然甘い。

「ナメてるよねー」

イーブにそんなモノ効く筈無いだろうに。

「こんな甘い殺し愛してんのにー、イロコトにつつつ抜かそーなんて
わー！」

根っからの狂喜、狂気の塊のイーブに色恋、劣情、性欲の文字は存在しない。まして戦いの中でそんな感情に目覚めるだなんて神聖な死合いを汚す行為に等しい。

「ええ、皆さんどうぞかかってきて下さい。大丈夫です、ご安心下さい。殺しはしません。ですが……絶望するほど転がして差し上げます」

お笑いみたいな理由で自分に向かってくる部下ヤマト、自分を見破れない妹カネル、戦いに不浄な感情を持ち込んでくる恩知らずハンコック。イーブは怒っていた。いまいち乗らない理由で戦いに繰り出されるこの状況に、そしてその原因に。

それでも戦闘モードに移行する。ついでに吹き出る怒気。それは霸王色の覇気とは全く違うものなのに原因不明解析不能の圧力を生み出して他を圧倒する。もうこの闘技場で意識があるのは戦う四人と手練れの観客一人しかない。

女ヶ島で乙女達は焦がれた想いを

未来に起こるとされているパンクハザード島での大将二人の決戦。その余波では島が死んだ。

そしてこの女ヶ島での決戦では王下七武海クラスが二人、大将以上が二人という超異常戦力が参加していながらもまだ闘技場で戦いが収まっている。その規模の小ささから全員が本気でないことが分かる。

それも当然、ハンコックとカネルは自分の島を沈める気はなく、ヤマトだって全力ではないし、イーブも妹の第二の故郷を消すつもりはない。つまりこの闘いはある意味で茶番、落とし処を探るものではないといえる。

ヤマト、カネル、ハンコックの中で最も弱いのはハンコックである。勿論そうは言っても実力者であることは変わり無いのだが、いかにせんイーブとの能力の相性が悪かった。

イッチャってるイーブはハンコックの魅力に落ちることはなくそして、

『『『 虜の矢』！』』』

『『『 泥侵食』』』』

相手を魅了したかどうかを問わない得意の石化の矢さえも“泥”のイーブには通用しない。しかし五年間の努力の末に手にした能力の高速発動が災いしてカネルがイーブの能力に気づく事ができなかった。

なんにせよ、能力の通じないハンコックは王下七武海失格の足手まといとは言わないが周りのレベルが高過ぎて、世なんの中ではずば抜けて最弱であった。

『ドレ、ミなさい。ファッと広がっているシがドーンと……』

手を仰々しく広げて叫ぶカネル。彼女の言う通り上を見ると、空が歪んでいた。

いや空中という空間が歪んだわけではない。空に広がる空気が激しく震動し、その結果屈折率が変わってしまった大気が空を歪めていたのだ。

勿論その震動とは音、彼女の言う“シ”すなわち“死”とは空に広がる大音響だ。

その“死”がドーンと、

『落ちてくる』

イーブに振るわれる。

『鉄塊』！

バリバリと服が、皮膚が揺れに“持ってきいかれて”裂ける。パンと鼓膜が破れる。

それでもイーブは気にしない。聞けなくとも大丈夫だ。イーブには見聞色の覇気、第六感があるのだから。皮膚、と鼓膜は破らせよう、だが肉はまだ切らせない、骨はまだ断たせない。

いくらでもイーブはそれらをボロ雑巾の様に棄てる覚悟はあるがまだその時ではない。

しかしそんな覚悟も露知らず、即席チームはイーブに休ませる暇を与えない。

「……………『蒼火謳歌』」

六尾の小さな六つに分割された炎と言えど、紛れもないイーブの弱点である“火”さらに覇気が込められているから笑い飛ばす事はできない。

『『ミキサー』！』

纏めて消し飛ばす。

しかしここでやっと役に立てるハンコック。イーブ本人には石化が効かない。ならばイーブ以外の“技”ならばどうか。

『『虜の矢』!!』

渾身の一撃は見事竜巻が飲み込み、そして竜巻が石化して固まった。

「今じゃー！」

自分が作ったチャンス、自分の攻撃は通じないと分かりきっているから残りの二人に任せる。

『『地ノビ』…』

「『蒼火世…』」

二人が決め技にかかるが感じた悪寒に従って二人共下がる。彼らの危機管理能力は正しい。もし技を打とうともう0・1秒そこに止まっていたらそこで退場だった。

「石は砕かれ、擦られ砂となり、砂は濡れば泥となる。石は僕の劣化品ですよ『土竜』」

モグラに喰われていただろう。

「えっ、お兄ちゃん マジンガー」

「なっ、お主イーブか!？」

そしてこの“泥”には二人共見覚えがある。

「だから先程から言っていたでしょう」

溜め息と共にイーブが言う。

「では貴女方、やる気もそのまま萎えていきそうですし、次の一撃で終わらせましょう。」ご安心下さい、貴女方の全力程度では僕は倒せません」

しかし終わらない。少なくともこんな不完全燃焼では済ませない。

「いや、私は止めておこう。通じる気がしないのでな」

しかしそこで素直に引き撤退するハンコック。勝てない闘いはや

らない、その冷静な判断力も彼女が王下七武海である所以の一つなのだろう。

だが、二人は引かない。だってまだ奥の手を隠していたのだから。

「……………六対羽九尾」

『『二オクターブ』』

ヤマトは自分の真の姿を晒し、カネルは身体を構成する音の振幅を大きくし身体能力と能力の絶対値を大幅に引き上げる。

「……………『白虎世界』」

「響き壊せ 『大地響き』」

純白のレーザーと大地を巻き込んだ大震動がイーブに向かう。

『『斬衝波』』

そしてそれらを吹き飛ばす理不尽。

当然イーブの勝利である。

招待が分かればイーブは今度は歓迎され、夜は城で宴となった。と
いうかそれくらいの勢いで迎えないとカネルがぶちギレそうであった。
やはり兄と気づかず色々言ったことが答えているのだろう。

イーブはハンコックら三人の幼少の頃の恩人、カネルの生き別れた
兄として迎えられた。詳細は話していないが嘘はつはついていない。

「二十「ゴルと言わず、タダで触っても良いよー」

宴の最中に自分の体で商売を始めようとする女の妨害はしておく。自分に許可なく売られるのは気に食わない物だ。

「とりあえず私とお兄ちゃんの邪魔したら散らすから」

そさて自分と兄の時間を邪魔されるのも気に食わない物だ。この国は“強さ”“美しさ”であり“偉さ”。見た目が子供なカネルもこの国では二番目に偉い。特に九蛇海賊団の連中はカネルのヤバさが分かっているから従う。

彼女らはカネルが敵海賊を音で爆破している事を見たことがあり、彼女の兄自慢は死ぬほど聞いてきたから分かる。彼女が機嫌を損ねたらマジで散らされる。

「はいはいー、ネルも物騒なことと言わないー」

そんな不穏な殺気を察知したイーブが右腕に引っ付いているネルを膝の上に持ってきて、あーんと食べ物を選んであげる。

女の子とは現金なものだ、食べ物で簡単に機嫌が治る。

「お兄ちゃん、結婚しよう」

この五年間の寂しさの反動あつてかテンションが可笑しな事になっっているカネル。

「嫌だー」

しかし色恋には興味の無いイーブ。バツサリと斬る。流石は剣士、切れ味が鋭い。

「ならば既成事実を作るまでっ チュー」

この子、既成事実の意味が分かってない。しかし、本物の既成事実に比べればそんなささやかなスキンシップもイーブはやらない、興味ない。

「アツハッハー、それは予測済みさー」

迫る唇、それに顔を寄せてからの頭突き。

「ぐわああああ」

相手が女であろうと顔面への攻撃は躊躇しない。イロゴトに興味の無いイーブにとっては男女に差は無い。

「そーいやーさー、スチーはどうしたー？」

この島にいる筈のもう一人の妹、三毛猫のシロン・スチルドパッドの行方を聞く。

その問いに思わず顔を伏せるカネル。それは決して先程の頭突きが痛かったからではない。

「えっ……？」

まさかと最悪の事態を覚悟するイーブ。

「あの子…一週間前から遭難してるの」

「えっ…じゃー、探しに行かないとー!」

バツと立ち上がるイーブを止めるカネル。

「ううん、行っても無駄になる あの子生粋のバカで方向音痴なの」

それを証明するようにつにカネルは新聞の記事を取り出す。

『「三毛猫」スチルドパッド、東の海の ×王国王家を皆殺し! 下手人「三毛猫」に懸賞金五千万ベリーが掛けられる!』

その二日後の新聞では、

『南の海にてまたも「三毛猫」が ×王国を滅ぼす! 「三毛猫」は懸賞金が一億ベリーに引き上げ!!』

その翌日の新聞、

『北の海で今度も「三毛猫」の襲撃! 王朝が途絶える!!』

その翌日の新聞の記事、

『西の海にて「三毛猫」が ×王国の城を全壊する! 「三毛猫」の懸賞金は二億ベリーに!!』

そして今日の新聞、

『偉大なる航路に進出した「三毛猫」 とも国家を亡ぼす! 下手人を一億五千万ベリーの賞金首に!!』

「……あの子何四天王ー!？」

「……あの子、バカなの」

度重なる国落としては認めよう、何か理由があったに違いない。しかし、何故ここまでフラフラしているのだろうか。四つの海では羅針盤すら使えるベリーイージー仕様の筈なのに、解せぬ。いや、それは百歩、千歩、一万歩譲って方向音痴だからだとしよう。だとしてもこの移動速度は異常すぎる。全力前進したとしてもこの速さは出ないのでは無いだろうか、解せぬ。馬鹿と天才は紙一重というのが彼女は馬鹿なのである。

因みにスチルドパッドの国落としての理由はその国が奴隷公認だったからである。元奴隷の彼女としてはこれは許せないであった。

そのままスチルドパッドは探さず、旅してればいずれ会えるだろうというスタンスでいくことに決定し、宴が終わってから解散してイーブは寝室で寝ることになった、カネルと一緒に。既成事実、既成事実煩かったので沈めておいたのは完全に余談である。

彼女も馬鹿なのである。

余談だがその頃のスチルドパッドは、瓦礫の山の上で自前の三味線を弾いていた。その瓦礫とは彼女が倒壊させた王城だった物である。

「」のまま真っ直ぐ行けばネルの所にゃん！（＝＾エ＾＝）」

そして偉大なる航路の前半をさ迷っていた。彼女の行く先は彼女を除いて誰も分からない。ただし彼女の予測は必ず外れる。帰巢能力が無いことに定評のあるネコの能力者のスチルドパッドらしいと

いえば彼女らしい。

所戻って女ヶ島、さらにその王の個室のベッドの上。そこでハンコックは寝付けずにいた。原因は今日我が国に侵入してきた男で、恩人のイーブの事である。

彼の顔がハンコックの頭から離れず寝付けない。

この日、ハンコックはイーブに惚れた。

一つは彼の強さ、王下七武海である自分すら全く気にかけない程の圧倒的実力。それに加え彼女以上のヤマトを従えるカリスマもある。

そして何よりイーブの目である。何にも媚びないその瞳、それにハンコックは惚れたのだ。自分の魅力に屈せずその姿が。そして偽りの、恐怖からくる自分の虚勢とは違い、本物の風格、態度にハンコックは打ち抜かれたのだ。

チヨロい。

そんな乙女の悶絶なんか気にせずに夜はふける。

「何処までもアナタに着いて行きます」

「いやー、そー言われても困るんだけどー」

朝イチでボケをかましてくるハンコックは華麗にスルー。

「なん…じゃと…？まさか皇帝が「恋の病」に？」

その光景に戦慄するのはこの国の先先代皇帝グロリオーサ。自身もそれにかかったから分かる、あれは恋の病だと。

「あとーそろそろー、僕はー旅に出よーかなー」

そしてハンコックからは“正義のコート”を返してもらった。ならばもう長居する理由はない。

「私も行くー」

「別にいいよー」

「なっ、カネルも行くなら私も行くのじゃ!!」

「えっ、良いの...?」

カネルは良い、ちゃんと五年前に言った通り王下七武海クラスの實力を身に付けた。だが現王下七武海で九蛇の王のハンコックは連れていっても良いのだろうか、国とかが大丈夫でない気がする。

「いや、だめニョー」

自身がこの国を出ていった後に国が相当荒れた事は戻ってきてから知った。故に現皇帝にそんな事はさせられない。

「うーんじゃー、時々戻ってくるからさー」

カネルの第二の故郷なのだ、戻ってきてても良いだろう。これがハンコックの恋い焦がれ死にを防ぎ、自身の旅を止めない最大の妥協である。

人に好かれるというのも中々難しい。